れも、らんもんにあげさせたまへりしは、きやうきやうしかりし」

らん-もん 蘭門【名】〔醫〕大腸と小腸と相合ふ所。分水。

らん-もん 欄門【名】透模様ある門。平家「家はあれども、欄門破れ、蔀(シトミ)・遣戸も絶えて無し」

らん-もん 亂紋【名】種種の形を亂雜に現したる紋。太平記「銀の亂紋打ったる、下濃(ダミ)の袴に下結(ノシヅリ)して」

らん-よ 鑾輿・鸞輿【名】『らん(鑾)』を見よ』じようよ(乘輿)に同じ。

らん-よ 籃輿【名】やまかご。よつでかご。和名「籃輿……言二竹車一也」

らん-よう 懶惰【名】らんだ(懶惰)に同じ。

らん-よう 濫用【名】無闇に用ふること。

らん-らん 爛爛【貌】光りかがやくさま。明らか。

爛爛として、嚴下の電の如し【句】『世說の容止篇に「裴令公目二王安豐一、眼爛爛如二嚴下電一」とあるに本づく。嚴は眉より額にかけての部分を譬へていふ』眼光の鋭く光る譬。

らん-らん 瀾瀾【貌】涙の流るるさま。

らん-り 亂離【名】世が亂れて、人人の離散すること。

らん-りつ 亂立【名】『立の字の音、正しくはりふ』亂雜に立ち並ぶこと。

らん-りん 亂倫【名】ふりん(不倫)に同じ。

らんりん-ぼう 蘭林坊【名】平安城の内裏の西北、徽安門の外、式乾門の内にありて、御物・御書等を納めおかれし所。一本御書所(イマノドコロノフミ)。

らん-りよ 蘭陵【名】〔地〕支那春秋時代の楚の邑。今の山東省兗州府嶧縣の地。〔地〕支那江蘇省常州府武進縣の地。蘭陵の美酒とて、李白の詩にも見えて有名なり。〔次條の略。

らんりよう-わう 蘭陵王【名】らりようわう(羅陵王)に同じ。

らん-る 襤褸【名】ぼろ。つづれ。ぼろきれ。

らん-ろ 蘭露【名】蘭の上におく露。

らん-ろ 鑾路・鸞輅・鑾輅【名】『らん(鑾)』を見よ』天子の御車。玉輅。

らん-ね 闌遺【名】家畜が、繫縶を脱して逃ぐることと、財物の遺失と、又これらの物。大寶令「闌遺之物、五日内申二所司一」

らん-ゑ 爛壞【名】らんくわい(爛壞)に同じ。

らんゑん-けい 卵圓形【名】卵形に近き圓形。

ら-もん 羅門【名】細き棧を以て、間を透して組みたる戸。連子。〔古語〕枕「透垣(ガキ)・らもんなどの上にかいたる蜘蛛の巣のこぼれ殘りて」盛衰記「法皇は、中門の羅門より窺覽ありて」

ら-もん 羅紋【名】〔羅(ラウス)に織り出せる紋。

ら-やく 羅疫【名】『羅はまら(魔羅)の略』かんさう(疳瘡)に同じ。醒睡笑「殿のらやくを煩ひ、さんざんなるを、裏方の悲しがりて」

らゆ【助動】らるに同じ。〔古語〕萬葉「いもを思ひいのねらえぬにあかときの朝霧こもりかりがねぞ鳴く」

らり 羅利・亂離【名】價値なき物とすること。〔江戸の語〕八笑人「からだは、ちっとも霑れねえから、おつだ。そのかはり、借りた衣裳は、らりにした」

らり・こくたい【句】前條に同じ。膝栗毛「膝箱も、何も、らりこくたいになった」

らり・こはひ【句】前條に同じ。膝栗毛「落耳灰、ラリコハヒ」

らり・こっぱい【句】前條に同じ。「羅利骨灰、亂離忽敗」膝栗毛「亭主を羅利骨灰にしやあがる」

らり-よう 羅綾【名】りようら(綾羅)に同じ。謠曲二角仙人「羅綾の衣(ケ)」

らりよう-わう 羅陵王・蘭陵王【名】りようわう(陵王)に同じ。

らりようわう-にふぢん-きよく 羅陵王入陣曲・蘭陵王入陣曲【名】前條に同じ。

らる【助動】『受動の意。〔被・所・見〕』可能の意。枕「げによく覺えず、申し出でられぬ事は如何なるぞ」『尊敬の意。古今「同じ御時せられける菊合に」

ら-れつ 羅列【名】つらなり並ぶこと。

り

【發音】『ら行第二の音。子音rが母音iに結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、ら及びいの條下に說けるが如し。『長音は、りいと書くとりーと書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。『拗音のりや・りゆ・りよは、子音rを發音する際、舌の前部を普通のrの場合よりも高くし、母音のiを發音する場合の位置に置きて發音するrに、母音a・u・oの合して成るものなり。その長音は、りやあ・りゆう・りよおなり。『一語の中にて、りの直下にう又はふの續く時は、相合して、拗長音リユウとなる。例へば、かりうど(獵人)・ふうりう(風流)・りふつぼ(立坪)をカリユウド・フウリユウ・リユウツボと發音する類。『りやう・りようは、拗長音リヨオと同じく發音す。例へば、りやうはう(兩方)・さんりよう(山陵)をリヨオホオ・サンリヨオと發音する類。

【字源】平假名りは漢字「利」(漢・吳音共にり)の草體利を更に簡易ならしめたるもの、變體平假名りは「里」(漢・吳音共にり)の草體、ゑは「梨」(漢・吳音共にり)の草體より出で、片假名りは「利」の略體、又、萬葉假名としては、前記「利」、「里」・「梨」の外、字音に據れるものに「理」・「裡」・「唎」・「黎」・「李」・「犂」(黎と同字なるべし)・「犂」(黎と同字なるべし)・「隣」等、訓を取りたるものに「入」等あり。

り 理【名】『すぢみち。ことわり。わけ。りあひ。道理。理論。理窟。拾玉「すみよしと思ふべきりをばしりながらいかにこの世を捨つる心ぞ」『りき(理氣)を見よ。理が濟む【句】道理一貫す。譯がわかる。醒睡笑「理の濟まぬ文章や」

理が非でも【句】「是(ゼ)が非でも」に同じ。

理に落つ【句】物事を道理の上よりのみ說く。理窟に走る。

理に勝って、非に落つ【句】道理上よりいへば勝ちながら、事實に於て、負となる。〔諺語〕

理に達する者は、必ず權に明かなり【句】『莊子の秋水篇に「北海若曰、知レ道者、必達二於理一。達二於理一者、必明二於權一。明二於權一者、不二以レ物害一レ己」とあるに本づく』事の道理に明かなる者は、權宜の處置を善くす。〔諺語〕

理に詰む『【句】『詰むは下二段活用』道理を說きて言ひ詰む。

理に詰む【句】『詰むは四段活用』言ふ所、精密に道理に合す。趣味人情味には豐かならねど、理路透徹す。「理に詰みたる話」

理の高(タカ)じたるは、非の一倍【句】「理も强ひぬれば、非の一倍」に同じ。「と。〔諺語〕

理の當然【句】道理上、然あるべきこと。

理も强ひぬれば、非の一倍【句】道理のみにて、相手を壓服せんとするは、非理なるよりも遠し。〔諺語〕

理を窮め、性を盡す【句】『易の說卦に「窮レ理盡レ性、以至二於命一」とあるに本づく』天地の理を推し窮めて、人類の天より受けたる性能を詳かにす。理を以て、非に落つ【句】「理に勝って、非に落つ」に同じ。〔諺語〕

り 利【名】『刃物のするどきこと。氣持よく切るること。鋭利。快利。『りき

(利器)の略。太平記「大敵の圍を出でんと、自ら利を破り、堅を碎き給ふと雖も」 ㊁物事の、すらすらと運びて、滯らぬこと。都合よきこと。便利。正統記「天の時に隨ひ、地の利に依れり」 ㊂戰爭・競技などに勝つこと。勝利。 ㊃まうけ。とく。利益。利得。得益。正統記「商沽の利を通ずるもあり」 ㊄りそく(利息)に同じ。胸算用「利をかく金五貫目借りて」

利が乘る【句】〔商〕定期取引の時、賣買の結果、自己の利益を生ずる結果となる。〔取引所の語〕

利が利を生む【句】貸金又は貯金が、長期に亙る間に、利子に利子を生じて、增加す。

利によりて行へば、怨多し【句】『論語の里仁篇に「子曰、放二於利一而行、多レ怨」とあり』己の利慾のみによりて事を行ふ時は、必ず人の利益を害し、怨みらるること多し。

利は向上に無かれ【句】自己の能力に任せて、利益を貪るべからず。〔諺語〕

利を喰ふ【句】㊀利息を拂ふために、出費嵩む。 ㊁〔商〕定期取引の買玉(カリギ)又は賣玉(ヨウリギ)に利の乘りたる時、轉賣又は買戻を行ひて、その差金を取る。〔取引所の語〕

利を拔く【句】〔商〕定期取引の買玉(カリギ)又は賣玉(ヨウリギ)に利の乘りたる時、轉賣又は買戻を行ひて、その差金を利得す。〔取引所の語〕

利を見て、義を思ふ【句】『論語の憲問篇に「子曰、見レ利思レ義、見レ危授レ命」とあり』利益を見ては、義に合ふや否やを考へたる上にて、取ると否とを決す。

り

吏【名】やくにん。官吏。公吏。

痢【名】痢病。下痢。

履【名】くつ(沓)に同じ。

履鮮かなりと雖も、枕に加へず【句】『新序に「履雖レ鮮弗二以加一枕。冠雖レ弊弗二以苴一履」とあり』上下の分の、亂るべからざる譬。

離【名】易の八卦の一。南方に配し、三の形を以て表はす。

里【名】㊀さと。むら。むらざと。村落。 ㊁支那唐代の制度にて、人家百戶を一區域としたる地。 ㊂大寶令の制度にて、郡の內を分ちて、人家五十戶を一區域としたる地、又、靈龜元年從來の里を鄕(ゴウ)と改稱せし時、その下の小區分として設けし名稱。後世、村の稱を用ふるに及びて、次第に廢絕せり。さと。あまべ(餘戶) ㊃參照。 ㊄ごう(洞)に同じ。

【助動】四段活用の動詞の第五變化につきて、つぬたりと同義の意を示す語。但し、實は、もと、第二變化に動詞「有り」の添はりたるものの約轉にて、眞の助動詞にあらず。

裏・裡【接尾】その場所又はその狀態の內の意。「祕密裡に調査す」「交際場裡に出入す」

【接尾】貌詞の語末を形づくるに用ふる語。「ばたり」「うかり」「どっさり」

里【助數】㊀王朝時代の班田の面積の單位。一里は三十六町歩。卽ち坪㊁の二萬一千六百倍。 ㊁道程の單位。古は六町、今は三十六町を一里とす。

釐・厘【助數】㊀尺度の單位。分(ブ)の十分の一。 ㊁量目の單位。分(ブ)の十分の一。 ㊂銀目の單位。分(ブ)の十分の一。

浬【助數】かいり(海里)に同じ。

りーあげ 利上【名】㊀利息を高くすること。(利下(サゲ)に對して) ㊁貸入して、その期限に至り、利息金のみを拂ひ、更に期限を延ばすこと。萬紅千紫「流るべき質くさながら今日ばかり利上をしても星に貸さなん」 「筋道。わけ。

りーあひ 理合【名】道理の譯あひ。事の

りーあひ 利合【名】りそく(利息)に同じ。

りあんくうるれつがん リアンクウル列岩【名】〔地〕りゃんくうるれつがん(リャンクウル列岩)を見よ。

りありすと (英 Realist)【名】現實に重きを置きて生活する人。

りありずむ (英 Realism)【名】㊀げんじつしゅぎ(現實主義)に同じ。 ㊁〔文・美〕しゃじつしゅぎ(寫實主義)に同じ。

りありてい 實在・現實。

りーい 邏迤【名】山・建物などが連なり續くさま。迤邐。

りーいう 理由【名】結果を生ずるに至れる筋道。わけ。仔細。

りいぐ (英 Leagueの)【名】同盟。盟約。

りいぐーせん リイグ戰【名】各大學又は各專門學校が、互に盟約を結びて行ふ運動競技。

りいじり 利尻【名】〔地〕りしり(利尻)に同じ。

りいじりーたう 利尻島【名】〔地〕りしりしたう(利尻島)に同じ。

りいじりーやま 利尻山【名】〔地〕りしりやま(利尻山)に同じ。

りいだあ (英 Reader)【名】㊀讀方の教科書。讀本。 ㊁讀者。

りいだあ (英 Leader)【名】音頭とり。指揮者。

りいだあーせん リイダア線(英 Leader)【名】てんせん(點線)に同じ。〔印刷業上の語〕 「課目。よみかた。

りいぢんぐ (英 Reading)【名】讀方の

りいべ (獨 Liebe)【名】愛。戀愛。らぶ。

りう 騮【名】くりげの馬。「かせぬこと。

りう 騮の耳語(ヤサキ)【句】馬術にて、馬を嘶

りう 流【名】㊀藝術上、その人、その家にて特有なる方式。ながれ。流儀。 ㊁その國、その人に特有なる取扱方。流儀。 ㊂りうけい(流刑)に同じ。「流に處す」

流を汲む【句】「流(ナガ)を汲む」に同じ。盛衰記「傳教師資の流を汲み、圓頓實教の法を學しながら」

りう 柳【名】二十八宿の一。北方にあるもの。ぬりごぼし。

りう 留【名】〔天〕『英 Stationary point』遊星が、その軌道上に、一時停息して見ゆる位置。

りう 梨雨【名】梨の花に降る雨。

りう 六【數】『字の唐音』むつ。りく。ろく。〔清樂又は拳(ケン)の語〕

りう 【貌】『りうとを見よ』衣裝などの、立派にはだてるさま。浮世床「形(ナリ)はりゅぎ(現實主義)に同じ。 ㊁〔文・美〕しゃじつしゅぎ(寫實主義)に同じ。

りありてい 實在・現實。

りーい 邏迤【名】山・建物などが連なり續くさま。迤邐。

りーいう 理由【名】結果を生ずるに至れる筋道。わけ。仔細。

りいぐ (英 Leagueの)【名】同盟。盟約。

りいぐーせん リイグ戰【名】各大學又は各專門學校が、互に盟約を結びて行ふ運動競技。

りいじり 利尻【名】〔地〕りしり(利尻)に同じ。

りいじりーたう 利尻島【名】〔地〕りしりしたう(利尻島)に同じ。

りいじりーやま 利尻山【名】〔地〕りしりやま(利尻山)に同じ。

りいだあ (英 Reader)【名】㊀讀方の教科書。讀本。 ㊁讀者。

りいだあ (英 Leader)【名】音頭とり。指揮者。

りいだあーせん リイダア線(英 Leader)【名】てんせん(點線)に同じ。〔印刷業上の語〕 「課目。よみかた。

りいぢんぐ (英 Reading)【名】讀方の

りいべ (獨 Liebe)【名】愛。戀愛。らぶ。

りう 騮【名】くりげの馬。「かせぬこと。

りう 騮の耳語(ヤサキ)【句】馬術にて、馬を嘶

りう 流【名】㊀藝術上、その人、その家にて特有なる方式。ながれ。流儀。 ㊁その國、その人に特有なる取扱方。流儀。 ㊂りうけい(流刑)に同じ。「流に處す」

流を汲む【句】「流(ナガ)を汲む」に同じ。盛衰記「傳教師資の流を汲み、圓頓實教の法を學しながら」

りう 柳【名】二十八宿の一。北方にあるもの。ぬりごぼし。

りう 留【名】〔天〕『英 Stationary point』遊星が、その軌道上に、一時停息して見ゆる位置。

りう 梨雨【名】梨の花に降る雨。

りう 六【數】『字の唐音』むつ。りく。ろく。〔清樂又は拳(ケン)の語〕

りう 【貌】『りうとを見よ』衣裝などの、立派にはだてるさま。浮世床「形(ナリ)はうとしてゐるから、なかなか素一歩(ナスイ)のお客とは見えねえ」

りう 流【接尾】品位・等級の意。「中流社會」「第一流の名家」 「語。

りう 流旒【助數】旗を數ふるに用ふる

りうーあ 流亞【名】ありう(亞流)に同じ。

りうーあう 柳櫻【名】やなぎとさくらと。

りうーあう 流鶯【名】木づたひて啼く鶯。一說に、滑らかに囀る鶯なりと。又、一說に、ばんあう(晩鶯)に同じと。

りうあつーけい 流壓計【名】『英 Hydrostatic pendulum』流速を測定する器械。

りうーあん 硫安【名】〔化〕りうくわあんちもん(硫化安質母尼)の略。

りうーあんーえんくわう 硫安鉛鑛【名】〔鑛〕鉛・アンチモン・硫黃の化合物なる鑛石。多くは、纖維狀に凝聚して、石英脈中に存し、灰色にして、金屬光澤を呈す。硬度は二乃至二・五、比重は約五・七。硫鉛安質母尼鑛。

りうーあんーぎんくわう 硫安銀鑛【名】〔鑛〕銀・アンチモン・硫黃の化合物なる銀の鑛石。脆銀鑛。

りうあんーくわめい 柳暗花明【句】柳は茂りて暗く、花は咲きて明らかなる春野の眺。

りうーい 柳意【名】柳の心もち。(柳を人「に擬していふ」

りうーい 留意【名】意をとどむること。氣を附くること。注意。留心。

りうーいん 溜飲【名】慢性胃加答兒に發する症狀。飲食物の、消化せずに、胃中に停滯し、腐敗して、酸敗液を出すもの。

溜飲が下る【句】㊀胸すきて、快くなる。 ㊁思ふままに恨をはらして、心始めて落ちつく。怒りやむ。はらゐる。

溜飲を下ぐ【句】㊀胸をすかして、快くす。 ㊁思ふままに事を果して、心を落ちつかす。はらゐせをなす。

りうーいん 柳陰・柳蔭【名】柳のかげ。

りうーう 柳雨【名】柳に降る雨。

りうーう 柳塢【名】柳の木のある堤。

りう-うしやく 劉禹錫【名】〔人〕支那唐の詩人。字は夢得(ボウ)。彭城の人。貞元の末、蘇州刺史より、太子賓客となり、王叔文の黨に坐して、連州刺史・朗州司馬等に貶せられ、後、召還せられて、主客郎中となり、會昌二年死す。年七十二。戶部尙書を贈らる。著す所、劉賓客文集三十卷、外集十卷あり。

りう-えい 柳營【名】『支那漢の周勃の子なる將軍周亞夫の、匈奴征討を命ぜられし時、細柳といふ地に陣し、軍規嚴肅、武帝をして敬意を表せしめし故事より出でたる語』■將軍の幕處。幕府。やなぎのいとなみ。太平記「闌省露深く、柳營烟暗く」■將軍。平並「柳營の職には、卯の年の人は、げにたよりありけるものかな」

りう-えう 柳腰【名】■『廣信の和三人日晚景宴昆明池詩に「上林柳腰細、新豐酒徑多」とあり』柳の細き枝。■『溫庭筠の南歌子詞に「轉盼如ノ波眼、娉婷似ノ柳腰」とあり』美人の腰の細きを形容していふ語。やなぎごし。蜂腰。細腰。

りう-えき 流液【名】流るるしる。

りう-えふ 柳葉【名】柳の葉。

りうえふさい 柳葉菜【名】〔植〕あかばな(赤花)■の漢名。

りうえふさい-くわ 柳葉菜科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區に屬する科。あかばなくわ。

りうえふの-さいこ 柳葉柴胡【名】〔植〕すぎさいこ(鈴柴胡)に同じ。

りう-えん 柳煙【名】柳にたなびく煙又「靄」。

りう-えん-あんちもんくわう 硫鉛安質母尼鑛【名】〔鑛〕りうあんえんくわう(硫安鉛鑛)に同じ。

りう-おん 流音【名】〔語〕『英 Liquid. もと希臘人の命名。破裂音・摩擦音の佶倔聱牙なると區別していふ』舌を上顎に接せしめて、その中間もしくは兩側より發せしむる子音。中間より發せしむるものは r、兩側より發せしむるものは l なり。

りう-か 柳下【名】柳のかげ。柳蔭。

りう-か 流霞【名】■たなびく霞。■『論衡に「飲二我流霞一杯一」、李商隱の詩に「尋レ芳不レ覺醉二流霞一」とあり』さけ(酒)の異稱。

りう-かう 柳巷【名】いろざと(色里)に同じ。

りう-かう 流行【名】■『易經の上經に「品物流行」、左傳の僖公十三年の條に「天災流行」とあり』水の流れゆきて定まらざるが如くなること。うつりかはり。推移。■世に行はるること。はやり。「文」「不易(ヤウエ)・流行」を見よ。

流行を追ふ【句】世の流行に後れじとて、あせる。「を見よ。

りう-かう 劉向【名】〔人〕りうきやう(劉向)

りうかう-おくれ 流行後【名】流行■の時期にはづるること。

りうかう-かんばう 流行感冒【名】〔醫〕

りうかうせいかんばう (流行性感冒)に同じ。

りうかうじ 流行兒【名】廣く世間の評判に上る人。はやりっこ。

りうかう-しやうぐわつ 流行正月【名】病氣流行又は凶災などの年に、その時期は正月ならぬに拘らず、その災厄を免るるために、その年の經過して、來年の正月の來りたると同じさまに、松・餅・雜煮などの祝をすること。

りうかうせい-かんばう 流行性感冒【名】〔醫〕いんふるえんざに同じ。

りうかうびやう 流行病【名】一時流行する病氣。はやりやまひ。時疫。疫病。傳染病。

りう-かく 【名】りゆうかく(龍角)の誤。

りう-がく 留學【名】外國に在留して、學問を修むること。「生。

りうがく-せい 留學生【名】留學する學生。

りうがく-そう 留學僧【名】留學する僧侶。

りうがく-ひ 留學費【名】留學するに必要なる費用。

りうかさう-しふ 柳河東集【名】〔書〕柳宗元の詩文集。四十七卷。

りう-がはり 流變【名】流儀の・一風かはれること。異流。

りう-かん 流感【名】〔醫〕りうかうせいかんばう(流行性感冒)の略。

りう-かん 流汗【名】汗を流すこと、又流「るる汗。

りう-がん 柳眼【名】柳の木の芽。

りう-がん 柳岸【名】柳の木の植ゑてある岸。

りう-き 流旗【名】ふきながし(吹流)に同じ。

りう-き 流期【名】質物(モンノ)の流るる期限。

りう-ぎ 流儀【名】りう(流)■■に同じ。

りうきう 琉球【名】■〔地〕『古、支那にて、臺灣を主とし、この列島をも含めて呼びしもの』西海道十二國の一。四十有餘の群島より成り、大別すれば、島嶼、おのづから、沖繩諸島・先島(サキシマ)諸島・ピンナクル群島の三部に分る。行政上、那覇(ナハ)・首里(シユリ)の二區及び島尻(シマジリ)・中頭(ナカガミ)・國頭(クニガミ)・宮古(ミヤコ)・八重山(ヤヤマ)の五郡に分れ、全國、沖繩縣の管轄に屬す。流虬・流求・硫鬼・瑠求・瑠球。■りうきうつむぎ(琉球紬)の略。■〔植〕りうきういも(琉球芋)の略。

琉球の五嶽【句】〔地〕琉球國にある五つの山、即ち佳楚(ソウ)嶽・名護(ゴ)嶽・恩納(オン)嶽・辨(ベン)嶽・八期嶽。

りうきう-あふひ 琉球葵【名】〔動〕斧足類に屬する軟體動物。殼は、高さ、長さより勝り、幅廣く、左右の殼片は、前方・中央部に膨脹部あり、後方はやや平坦、內面は白く、表面は黃色を呈す。

りうきう-あね 琉球藍・馬藍・唐藍【名】〔植〕爵牀(ハツシヤウ)科に屬する常綠草。高さ一二尺、莖は平滑にして節高く、葉は對生し、楕圓形にして、頂端尖り、細鋸齒あり、葉面平滑にして光澤あり、暗綠色を呈し、紫色の花を開く。琉球・臺灣に產し、莖・葉を、藍色の染料に用ふ。薩摩紺飛白を染むるもの、これなり。

りうきう-いも 琉球芋【名】〔植〕『薩摩へは、琉球より渡來せしものなるよりいふ』さつまいも(薩摩芋)に同じ。

りうきう-おもて 琉球表【名】しちたうゐ(七島藺)を見よ。

りうきう-かがい 琉球笄【名】〔植〕紅樹科に屬する常綠小喬木。葉は對生し、革質・全緣・長楕圓形にして、花瓣の二分せる白花を開く。胚は果實の脫落に先だちて發芽し、果外に長根を出す。我國南地の海邊に自生し、樹皮は染料となる。おほひぎ。

りうきう-がしは 琉球槲【名】〔植〕いつせ

りうきう-がすり 琉球絣・琉球飛白【名】琉球產の泥藍を染料とせる木綿絣。染色後洗滌し、數十回同一方法を反復するが故に、色澤堅牢なり。さつまがすり(薩摩絣)參照。

りうきう-からすばと 琉球烏鳩【名】〔動〕鳩鴿類に屬する鳥。概略烏鳩に似たれど、背上部に、半月形の白斑橫列せり。琉球諸島に產す。

りうきう-ご 琉球語【名】琉球諸島並びに奄美(アマ)大島諸島の住民の用ふる言語。日本語の姉妹語にして、音韻・單語・文法等に於て、その證徵歷然たり。沖繩・宮古(ミヤコ)・八重山及び大島の四方言に分つ。

りうきう-こざくら 琉球小櫻【名】〔植〕■なんきんこざくら(南京小櫻)に同じ。■ゆきわりさう(雪割草)に同じ。

りうきう-じん 琉球人【名】琉球の人民。

りうきう-しゆうちく 琉球櫻櫚竹【名】〔植〕くわんおんちく(觀音竹)に同じ。

りうきう-しよたう 琉球諸島【名】〔地〕

りうきうれったう (琉球列島)に同じ。

りうきう-たけ 琉球竹【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。形、筍に似て、長さ四五寸、殼は淡朱色を呈し、淡黑色の斑あり。琉球等に多く產す。

りうきう-だんご 琉球團子【名】饂飩粉を水にて解き、湯煮して、黃粉(キナ)を附けたるもの。つみいれだんご。

りうきう-ちく 琉球竹【名】〔動〕ほていちく(布袋竹)に同じ。「の略。

りうきう-つうはう 琉球通寶【名】次條

りうきう-つうはうせん 琉球通寶錢【名】文久元年、薩摩國鹿兒島にて、琉球國に於ける通用を名として發行したる銅錢。形は、天保錢と同一なるものと、徑一寸四分の圓形なるとあり。前者は、表面に「琉球

通寶」の四字、背面に「當百」の二字あり、價格は、天保通寶より八文低かりきといふ。後者は、表面に、隷書の「琉球通寶」の四字、背面に「半朱」の二字ありて、一朱の半に通用したりといふ。

りうきう-つつじ 琉球躑躅【名】〔植〕ひらさつつじ(平戸躑躅)に同じ。

りうきう-つのまた 琉球角叉【名】■〔植〕紅色藻類に屬する海藻。體は圓柱狀にて、多數の尖りたる枝を出し、全面に乳頭狀の突起を有す。琉球に產し、糊料に供し、又、食用とす。■〔動〕腹足類に屬する軟體動物。殼は、長さ約三寸、厚くして、紡錘狀をなし、褐色中に黃色の縱條あり。南海に產す。

りうきう-つぼめ 琉球燕【名】鳴禽類に屬する鳥。普通の燕と殆ど同一なれども、全形やや小く、喉部は赤褐なり。琉球に產す。

りうきう-つむぎ 琉球紬【名】琉球より產する紬。縞地なるも、絣(がす)なるもあり。柔軟・强靱なるを以て、珍重せらる。めんりうきう(綿琉球)參照。

りうきう-なでしこ 琉球撫子【名】〔動〕斧足類に屬する軟體動物。殼は一寸許、圓形に近く、質脆く、その色、褐・紅・紫・黃・白等一樣ならずして、美し。琉球に產す。

りうきう-ぶぎやう 琉球奉行【名】室町幕府の職制の一。琉球國使入貢等の事を掌りしもの。

りうきう-ぶし 琉球節【名】明治三十年頃、東京に行はれし俗謠の一。琉球の俗謠の曲節を加味して、內地にて作りたるものなるべし。歌詞は「琉球へおぢやるなら草鞋(わらぢ)穿(ハ)いておぢやれ、琉球は石原小石原」の類。

りうきう-ますほ 琉球眞赭【名】〔動〕斧足類に屬する軟體動物。殼は楕圓形にして、左右二片の形・大さ、共に同じく、表面は白色、內面は紅色又は紫色を呈す。

りうきう-まめ 琉球豆【名】〔植〕■かいこうづ(海紅豆)に同じ。■きまめ(木豆)に同じ。

りうきう-むくげ 琉球木槿【名】〔植〕ぶつさうげな(佛桑花)に同じ。

りうきう-むしろ 琉球筵【名】りうきうおもて(琉球表)に同じ。

りうきう-もくかう 琉球木瓜【名】〔植〕やまばこ(山烟草)に同じ。

りうきう-もず 琉球鵙・琉球百舌【名】〔動〕鳴禽類に屬する鳥。頂部より後頸部にかけて灰色、背部に下るに隨ひて、漸次褐色を呈し、腰と尾とは赤褐色なり。支那に產し、冬期琉球に渡來す。しまもず。

りうきう-もみ 琉球樅【名】〔植〕くわうえふさん(廣葉杉)に同じ。

りうきう-やまたにし 琉球山田螺【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。琉球に產し、陸上に棲息す。

りうきう-ゆり 琉球百合【名】〔植〕てっぱうゆり(鐵砲百合)に同じ。

りうきう-りうでう 琉球柳條【名】琉球より產する柳條。八丈絹に似て、美なり。

りうきう-れったう 琉球列島【名】〔地〕九州と臺灣との間に弧形を成して散布せる島。卽ち琉球の一國を形づくる諸島を指すものなれども、地勢上よりすれば、大隅諸島(一名、薩隅諸島)・寶(タカ)七島・大島諸島の三大群を包含すべきものなり。

りうきう-ね 琉球蘭【名】〔植〕しちたうね(七島藺)を見よ。

りうきう-とう 硫氣孔【名】〔地〕『伊Soffaro』噴氣孔の一。亞硫酸瓦斯・硫化水素等、硫黃質の瓦斯を放散するもの。

りうきど 劉寄奴【名】〔植〕はんごんさう(反魂草)の漢名。

りう-きん 琉金【名】■しんちゆう(眞鍮)に同じ。■〔動〕『琉球金魚の義』金魚の一品種。體短く圓く、腹部膨出し、尾鰭は長くして垂る。をながし。

りうぎん-くわう 硫銀鑛【名】〔鑛〕きぎんくわう(輝銀鑛)に同じ。

りうきん-しやくせき 流金鑠石【句】『淮南子に「大熱鑠石流金、火弗ミ爲益二其烈一」とあり』暑氣の甚しき形容。

りうきん-せうど 流金焦土【句】『莊子の逍遙遊篇に「大旱金石流、土山焦而不ル熱」とあり』前條に同じ。

りう-きやう 劉向【名】〔人〕支那の學者。字は子政。前漢宣帝の時、散騎諫大夫給事中に進み、元帝の時蕭望之と心を同じくして、政を輔けしが、宦官に嫉まれて獄に下る。成帝の時、郎中に任ぜられ、外戚王氏の專橫を嫉み、書を著して、これを責む。建平元年歿す。年七十二。著す所、新序・說苑・列女傳等あり。

りう-ぐ 輪鼓【名】りうご(輪鼓)に同じ。俗曲(藏朝嘉例)「手綱かい繰り、しっとんしっとん、りうぐ・あぎりを乘りまはし」

りう-ぐう 流寓【名】さすらひつつ處處にとどまること。流浪して、他國に住むこと。

りう-くわ 流火【名】りうせい(流星)に同じ。

りう-くわ 柳花【名】柳の花。柳絮。

りう-くわ 榴花【名】ざくろの花。

りうくわ-あえん 硫化亞鉛【名】〔化〕『英Zinc sulphide』亞鉛の硫化物。天然には、閃亞鉛鑛として產出し、又、亞鉛化合物の溶液に、硫化アンモニウムを加ふれば、白色の沈澱物となりて得。白色のペンキを造るに用ふ。

りうくわ-あんちもにい 硫化安質母尼【名】〔化〕『英Antimony sulphide又Antimony trisulphide』アンチモンの硫化物。天然には、輝安鑛と稱し、針狀の結晶をなし、灰黑色の金屬光澤を有して、產出す。又、人工を以て、アンチモン鹽の溶液に硫化水素を作用せしむる時は、橙黃の沈澱となりて生ず。天然產のは、烟火・マッチの製造に用ひ、人工を以て製したるは、顏料に供す。

りうくわ-あんちもん 硫化安質母【名】〔化〕『獨Antimonsulfid』前條に同じ。

りうくわ-あんもにうむ 硫化安母紐謨【名】〔化〕『英Ammonium sulphide』アンモニヤの硫化物。成分に種類多く、性質・製法等も各異なり。その一種、硫化水素を、アンモニヤ水に通じて得るものは、硫水化アンモニウムにして、これに硫黃の粉末を作用せしむる時は、多硫化アンモニウム又は黃色硫化アンモニウムと稱する黃色液を得。後者は、種種の金屬の硫化物を溶解する性質あるにより、硫化水素と同樣に試藥に供せらる。

りうくわい 流會【名】會合が、故障生じて成立せぬこと。お流(ナガ)。

りうくわう 流光【名】■光陰の經過すること。月日のたつこと。流年。■月の光の、波に映りて、流るるが如く見ゆること。

りうくわ-かどみうむ 硫化カドミウム【名】〔化〕『英Cadmium sulphide』カドミウムの硫化物。黃色を呈し、顏料とす。

りうくわ-かるしうむ 硫化加個叟母【名】〔化〕『英Calcium sulphide』カルシウムの硫化物。塊狀にして、灰白色を呈し、燐光を放つ。水には溶けざれども、酸により分解せられて、硫化水素を發生す。石膏の粉末に炭を加へ、空氣を通ぜずして熱すれば得。硫化石灰。

りうくわ-ぎん 硫化銀【名】〔化〕『英Silver sulphide』銀の硫化物。黑色の粉末にして、硫酸又は硝酸には容易に溶解す。銀器が、硫黃の氣に觸れて、黑く變ずるは、この物を生ずるに因る。又、輝銀鑛の主成分をなす。

りうくわ-きんぞく 硫化金屬【名】〔化〕『英Sulphides of metals』金屬の硫化物の總稱。天然に鑛石として產するもの多く、又、硫黃と共に熔融し、或は、硫化水素・硫化アルカリもしくは硫化アンモニウムを作用せしむる時生ず。黑色を呈するもの多し。

りうくわ-ごむ 硫化護謨【名】『英Vulcanized rubber』生(キ)護謨に硫黃を作用せしめて得る製品。護謨工業上、用途廣し。

りうくわ-すゐぎん 硫化水銀【名】〔化〕同じ。

りうくわだいにすゐぎん 硫化第二水銀【名】〔化〕同じ。

りうくわ-すゐそ 硫化水素【名】〔化〕『英

Hydrogen sulphide』水素の硫化物。腐卵の如き悪臭を放つ。無色・有毒の氣體にして、火山より噴出する氣體の中に混じ、又、或鑛泉中に溶解して存し、硫黄を含める有機物の腐敗する時にも生ず。可燃性を有し、水には相當に溶け、その液は、弱酸性の反應を呈す。硫化第一鐵に稀硫酸又は鹽酸を注ぎ、又は、沸騰せる硫黄に水素を通ずれば得。金屬鹽類の溶液に通ずる時は、金屬の硫化物を沈澱せしむる特性あるため、硫化アンモニウムと共に試藥に用ふ。

りうくわ-せきくわい 硫化石灰【名】〔化〕

りうくわかるしうむ(硫化加爾度母)に同じ。

りうくわ-だいいち-てつ 硫化第一鐵【名】〔化〕『英 Ferrous sulphide』鐵の硫化物の一種。鐵と硫黄とを、適當なる割合に混じて熔融せしめて得る、青銅色・塊狀なるもの。硫化水素の製造に用ふ。

りうくわ-だいいちどう 硫化第一銅【名】〔化〕『英 Cuprous sulphide』銅の硫化物の一種。天然には、硫銅鑛として產出し、又、硫化第二銅を、空氣を通ぜず、水素の氣流を通じて熱し、若しくは、硫黄の蒸氣中にて、銅を熱する時に生ず。硫化銅。

りうくわ-だいにすいぎん 硫化第二水銀【名】〔化〕『英 Mercuric sulphide』水銀の硫化物の一種。天然には、辰砂として產出し、人工品は、朱これなり。朱も、日光に遭へば、漸次黑色品に變ず。水に溶けず、他の種種の藥品に對しても、抵抗力甚だ强けれど、王水には容易に溶け、强熱すれば、無水亞硫酸及び水銀となる。

りうくわ-だいにどう 硫化第二銅【名】〔化〕『英 Cupric sulphide』銅の硫化物の一種。天然には銅藍として產出す。銅と硫黄と又は銅鹽溶液と硫化水素との化合によりて生ず。黑褐色なる粉末をなし、稀薄酸に溶けず。りうくわだいいちどう(硫化第一銅)參照。

りうくわ-だん 榴火彈【名】〔兵〕えいくわだん(曳火彈)に同じ。

りうくわ-たんそ 硫化炭素【名】〔化〕『英 Carbon sulphide』にりうくわたんそ(二硫化炭素)に同じ。

りうくわ-てつ 硫化鐵【名】〔化〕りうくわだいいちてつ(硫化第一鐵)に同じ。

りうくわ-どう 硫化銅【名】〔化〕りうくわだいいちどう(硫化第一銅)に同じ。

りうくわ-なまり 硫化鉛【名】〔化〕『英 Lead sulphide』鉛の硫化物。天然には、方鉛鑛として產出し、鉛鹽の溶液に硫化水素を通じても、黑色なる沈澱物となりて得べし。硫化アルカリ・稀薄酸に溶けず。熱すれば、酸化鉛・硫酸鉛を生ず。

りうくわ-ぶつ 硫化物【名】〔化〕『英 Sulphides』他の元素の硫黄と化合したるもの。硫化銀・硫化水素など。金屬の硫化物は、硫化金屬と稱す。

りう-ぐわん 流丸【名】發射したる彈丸の、外れて飛びゆくもの。ながれだま。それだま。流彈。

りうくわ-ゑん 柳花苑【名】舞樂の一種。後世は音樂のみ傳はりて、舞曲は絕ゆ。

りう-けい 流刑【名】一るざい(流罪)に同じ。二〔法〕舊刑法に於ける重罪の主刑の一。國事犯に科し、島地の獄に幽閉して、定役には服せしめざりき。有期流刑・無期流刑の二種ありたり。「螢。

りう-けい 流螢【名】光を放ちつつ飛ぶ

りう-けつ 流血【名】傷きて、血を流すこと、又流るる血。

りう-げ 流外【名】次條を見よ。流外の官【句】王朝時代に、本官の下司(シクワツ)にて、相當の位階なかりし官。例へば、中務(ナカツカサ)省の內舍人(ウドネリ)、太政官の官掌(ヤクワンジ)など。(「流內の官」に對して)

りう-げん 流言【名】無根の風說。とりざた。浮言。飛言。飛語。流說。

りう-げんさく 劉玄德【名】〔人〕りうび(劉備)に同じ。

りう-ご 輪鼓・輪子【名】一鼓の胴の如き形、即ち長くして、中部のくびれてあるもの。「立鼓(イツウ)」一目玉鉾「庄野(シヤ)、この宿(クヤ)の名物に、燒米の俵を、美しげに藁をすぐりて、青き苧(ソ)にして、細かに編みけるその形(リナ)は、りうごの如し」二紋所の一。前項の輪鼓の縱斷面に擬したる形のもの。一(ヒト)輪鼓・二(フタ)輪鼓・三並(ミツナ)輪鼓・引兩(ヒキヤウ)輪鼓などの種類あり。粒子。太平記「輪鼓の笠印附けたる武者」三指物(モサシ)、一の一。四雜技の一。輪鼓の形の、くびれたる部分に緒を卷きつけ、廻轉しつつ投げ上げ、又承けなどするものならんといふ。即ち西洋傳來のヂャボロと同樣のものなるべし。和名抄「輪鼓二人(諸雜藝之中、弄二輪鼓一之者二人也。今案、此物所レ出未レ詳。但其形如二細腰鼓一、而輪二轉於絲上一、故以名レ之)」五紡績を廻轉せしむるため、それに取り附け、調絲(イトヅク)を卷きたるもの。形、小鼓の如し。六馬術にて、輪鼓の形、即ち X の線の方向を取りて乘りまはすこと。りうごのり。

りう-ご 留後【名】支那唐代の節度使の代理の官。節度使死歿後、その子、朝命に依らずして、自らこの官命を稱し、父の遺兵を領して、節度使の權勢を世襲するに至りしもの。斯くて、節度使は諸侯と同樣のものとなり、唐室傾覆の基をなせり。

りう-ご 林檎【名】〔植〕りんご(林檎)の音便。きのふはけふの物語「ちりけもとを、一つたたきければ、りうごの如くなる餅、三間あまり先へ飛んで出る」

りう-ごう 林檎【名】〔植〕前條に同じ。和名抄「林檎、利宇古宇、與二柰相似而小者也」

りう-ごうけん 柳公權【名】〔人〕支那唐代の人。廣く經術に通じ、尤も書を巧みにす。穆宗の嘗て筆法を問ひしに對し、心正しければ、筆正しと答へて、帝をして、感悟せしむ。文帝の朝、累遷して、太子太保に至りて致仕す。

りうご-のり 輪鼓乘・輪子乘【名】りうご(輪鼓)ゑに同じ。甲陽軍鑑「馬上にて、俄かに足輕をはくるは、りうご乘の事」

りうご-ふなばり 輪鼓船梁・輪子船梁【名】和船の船梁の一。蹴上(ケアゲ)船梁の下にあり、犀(ホゾ)又は樋(ヒ)を裝置して、淦(カイ)を除き去るやうにせる所。荷船には、淦拔(キユ)と呼ぶ。ゆぬき。

りう-こんいつ 劉坤一【名】〔人〕支那清朝の政治家。字は峴莊。湖南省湖鄉の人。長髮賊の亂に、戰功あり。後、湖南巡撫・湖廣總督・兩江總督に歷任し、日清戰役に、總司令官に拜せしが、就任に先だちて和成る。北清事變には、斡旋・交涉に力を盡したり。光緒二十八年歿す。年六十六。

りう-さ 流沙【名】一水に押し流されたる沙。「流砂」二廣大なる砂原。沙漠。(支那にて、戈壁(ゴビ)の沙漠にいふ)盛褒記「玄奘三藏、流沙・葱嶺を凌ぎて、佛生國(ブツシヤコク)へ渡り」

りう-ざい 流罪【名】るざい(流罪)に同じ。

りうさ-がは 流沙川【名】りうさ(流沙)二に同じ。根南志具佐「弘法大師渡天の砌、流沙川の川上にて」

りう-さん 硫酸【名】〔化〕『英 Sulphuric acid』硫黄と酸素と水素との化合より成る無機酸。純粹なるは無色なれども、不純品は、有機物等を含むが故に、褐色を帶ぶ。濃硫酸又は强硫酸と稱するものは、比重約一・八四にして、百分中二乃至四の水を含む。能く水と混和し、その際、强熱を發す。酸化窒素を觸媒として、無水亞硫酸・酸素及び水を化合せしめて製する外、鉛室法・接觸法と稱するものあり。各條を見よ。脫水劑、又、炭酸曹達及び肥料の製造、その他、工業上の用途廣大なり。

りう-ざん 流產【名】胎兒の、分娩期以前に、死體となりて生るること。半產。

りう-ざん 流鼠【名】しまながし。流刑。

りうさん-あゑん 硫酸亞鉛【名】〔化〕『英 Zinc sulphate』亞鉛の硫酸鹽。無色の結晶をなす。天然にも產すれども、亞鉛又は酸化亞鉛に硫酸を作用せしめて製するを得。俗に皓礬と稱す。水に溶けやすく、消毒性と收斂性とを有す。藥用又は媒染劑に供す。

りうさん-あとろぴん 硫酸アトロピン【名】〔化〕『英 Atropine sulphate』アトロピンを硫酸にて處理して得る、白色・細針狀又は白色・結晶性の粉末。劇毒を有

し、水と酒精とに溶けやすく、水溶液は、中性にして、不快なる苦味を有す。瞳孔を散大する効あるを以て、眼科の醫藥に用ふ。あとろぴん鹽。

りうさんあんもにうむ 硫酸安母紐謨【名】〔化〕『英 Ammonium sulphate』アンモニヤ液に石灰を加へて、蒸氣を通じ、發出するアンモニヤの蒸氣を硫酸中に導きて化合せしむる等の方法によりて製する可溶性の鹽(エン)。コオクス製造の副產物としても得。粗製品は、他のアンモニウム鹽製造の原料に供し、又、肥料に用ふ。純品は、全く無色・透明なる結晶をなし、化學上の試劑として用ふ。

りうさんあるみにうむ 硫酸安律密紐謨【名】〔化〕『英 Aluminium sulphate』アルミニウムの硫酸鹽。礬土又は無鐵の粘土を濃硫酸と共に熱し、水にて浸出し、蒸發結晶せしめて得。普通、白色の不分明なる結晶狀の塊をなし、水に溶けやすし。媒染劑及び、他のアルミニウム鹽製造の原料に供す。

りうさんいおん 硫酸イオン【名】〔化〕『英 Sulphate ion』可溶性の硫酸鹽を水に溶かしたる時、解離して生ずる、二價の陰イオン。

りうさんえん 硫酸鹽【名】〔化〕『英 Sulphates』硫酸の水分中の水素を、金屬と置換して得る化合物の總稱。例へば、硫酸亞鉛硫酸銅など。

りうさんかんさうき 硫酸乾燥器【名】硫酸の水との結合力强きを利用して、物の水濕を除き去るに用ふる器。

りうさんかるしうむ 硫酸加爾斐謨【名】〔化〕『英 Calcium sulphate』カルシウムの硫酸鹽。天然には、石膏となりて、多量に產出し、又、カルシウム化合物の溶液に硫酸の鹽類を加ふる時、沈澱となりて得。溶解度甚だ小なれども、海水・鑛泉・河水等に、多少包含し、漂罐・鐵瓶等の湯垢を作り、又、水質を硬化せしむる基となる。

りうさんきにいね 硫酸規尼涅【名】〔化〕『英 Quinine sulphate』規那皮(キナ)の粉末を、稀硫酸にて浸出し、動物炭を以て脫色し、アルカリを加へて沈澱せしめ、稀硫酸にて更に中和し、蒸發せしむる時、殘留する白色・粉末狀の結晶。苦味を有し、解熱劑として賞用す。

りうさんくど 硫酸苦土【名】〔化〕りうさんまぐねしうむ(硫酸麻倔涅斐謨)に同じ。

りうさんくわう 硫酸鑛【名】〔鑛〕硫酸鹽なる鑛物の總稱。例へば、重晶石(硫酸バリウム)・石膏(硫酸カルシウム)など。

りうさんさんくわこう 硫酸酸化汞【名】〔化〕りうさんだいにすゐぎん(硫酸第二水銀)に同じ。

りうさんし 硫酸紙【名】『英 Parchment paper』濾紙など、糊氣を含まぬ紙を、濃硫酸に浸したる上、水洗して得る、半透明强靭なる紙。

りうさんすゐぎん 硫酸水銀【名】〔化〕りうさんだいにすゐぎん(硫酸第二水銀)に同じ。

りうさんそおだ 硫酸曹達【名】〔化〕『英 Sodium sulphate』りうさんなとりうむ(硫酸那篤留謨)に同じ。

りうさんだいいちてつ 硫酸第一鐵【名】〔化〕『英 Ferrous sulphate』鐵の硫酸鹽の一。鐵又は硫化鐵を、稀硫酸に溶かし、又は、黃鐵鑛を燒きて得る綠色の結晶物。普通には、綠礬と稱し、インキの製造及び染色術に多く用ひ、粗製品は、防臭藥及び消毒藥に供す。硫化鐵。

りうさんだいにくろむ 硫酸第二格魯謨【名】〔化〕『英 Chrome sulphate』クロムの硫酸鹽の一。重クロム酸加里を硫酸と共に熱して生ずる暗紫色なる結晶物。その、硫酸アルカリとの複鹽は、クロム明礬とて、染色・製革等に用ふ。

りうさんだいにすゐぎん 硫酸第二水銀【名】〔化〕『英 Mercuric sulphate』水銀の硫酸鹽の一。水銀と硫酸との作用により生ずる、無色の結晶物。水と煮沸する時、鹽基性硫酸第二水銀を生じ、硫酸アルカリと共に、マグネシウム屬のものと同形なる複鹽を生ず。硫酸水銀。硫酸酸化汞。

りうさんだいにてつ 硫酸第二鐵【名】〔化〕『英 Ferric sulphate』鐵の硫酸鹽の一。硫酸第一鐵の、徐徐に酸化して生ずる無色の結晶物。染色用に供す。

りうさんだん 榴霰彈【名】〔兵〕『英 Shrapnel shell』砲彈の一種。內部に炸藥と數十箇の彈子とを裝塡し、著彈するや、破裂して、彈子を散亂せしむ。重砲兵用として、野戰に缺くべからざるものにて、射彈の觀測を容易ならしむるために、爆煙の發散を必要とす。りうだん(榴彈)參照。

りうさんてつ 硫酸鐵【名】〔化〕『英 Sulphates of iron』りうさんだいいちてつ(硫酸第一鐵)とりうさんだいにてつ(硫酸第二鐵)との總稱。普通には、前者にいふ。

りうさんどう 硫酸銅【名】〔化〕『英 Copper sulphate』銅の硫酸鹽。銅屑を濃硫酸に作用せしむる等、種種の製法あり。青色の結晶をなし、普通には、丹礬と呼ぶ。熱すれば、白色の粉末となる。銅鹽中、最重要のものにて、染色・繪具の製造、木材の防腐、電池の組立等に、多量に使用す。

りうさんないかく 流產內閣【名】內閣組織の內命を受けたるまま、閣臣の人選意のままにならずして、遂に成立せずに終ること。〔俚語〕

りうさんなとりうむ 硫酸那篤留謨【名】〔化〕『獨 Natriumsulpat』ナトリウムの硫酸鹽。天然にも產し、又、食鹽・智利硝石その他のナトリウム鹽に濃硫酸を作用せしめて得る、無色・可溶性の結晶物。通俗には芒硝と呼び、硝子製造等、工業上に用途多く、又、藥用に供す。硫酸曹達。

りうさんなまり 硫酸鉛【名】〔化〕『英 Lead sulphate』鉛の硫酸鹽。天然には、硫酸鉛鑛として產し、又、鉛鹽の溶液に硫酸又は硫酸鹽の溶液を處理する時、沈澱して生ずる白色の結晶物。水・酒精及び酸には溶けず。白色の顏料の原料とす。

りうさんにっける 硫酸ニッケル【名】〔化〕『英 Nickel sulphate』ニッケルの硫酸鹽。ニッケルを硫酸に溶かしたる上、濃硫酸を處理する時生ずる、綠色・可溶性の結晶物。染色上、固著材に供することあり、又、その、硫酸アンモニウムとの複鹽は、ニッケル鍍金の原料となる。

りうさんばりうむ 硫酸巴留謨【名】〔化〕バリウムの硫酸鹽。天然には、重晶石として產し、又、バリウム鹽の溶液に硫酸又は硫酸鹽の溶液を加ふる時、沈澱して生ずる白色の結晶物。水に溶けず。顏料・塗料として用ふ。ぢゆうどはく。

りうさんまぐねしうむ 硫酸麻倔涅斐謨【名】〔化〕『英 Magnesium sulphate』マグネシウムの硫酸鹽。即ち瀉利鹽(エンヤク)にして、水に溶けやすく、苦味を有し、海水・鑛泉中に含有す。他のマグネシウム鹽製造の原料とし、又、廣く瀉下劑とし、染色上、過酸化曹達漂白助劑及び增量劑等にも使用す。しやりえん。

りうし 流矢【名】發射したる矢の、空中を飛びゆくもの。それや。ながれや。飛矢。流箭。

りうし 柳枝【名】柳の枝。柳條。

りうし 柳絲【名】柳の枝を絲に譬へていふ語。やなぎのいと。

りうし 流澌【名】「氷。」解けて流るる氷。流氷。

りうじ 【名】次條を見よ。

りうじの鰭【句】鯛の尾鰭の下方の一部。〔料理の語〕

りうじ 臨時【名】りんじ(臨時)の音便。〔古語〕

りうしう 臨時(シリウ)の祭【句】「臨時(シリウ)の祭」の音便。

りうしうこう 柳子厚【名】〔人〕りうそうげんじ。(柳宗元)に同じ。

りうしつ 流質【名】ながれじち(流質)に同じ。

りうしちけいやく 流質契約【名】〔法〕質權を設定する當時、又は、債權辨濟期に先だちて、質權者に、質物の所有權を取得せしむる契約。

りうしつ 流失【名】流れうすること。

りうしん 留心【名】〔一〕りうい(留意)に同じ。〔留神〕〔二〕『史記の吳起傳に「臣竊恐、起之無二留心一也」とあり』とどまる心。離れ去らぬ心。

りうじん 流人【名】〔一〕るにん(流人)に同

じ。 ㊁流浪する人。漂泊する人。浪人。

りうーしや 流砂・流沙 【名】りうさ(流沙)に同じ。

りうーしやう 留省 【名】王朝時代に、貢人の、考試に及第したれども、敍位に及ばず、式部省に留めおき、選敍の時を待たしめしこと。

りうーしやく 留錫 【名】くわしやく(挂錫)に「同じ。」

りうーしゆ 留守 【名】あとに殘り留まりて守ること、又その人。るす。るすばん。

りうーじゆ 柳樹 【名】やなぎの木。

りうーじゆ 榴樹 【名】柘榴(ザクロ)の木。

りうーしゆつ 流出 【名】㊀ながれ出づること。 ㊁〔哲〕『英 Emanation, 羅甸語 Emanare (流れ出づ又は溢れ出づの義)より出でたる語』りうしゆつろん(流出論)を見よ。分出。

りうしゆつ-せつ 流出說 【名】〔哲〕次條りうしゆつ-ろん 流出論 【名】〔哲〕『英 Emanation theory』宇宙の萬有を、光線の太陽に於けるが如く、無限なる神性が、自然的・必然的に溢れて、精神となり、物質となりたるによりて現出せりと見る說。ゾロアスタア(Zoroaster)、羅馬時代に於ける新プラトオン學派(New-platonism)及び敎父時代のグノスチク學派(Gnostics)などの唱道に係り、進化論㊁が、單純より複雜へ、低度より高度への展開を說くとは反對の順序を以て宇宙は展開せりと說く點は、創造論に似たれど、又、創造論の如く、神に創造の意思ありとは認めざるものなり。

りうじゆどん 柳樹屯 【名】〔地〕南滿洲關東州にある都會。大連との間に、鐵道と汽船とに依る連絡あり。淸朝時代には、大連以上に重要視せられしが、露國の大連經營以來、衰頹せり。

りうーしよ 流所 【名】はいしよ(配所)に同じ。

りうーしよ 柳絮 【名】柳の花の、綿の如くに亂れ飛ぶもの。絮雪。

柳絮の才 【句】『支那晉の謝安が、「雪の降るは、何に似る」と問ひしに、その兄謝奕の子なる郎が「鹽を空中に撒く」と答へたるに對し、謝奕の女なる道蘊が「未だ柳絮の風によりて起るに若かず」と答へたる故事(晉書に出づ)に本づく』女子の文學の才。

りうーしよく 柳色 【名】柳の青青とせるもの。

りうーすい 流水 【名】㊀流るるみづ。ながれ。ながれみづ。 ㊁物の速かに移りゆくことの譬。 ㊂『後漢書の馬皇后傳に「車如二流水一、馬如二游龍一」とあり』くるま(車)㊀の異稱。 廣添埃囊抄「車の一名を流水といふ。巡る姿、水流に似たるが故に、若し是をいふか」

流水あかず、とざい、蟲食はず 【句】『呂氏春秋の盡數篇に「流水不レ腐、戶樞不レ蠹、動也」とあるに本づく。とざいはとざし(樞)の音便』常に運動する者は、腐朽せざる譬。〔諺語〕

流水腐らず 【句】前條に同じ。〔諺語〕

流水の盃 【句】「曲水の宴」を見よ。 曲善界「流水の盃は、手、まづ遮る心なり」

流水の韻 【句】『李白の詩に「愧非二流水韻一、朋人伯牙絃」とあり。列子の湯問篇に「伯牙鼓琴、志在二流水一。鐘子期曰、善哉洋洋兮若二江河一」とあるに本づく』高妙なる音調の形容。

流水一たび去って、又歸らず 【句】過ぎたる事は、再び元の如くにせんと欲すれども及ばざる譬。〔諺語〕

りうすい 溜水 【名】たまりみづ。ためみづ。瀦水。

りうすいえんくわう 硫水鉛鑛 【名】〔鑛〕きずいえんくわう(輝水鉛鑛)に同じ。

りうせい 流星 【名】㊀空中に散布する小天體の、地球の大氣中に入り來る時、摩擦によりて光を發し、大なる速度にて通過するもの。多くは、燃燒又は飛散して、瓦斯及び微細なる粉末に變ずれども、大なるは、地上に落下して、隕石又は隕鐵となる。よばひぼし。はしりぼし。 ㊁りうせいくわ(流星火)に同じ。「流星・星下(ホシシタ)」 ㊂〔古今注に「吳有二賣劒六・四日二流星」、楊炯の詩に「赤土流星劒」とあり』支那古代の寶劒の一。

りうーせい 流井 【名】瓦斯の壓力によりて、油の自然に流れ出づる石油井。

りうせいーう 流星雨 【名】〔天〕『英 Meteoric shower』多數の流星の、雨雪の如くに飛散するもの。その各流星は、地球上、何れの地點より見るも、天球上の殆ど一點(輻對點といふ)より四方に飛散す。これ、一群の流星の、同一の方向を取りて、大氣中に進入するに因る。

りうせいーぐん 流星群 【名】〔天〕『英 Meteoric swarm』流星の集團。流星は多く群をなして、太陽の周圍を運行するものにて、その軌道が地球の軌道と接觸する時、流星の現象を生ず。流星雨となりて現るる時の輻射點の位置によりて、その所屬を定め、獅子座の流星、オリオン星座の流星など呼ぶ。

りうせいくわ 流星火 【名】星の流るるが如き狀の花火又は狼烟(ノロシ)。流星。

りうせつ 流歠 【名】水の流れ込むが如くに貪りすること。「放飯・流歠」

りうせつ 流說 【名】りうげん(流言)に同じ。「じ。」

りうせん 【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同

りうせん 流箭 【名】りうし(流矢)に同じ。

りうせん 流泉 【名】㊀流るるいづみ。 ㊁琵琶の祕曲の一。方丈「松の響に秋風の樂(ガク)をたぐへ、水の音に流泉の曲を操る」

りうーぜん 流涎 【名】食欲動きて涎(ヨダレ)を「をたらすこと。垂涎。」

りうーそ 流蘇 【名】ふさ(總)に同じ。

りうーそう 劉宋 【名】そう(宋)㊁を見よ。

りうーそうげん 柳宗元 【名】〔人〕支那唐の文人。字は子厚。柳州と號す。自ら河東の人と稱すれども、長安に生る。王叔の黨に坐して、永州司馬に貶せられ、元和十年柳州刺史に遷され、同十四年死す。年四十七。文章を能くして、名を韓退之と齊しくす。柳河東集四十七卷の著あり。

りうそうべつ-くわい 留送別會 【名】留別會と送別會とを兼ねたる會。

りうーそく 流速 【名】水の流るる速さ。

りうーぞく 流俗 【名】㊀世のならはし。一般の風俗。世俗。 拾遺「りうぞくの色にはあらず梅の花珍重すべきものとこそ見れ」 ㊁世俗の人。俗人。

りうーぞく 流賊 【名】此處彼處とわたり歩く賊。「ること。」

りうそん 流損 【名】水に流されて損ず

りうそん-でん 流損田 【名】流損の害を被りたる田地。「動體」に同じ。

りうーたい 流體 【名】〔理〕りうどうたい(流動體)に同じ。

りうーたい 柳黛 【名】美人の眉を形容していふ語。柳眉。

りうーたい 柳態 【名】柳のすがた。

りうーたい 留滯 【名】たいりう(滯留)に同じ。「じ。」

りうーたう 柳塘 【名】りうてい(柳堤)に同

りうた-さう りうた草 【名】〔植〕ありたさう(上荊芥)に同じ。

りうーたん 龍膽 【名】『龍の字の音、普通はりゆうなれども、りんだうのりんを音便にいへるなれば、りうの假名を用ふ』㊀〔植〕りんだう(龍膽)㊁に同じ。 古今「りうたんの花、わが宿の花蹈みしだくとりうたん野は無ければやここにしも來る」 ㊂りんだう(龍膽)㊂に同じ。 伊勢集「りうたん、風寒く鳴く雁がねの聲すなりうたん衣(ゴロモ)をぞまづや貸さまし」「じ。」

りうーたん 流彈 【名】りうぐわん(流丸)に同

りうーたん 榴彈 【名】〔兵〕『英 Shell』專ら內部に裝塡したる炸藥の破裂力を利用する砲彈。りうさんだん(榴霰彈)參照。

りうだんーはう 榴彈砲 【名】〔兵〕㊀榴彈の發射用に供する特種の大砲。 ㊁擲射を目的とする大砲。臼砲に似、又、加農(カノン)に近し。砲身の長さは、通常十口徑乃至十五口徑。變裝藥を用ひ、その量、臼砲のよりも、概して强量なり。

りうーち 留置 【名】とめおくこと。殘り留まらしめておくこと。

りうち-けん 留置權 【名】〔法〕物權の一。他人の物の占有者が、その物に關して生じたる債權の辨濟を受くるまで、その物を留置するもの。

りうちけんしや 留置權者【名】〔法〕留置權を有する人。

りうちしよ 留置所【名】一次條に同じ。二明治四十一年十月以前に於て、刑事被告人を一時留置せし普通監獄又は陸軍監獄。

りうちぢやう 留置場【名】警察官署内に於て、犯罪の嫌疑者、罰金を禁錮に換ふる者、拘留に處せられたる者などを拘禁して、監獄に代用する所。留置所。

りうちにん 留置人【名】〔法〕留置場に留置したる刑事被告人。

りうちぶつ 留置物【名】〔法〕留置權の目的物、即ち留置權者の留置する物。

りうぢん 留陣【名】同一の地に、比格的長く陣を据うること。

りうちやう 流暢【名】詩文などの、句調の佶屈ならぬこと。すらすらとして、滯らぬこと。

りうちゆう 流注【名】流しそそぐこと、又流れそそぐこと。

りうぢゆう 留住【名】一とどまり住むこと。二大寶令の制度にて、雜戸・陵戸又は婦人などの、流罪を犯したる時、杖刑を科して、配所には送らず、その地に留めて居住せしめしこと。

りうつう 流通【名】一ながれのかよふこと。よどまぬこと。るつう。二世に廣く行はるること。通用。融通。るつう。

りうつうかかく 流通價格【名】〔經〕かうくわんかかく(交換價格)に同じ。

りうつうくわへい 流通貨幣【名】つうくわ(通貨)に同じ。

りうつうしほん 流通資本【名】〔經〕りうぢうしほん(流動資本)に同じ。

りうつうしんようしようけん 流通信用證券【名】次條に同じ。

りうつうしようけん 流通證券【名】ゆうづうしようけん(融通證券)に同じ。

りうつうしようしよ 流通證書【名】ゆうづうしようしよ(融通證書)に同じ。

りうつうてがた 流通手形【名】ゆうづうてがた(融通手形)に同じ。

りうつうまそん 流通磨損【名】貨幣の世上に流通する結果、授受轉轉の間に、摩擦損傷すること。

りうてい 柳堤・柳隄【名】柳を植ゑたる つつみ。柳塘。柳塢。

りうてい 流涕【名】涙をながすこと。落涙。「じ。

りうてい 流睇【名】りうべん(流眄)に同

りうていたねひこ 柳亭種彥【名】〔人〕『幼少の時、疳癖強くして、屢ば激怒しければ、父、「風に頭(かぶ)はられて睡る柳かな」と云ふ句を作りて與へしため、爾來、身を謹み、狂歌の狂名を「柳の風成」といひ、柳亭の號もこれに基づく。又、後、古今集の序に見ゆる「人の心を種として」の語によりて「心の種俊」と改め、その「種」と俗名の一字とを合はせて、「種彥」と稱す』江戸の小說家。幕府麾下の士にして、本姓は横手氏、通稱は高屋彥四郎。草雙紙作者の巨擘にして、傳紫田舍源氏(ムラサキヰナカゲンジ)、尤も世に愛讀せらる。兼ねて狂歌・俳諧及び畫をよくす。天保十三年歿す。年六十。

りうてう 留鳥【名】〔動〕季節の如何に拘らず、常に一所に留まり棲む性質の鳥。例へば、雀・烏・雉子など。(候鳥・漂鳥に對して)

りうてう 柳條【名】りうし(柳枝)に同じ。

りうてん 【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。殼は厚くして、長さ約二寸、螺塔突出し、表面滑かに、黃色中黑斑あり。南海に產す。

りうてん 流轉【名】移り變ること。遷「移。るてん。

りうでん 流電【名】一いなづま。いなびかり。二極めて迅速なることの譬。

りうてん 流傳【名】世に廣くゆきわたること。

りうど 【副】思ひいれ。たんと。たっぷり。澤山に〔信濃國・甲斐國の方言〕

りうどう 流燈【名】片板(ヘギ)を底とし、草木の花又は鳥などの形を、紙にて造り、中に燈を點じて、水に浮べ流すもの。

りうどう 流動【名】一流れて、位置の變ずること。二りうてん(流轉)に同じ。

りうどうくわぶつ 流動貨物【名】〔商〕流動體なる貨物。例へば、酒・醬油・油など。

りうどうこうさい 流動公債【名】〔經〕『英 Fluating bond』發行額・利率等、起債上の重要事項が、法律を以て確定せらるることなく、政府の自由に裁量し得るやうにして發行する公債。則限は極めて短きを普通とす。大藏省證券の如き、これなり。不確定公債。浮動公債。(確定公債に對して)

りうどうこくさい 流動國債【名】〔經〕流動公債たる國債。浮動國債。

りうどうしさん 流動資產【名】〔商〕『英 Circulating estate』現金なるか、又は直ちに現金に引き換へ得る爲替手形・仕拂命令書・公債證書などなる資產。

りうどうしほん 流動資本【名】〔經〕『英 Circulating capital』一度生產の用に供する時は、その形を變じ、或は、その處を換へ、これより以上、屢ば使用することを能はざる資本。例へば、飲食物・貨幣・燃料・原料など。流通資本。運轉資本。運轉資金。可動資本。(固定資本に對して)

りうどうたい 流動體【名】〔理〕『英 Fluid』液體と氣體との總稱。流體。動體。

りうどうでんき 流動電氣【名】〔理〕どうでんき(動電氣)に同じ。「物體。

りうどうぶつ 流動物【名】流物體なる

りうどうゑ 流燈會【名】神佛のために、流燈を行ふこと。燈籠ながし。

りうない 流內【名】次條を見よ。流內の官【句】王朝時代に、本官の長官以下四部官等の、各、相當の位階ありしもの。(「流外(ルガイ)の官」に對して)

りうにん 留任【名】辭任も轉任もせず、その任務に殘り留まること。「光。

りうねん 流年【名】過ぎゆく年月。流

りうのけーじろ 驪【名】りゆうのけじろ(龍毛白)を見よ。「(ガリ)。

りうは 流派【名】流儀の區分。流儀。流

りうはい 流輩【名】ざうはい(同輩)に同じ。「ること。

りうはう 流芳【名】芳名を、後世に傳ふ

りうはう 劉邦【名】〔人〕支那漢の高祖。字は季。沛の豐邑の人。秦代に、泗水の亭長たり。陳涉の兵を起すに當り、衆數百人を集め、沛を攻めて、その令を殺し、沛公と稱す。楚の懷王の命に依り、項籍と道を分けて、秦を攻め、先んじて關中に入りたれど、項籍に斥けられて、漢王とせられしより、蕭何・張良・韓信等を用ひ、項籍と戰を交ふること五年、遂にこれに勝ち、長安に都して、漢朝を創む。在位十二年にして崩ず。年六十三。

りうばう 流亡【名】故鄕を離れて、處處にさまよふこと。さすらふこと。流浪。「じ。

亡命。

りうばう 流氓【名】りうみん(流民)に同

りうはくりん 劉伯倫【名】〔人〕りうれい(劉伶)に同じ。

りうはつ 柳髮【名】女の頭髮のしなやかに美しきを、風に靡く柳に譬へていふ語。やなぎのかみ。やなぎがみ。平家「紅粉・眼に媚をなし、柳髮風に亂るる粧」

りうひ 【名】〔植〕くわうえふざん(廣葉杉)に同じ。

りうび 【名】『琉皮の義かといふ』りうきうおもて(琉球表)に同じかるべし。

りうび 柳眉【名】美人の眉を柳の葉に譬へていふ語。やなぎのまゆ。

柳眉を逆立つ【句】美人の怒る形容。

りうび 劉備【名】〔人〕支那蜀漢の帝。字は玄德。涿郡の人。漢の景帝の子中山靖王勝の後裔。寡言にして、喜怒色にあらはさず。兵を起し、天下を三分して、その一に據り、帝位に上れり。昭烈帝と謚す。

りうひーがや りうひ榧【名】〔植〕くわうえふざん(廣葉杉)に同じ。

りうびん 柳鬢【名】女の鬢の毛を、風に靡く柳に譬へていふ語。

りうびん 流鬢【名】女の鬢のおくれ毛。

りうびんたい 觀音座蓮【名】〔植〕りゆうびんたい(觀音座蓮)に同じ。

りうはい りうび りうひ りうどう りうどうこくさい りうどうしさん りうどうしほん りうどうたい りうどうでんき りうどうぶつ りうどうゑ りうない りうにん りうねん りうのけーじろ りうは りうはい りうはう りうはつ りうばう りうばう りうはくりん りうひ りうひーがや りうびん りうびんたい りうてう りうてん りうでん りうてん りうど りうどう りうどうくわぶつ りうどうこうさい りうどうしほん りうつうしほん りうつうしようけん りうつうしようしよ りうつうてがた りうつうまそん りうてい りうていたねひこ りうてう りうてん りうでん りうてん りうど りうどう りうどうくわぶつ りうどうこうさい りうどうしさん

りうびん

りうびんたいくわ 觀音座蓮料【名】〔植〕りゆうびんたいくわ(觀音座蓮科)に同じ。

りうーふう 流風【名】一そよそよと吹く風。二昔の人の殘しおきたる美風。「弊風。宿弊。」三流儀のならはし。

りうーへい 流弊【名】前より傳はりたる

りうーべつ 留別【名】旅だつ人の、後に留まる人に告別すること。(送別に對して)

りうべつーくわい 留別會【名】留別のために催す會。たちぶるまひ。(送別會に對して)

「流離。りうめん。」

りうーべん 流眄【名】ながしめ。よこめ。

りうーほ 留保【名】一留めて、後日に、保存すること。保留。二〔法〕權利を移轉する場合に、自己の利益の條件を、その中に含ませ置くこと。例へば、土地の賣渡の場合に、何年の後、これを買ひ戻すことを得との條件を附すれば、買戻權の留保となる類。

りうーぼうとく 劉夢得【名】〔人〕りううしやく(劉禹錫)に同じ。

りうーぼく 流木【名】漂流する木。ながれぎ。盛衰記「難波の浦に夜夜光を放つ者あり。行きて見れば、補の流木なり」

りうまち【名】次條の略。〔俚語〕

りうまちす 流麻質斯(英 Rheumatism)【名】〔醫〕冷濕又は風邪に冒されなどして、關節に疼痛又は强直を來し、若しくは、筋肉に疼痛發して、處處に轉移する病。れうまちす。ろいまちす。

りうーまつ 流末【名】流水の末。末流。

りうーまつ 流沫【名】水の流れて、沫の生ずること。

「せる民。流氓。」

りうーみん 流民【名】流亡せる人民。流離

りうーん 利運【名】都合よき運命。好運。幸運。天の網島「あんまり利運すぎました」

りーうん 理運【名】道理に順ひて受くる運命。天理に叶ひたる仕合。盛衰記「御昇進の時は、理運數輩の人人を超越せられしかども」正統記「忠を致し、勞を積みてぞ、理運の望をも企てはべるべき」

りうめん

りうーめん 流眄【名】りうべん(流眄)に同じ。

りうめんき 流綿機【名】打綿機にて除き得ざりし塵芥、短き纖維及び結綿を、完全に除き去り、纖維を精選し、成紡の紡梯たる綿條を作る裝置の紡績機械。

りうーも【名】〔植〕いとひば(絲檜葉)に同じ。

りうーもく 流目【名】目をあちら・こちらへ移して見ること。

りうーもん 流紋【名】羽二重(ハブタエ)に似て粗き、一種の生(キ)織物。經(タテ)・緯(ヨコ)共に、やや太き絲を用ひて織り、羽二重と同樣に、精練・染色して用ふ。地質厚く强し。龍紋(リユウモン)。太平記「薄色のりうもんの織物の指貫(サシヌキ)」

りうーもん【名】みづひき(水引)に同じ。

りうもんーがん 流紋岩【名】〔鑛〕斑紋水流を呈し、嘗て流動せし形跡を留むるものあるによりていふ。火成岩の一。第三紀及びその以後に成れるもの。火成岩中、最も硅酸に富み、帶白色を呈す。石基は、石英・長石・雲母・磁鐵鑛などの小結晶より成り、その中に、石英と長石との結晶を含有し、多くは、斑狀の構造を成す。我國、中國地方に多く、九谷燒・會津燒の原料となる。石英粗面岩。

りうーよう 流用【名】融通して使用すること。一時繰りかへて用ふること。

りうーよう 流庸・流傭【名】おちぶれて故國を去り、人にやとはれて、賤業に從ひ、生活すること。

りうーらう 劉郎【名】『支那の漢の天台山に入りて、仙女と交通せりといふ劉長の故事』藝妓・娼妓などに狂ふ人。たはれを。放蕩家。

りうーらう 流浪【名】るらう(流浪)に同じ。

りうーらく 流落【名】流離し、零落すること。さすらひおちぶるること。

りうーらん 流覽【名】一とほり見ること。目を通すこと。通覽。

りうーらん 瀏覽・劉覽【名】『劉は陳(ヅ)ぬる義。瀏は劉に通ず』つらね見ること。見通すこと。

りうり

りうーり 利賣【名】利益を得て賣ること。東鑑「利賣直法」

りうーり 流離【名】本土を離れて、他鄉にさまよふこと。さすらふこと。

りうーりう【貌】太刀などを振りまはすさま。八犬傳「長さ一丈餘なる槍、りうりうと打揮りつつ」

りうーりう 瀏瀏・飀飀【貌】風のはげしく

りうーりうさん 硫硫酸【名】〔化〕ちおりうさん(チオ硫酸)に同じ。

りうーりうしう 柳柳州【名】〔人〕りうしう(柳子厚)に同じ。

りうーりきよう 柳里恭【名】〔人〕やなぎさとき恭(柳澤淇園)に同じ。

りうーりん 李于鱗【名】〔人〕りはんりよう(李攀龍)に同じ。

りうーりやう 瀏亮・瀏亮【貌】音聲の、きよくあきらかなるさま。清亮。

りうーりよく 柳綠【名】柳の綠なる色。柳綠・花紅【句】『蘇軾の詩に「柳綠花紅眞面目」とあり』物の、自然のままにて、少しも人工を加へぬ狀態。柳は綠、花は紅。

りうーれい 流例【名】しきたり。慣例。

りうーれい 流麗【名】詩文の語句の、すらすらとうるはしきこと。

りうーれい 劉伶【名】〔人〕支那晉の清談の徒。沛國の人。字は伯倫。容貌甚だ醜、志氣曠達、建威參軍となり、酒を好み、「酒德頌」を作れり。竹林の七賢の一人。

りうれん 流連【名】『孟子の梁惠王下篇に「先王無二留連之樂、荒亡之行」とあり』一箇所に永く留まること。一說に、遊樂に耽りて、家に歸るを忘るること。ゐつづけ。

りうーろ 流露【名】眞相を隱さずあらはすこと、又、眞相の、隱るる所なくあらはるること。るろ。

りうーね 瘤胃【名】〔動〕『英 Rumen』反芻類に屬する哺乳動物の胃に四つの區劃ある內の、第一囊。食物を、一時貯へおく部分にて、他の三囊に比して、最も大なり。

りうゐき

りうーゐき 流域【名】川の流に沿へる地域。河域。瀕域。

りーえう 俚謠【名】ぞくえう(俗謠)に同じ。

りーえき 利益【名】一都合よきこと。ためになること。二まうけ。とく。利得。利分。

りえきーおち 利益落【名】〔商〕りおち(利落)に同じ。

りえきーきん 利益金【名】利得したる金。

りえきーさきどりーかぶ 利益先得株【名】〔商〕いうせんかぶ(優先株)に同じ。

りえきさきどりーつうじやうかぶ 利益先取通常株【名】〔商〕利益讓渡通常株に先だちて、利益配當に與る通常株。

りえきさきどりーてつたうかぶ 利益先取鐵道株【名】〔商〕鐵道會社發行の利益先取通常株。

りえきーねんど 利益年度【名】一の事業上、損益計算に於て利益ありたる年度。

りえきーはいたう 利益配當【名】〔商〕銀行・會社組合などにて、株主又は組合員に、純益金を配當すること。配當。

りえきはいたうーほしようしよ 利益配當保證書【名】〔商〕銀行・會社などにて、株主に定期の利益配當を保證する文書。

りえきーぶんぱいーはふ 利益分配法【名】〔經〕『英 Rewarding system』資本家が、勞働者に、その事業上の利益に與らしむる賃銀制度。年末又は決算期に賞與金を給し、資本に對する利益の多寡に應じて、その幾分を賞與し、又は、株式を發行して、勞働者をして、株主を兼ねしむる等の方法あり。

りえきーもんだい 利益問題【名】利益に關する懸案。利益の方面に於て、解決を要すること。

りえきゆづりさきーつうじやうかぶ 利益讓渡通常株【名】〔商〕りえきゆづりわたしつうじやうかぶ(利益讓渡通常株)に同じ。

りえきゆづりさきーてつたうかぶ 利益讓渡鐵道株【名】〔商〕鐵道會社發行の利益讓渡通常株。

りえきゆづりわたし-つうじやうかぶ 利益譲渡通常株【名】〔商〕利益先取(すぎ)通常株に次ぎて、利益配當に與る通常株。

りーえん 離筵【名】べつえん(別宴)に同じ。

りーえん 離縁【名】■夫妻・養父子などの縁を切ること。(多くは、夫妻のにいふ)えんきり。離別。■〔法〕養子縁組の効力を解除する法律行爲。

協議上の離縁【句】〔法〕養子縁組の當事者の協議によりてなす離縁。(「裁判上の離縁」に對して)

裁判上の離縁【句】〔法〕養子縁組の當事者の一方、又は、その縁組に關して、承諾權を有する者が、裁判所に訴訟を提起し、その判決によりてなす離縁。(「協議上の離縁」に對して)

りえん-じやう 離縁状【名】昔、妻を離縁する時、證として與へし書附。さりじやう。のきじやう。いとまじやう。きれぶみ。三行(ぎょう)半。離別状。

りーえんねん 李延年【名】〔人〕支那漢の武帝の嬖臣。中山の人。父母・兄弟、皆倡人たり。法に坐して、腐刑に處せらる。歌曲を善くし、その妹、帝の幸を得て、李夫人と稱し、昌邑王を産むに至り、これに縁りて、協律都尉の官を得、大いに帝の愛幸を受く。李夫人卒して、帝の愛弛み、兄弟・宗族と共に誅せらる。

りえん-ばなし 離縁話【名】離縁■につきての相談。

りーおち 利落【名】〔商〕公債、その他の有價證券の利息又は利益配當の、支拂の濟みたること。

りおち-かぶ 利落株【名】〔商〕年二季の配當の濟みたる株。配當株。

りーか 李下【名】すももの木のした。

李下に冠を正さず【句】『「瓜田(かでん)に履を納れず」を見よ』李下にて、手をあげて、冠の曲れるをなほす時は、李の實を取りて、冠の中に隠したりとの疑を受くべきが如く、すべて、他人の嫌疑を受け易き所行は、避くるやうにせよ。

李下の冠【句】前條に同じ。

りーか 俚歌【名】ぞくか(俗歌)に同じ。

りーか 離歌【名】わかれのうた。送別の時の歌。

りーか 籬下【名】まがきのもと。

籬下に依る【句】「人の籬下に依る」を見よ。

りーか 李何【名】〔人〕李夢陽(ヤウヤウ)と何景明と。しちし(七子)■參照。

りーが 李賀【名】〔人〕支那唐の詩人。字は長吉。七歳にして詩を能くし、毎朝、弱馬に騎し、小童に古き錦の囊を負はせて從はしめ、郊外に出でて苦吟し、得る所の詩は、その囊に投じて歸る。憲宗の朝、協律郎となる。年二十七にして死す。著す所、李長吉歌詩四卷、外集一卷あり。はくきよくろう(白玉樓)參照。

りーかい 裏海【名】■『海防纂要に「在二裏海一則稷、在二外洋一則動搖。此廣船之利弊也」とあり』ないかい(内海)■に同じ。■〔地〕亞細亞・歐羅巴の二洲に跨り、露西亞の南境と波斯とに圍まるる鹹湖。面積約二八〇四〇方里に達し、世界最大の内地湖なり。かすひ海(カ)。

りーかい 理解【名】道理を解き分くること。すぢみちを明かにすること。了解。理會。

りーかい 離解【名】ばらばらにほどし、又、ばらばらにほどるること。

りーかい 離開【名】重なり閉ぢたる物の、はなれひろがること。

りーがい 利害【名】利と害と。利益と損害と。利弊。得失。

りがい-くわんけい 利害關係【名】相互に利害が相影響する間柄なる關係。

りがい-くわんけいにん 利害關係人【名】〔法〕或事件の成否によりて、直接に利害の及ぶべき當事者以外の人。訴訟が、財産上の變動を來す場合に於ける、その訴訟當事者の債權者の如き、これなり。

りかい-りよく 理解力【名】理解する能力。理會力。

りーかう 里巷【名】村里のちまた。「かまち。」

りーかう 降降【名】『蓋は、治にて、裝を治むる義』皇女の降嫁。

りーかう 利巧【名】すばやく巧みなること。

りーかう 履行【名】履(ク)み行ふこと。言葉のとほりに行ふこと。實行。履踐。

りーがう 聲嚎【名】がうり(亳蓋)に同じ。

りかう-ち 履行地【名】或人が或事を履行する土地。

りーかく 聲革【名】あらたむること。改「革。」

りーかく 離隔【名】間を離し隔つること、又、間の離れ隔たること。離間。

りーがく 理學【名】■せいりがく(性理學)に同じ。■てつがく(哲學)に同じ。■しぜんくわがく(自然科學)に同じ。■ぶつりがく(物理學)に同じ。

りかく-けんきうはふ 離隔研究法【名】全問題中の一部を離隔し、特に獨立の一問題として研究すること。

りーがくし 理學士【名】理科大學又は大學理學部を卒業したる人の稱號。

りがく-しんたう 理學神道【名】唯一神道の一種。理學■にもとづきて說を立てたるもの。山崎神道の如きこれなり。天人唯一神道。

りがく-しや 理學者【名】理學■に委しき人。「じ。」

りがく-はかせ 理學博士【名】次條に同

りがく-はくし 理學博士【名】博士の一。理學の蘊奥を究めたる者に授く。

りがくはくし-くわい 理學博士會【名】博士會の一。理學博士を以て組織するもの。

りがく-ぶ 理學部【名】綜合大學の一部。理學の理論と應用とを教授する所。

りがくぶ-ちやう 理學部長【名】綜合大學の理學部の學務を統理する職。

りーかた 理方【名】すぢみち。わけ。道理。理由。理法。心學早染草「茶碗のやうな物へ、むくの實の皮のやうな物を、水にてとき、竹の管をひたして、魂を吹き出したまふ。その理方、子供の弄ぶ石鹼玉(シャボン)の如し」膝栗毛「すゐ風呂……、蓋(カ)といふもの無く、底板上に浮きてゐる故、蓋のかはりにもなりて、早く湯の沸く理方なり」

りーかた 利方【名】多かれ、少かれ、利益の得らるること。損にはならぬこと。浮世床「野暮といはれて、金を溜めた方が、利方だの」膝栗毛「薪多分にいらず、利方第一のすゐ風呂なり」

りーがね 利金・利銀【名】りぎん(利銀)に同じ。胸算用「一年この銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋(オモ)から濟ましたまへ」新永代藏「二百兩に利銀かかり」

りーがふ 離合【名】離るることと、合ふこと。

りーかん 利勘【名】利益上の勘定、又それに心を碎くこと。三代男「利勘と金儲に、心を詰めて」浮世風呂「一代に仕上げた人さ。その代り利勘だ」

りーかん 里閭【名】りりよ(里閭)に同じ。

りーかん 離間【名】他と他との交誼を破ること。仲を裂くこと。水をさすこと。

りかん-さく 離間策【名】他と他とを離間せんとする策。

りき 力【名】■ちから。りよく。■りきしや(力者)■の略。■しやりき(車力)、又その給せらるる賃錢。

りーき 利器【名】■鋭利なる刃物。利刃。■『後漢書の虞詡傳に「不レ遇二盤根錯節一、何以別二利器一乎」とあり』すぐれたる才器の譬。■『老子に「國之利器、不レ可二以示レ人」とあり』利用すべきうつは。便利なるうつは。重寶なる道具。

りーき 理氣【名】宋儒の說にて、宇宙の生成せらるべき根本の理と、これより生ずる陰陽の氣と。萬物は、陰陽の氣の運行によりて生成すと說く。即ち一種の二元論にして、支那古代の一元論と同じからざるものなり。天理(形而上)と現象(形而下)と。太極と動靜と。りせんきご(理先氣後)・せいりせつ(性理說)參照。

りーぎ 理義【名】道理と正義と。義理。

りきう 利休【名】〔人〕せんりきう(千利休)を見よ。

りきう 利久【名】りきゆう(利久)を見よ。

りーぎう 犁牛・犂牛【名】㊀毛色の駁(ブチ)なる牛。㊁『論語の雍也篇に「子謂二仲弓一曰、犂牛之子騂且角、雖欲勿用、山川其舎諸」とあるに本づく。毛色の駁なる牛は、犠牲に供し難きをいへり』徳器すぐれたる人の父にして、凡庸不材なる者の譬。太平記「不義の父を誅せられて、忠功の子を召仕はるる例あり。……、犂牛のたとひ、その理、しかなり」

りーぎう 犂牛・犂牛【名】〔動〕**ばうぎう**(旋牛)に同じ。

りぎうーがた 利休形【名】㊀ひら**なつめ**(平棗)に同じ。㊁櫛の形の一。その淺きもの を、昔、深川利休といへり。江戸深川仲町の藝妓の間に行はれし故なるべし。後萬載藤満丸「戀人の黄楊(ツゲ)の小櫛も利休形さすが千家(センケ)の園者(モリコ)ずき」

りぎうーだんす 利休簞笥【名】茶席にて用ふる棚物の一。唐物の簞笥に摸して造り、豐臣秀吉の小田原征伐の時、千利休、扈從して陣中に携帶所持したり。たびだんす。

りぎうーづた 利休蔦【名】紋所の一。圖を見よ。

りぎうーばし 利休箸【名】四隅の面(ノ)を削りたる箸。

りきーえき 力役【名】**りよくえき**(力役)に同じ。

りきーがく 力學【名】〔理〕『英Mechanics』物理學の一分科。力の物體に對する作用、即ち物體の運動及び靜止の現象につきて論究するもの。通常、靜力學と動力學とに分つ。

りきがくーてき 力學的【名】『英Mechanical』力學に關すること。

りーきく 離菊【名】まがきの下に咲ける菊。「菊。

りきーく 力作【名】**りよくさく**(力作)㊁に同じ。

りーぎさん 李義山【名】〔人〕**りしやういん**(李商隱)に同じ。

りーぎさんーざっさん 李義山雜纂【名】〔書〕「必不ノ來」と題して、「醉客逃ノ席。客作偷ノ物去。把ノ棒呼ノ狗。窮措大喚二妓女一。逐二王侯一家人」と列擧する類の文四十五項を記せるもの。一卷。支那唐の李商隱の著。清少納言の枕草子は、これに倣へるならんとの說あり。

りぎさんーしふ 李義山集【名】〔書〕支那唐の李商隱の詩文集。詩集三卷。文集八卷。

りきーし 力士【名】㊀力ある人。體力强き人。力人(ノキ)。力者。㊁すまふとり(相撲取)に同じ。㊂〔佛〕『こんがうりきし(金剛力士)の略』**にわう**(仁王)㊁に同じ。十訓「鬼王の形を現し、力士の忽ちに來たるかと覺ゆ」千載鑑「鐵が嶽が諸羕(ヤモジ)をほぐして、土俵へひっくりかへし、力士の如くつっ立てば」

りきしーだち 力士立【名】**にわうだち**(仁王立)に同じ。艶好劍本地「金剛兵衛が力士立」

りきしーなり 力士形【名】力士㊂の如き體格。曾我「河津が姿は……力士なりにして、丈は五尺八分」

りきしーまひ 力士舞・力士儛【名】上古の一種の舞。鉾などを持ちて舞ひしものなるべしといふ。萬葉「池神(ガミ)の力士儛かも、白鷺の鉾くひ持ちて飛び渡るらむ」

りきーじん 力人【名】**りきし**(力士)㊁に同じ。十訓「即ち、五人の力人をして、山を掘り、牛を引くに」

りきしや 力者【名】㊀**りきし**(力士)㊁に同じ。葉村「飛入の力者怪しき角力(スマヒ)かな」㊁**りきし**(力士)㊂に同じ。㊃古、法體にて、寺院又は法皇などに屬し、輿を舁き馬の口に附く等の力役に從事せし者。印度にて、拘尸那(クシ)城の諸力士、佛棺を舁きしに因めるものなれども、墮落の僧のせし業にて、後の僧兵の徒なりといふ。力者法師。力(キ)。人工(ニン)。人工法師。著聞「近江法眼寛快、……、力者二人に舁かれて、御室へ參りけるに」盛衰記「法皇……、御力者に、金行(コンギヤ)法師は」

りきーしや 力車【名】㊀**ちからぐるま**(力車)に同じ。榮花「力車に、えもいはぬ大木どもに、綱を附けて」㊁**じんりきしや**(人力車)の略。「仂車」

りきしやーほふし 力者法師【名】**りきしや**(力者)㊁に同じ。著聞「聖覺、輿に舁かれて、その前を通りけるに、……、力者法師聞き咎めて」

りきしよくき 力織機【名】『英Power loom』水力・汽力乃至電力を、製織の動力とする裝置の織機。(毛織機に對して)

りきーてん 力點【名】〔理〕**りよくてん**(力點)に同じ。

りきーふ 力婦【名】㊀力ある女。㊁體力强き者を擇びしによりていふ。**ぢよちやう**(女丁)に同じ。

りきふーとうぢゆう 裏急後重【名】腹工合しぶりて、大便の排泄思ふやうならぬこと。直腸炎・赤痢・直腸癌・水銀中毒等に於て發す。芭蕉翁反故文「翁、腹痛の氣味にて、……、裏急後重あり」

りきぼんーせつ 力本說【名】〔哲〕『英Dynamism』宇宙間の一切の現象を、或勢力の發現として說明せんとする學說。例へば、希臘のイオニヤ(Ionian)派の哲學者が、憂憎二力の發現とし、獨逸のライプニッツ(Leibnitz)が成・反二勢力に歸せしめ、英國のスペンサア(Spencer)が牽引・反撥の二力によりて說明せし類。りよくほんせつ。物力論。

りきみ 力【名】りきむこと、又その樣子。若風俗「左右(サウ)の手に、力身(リキ)を出し」

りきむ 力む【動四自】㊀力を込めて爲す。㊁**ゐばる**(威張る)に同じ。

りーきん 利金【名】㊀利息のかね。利子。利息。利がね。利錢。㊁利益の金。まうけ。

りーぎん 利銀【名】前條に同じ。「德川時代の語」

りきんーじま 織留「二割の利銀」りきん縞【名】織物の縞の一。一代男「藤色のりきん島に、譯知(シワケ)だてなる茶縞子の幅廣」

りきんーぜい 釐金稅【名】『釐は百分の一の義にて、雷以誠の徵收額はこの率なりしよりいふ』支那にて、長髮賊の亂によりて行はるるに至りし一種の國內關稅。咸豐四年、江寧布政使雷以誠が、軍費補充のため、商人をして、商品の價に應じて獻金せしめんことを建言して、當路の許可を得たるに始まる。各省內便宜の地に徵收の機關を設置し、戰亂平ぎて後も、繼續徵收せるのみならず、その額も漸次增加せり。

りきゆう 利久【名】〔佛・英Liqueur〕『利久は假借の文字』水・酒・精・砂糖・植物性芳香汁・香油等を合はせて造る混成酒。初は辛烈なれども、久しく貯藏せるは、良好なる香味を具ふ。種類多し。

りきゆう 離宮【名】常の皇居の外に設けおきて、臨時に行幸あらせらるる宮殿。りぐう。とつみや。「こと。

りーきよ 離居【名】はなればなれに住む

りーぎよ 鯉魚【名】〔動〕**こひ**(鯉)に同じ。

りーぎよ 李漁【名】〔人〕支那清初の小說・傳奇作家。明の遺臣。笠翁と號す。もと浙江の人。明末貧家に生れて、四方に流寓し、遂に金陵に移る。傳奇に笠翁十種曲、小說に笠翁十二樓、最も著れ、その他、詩・文・塡詞・隨筆あり、稱して笠翁一家言全集といふ。豐後禪(一名、肉蒲團)といふもの、又その手に成れりといふ。

りーきよく 俚曲【名】**りえう**(俚謠)に同じ。

りーぎよく 驪玉【名】**りしゆ**(驪珠)に同じ。

りぎよーふう 鯉魚風【名】陰曆九月頃の風。

りきーりやう 力量【名】㊀人體の力の程あひ。㊁人の能力の程あひ。

りきりやうーもの 力量者【名】力量のすぐれたる人。雙生隅田川「お供の軍介、力量者」

りーく 離苦【名】〔佛〕苦惱を離るること。

りーく 離垢【名】〔佛〕煩惱(ボンノウ)の垢染を離るること。

りく 陸【名】㊀くが。をか。陸地。(海に對して)㊁〔地〕陸前・陸中・陸奥(ノ)の總稱。三陸。「陸・羽地方」

りく 戮【名】㊀罪しころすこと。誅戮。刑戮。「戮に遭ふ」㊁ばつ。刑罰。

りく

りく 六【數】むつ。ろく。

りく-あげ 陸揚【名】船の荷を、陸地へ運びあぐること。にあげ。かしあげ。みづあげ。

りくあげ-かう 陸揚港【名】つみおろしかう(積卸港)に同じ。(船積(ツミ)港に對して)

りくあげ-さんばし 陸揚棧橋【名】陸揚の用に供するために特設したる棧橋。

りくあげ-しんこく 陸揚申告【名】〔商〕船長が、陸揚の旨を稅關に申告すること。

りくあげ-しようしよ 陸揚證書【名】〔商〕棧橋業者又は上屋(ヤ)の所有者の、船名・積荷の記號・番號・重量・數量及び倉庫料を徵收せらるべき日附等を記入事項として調製する證書。

りくあげ-ば 陸揚場【名】陸あげをする場所。ものあげば。あげば。

りくあげ-めんじやう 陸揚免狀【名】〔商〕入港の手續濟みたる船舶に、陸揚許可の旨を記して、稅關より稅關官吏に引き渡す文書。稅關官吏は、これによりて、その陸揚を監視す。

りく-いう 陸游【名】〔人〕支那宋の詩人。字は務觀。越州山陰に生れ、十二歲にして詩文を善くす。范成大が蜀に帥たる時、游その參議官となり、成大と交るに文雅を以てし、禮法に拘らず。人、その頹放を譏るや、自ら放翁と號せり。累官して、寶章閣待制に至り、渭南伯に封ぜられ、嘉定三年卒す。年八十五。著す所、劍南集・老學庵筆記・入蜀記等あり。

りく-いつ 六逸【名】六人の隱者。「竹溪の六逸」參照

りく-いつ 六俊【名】はちいつ(八俊)を見よ。

りくいつ-とじ 六一居士【名】〔人〕『晩年、傍に、集古錄一卷、藏書一萬卷、琴一張、棋一局を備へ、常に酒一壺を置き、己一人、その間に老を樂みしより』いふ。おうやうし(歐陽修)を見よ。

りくいつ-しわ 六一詩話【名】〔書〕支那宋の歐陽修の詩話。一卷。詩話に關する著書の嚆矢なり。

りく-う 陸羽【名】■〔人〕支那唐の隱士。字は鴻漸、一名は疾、又の字は季疵。竟陵の人。最も茶道の妙を盡し、茶經三篇を著せり。■〔地〕あうう(奧羽)に同じ。

りぐ

りぐう 離宮【名】りきゆう(離宮)に同じ。

りくう-かいだう 陸羽街道【名】〔地〕武藏國千住より下總・下野・磐城の三國を經、岩代國福島にて、東方・陸前・陸中の二國を過ぐるものと、西方・羽前・羽後の二國を過ぐるものとの兩路に分れ、共に陸奧國青森に至りて相合する國道。

りく-うち 陸打【名】掩網(カヅヒ)を、陸上より投げおろすこと。(船打に對して)

りく-うん 陸運【名】りくしやううんそう(陸上運送)の略。(海運に對して)

りくうん-せいさく 陸運政策【名】〔經〕陸運に關する交通政策。

りく-か 陸賈【名】〔人〕支那漢の高祖の臣。楚の人。口辯ありて、常に左右に侍し、また、諸侯に使す。太中大夫となり、帝のために詩書を講ず。又、詔を受けて、秦漢興亡の史實を編み、新語十二篇を著せり。

りく-が 蓼莪【名】〔文〕詩經の小雅中の詩篇。孝子、親を養はんとすれども、役に行きて養ふを得ず。親の歿後、孝養を盡さざりしを悲みし意を詠じたるもの。六章より成る。

りく-かい 陸海【名】■陸と海と。海陸。■『漢書の地理志に「秦地號稱二陸海一、爲二九州膏腴一」とあり』物產の豐かなる陸地。

りく-かい 陸界【名】〔地〕りくけん(陸圈)に同じ。

りく-がい 六骸【名】『莊子の德充符篇に「況官天地、府二萬物一、直寓二六骸一、象二耳目一、一二知之所一レ知、而心未二嘗死一者乎」とあり』首と、體と、左右の手足との併稱。

りくかい-ぐん 陸海軍【名】陸軍と海軍。

りくかいぐん-さいばんしよ 陸海軍裁判所【名】陸軍裁判所と海軍裁判所と。軍法會議。

りくかい-ちりがく 陸界地理學【名】りくけんがく(陸圈學)に同じ。

りく-かう 陸行【名】陸路を行くこと。(水行などに對して)

りく-かう 六行【名】『周禮に見ゆ』人の爲すべき、六つの行、即ち孝(父母に事ふること)・友(兄弟に睦むこと)・睦(九族、相親むこと)・婣(外戚に親むこと)・任(朋友に信あること)・恤(貧民を惠むこと)。

りく-かう 六爻【名】易(エキ)にて、一の卦(クワ)を組織する、六箇の爻。

りく-がく 六樂【名】支那の周代にありし六つの音樂、即ち雲門(黃帝の樂)・咸池(堯帝の樂)・大韶(舜帝の樂)・大夏(夏の禹王の樂)・大濩(殷の湯王の樂)・大武(周の武王の樂)。

りく-がく 六學【名】■支那唐代の六つの學科、即ち國子學・太學・四門學・律學・書學・算學。■りくけい(六經)に同じ。

りく-かしふ 六家集【名】〔書〕新六歌仙の家集、即ち藤原俊成の長秋詠藻、藤原良經の月清集、慈鎭和尙の拾玉集、西行法師の山家集、藤原家隆の拾遺愚草・拾遺員外、藤原定家の拾遺集の壬生二品集の總稱。

りく-かふ 六甲【名】■十干と十二支とを配合して生ずる、甲子・乙丑より、壬戌・癸亥に至る六十干支中の、甲の字の附ける、甲子・甲戌・甲申・甲午・甲辰・甲寅の六つ。■上述の六十干支の總稱。■『虞裕の談撰に「雙陸之戲、最盛二於唐一。嘗考二其技一、凡白黑各用二六子一、乃今人所レ謂六甲是也」とあり』すごろく(雙六)の異稱。

りく-かふ 六合【名】天地と東西南北と、即ち宇宙間。六極。六幕。六方。六合を以て家と爲す【句】『賈誼の過秦論に「以二六合一爲レ家、殽函爲レ宮」とあり』天下を統一する形容。

りく-がん 陸岸【名】かいがん(海岸)に同じ。(但し、海上よりいふ)

りく-き 六紀【名】『白虎通に見ゆ』人倫の綱紀となすべき六つのもの、即ち諸父・兄弟・族人・諸舅・師長・朋友の總稱。

りく-き 六氣【名】■『左傳の昭公元年の條に「天有二六氣一、降生二五味一、淫生二六疾一。六氣曰二陰・陽・風・雨・晦・明一、素問に「寒・暑・燥・濕・風・雨爲二陰陽之六氣一」とあり』天地間の六種の氣象、即ち陰・陽・風・雨・晦・明。又、寒・暑・燥・濕・風・雨。■『管子に「聖人齊二滋味一而時二動靜一、御二正六氣之變一、禁二止聲色之淫一」とありて、註に「六氣、即好惡喜怒哀樂」と見ゆ』人の六種の情、即ち好惡喜怒哀樂。

りく-き 六騏【名】りくば(六馬)に同じ。

りく-ぎ 六義【名】■〔文〕支那の詩經の、詩の分類法に於ける賦・比・興・風・雅・頌の六體。賦は、何等の比喩をも設けず、何等の物をも借らずして、その意を直言するもの、比は、比喩を設けて說くもの、興は、或事物を言はんがために、他の事物を借り來りて、その首を起すものにて、この三者は、形の上の區分に屬し、又、風は諸國の歌謠、雅は饗燕朝會の樂、頌は宗廟に對して、その德を歌ふものにて、この三者は、質の上の區分に屬す。故に、風にして、その體裁は興なるもの、頌にして、比と興とを兼ねたるもの等あり。ろくぎ。六詩。■〔文〕古今和歌集の序に和歌の風體を、詩經のに擬して、そへ歌・かぞへ歌なぞへ歌・たとへ歌・ただごと歌・いはひ歌の六種に分ちたるもの。■うた。和歌。著聞「誠に、これ、六義之秀逸」太平記「尊良(ナガヨシ)親王は、……、志學の歲の初より、六義の道に長ぜさせたまへり」■筆道にて、筆法・風情・字象・去病・骨目・感德の六種の法。六義の言葉【句】前條■に同じ。增鏡「春宮太夫、序書かれけり。……、重課二六義之言葉一、屢賞二數柯之濃花一」

りく-ぎ 六議【名】ろくぎ(六議)を見よ。

りく-きう 六畜【名】りくちく(六畜)を見よ。

りく-きこう 陸氣候【名】〔地〕陸地に於けるが如く、寒暖の差甚しき氣候。

りく-きもう 陸龜蒙【名】〔人〕支那唐の詩人。字は魯望、天隨子・江湖散人・甫里先生等の號あり。松江の甫里に隱れ、朝廷、高士を以て召せども至らず、顏真・皮日休・羅隱・吳融等と友たり。吳興實錄四十卷、松陵集十卷、笠澤叢書三卷を著す。

りくき

りく-ぎやく 六逆【名】『左傳隱公三年の條に見ゆ』道に逆ふ六種の行爲、即ち位賤しくして、貴き人を妨げ、年少にして、長者を凌ぎ、疎遠にして、親しき者を離間し、新參にして、古參の者を離間し、德小くして、德大なる人を超え、道不正にして、正義を破ることの六。(六順に對して)

りくきゆう 六宮【名】『周禮の內宰篇に「以二陰禮一教二六宮一」とありて、鄭玄の註に「皇后正寢一、燕寢五、是爲二六宮也。夫人以下分居焉」と見ゆ』宮中の奧御殿。後宮(ごうきゅう)。

りくきよく 六極【名】■『莊子の天運篇に「天有二六極一」とあり』**りくがふ**(六合)に同じ。■『書經の洪範篇に見ゆ』短折・疾・憂・貧・惡・弱の總稱。

りくぎをん 六義園【名】柳澤吉保の別莊たりし所。江戸駒込にありて、規模廣大、園中に、八十八境の設ありきといふ。今、富豪岩崎男爵の有に歸せり。むくさのその。

りく-ぐん 陸軍【名】■國の陸上の備とする軍隊。■男の兒。(海軍に對して)〔俚語〕

りく-ぐん 六軍【名】『周禮の大司馬篇に「凡制ノ軍、萬有二千五百人爲ノ軍。王六軍、大國三軍」、唐書の百官志に「左右龍武、左右神武、左右神策、號二六軍一」とあり』支那周の代の制度にて、天子の統率せし六箇の軍。一軍の數は一萬二千五百人。六師。天子の軍勢。

りく-ぐん-あんこうちやう 陸軍鞍工長【名】鞍工上の軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りく-ぐん-いちねんしぐわんへい 陸軍一年志願兵 **いちねんしぐわんへい**(一年志願兵)を見よ。

りく-ぐん-うんゆぶ 陸軍運輸部【名】『輸の字の音、正しくはしゆ』陸軍に屬する人馬・物件の船舶輸送及びこれと聯絡する鐵道輸送、陸軍にて所有し又は使用する汽船の管理、船舶輸送用補助物件の整理・保管、又、必要に應じて、その管理する船舶と搭載の人馬・物件とに對する檢査・消毒を事とする陸軍官衙。本部と支部とに分ち、本部は字品に、支部は門司・基隆・大連・釜山に設け、職員には、本部に本部長・部員・主計・軍醫・技師・下士及び判任文官、支部に支部長・部員・主計・軍醫・下士及び判任文官あり。

りく-ぐん-えうさいはうへい-しやげきがくかう 陸軍要塞砲兵射擊學校【名】**りくぐんほうへいしやげきがくかう**(陸軍砲兵射擊學校)の舊稱。

りく-ぐん-えうねんがくかう 陸軍幼年學校【名】陸軍中央幼年學校と陸軍地方幼年學校との併稱。幼年學校。

りく-ぐん-かうとうぐんばふくわいぎ 陸軍高等軍法會議【名】陸軍軍法會議の一。高等武官の犯罪及び再審の審判を行ふもの。東京に設く。

りく-ぐん-かうとうくわんが 陸軍高等官衙【名】高級なる陸軍官衙、即ち參謀本部・師團司令部・旅團司令部など。

りく-ぐん-かうとうくわんが-ふくくわん 陸軍高等官衙副官【名】その所屬の陸軍高等官衙の事務官にて、場合により、命令傳達に任ずる陸軍將校、即ち陸軍省・參謀本部・師團・要塞・旅團などの副官。陸軍大學校を卒業せる適任の將校にて、卒業後一箇年以上聯隊附服務をなしたる者、及び全軍中、才能衆に秀でたる將校にて、その職務に適任なる者より補充す。

りく-ぐん-かうとうぶくわん 陸軍高等武官【名】高等武官たる陸軍武官、即ち陸軍將校と同相當官たる陸軍主計官・陸軍軍醫官・陸軍獸醫官等との總稱。

りく-ぐん-がくしゆ 陸軍樂手【名】軍樂上の軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分る。

りく-ぐん-がくちやう 陸軍樂長【名】陸軍軍樂上の軍務に從ふ士官。一等は中尉相當官、二等は少尉相當官。

りく-ぐん-がくちやうほ 陸軍樂長補【名】陸軍軍樂上の軍務に從ふ准士官。

りく-ぐん-かし 陸軍下士【名】陸軍武官中、最下級なるもの、即ち準士官の次。陸軍曹長・陸軍軍曹・陸軍伍長及び陸軍計手・陸軍樂手・陸軍縫工長・陸軍靴工長・陸軍看護長・陸軍鞍工長・陸軍銃工長・陸軍鍛工長など、これなり。

りく-ぐん-かしくわん 陸軍下士官【名】下士適任證書【名】適任證書の一。陸軍各兵科各部の兵士に付與するもの。憲・歩・騎・砲・工・輜重の各兵科及び鞍工・銃工・木工・鍛工長・計手・縫工・靴工長・衞生部(看護長)、獸醫部の六種に分たる。

りく-ぐん-かしてきにんしようしよ 陸軍下士適任證書【名】適任證書の一。陸軍各兵科各部の兵士に付與するもの。憲・歩・騎・砲・工・輜重の各兵科及び鞍工・銃工・木工・鍛工長・計手・縫工・靴工長・衞生部(看護長)、獸醫部の六種に分たる。

りく-ぐん-かふねちぐんばふくわいぎ 陸軍合圍地軍法會議【名】陸軍軍法會議の一。臨戰合圍の戒嚴閉にのみ設け、その臨戰合圍の地にある佐官以下の軍人・從軍常人の罪を犯せる者、及び陸軍刑法を以て論ずべき罪を犯せる者を審判し、又、その特別權として、合圍地域內に於ける軍事に係る民事及び普通刑法內の特定犯罪に係る者を審判し、若しその地境內に普通裁判所なく、又その管轄普通裁判所と通路斷絕せし時は、すべての民事・刑事をも審判する所。

りく-ぐん-かんごく 陸軍監獄【名】特別監獄の一。陸軍軍法會議の所在地に置き、師團長(東京に於ては第一師團長)・臺灣總督・朝鮮駐劄軍司令官又は關東都督の管理の下に、懲役・禁錮又は拘留の執行を受くる現役若しくは召集中の在鄉陸軍軍人・軍屬・陸軍所屬の學生生徒、死刑の言渡を受けたる者、及び刑事被告人を拘禁する所。懲役監・禁錮監・拘置監・拘留場の四種に分ち、職員に陸軍監獄長・陸軍監獄看守長・陸軍監獄看守あり、總稱して、陸軍監獄官といふ。

りく-ぐん-かんごく-かんしゆ 陸軍監獄看守【名】前條を見よ。

りく-ぐん-かんごく-かんしゆちやう 陸軍監獄看守長【名】**りくぐんかんごく**(陸軍監獄)を見よ。

りく-ぐん-かんごくくわん 陸軍監獄官【名】**りくぐんかんごく**(陸軍監獄)を見よ。

りく-ぐん-かんごくちやう 陸軍監獄長【名】**りくぐんかんごく**(陸軍監獄)を見よ。

りく-ぐん-かんごそつ 陸軍看護卒【名】傷病者看護上の軍務に從事する陸軍卒。

りく-ぐん-かんごちやう 陸軍看護長【名】陸軍下士の一。傷病者看護上の軍務に從事する陸軍下士官。一等より三等までに分る。

りく-ぐん-かんさく 陸軍監督【名】**りくぐんしゆけい**(陸軍主計)の舊稱。

りく-ぐん-かんさくくわん 陸軍監督官【名】**りくぐんしゆけいかん**(陸軍主計監)の舊稱。

りく-ぐん-かんさくそうかん 陸軍監督總監【名】**りくぐんしゆけいそうかん**(陸軍主計總監)の舊稱。

りく-ぐん-かんさくちやう 陸軍監督長【名】**りくぐんしゆけいかん**(陸軍主計監)の舊稱。

りく-ぐん-ききうへい 陸軍歸休兵【名】「陸軍の歸休兵。

りく-ぐん-ぎじゆつくわいぎ 陸軍技術會議【名】砲工兵の技術・兵器・材料に關する事項を研究・調査して、陸軍大臣に意見を上申し、又はその諮詢に應ずる合議機關。もとの陸軍砲兵會議と陸軍工兵會議とを合同せしめて設置す。

りく-ぐん-きねんび 陸軍記念日【名】日露戰役に於ける、奉天會戰の最後の大捷を記念する日、即ち三月十日。

りく-ぐん-きへいがくかう 陸軍騎兵學校【名】騎兵大・中尉を甲種學生、騎兵中・少尉及び砲兵・輜重兵科士官を乙種學生とし、馬術・戰術及び通信術等を修得せしめて、各隊に普及し、これらの諸學術の調査・研究を行ひて、騎兵教育の進歩を圖り、並びに騎兵用兵器・器具・材料等の研究・試驗を行ふ學校。最初、陸軍乘馬學校といひしを、陸軍騎兵實施學校と改稱し、大正六年九月現稱に改む。

りく-ぐん-きへいじつしがくかう 陸軍騎兵實施學校【名】前條を見よ。

りく-ぐん-きやう 陸軍卿【名】**りくぐんだいじん**(陸軍大臣)の舊稱。

りくぐん-きよく 陸軍局【名】明治初年設置の軍務官に屬して、陸軍に關する一般の事を掌りし局。

りくぐん-ぐんい 陸軍軍醫【名】一りくぐんぐんいくわん(陸軍軍醫官)を見よ。二りくぐんぐんいくわん(陸軍軍醫官)の略。

りくぐん-ぐんいがくかう 陸軍軍醫學校【名】陸軍各部隊附の衛生部士官を學生とし、衛生部に必要なる學術を練習せしめ、軍陣醫學の研究、教科圖書の編纂又は選擇及び軍事衛生上の試驗をなす學校。

りくぐん-ぐんいかん 陸軍軍醫監【名】次條を見よ。

りくぐん-ぐんいくわん 陸軍軍醫官【名】病傷者の診斷・治療、その他、衛生上の軍務に從ふ陸軍高等武官。陸軍軍醫總監(中將相當官)・陸軍軍醫監(少將相當官)・陸軍軍醫正(佐官相當官にて、一等より三等まで)・陸軍軍醫(尉官相當官にて、一等三等よりまで)の四階級に分たる。

りくぐん-ぐんいせい 陸軍軍醫正【名】前條を見よ。

りくぐん-ぐんいそうかん 陸軍軍醫總監【名】りくぐんぐんいくわん(陸軍軍醫官)を見よ。

りくぐん-ぐんいぶ 陸軍軍醫部【名】職員に部長・部員・下士ありて、各師團及び師管・臺灣・朝鮮又は滿洲にある陸軍部隊の衛生・醫事を統理する部、即ち師團軍醫部・臺灣總督府陸軍軍醫部・朝鮮駐劄軍軍醫部・關東都督府陸軍軍醫部の總稱。

りくぐん-ぐんいふく 陸軍軍醫副【名】明治十六年五月以前の中尉相當の陸軍軍醫官。一等・二等に分れたり。

りくぐん-ぐんがくがくかう 陸軍軍樂學校【名】明治四十一年一月以前に於て、陸軍軍樂部出身志願の者を選拔して生徒とし、樂生補の養成、諧調學生の訓練、及び軍樂の研究をなしし學校。

りくぐん-ぐんさう 陸軍軍曹【名】陸軍下士の一。各兵科に於て、曹長の下位、伍長の上位にあるもの。軍曹。

りくぐん-ぐんじん 陸軍軍人【名】陸軍高等武官・陸軍准士官・陸軍下士及び陸軍卒の總稱。

りくぐん-ぐんせい 陸軍軍政【名】陸軍に關する軍事行政。

りくぐん-ぐんぞく 陸軍軍屬【名】陸軍の勤務に服する陸軍文官・同待遇者、及び宣誓規則によりて宣誓せる雇員・傭人の總稱。

りくぐん-ぐんばつくわいぎ 陸軍軍法會議【名】軍法會議の一。陸軍刑法を適用すべき被告人を裁判する所。判士長・判士・理事若しくは理事試補及び錄事を以て構成す。常設・臨時の二種ありて、前者は、更に師管軍法會議・旅管軍法會議・高等軍法會議に、後者は、軍團・師團・混成旅團の軍法會議・陸軍合圍地軍法會議に分つ。陸軍法衙。

りくぐん-ぐんり 陸軍軍吏【名】りくぐんしゅけい(陸軍主計)の舊稱。

りくぐん-くわいけいかんさく-ぶ 陸軍會計監督部【名】明治三十七年四月設置せられ、部長・部員・下士及び判任文官の職員ありて、部長は、陸軍大臣に隷屬し、陸軍全般の會計・經理を監査し、師團及び臺灣陸軍經理部の管轄以外に屬する陸軍各部の會計事務監督をなし、なほ、臨時陸軍各部隊につきて、その會計事務を監督せし所。大正五年四月廢止せられたり。

りくぐん-くわいさうしき 陸軍會葬式【名】りくぐんさうさう(陸軍葬喪)を見よ。

りくぐん-くわんが 陸軍官衙【名】陸軍に關する官衙。りくぐんかうとうくわんが(陸軍高等官衙)參照。

りくぐん-くわんく 陸軍管區【名】陸軍に關する軍事行政の便宜上設置せる、土地の區劃。師管・旅管・聯隊區・警備隊區の四種に分つ。明治二十九年の創定に係る。

りくぐん-くわんしよ 陸軍官署【名】陸軍に關する事務を取り扱ふ官署。

りくぐん-くわやくけんきうじよ 陸軍火藥研究所【名】陸軍大臣の管理の下に、所長・所員・准士官・下士及び判任文官の職員ありて、火藥に關する事項を研究・調査する所。東京砲兵工廠板橋火藥製造所内に置く。

りくぐん-けい-しゆ 陸軍計手【名】會計及び給與に關する軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-けいしゆ 陸軍警手【名】りくぐんぱつくわんふ(陸軍法官部)を見よ。

りくぐん-けいりがくかう 陸軍經理學校【名】陸軍主計候補生及び陸軍經理部官中より選拔せる者を入學せしめ、前者は、生徒として、經理部の初級士官に必要なる教育を施し、後者は、學生として、高等なる學術を授け、且つ經理に關する學術上の調査を行ふ學校。

りくぐん-けいりぶ 陸軍經理部【名】各師團長・臺灣總督・朝鮮駐劄軍司令官又は關東都督に隷屬し、その陸軍部隊の會計經理を統理する部、即ち師團經理部・臺灣總督府陸軍經理部・朝鮮駐劄軍經理部・關東都督府陸軍經理部の總稱。職員に、部長・部員・技師・下士・判任文官あり。

りくぐん-けいりくそうかん 陸軍教育總監【名】次條の語を見よ。

りくぐんけいりくそうかん-ぶ 陸軍教育總監部【名】陸軍全體の教育の齊一進歩をはかる機關。長官即ち陸軍教育總監は、天皇に直隷し、大將もしくは中將、これに親補せられ、その下に、步・騎・砲・工・輜重各兵科の兵監部を置く。

りくぐん-けうどうだん 陸軍教導團【名】明治四年以後同二十九年に至るまで、教育總監の管理の下に、陸軍步・騎・砲・工・輜重各兵科に、出身志願の者を選拔して生徒とし、これに、各兵科の下士たるに必要なる教育を施しし學校。初東京にて組織し、後千葉縣下國府臺(コクフダイ)に移轉せり。卒業者中優秀の者は、將校にも累進するを得たりしが、後年、陸軍士官學校設けられ、又下士制度の改正ありて、この學校廢止後は、下士の教育は、各聯隊に委任する事となれり。教導團。

りくぐん-けんえつ 陸軍檢閲【名】陸軍に關する諸般の檢閲、即ち師團長・旅團長・聯隊長などが、その部下たる軍隊に對して行ふ檢閲及び特命檢閲の總稱。

りくぐん-けんさつ 陸軍檢察【名】陸軍に關する犯罪を搜査し、證憑を收集すること。即ち普通の裁判に於ける檢事の職に該當するもの。

りくぐん-けんさつくわん 陸軍檢察官【名】陸軍檢察の事務を掌る官。憲兵の將校・下士、師團副官・旅團副官・警備隊司令官をこれに充つ。

りくぐん-けんぺいじやうとうへい 陸軍憲兵上等兵【名】憲兵を組織する陸軍の上等兵。憲兵卒。

りくぐん-こうへいくわいぎ 陸軍工兵會議【名】明治廿六年五月以前、議長・議員・臨時議員・審査官を以て組織し、工兵の技術・兵器・材料(陸軍砲兵會議に屬するものを除く)に關して、陸軍大臣の諮詢に應じ、且つその改良・進歩を圖り、審査・立案せし合議機關。後、陸軍砲兵會議と合同せしめて、陸軍技術會議と稱するに至れり。

りくぐん-こうへい-じやうとうこうちやう 陸軍工兵上等工長【名】りくぐんじやうとうこうちやう(陸軍上等工長)を見よ。

りくぐん-こうほせい 陸軍候補生【名】陸軍士官の補充に充つる奏任待遇の現役陸軍軍人。即ち陸軍士官候補生・陸軍主計候補生など。

りくぐん-ごちやう 陸軍伍長【名】陸軍下士の一。各兵科に於て、最下級に位するもの、即ち軍曹の次位にあるもの。伍長。

りくぐん-さいばんしよ 陸軍裁判所【名】一明治五年四月設置せられ、同十五年九月まで、即ち陸軍軍法會議設置以前に、軍人斷罪の事を掌りし裁判所。初、職員に、長・正・權の評事、大中少の主理、錄事、捕部、捕部試補、管獄、看囚、書記等を置き、翌年八月、管獄・書記を廢し、同十年一月、捕部を一等と二等とに分ちて、捕部試補を廢せり。二りくぐんぐんぼつくわいぎ(陸軍軍法會議)に同じ。

りくぐん-さうさう 陸軍葬喪【名】陸軍

現役軍人、及び召集中若しくは現に陸軍軍人の勤務に服する在郷軍人、又は勳三等（賓冠章を除く）若しくは功三級以上の者の葬禮につき、陸軍にて施行する儀式。その他陸軍軍人、軍隊の表喪。會葬式と表喪式とに分ち、會葬式は、晝間葬儀を行ふ時に限りて會葬するものにて、更に儀仗兵・堵列・弔砲・總代會葬の四種に分ち、隊附軍人の葬喪にありては、當該師團長、その他の葬喪にありては、その地の衞戍司令官（東京にては衞戍總督）、これを管理し、表喪式は、喪章を附するものとす。

りくぐん-さうちやう 陸軍曹長【名】陸軍下士の一。各兵科の最高級に位するもの、即ち陸軍曹の上位にあるもの。曹長。

りくぐん-さくわん 陸軍佐官【名】陸軍將校中、陸軍大佐・中佐及び少佐の總稱。大佐・中佐・少佐、共に憲兵・歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵の各兵科に分る。（陸軍將官陸軍尉官に對して）これに、その相當官たる陸軍主計正・陸軍軍醫正・陸軍藥劑正・陸軍獸醫正などを合はせて、陸軍上長官といふ。

りくぐん-さんぺいほんぶ 陸軍三兵本部【名】明治四年八月より翌年正月まで、兵部省内に設置せられ、部下兵隊の監視・檢閲を掌りし所。歩・騎・砲の三兵に分ち、各、職員に、正・權の檢閲使、副官、中尉ありたり。

りくぐん-さんぼう 陸軍參謀【名】參謀總長の統轄に屬して、高等將帥の職務を輔佐し、殊に國防・用兵上の職務に參畫し、又、軍隊編成の事務を掌る陸軍將校。

りくぐん-さんぼうきよく 陸軍參謀局【名】明治四年、兵部省内に設けられ、局長・少將佐官・大尉・中尉・中錄・畫工の職員ありて、機務・密謀に參畫し、地圖・地誌の編輯、並びに間諜・通報等の事を掌りし局。翌年二月、兵部省廢せられ、陸軍・海軍の二省設けらるるに及び、陸軍省内の一局となり、同六年三月廢止せられたり。

りくぐん-じうい 陸軍獸醫【名】一りくぐんじういくわん（陸軍獸醫官）を見よ。二り

くぐんじういくわん（陸軍獸醫官）の略。

りくぐん-じういがくかう 陸軍獸醫學校【名】陸軍蹄鐵工長を下士學生とし、陸軍一二等獸醫を士官學生中の甲種學生とし、陸軍二・三等獸醫を乙種學生として、獸醫及び蹄鐵に關する必要の學術を練習せしめ、學術材料を調査・研究し、教科圖書の編纂又は選擇をなし、軍馬衞生に關する試驗を行ひ、且つ蹄鐵工長候補生に對して、必要なる教育を施す學校。獸醫學校。

りくぐん-じういかん 陸軍獸醫監【名】次條を見よ。

りくぐん-じういくわん 陸軍獸醫官【名】馬匹の疾病治療上の軍務に從ふ陸軍高等武官。陸軍軍醫監（少將相當官）・陸軍獸醫官（佐官相當にて、一等より三等まであり）・陸軍獸醫（尉官相當にて、一等より三等まであり）の三階級に分たる。

りくぐん-じういせい 陸軍獸醫正【名】前條を見よ。

りくぐん-じういぶ 陸軍獸醫部【名】各師團及び師管、臺灣・朝鮮又は滿洲にある陸軍部隊の軍馬衞生を統理する部。即ち、師團獸醫部・臺灣總督府陸軍獸醫部・朝鮮總督府獸醫部・關東都督府陸軍獸醫部の總稱。職員に、部長・部員・下士あり。

りくぐん-しくわん 陸軍士官【名】りくぐんぶくわん（陸軍尉官）を見よ。

りくぐん-しくわん 陸軍次官【名】各省次官の一。陸軍大臣を佐けて、省務を整理し、各局部の事務を監督する勅任官。

りくぐん-しくわんがくかう 陸軍士官學校【名】陸軍の諸隊に屬して、規定の修業を終へたる各兵科の士官候補生を、生徒とし、初級士官たるに、必要なる學問・技術を教授する學校。教育總監の管理に屬す。

りくぐん-しくわん-きんむ-てきにんしようしよ 陸軍士官勤務適任證書【名】適任證書の一。憲歩・騎・砲・工・輜重各兵科、及び經理部（陸軍主計）・衞生部（陸軍軍醫一）・獸醫部（陸軍獸醫一）の四種に分たる。

りくぐん-しくわんこうほせい 陸軍士官候補生【名】しくわんこうほせい（士官候補生）に同じ。

りくぐん-しやう 陸軍省【名】各省の一。陸軍大臣の統轄の下に、その所管事務を取り扱ふもの。大臣官房の外、人事・軍務・兵器・經理・醫務・法務の六局に分れ、職員に、大臣・次官・參與官・局長・局員・課長・課員・祕書官・書記官・屬の外、副官・編修・編修書記・技手・錄事あり。

りくぐん-しやうかう 陸軍將校【名】陸軍高等武官の内、戰鬪上の軍務に從ふ者、即ち陸軍の將官・佐官及び尉官の總稱。

りくぐん-しやうくわん 陸軍將官【名】陸軍將校中、陸軍大將・中將及び少將の總稱。（陸軍佐官・陸軍尉官に對して）

りくぐん-じやうちやうくわん 陸軍上長官【名】りくぐんさくわん（陸軍佐官）を見よ。

りくぐん-じやうとうかんごちやう 陸軍上等看護長【名】病傷者看護上の軍務に從事する陸軍准士官。

りくぐん-じやうとうけいしゆ 陸軍上等計手【名】會計及び給與上の軍務に從事する陸軍准士官。

りくぐん-じやうとうこうちやう 陸軍上等工長【名】砲・工兵科の諸工に關する軍務に從事する陸軍准士官。分ちて、砲兵科のは、陸軍砲兵上等工長、工兵科のは、陸軍工兵上等工長といふ。

りくぐん-じやうとうていてつこうちやう 陸軍上等蹄鐵工長【名】蹄鐵工上の軍務に從事する陸軍准士官。

りくぐんしやう-れい 陸軍省令【名】陸軍大臣の發する省令。

りくぐん-じゆうこうちやう 陸軍銃工長【名】銃工上の軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-しゆけい 陸軍主計【名】一りくぐんしゆけいくわん（陸軍主計官）を見よ。二りくぐんしゆけいかん（陸軍主計監）の略。

次條を見よ。

りくぐん-しゆけいくわん 陸軍主計官【名】會計及び給與上の軍務に從ふ陸軍高等武官。陸軍主計總監（中將相當官）・陸軍主計監（少將相當官）・陸軍主計正（佐官相當にて、一等より三等まであり）・陸軍主計（尉官相當にて、一等より三等まであり）の四階級に分たる。もとは、今の主計に該當する者を陸軍軍吏といひ、その上に、今の主計監に該當する陸軍監督長（後、陸軍監督監と改む）ありて、これを監督したり。

りくぐん-しゆけいこうほせい 陸軍主計候補生【名】陸軍候補生の一。一定の學術を修了せる後、陸軍三等主計に補充せらるべきもの。中學校又はこれと同等以上の學校の卒業生、一年志願兵にして、隊長の保證を得たる者、及び、品行方正、志操確實なる陸軍經理部の下士にして、隊長、又は所屬長官の保證を得たる者の三者中、召募試驗に及第したる者より採用す。

りくぐん-しゆけいせい 陸軍主計正【名】りくぐんしゆけいくわん（陸軍主計官）を見よ。

りくぐん-しゆけいそうかん 陸軍主計總監【名】りくぐんしゆけいくわん（陸軍主計官）を見よ。

りくぐん-じゆんしくわん 陸軍准士官【名】陸軍武官中、士官の下、下士の上に位するもの。特務曹長・陸軍砲兵上等工長・陸軍工兵上等工長・陸軍上等計手・陸軍上等看護長・陸軍上等蹄鐵工長・陸軍軍樂長補など、これなり。

りくぐん-しよ 陸軍所【名】講武所一を廢止したる後、更めて設置し、旗本の士に武術を教習せしめし所。

りくぐん-じようばがくかう 陸軍乘馬學校【名】りくぐんきいがくかう（陸軍騎兵學校）を見よ。

りくぐん-せうさ 陸軍少佐【名】陸軍佐官中の最下級なるもの。

りくぐん-せうしふ 陸軍召集【名】師團長が在郷軍人と國民兵とに對して行ふ召

集。充員召集・臨時召集・國民兵召集・演習召集・教育召集及び補缺召集の六種あり。

りくぐん-せうしやう 陸軍少將【名】陸軍將官中の最下級なるもの。

りくぐん-せうゐ 陸軍少尉【名】陸軍尉官中の最下級なるもの。

りくぐん-そうさい 陸軍總裁【名】江戸幕府の職制の一。文久二年十二月の設置に係り、陸軍に關する事務を總裁せしもの。慶應三年六月以後は、老中の兼任となれり。

りくぐん-ぞく 陸軍屬【名】陸軍の諸官「廳の屬官。

りくぐん-そつ 陸軍卒【名】陸軍軍人中、最下級に位するもの、卽ち下士の次位にあるもの。憲兵科の上等兵、步兵・騎兵・砲兵・工兵・各科の上等兵・一等卒・二等卒、又、看護卒・輜重輸卒など、これなり。陸軍兵。陸軍兵卒。

りくぐん-だいがく 陸軍大學【名】次條の略。

りくぐん-だいがくかう 陸軍大學校【名】參謀その他樞要なる軍職に充つべき人材を養成する學校。選拔したる陸軍士官に、高等用兵に關する學術を授け、かねて、軍事研究に必須なる諸科の學識を增進せしむる學校。その教育の實施は、參謀總長が定むる教育綱領に據る。

りくぐん-たいさ 陸軍大佐【名】陸軍佐官中、最高級に位するもの。

りくぐん-だいじん 陸軍大臣【名】各省大臣の一。陸軍軍政上の單獨官府。陸軍の軍人・軍屬を統督し、所轄事務を監督するもの。

りくぐん-たいしやう 陸軍大將【名】陸軍將官中、最高級に位するもの。

りくぐん-たいゐ 陸軍大尉【名】陸軍尉官中、最高級に位するもの。

りくぐん-たんこうちやう 陸軍鍛工長【名】銃器製造に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-ちはうえうねんがくかう 陸軍地方幼年學校【名】陸軍將校志願者を選拔して生徒とし、軍事上の必要を顧慮して、普通學を教授し、軍人精神を涵養する學校。教育總監の管理に屬し、その卒業生は、陸軍中央幼年學校に入らしむ。

りくぐん-ちゆうあうえうねんがくかう 陸軍中央幼年學校【名】陸軍地方幼年學校の卒業生を、生徒となし、士官候補生たるに必要なる普通學を授け、且つ、軍人の豫備教育を施し、各兵科の士官候補生を養成する學校。又、その下に、豫科の設あり、その程度、地方幼年學校に同じく、その科程修了者も、陸軍地方幼年學校の卒業生と同一に取り扱はる。教育總監の管理に屬す。

りくぐん-ちゆうさ 陸軍中佐【名】陸軍佐官中、大佐の下、少佐の上に位する者。

りくぐん-ちゆうじやう 陸軍中將【名】陸軍將官中、大將の下、少將の上に位するもの。

りくぐん-ぢゆうはうへい-しやげきがくかう 陸軍重砲兵射擊學校【名】各重砲兵隊より分遣する大中尉、又は少尉を甲・乙兩學生とし、射擊及び戰術を訓練して、各隊教育の進步を圖り、電信大隊にて修業後、入校する尉官及び重砲兵隊より分遣する下士・兵卒を丙種學生とし、電燈使用術の教育をなし、又常に諸學術の調査・研究をなし、且つ重砲兵材料の研究並びに試驗を行ふ學校。

りくぐん-ちゆうゐ 陸軍中尉【名】陸軍尉官中、大尉の下、少尉の上に位する者。

りんぐん-ちようぢたい 陸軍懲治隊【名】軍隊中、罪人とすべき程の者にあらざる、素行惡しき者を入れ、嚴格なる教育を與ふるために設けたる隊。

りくぐん-ちようばつ 陸軍懲罰【名】陸軍軍人にて、その本分に背き、又は軍事の定則に違ひ、その他軍紀を害し、風紀を紊り、その犯行が陸軍刑法の罪に當らざる時に科する懲罰。謹慎・譴責・免官・營倉・降等・禮遇停止の罰目あり。

りくぐん-つうやくくわん 陸軍通譯官【名】陸軍官衙及びその各部に置かれ、外國語の通譯を掌る奏任官。

りくぐん-つうやくせい 陸軍通譯生【名】陸軍官衙及びその各部に置かれ、外國語の通譯に從事する判任官。

りくぐん-ていてつこうちやう 陸軍蹄鐵工長【名】陸軍獸醫部に屬し、蹄鐵工に關する軍務に從事する下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-てつこうちやう 陸軍鐵工長【名】鐵工に關する軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-さうきやうけいりぶ 陸軍東京經理部【名】陸軍全般の會計經理の監査、第一師管內に於ける陸軍部隊中、師團長に隸屬せざるもの、及び陸軍經理部管轄外陸軍部隊の會計事務の監査、第一師管內に於ける陸軍所屬の土地・建造物の經營に關する事務(國防に關するもの、並びに、砲兵工廠及び千住製絨所に關するものを除く)を掌る陸軍官衙。職員に部長・部員・技師・下士・判任文官あり。

りくぐん-さくむさうちやう 陸軍特務曹長【名】さくむさうちやう(特務曹長)に同じ。

りくぐん-さやまがくかう 陸軍戶山學校【名】『さやまのやしき(戶山屋敷)を見よ』陸軍の各師團より選出したる規定の學生に、戰術・射擊(以上、士官の學生に限る)、體操並びに劍術(下士の學生にも授く)及び鼓譜・喇叭譜(鼓手長と喇叭長とに限る)の訓練をなす學校。修學期は、概ね二箇月以上、七箇月以內にして、教育總監の管理に屬す。

りくぐん-はうこうがくかう 陸軍砲工學校【名】陸軍の砲兵科と工兵科との少尉、若しくは、中・大尉を學生とし、その各兵科の勤務に必要なる學術を授くる學校。教育總監の管理に屬す。

りくぐん-はうゐくわいぎ 陸軍砲兵會議【名】明治卅六年五月以前、砲兵技術及び兵器材料(陸軍工兵會議に屬するものを除く)に關し陸軍大臣の諮詢に應じ、且つその改良・進步を圖り、審査・立案したる合議機關。職員に議長・議員・臨時議員・審査官あり。後、陸軍工兵會議と合同せしめて、陸軍技術會議と呼ぶに至れり。

りくぐん-はうへいこうくわ-がくかう 陸軍砲兵工科學校【名】東京砲兵工廠內にありて、同廠提理の管理の下に、火工掛下士及び砲工諸工長を學生として、その本務に必要なる學術を練習せしめ、又、火工下士・候補者及び砲兵工長候補者を生徒として、火工掛下士又は鞍工長・銃工長・木工長・鍛工長たるに必要なる教育を施すところ。

りくぐん-はうへいじやうとうこうちやう 陸軍砲兵上等工長【名】りくぐんじやうとうこうちやう(陸軍上等工長)を見よ。

りくぐん-はうへいしやてき-がくかう 陸軍砲兵射的學校【名】りくぐんやせんはうへいしやげきがくかう(陸軍野戰砲兵射擊學校)を見よ。

りくぐん-はじめ 陸軍始【名】毎年、一月八日、陸軍諸部隊にて行ふ儀式。當日、各衞戍地にて、觀兵式擧行せられ、東京にては、大元帥陛下の御親閱あるを例とす。

りくぐん-はふが 陸軍法衙【名】りくぐんぐんばふがゐ(陸軍軍法會議)に同じ。

りくぐん-はふき 陸軍法規【名】陸軍部內の法規。

りくぐん-はふくわんぶ 陸軍法官部【名】各師團長・臺灣總督・朝鮮駐劄軍司令官又は關東都督の權限に屬する軍事司法に關する軍務を掌る部。卽ち師團の法官部、臺灣總督府の陸軍法官部・朝鮮駐劄軍の法官部及び關東都督府の陸軍法官部の總稱。職員に部長・部員・錄事(軍法會議に、通常裁判所に於ける裁判所書記と同樣の職務を執る判任官)・陸軍醫守(軍法會議の法廷の醫衞、書類の送達、並びに被告人の護送及び看守に任ず)あり。

りくぐん-ひふくしやう 陸軍被服廠【名】被服品の調辨・製造・貯藏及び補給を掌り、陸軍縫・靴工長の養成に任じ、且つ被服に關する試驗を行ふ陸軍官衙。本廠と支廠とに分ち、本廠は東京に、支廠は大阪・廣島に設け、職員には、本廠に本廠長・

廠員・技師・下士及び判任文官、支廠に支廠長・廠員・技師・下士及び判任文官あり。

りくぐん-ぶ 陸軍部【名】㊀明治四年七月兵部省に置かれ、祕史・軍務・砲兵・築造・會計の諸局と兵部大丞・會計監長・監督、正・權の大・中・少錄、少將、佐尉官、正・權の曹長・軍曹・大・中・尉・工長等の職員とありて、陸軍に關する事を掌りし部局。翌年二月、兵部省と共に廢せられ、今日の陸軍省これに代れり。㊁臺灣總督府又は關東都督府に置かれ、臺灣總督又は關東都督の管轄内に於ける陸軍一般に關することを掌る部局。

りくぐん-ぶぎやう 陸軍奉行【名】江戸幕府の職制の一。文久二年十二月の設置に係り、老中支配の下に、歩・騎・砲の三兵を總轄せしもの。

りくぐん-ぶくわん 陸軍武官【名】陸軍將校・同相當官及び陸軍准士官・陸軍下士の總稱、即ち陸軍軍人中、卒以外のもの。

りくぐん-ぶんくわん 陸軍文官【名】陸軍官衙に勤務する文官。即ち理事・錄事・陸軍通譯生など。「(陸軍卒)に同じ。

りくぐん-へい 陸軍兵【名】**りくぐんそつ**

りくぐん-へいがくれう 陸軍兵學寮【名】明治三年十一月、兵部省所管の大阪兵學寮を改稱せしもの。同五年二月兵部省廢せられ、陸軍・海軍の二省を置かるるに及びて、陸軍省の所管となり、同八年五月廢せられたり。

りくぐん-へいきしやう 陸軍兵器廠【名】兵器の購買・檢査・貯藏・保存・修理・支給・交換・廢品處分及び砲兵工廠にて製造・修理する軍用品の檢査、並びに要塞の備砲工事を掌る陸軍官衙。本廠と支廠とに分ち、本廠は東京に、支廠は東京・大阪・名古屋・廣島・小倉及び龍山に設け、職員には、本廠に本廠長・廠員・檢査官・主計正・主計・軍醫・准士官・下士及び判任文官、支廠に支廠長・廠員・主計・軍醫・准士官・下士及び判任文官あり。なほ、陸軍大臣は、必要に應じ、支廠出張所を設置することを得。

りくぐん-へいきぶ 陸軍兵器部【名】部長・部員・准士官・下士の職員ありて、各師管・臺灣又は滿洲にある陸軍部隊の兵器事務を統理する部、即ち師團兵器部・臺灣總督府陸軍兵器部・關東都督府陸軍兵器部の總稱。但し、滿洲駐劄師團の兵器事務は、當該師團兵器部の管轄に屬す。

りくぐん-へいせき 陸軍兵籍【名】陸軍軍人の身上に關する要件を登記しおくもの。將校・同相當官及び准士官のを第一種兵籍といひ、士官候補生・主計候補生・見習醫官・見習藥劑官・見習獸醫官・下士・兵卒(雜卒及び職工を含む)・諸生徒(陸地測量部修技師の生徒を除く)・依託學生及び依託生徒のを、第二種兵籍といふ。

りくぐん-へいそつ 陸軍兵卒【名】**りくぐんそつ**(陸軍卒)に同じ。

りくぐん-へいびひん 陸軍兵備品【名】陸軍の兵備に供すべき諸品。通常兵備品と出師兵備品との二種に分ち、圖書・糧秣・被服及び裁縫具・衞生材料・獸醫材料・兵營備付陣營具を前者に、兵器・彈藥及び兵器具並びに材料・祕密圖書・馬匹及び戰時これに要する器具、戰時の糧秣・炊爨具・被服・裁縫具・衞生材料・獸醫材料・戰用天幕・陣中事務用品・軍隊輸送用補助物件を後者に屬せしむ。

りくぐん-へうさうしき 陸軍表喪式【名】**りくぐんさうさう**(陸軍葬喪)を見よ。

りくぐん-へんしう 陸軍編修【名】次條を見よ。

りくぐん-へんしうくわん 陸軍編修官【名】陸軍大臣管轄の下に、上官の命を承けて、陸軍の圖書の編纂及び飜譯に從事する官職。陸軍編修(奏任、定員四人)・陸軍編修書記(判任、定員十四人)の二等級あり。

りくぐん-ほうこうちやう 陸軍縫工長【名】縫工に關する軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-ほじゆうへい 陸軍補充兵【名】陸軍の補充兵役に編入せられたる兵卒。

りくぐん-ほへいがくかう 陸軍歩兵學校【名】歩兵科の大尉又は中尉を學生とし、これに歩兵の射擊・戰術及び通信術等を修得せしめて、各隊に普及し、且つ、常にこれらの諸學術の調査・研究を行ひて、歩兵教育の進歩を圖り、並びに、携帶火兵・機關銃等の研究・試驗を行ふ學校。

りくぐん-まこうちやう 陸軍磨工長【名】磨工に關する軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-もくこうちやう 陸軍木工長【名】木工に關する軍務に從事する陸軍下士。一等より三等までに分たる。

りくぐん-やくざいかん 陸軍藥劑監【名】次條㊁を見よ。

りくぐん-やくざいくわん 陸軍藥劑官【名】㊀調劑上の軍務に從ふ陸軍高等武官。陸軍藥劑監(少將相當官)・陸軍藥劑正(佐官相當にて、一等より三等まであり)及び次項の陸軍藥劑官(尉官相當にて、一等より三等まであり)の三級に分たる。㊁前項の内、尉官相當のものの特稱。

「前條㊀を見よ。

りくぐん-やくざいせい 陸軍藥劑正【名】

りくぐんやせんはうへい-しやげきがくかう 陸軍野戰砲兵射擊學校【名】陸軍各隊の野戰砲兵隊及び山砲兵隊より分遣する大尉を甲種學生とし、同じく中尉又は少尉を乙種學生として、射擊・戰術並びに通信技術の訓練を施して、各隊教育の進歩を圖り、常に諸學術の調査・研究をなし、且つ野戰砲兵材料の研究並びに試驗を行ふ學校。舊稱、陸軍砲兵射擊學校。

りくぐん-りやうまつしやう 陸軍糧秣廠【名】糧秣品の調辨・製造・貯藏及び補給を掌り、且つ糧秣に關する試驗を行ふ陸軍官衙。本廠と支廠とに分ち、本廠は東京に、支廠は大阪・宇品に設け、職員には、本廠に本廠長・廠員・技師・下士及び判任文官、支廠に支廠長・廠員・技師・下士及び判任文官あり。

りくぐん-ろくしうかんげんえきへい 陸軍六週間現役兵【名】**ろくしうかんげんえきへい**(六週間現役兵)を見よ。

りくぐん-ねくわん 陸軍尉官【名】陸軍將校中、陸軍大尉・中尉及び少尉の總稱。大尉・中尉・少尉共に憲兵・歩兵・騎兵・砲兵・工兵・輜重兵の各兵科に分る。(陸軍將官・陸軍佐官に對して)これに、その相當官たる陸軍主計・陸軍軍醫㊀・陸軍藥劑官㊁・陸軍獸醫㊀・陸軍樂長などを合はせて、陸軍士官といふ。

りくぐん-ねたくがくせい 陸軍委託學生【名】陸軍にて、帝國大學その他の專門學校の學生に、毎月一定の金額を給し、その學校にて、指定の學科を修めしむるために、その學校に委託せる學生。

りくぐん-ねたくせいと 陸軍委託生徒【名】陸軍にて、官立高等專門學校生徒中、陸軍出身を志願する者より採用して、一定の手當を給し、その學校にて、指定の學科を修めしむる者。

りくぐん-えいせいざいれうしやう 陸軍衞生材料廠【名】衞生材料・獸醫材料の模範品・特種品・戰用品の製作・購買・貯藏・補給・品質審査を行ひ、且つ外國駐屯の部隊に要する材料の購買・補給を行ふ陸軍官衙。職員に廠長・廠員・主計・下士及び判任文官あり。

りくぐん-くわ 六花【名】㊀**りくしゆつくわ**(六出花)に同じ。㊁昔の陣立の一。

りくぐん-くわ 六科【名】古、支那にて、士を舉ぐる六つの科目、即ち秀才・明經・進士・明法・明書・明算の稱。

りくぐん-くわん 六官【名】**りくけい**(六卿)に同じ。

りく-けい 六經【名】〔書〕『莊子の天運篇に「丘治二詩書禮樂易春秋六經一。老子曰、六經先王之陳迹也」とあり』支那の、六つの經書、即ち易・書・詩・禮・春秋・樂(ガク)の總稱。樂經亡びてより後は、禮經を周禮(シウライ)・禮記(ライキ)の二に分ちて、これを補へり。六藝。六籍。**ごきやう**(五經)參照。

六經、我を注し、我、六經を注す【句】『宋史の陸九淵傳に「六經注レ我、我注二六經一。學苟知二本、六經皆我注脚」とあるに本づく』我心に、天地萬物の道理具はらざるなきが故に、我心と、六經の說く所とは、互に表裏して、齟齬する所

ある筈なし。(支那宋の陸象山が頓悟し得たる一家の言)

六經わが注脚【句】前條に同じ。

りく-けい 六卿【名】支那周代の六大臣、即ち冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空の總稱。冢宰を天官、司徒を地官、宗伯を春官、司馬を夏官、司寇を秋官、司空を冬官ともいひて、併せて、六官ともいへり。

りく-げい 六藝【名】Ⅰ支那周の代に、一般國民に教へし、六種の技藝、即ち禮・樂(ガク)・射・御(ギョ)・書・數の總稱。Ⅱ『史記に見ゆ』**りく-けい**(六經)に同じ。

りく-けん 陸圈【名】〔地〕地球上、陸地の範圍。陸界。岩石圈。(氣圈・水圈に對して)

りく-げん 六言【名】**ろくごん**(六言)に同じ。

りく-けん-がく 陸圈學【名】〔地〕陸地の分布・構成・變動などに關して研究する學。陸界地理學。(氣圈學・水圈學に對して)

りく-とう 六功【名】『小學紺珠に見ゆ』古、支那にて分てる、六つのてがら、即ち勳(王功)・功(國功)・庸(民功)・勞(事功)・力(治功)・多(戰功)の總稱。

りく-とう 六工【名】古、支那の朝廷に屬せし、六種の工人、即ち土工・金工・石工・木工・獸工・草工の稱。

りく-とく 六國【名】古、支那の春秋戰國の時に割據せし、六つの諸侯の國、即ち、齊・楚・燕・韓・魏・趙。これに秦を加へて、七國といふ。

りく-とく 六穀【名】『周禮の膳夫篇に「凡王之饋食、用二六穀一」とあり』稻・黍・稷・麥・菽の五穀に粱を加へていふ語。

りく-とくし 六國史【名】〔書〕王朝時代に、漢文にて編年體に書きたる、六部の、勅撰の國史、即ち日本書紀・續日本紀・日本後紀・續日本後紀・文德實錄・三代實錄の總稱。

りく-ざう 六贓【名】支那唐代及び我國平安朝時代の、六種の贓、即ち强盜・竊盜・枉法・不枉法・受所監臨及び坐贓。

りく-さん 陸產【名】陸地に產すること、又その物。(水產・海產に對して)

りくさん-ぶつ 陸產物【名】陸地に產する物。(水產物・海產物に對して)

りく-し 六師【名】**りくぐん**(六軍)に同じ。

りく-し 戮尸【名】死體を、刑罰に處すること。(「同じ。

りく-し 六詩【名】〔文〕**りくぎ**(六義)Ⅱに

りく-し 六摯【名】『周禮に見ゆ』古、支那にて定めし、六種の贈物、即ち、諸侯は皮帛、卿は羊、大夫は雁、士は雉、庶人は鶩(アヒ)、工商は雞。

りく-し 陸贄【名】〔人〕支那唐代の名臣。字は敬輿。嘉興の人。十八歲にして、進士となり、累進して監察御史となり、德宗の時、翰林學士となる。李希烈の寇、朱泚の亂ありて、德宗流離艱難の際、獻替する所多し。ただ直言のために、進路澁滯し、貞元八年始めて、中書侍郎同平章事に任ず。後、裴延齡の讒により、纔かに死を免れて貶謫せらる。順宗、位に即くや、召還の命を發したれども、詔未だ到らざるに死す。年五十二。宣公と謚す。著す所、制誥集・奏草・中書奏議等あり。

りく-じ 六辭【名】支那の古文の六體、即ち詞辭・命辭・語辭・會辭・禱辭・誄辭(ルイジ)。

りく-じ 六事【名】『小學紺珠に見ゆ』人として心掛くべき、慈・儉・勤・慎・誠・明の六種の性行。 著聞「六事の題を出して、人人に、思ふ事を書かせられけり」

りく-しん 六親【名】『管子の牧民篇、老子の第十八章、及び漢書の禮樂志に見ゆ』六種の親族、即ち父・母・兄・弟・妻・子の總稱。又、父子・兄弟・姑姊・舅姑・婿媾・姻婭なりとも、父・子・從父昆弟・從祖昆弟・曾祖昆弟・族昆弟なりともいふ。六戚。

六親・眷族【句】一切の血族と姻族と。親族全部。 「(五臣注)を見よ。

りくしん-ちゆう 六臣注【名】**ごしんちゆう**

りく-しやう 陸商【名】陸上にて行はる商業。陸上商業。(海商に對して)

りく-しやう 陸相【名】**りくぐんだいじん**(陸軍大臣)の異稱。

りく-じやう 陸上【名】陸地の上。(水上・海上に對して)

りく-じやう 六情【名】『白虎通に見ゆ』喜・怒・哀・樂・愛・惡(ヲ)の、六種の情。これに、欲を加へて、七情といふ。

りくじやう-うんそう 陸上運送【名】陸上にて行はるる運送。陸運。(海上運送に對して)

りくじやう-けいさつ 陸上警察【名】陸上に於ける警察事務。(水上警察に對して)

りく-しやうざん 陸象山【名】〔人〕支那宋の儒者。名は九淵、字は子靜、象山はその號。金谿の人。乾道年間進士となり、國士正に敍し、後、鄉に歸りて、講席を開く毎に、學者その門に輻輳す。紹興三年卒す。年五十四。文安と謚す。

りくじやう-しやうげふ 陸上商業【名】**りくしやう**(陸商)に同じ。(海上商業に對して)

りくじやう-ふうさ 陸上封鎖【名】〔兵〕封鎖Ⅱの一。陸上にて行ふもの。陸地封鎖。(港灣封鎖に對して)

りくじやう-ほけん 陸上保險【名】〔商〕海上保險にあらざる損害保險。

りく-しゆつ 六出【名】次條に同じ。

りくしゆつ-くわ 六出花【名】『雪は六面の結晶をなすよりいふ』**ゆき**(雪)の異名。

りく-じゆん 六順【名】『左傳の隱公三年の條に見ゆ』道に順(ジュン)へる六種の道、即ち君は義に、臣は行ひ、父は慈に、子は孝に、兄は愛し、弟は敬ふことの總稱。(六逆(ギャク)に對して)

りく-しよ 六書【名】Ⅰ漢字の組織の六種、即ち象形・指事(又、處事・象事)・會意(又、象意)・諧聲(又、形聲・象聲)・轉注・假借の總稱。象形とは、「日」の⊙に於ける「月」の☽に於ける「山」の⛰に於ける、又、「木」の�木(上は枝、下は根)に於けるが如く、天地萬物の形體を、そのままに象りて、文字としたるもの、即ち、文字制作の方法としては、最も單純にして、繪畫に近きもの、指事とは、「天」は絕對的に大なるものなるより、「大」の上に、「一」を置きて作り、「木」の下に、「一」を加へて、「本」とするが如く、象形を基とし、形體なくして事實のみ指斥すべき物の符牒とせるもの、會意とは、「亡」と「目」とを合はせて、「盲」とし「日」と「月」とを合はせて、「明」とするが如く、二字の意味を取りて、形の象るべきなく、事の指すべきなくして、ただ、無形の思想の依るべきのみなるものの符牒とせるもの、諧聲とは、「峯」・「蜂」・「鋒」の「夆」は、音「ほう」を示し、「山」・「虫」・「金」は、その山たり虫たり金たるを示すが如く、二字を合はせて、一字となし、その一半は形質を示し、一半は音を示すもの、(即ち、以上四者の內、前三者は視官的にして、諧聲は聽官的分子を交ふ)、假借とは、「革」は「皮」の意なるを、「改革」などの如く用ひ、「あじあ」に「亞細亞」と書くなどの如く、言語ありて文字なきものに、既成の文字の音のみを借りて、意義を取らざるもの、轉注とは、「惡」は、「善惡」の「あく」にて、名詞なるを、動詞として、「好惡」などの「を」とし、「樂」は、「音樂」の「がく」にて、人を樂ましむる意より、「悅樂」などの「らく」とするが如く、既成文字の音聲と意味とを轉じて用ふること、水を甲器より乙器に注ぐが如くするもの。初の四者は構成に關し、後の二者は使用法に關す。Ⅱ漢字の書體なる、古文、奇字・隸書・篆書・繆篆・蟲書の六種。六體。

りく-せい 六牲【名】『周禮の天官膳夫篇に見ゆ』支那の周の代の、六種のいけにへ、即ち馬・牛・羊・豕・犬・雞。

りく-せい 陸生【名】陸上に生ずること。

りく-せい 陸棲【名】陸上に棲息すること。(水棲に對して)

りく-せき 六戚【名】**りくしん**(六親)に同じ。 「に同じ。

りく-せき 六籍【名】〔書〕**りくけい**(六經)

りく-せき-の-こ 六尺孤【句】『論語の泰伯篇に「可三以託二六尺之孤一、可三以寄二百里之命一」とあり』父を失ひたる幼君。

りく-せん 陸戰【名】陸地に於ての戰爭。(水戰・海戰に對して)

りくぜん 陸前【名】〔地〕東山道十三國の一。仙臺市及び柴田・名取・宮城・黒川・加美(カミ)・志田・玉造・遠田(トウダ)・栗原・登米(トヨマ)・桃生(モノ)・牡鹿(カノシ)・本吉(モトヨシ)・氣仙(ケセ)の十四郡に分ち、氣仙郡は巖手縣、その他は宮城縣の管轄に屬す。「鷺」に同じ。

りく-せんこう 陸宣公【名】〔人〕りくし(陸士)に同じ。

りくせん-たい 陸戰隊【名】かいぐんりくせんたい(海軍陸戰隊)の略。

りくぜん-はまかいだう 陸前濱街道【名】〔地〕武藏國千住より、下總・常陸・磐城の三國を過ぎて、陸前國仙臺に通ずる街道。水戸街道。

りく-ぞく 陸續【名】引き續くさま。續續。

りく-たい 六體【名】『漢書の藝文志及び小學紺珠に見ゆ』りくよ(六書)〔二〕に同じ。一說に、大篆・小篆・八分(ハツブン)・隷書・行書・草書なりともいふ。

りく-たう 陸稻【名】をかぼ(陸稻)に同じ。

りく-たう 六韜【名】〔書〕支那周の太公望の作れりといふ、文韜・武韜・虎韜・豹韜・龍韜・犬韜の總稱。

六韜三略【句】〔一〕〔書〕六韜と三略と。〔二〕人に明さぬ術。おくので。祕訣。虎の卷。

りく-たう 陸島【名】〔地〕たいりくたう(大陸島)に同じ。(洋島に對して)

りく-だう 陸道【名】りくろ(陸路)に同じ。

りく-ち 陸地【名】地球上にて、水面より高く現れたる土地。をか。くが。陸。

りく-ぢ 離垢地【名】〔佛〕十地(ジフチ)の第二。清淨の戒行(カイギヤウ)を具し、煩惱(ボンナウ)の垢染(ノウセン)を離れたる行位(ギヤウヰ)。

りく-ちえうさい 陸地要塞【名】〔兵〕港灣以外の、兵略上重要なる地(國境・市街等)に設けたる要塞。

りく-ちく 六畜【名】『爾雅の釋畜及び左傳の僖公十九年の條に見ゆ。畜の字の音、正しくはきう』六種の家畜、即ち馬・牛・羊・豕・犬・雞の總稱。

りくち-そくりやう-くわん 陸地測量官【名】陸地測量部長の指揮・監督の下に、陸地測量の業務に從事する官吏。陸地測量師(奏任)・陸地測量手(判任)の二等級に分たる。「前條を見よ。

りくち-そくりやう-し 陸地測量師【名】

りくち-そくりやう-しゆ 陸地測量手【名】りくちそくりやうくわん(陸地測量官)を見よ。

りくち-そくりやう-ぶ 陸地測量部【名】參謀總長の統轄の下に、兵要地圖及び一般の國用に供すべき內國地圖の製作、その他陸地の測量に關する事務を掌る陸軍官衙。三角・地形・製圖の三科あり。各科、又、數班に分れ、別に修技所の設ありて、學生・生徒を養成す。職員は、部長(陸軍少將又は各兵科大佐)以下、事務官(各兵科少佐及び尉官)・材料主官(各兵科大尉)・主計・科長(各兵科佐官)・科僚(各兵科中尉又は少尉)・班長(各兵科少佐或は大尉)・班員(各兵科大・中小尉或は相當陸地測量師及び陸地測量手)・修技手・幹事(各兵科大尉)・修技所教官(各兵科大・中少尉或は相當陸地測量師)及び修技所助教(陸地測量手)等あり。科長と班長とは、陸地測量官を以て、これに充つることを得。

りくち-そくりやう-へう 陸地測量標【名】陸地測量部が設置する測量標。三角點標石・水準點標石・覘標・標杭・測旗・假杭の六種あり。

りくち-ふうさ 陸地封鎖【名】〔兵〕りくぢやうふうさ(陸上封鎖)に同じ。

りく-ちん 陸沈【名】『水無くして沈む義』〔一〕『莊子の則陽篇に「方且與レ世遊、而心不レ屑二與レ之俱一、是陸沈者也」とあり』德をかくして、俗塵の間にかくれをること。陸沒。〔二〕衰へ又は滅ぶること。零落。沈淪。太平記「氏族の陸沈を御助け候へ」

りくちゆう 陸中【名】〔地〕東山道十三國の一。盛岡市及び巖手(イハテ)・紫波(シハ)・稗貫(ヒエヌキ)・和賀(ワガ)・膽澤(イサハ)・江刺(エサシ)・西磐井・東磐井・上閉伊(カミヘイ)・下閉伊・九戸(クノヘ)・鹿角(カヅノ)の十二郡に分れ、鹿角郡は秋田縣、その他は巖手縣の管轄に屬す。

りく-つ 理窟【名】〔一〕『續高僧傳に「理窟更深、浮囊不レ捨」とあり』理論のあつまり。道理を窮めてあること。〔二〕『晉書の張憑傳に「張憑勃窣、爲二理窟一」とあり』條理を言ひ張ること。理論に偏すること。理窟上手の行下手【句】理論にのみ走りて、實行の伴なはぬこと。理窟に詰む【句】理窟を言ひ立てて、遁辭に窮せしむ。條理を說きて、屈服せしむ。理窟詰にす。醒睡笑「ちと出家を嬲り、理窟に詰めて遊びたや」「じ。

りく-づ 陸圖【名】ちけいづ(地形圖)に同

りく-つ-くさし 理窟臭し【形二】道理ありげなり。理窟っぽし。

りく-つぐき 陸續【名】陸地の、中間に海などの隔なく、互に接續してあること。をかつづき。

りく-つ-っぽし 理窟っぽし【形一】『ぽしはおほし(多し)の略』りくつくさし(理窟臭し)に同じ。和合人「理窟っぽい嬶だぞ」

りく-つ-づめ 理窟詰【名】條理を說きて、屈服せさすること。だうりづめ。りづめ。一代女「理窟詰なる詰開(ツメヒ)、少し勿體も附け」

理窟詰より重詰【句】議論を聞かせらるるよりは、御馳走を欲す。〔諺語〕

りく-つ-ばなし 理窟話【名】理窟がかりたる談話。曉野越人「おもしろや理窟話に花の雲」「さく言ふ。

りく-つ-ばる 理窟張る【動四自】理窟くりく-つ-や 理窟屋【名】とかくに理窟張る癖の人。

りく-てう 六朝【名】支那にて、三國時代の後、建康(明の南京)に都せし、吳・東晉・宋・齊・梁・陳の六代の朝廷。我國の紀元八百八十二年より一千二百四十八年まで。最後の陳は、隋に滅されたり。

りくてう-ぶんかく 六朝文學【名】支那六朝時代の文學。文學史上の六朝は、歷史上のよりやや廣義に解し、遡りて魏・晉に至るまでを包含せしむ。

りく-てん 六典【名】〔一〕『周禮の大宰篇に「掌レ建二邦之六典一、以佐レ王治中邦國上」とあり』支那周の代に、國を治むる根本とせし、六つの法典、即ち治典・教典・禮典・政典・刑典・事典。治典は天官・冢宰、教典は、地官・司徒、禮典は春官・宗伯、政典は夏官・司馬、刑典は秋官・司寇、事典は冬官・司空の職掌を記す。〔二〕支那周の代の大宰・大宗・大史・大祝・大士・大卜の六種の官。〔三〕〔書〕たりりくてん(唐六典)の略。

りく-でん 陸田【名】はたけ(畑)に同じ。(水田に對して)

りく-とく 六德【名】〔一〕人の具ふべき、仁・義・禮・智・忠・和の六種の德。〔二〕婦人たる者の具ふべき、柔順・清潔・不妬・儉約・恭謹・勤勞の六種の德。

りく-なんぷう 陸軟風【名】〔地〕『英Land breeze』夜間、陸地より海上に向ひて吹く微風。夜間は、陸は海よりも、熱を放散すること早きため、氣溫の關係上冷えて、重き陸上の空氣は、海上に向ひて移動するに因る。陸風。(海軟風に對して)あさなぎ(朝凪)・ゆふなぎ(夕凪)參照。

りく-ば 六馬【名】『書經の五子之歌篇に「予臨二兆民一、凜乎若二朽索之馭二六馬一」とあり』古、支那にて、天子の馬車に附けたる六頭の馬。六驥(キヤク)。六飛。六龍。

りく-はうをう 陸放翁【名】〔人〕りくいう(陸游)に同じ。

りく-はんきう 陸半球【名】〔地〕『英Land hemisphere』約九割の陸地を包含せるによりていふ』地球を、西歐羅巴の海岸とニユウジイランド(New Zealand)の近傍とを兩極として二分する時、南極を含む方の半球。(海半球に對して)

りく-ひ 六飛【名】りくば(六馬)に同じ。

りく-ぐひ 利喰【名】〔一〕利息を拂ふために、出貸の增すこと。〔二〕〔商〕買玉(カヒヒキ)又は賣玉(ヨウヒキ)に利の乘りたる時、受渡期限に先だちて、轉買又は買戻を行ひて、その差金を受け取ること。

りく-ふ 六府【名】〔一〕『府は藏にして、財用の由りて出づる所の義。書經の大禹謨篇に「地平天成、六府三事允治」とあり』古、支那にて、人生に必須なりと考へし、水・火・金・木・土・穀の六種の貨物、即ち五行

に、穀を加へしもの。 ㊂古、支那にて、司土・司木・司水・司草・司器・司貨の六つの役所。 ㊃ろくふ(六府)を見よ。 ㊄次條に同じ。

りくふ 六腑・六府【名】ふ(腑)㊀を見よ。

りくぶ 六部【名】支那隋・唐より清末まで、中央行政府に設けたる吏部・戸部・禮部・兵部・刑部・工部の六官省。大抵、中央行政の中樞たる尚書省に設けたれども、元のみは、中書省を以て、尚書省の事を行ひしより、その中に設けたり。各部に尚書・侍郎・郎中・員外郎等の官を設けしが、明に至りて、中書省廢止の結果、各部の尚書は天子に直屬するに至り、清末、六部以外に、外務學・民政・海軍の四部新設せられ、理藩院も理藩部と稱するに至り、合はせて、十一部となれり。又、六部は周代の六卿に當るものとし、雅稱として、尚書と侍郎とを、それぞれ冢宰・小宰、大司徒・小司徒、大宗伯・小宗伯、大司馬・小司馬・大司寇・小司寇、大司空・小司空と呼びたり。

りくぶう 陸風【名】〔地〕**りくなんぷう**(陸軟風)に同じ。(海風に對して)

りくへい 陸兵【名】陸上にて戰ふ兵士。陸軍の兵士。(水兵に對して)

りくへい 六柄【名】『國語の齊の條に「管子曰、聖王之治天下也、……、愼用二其六柄一」とあるに本づく』人君の政をなすに注意すべき六種の事項、即ち生・殺・貴・賤・貧・富の總稱。

りくへい 六米【名】**りくこく**(六穀)に同じ。

りくへう 陸標【名】『英 Cable banoon』水底電線の位置を、その陸揚地の附近にて示すために、建設する目標。三角形の木版を木柱に取り附け、全部白色の塗料にて塗りたるを用ふ。

りくぼ 六母【名】六種の母、即ち嫡母・繼母・慈母・養母・庶母・乳母の總稱。

りくぼつ 陸沒【名】**りくちん**(陸沈)に同じ。

りくみ 六味【名】五味㊀に淡の一味を加へ「へていふ稱。

りくむ 六夢【名】六種の夢、即ち正夢・愕夢・思夢・寤夢・喜夢・懼夢。

りくゆ

りぐん 離群【名】仲間を離るること。なかまはづれ。孤立。「離群・索居(キョ)」

りくやう 六陽【名】陰曆四月の異稱。

りくゆ 六諭【名】支那清の康熙帝の人民に發布せし、父母に孝順なれ、長上を尊敬せよ、鄉里を和睦ならしめよ、子孫を教訓せよ、各生理に安んぜよ、非を作(ナ)して、是と爲す毋れといふ、六箇條の教誨。

りくゆ-えんぎ 六諭衍義【名】〔書〕前條の六諭を、支那會稽の人范鑛の、俗語にて敷衍したるもの。一卷。琉球の使者程順則、一本を携へ歸りて印行し、一部を薩摩の島津侯に獻じ、島津侯、更に將軍吉宗に獻ぜり。

りくゆ-えんぎ-たいい 六諭衍義大意【名】〔書〕前條の書を、將軍吉宗に命ぜられて、室鳩巢の和譯せしもの。

りくり 陸離【貌】入りみだれ、きらめきて、立派なるさま。「光彩陸離」

りくりくぎよ 六六魚【名】〔動〕『續博物志に「鯉魚大小並三十六鱗」とあるよりいふ』**こひ**(鯉)の異稱。

りくりつ 六律【名】**じふにてうし**(十二調子)を見よ。

りくりやう 陸梁【名】くるひ走ること。あれまはること。跳梁。平治「躍り上り、躍り上り、陸梁せられけれども」

りくりよ 六呂【名】**じふにてうし**(十二調子)を見よ。

りくりよう 六龍【名】**りくば**(六馬)に同じ。

りくりよく 戮力【名】力をあはすること。協力。

りくろ 陸路【名】をかのみち。くがち。「陸道。

りくろいん(英 Ligroin)【名】〔化〕石油より輕油を分溜し、八十度乃至百二十度の間に沸騰する部分を採取せるもの。樹脂・護謨・油類の溶劑に用ふ。

りくろ-ほうえき 陸路貿易【名】陸續きなる國際間に於ける貿易。

りくろ-りよかう 陸路旅行【名】㊀陸路を通行する旅行。㊁鐵道又は水路に依らざる旅行の特稱。

りくわ 梨花【名】なしの花。

りくわ 李花【名】すももの花。

りくわ 理科【名】理學の學科。「略。

りくわ 理化【名】**りくわがく**(理化學)の略。

りくわい 理會【名】道理によりて會得(タ)すること。合點。了解。理解。

りぐわい 理外【名】ことわりのほか。道理以外。理外の理【句】普通の道理にては了解しがたき、不可思議の道理。

りくわい-りよく 理會力【名】理會する能力。理解力。

りくわう 李廣【名】〔人〕支那漢の將軍。隴西の人。武帝の時、右北平大守となり、景帝の時、驍騎將軍となる。匈奴と戰ふこと、前後七十餘度、屢ば大功あり。後、匈奴を擊ちて、道に迷ひ、長史の責むる所となりて、遂に自殺す。天下これを傳へて、悲慟せり。

りくわう 六王【名】㊀支那周の六代の王、即ち文王・武王・成王・厲王・宣王・幽王。㊁支那春秋戰國の時の六國の王。

りくわう 陸王【名】支那宋の陸象山と王陽明と。陽明の良知の說は、象山に由來せるによりて、連稱す。「陸王の學」

りくわ-がく 理化學【名】物理學と化學と。理化。

りくわ-だいがく 理科大學【名】分科大學の一。帝國大學理學部の舊稱。

りくわん 痢患【名】**りびやう**(痢病)に同じ。水左記「痢患之輩」

りくわ-わかしふ 李花和歌集【名】〔書〕宗良親王の歌集。三卷。

りげき 履屐【名】くつ。あしだ。げた。『履屐の才【句】『晉書の謝玄傳に「見二其使ヒ才、雖二履屐之間一、亦得二其任一」とあるに本づく』細かなる物事にまでゆきとどく才。

りけん 利劍【名】㊀するどきつるぎ。鋭利なる刀。利刃。㊁〔佛〕煩惱(ナボ)を破摧する法力の譬。彌陀の名號、文殊(モジ)の智などに譬へていふこと多し。利劍卽是彌陀號【句】〔佛〕『善道の般舟讚に「門門不同八萬四、爲滅二無明果業因一、利劍卽是彌陀號、一聲稱念罪皆除」とあるに本づく』彌陀の名號は、利劍の如く、これを唱ふれば、一切の罪惡、悉く滅す。手書鑑「この刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力、利劍卽是彌陀號と、撞木を取ってうち鳴らす」

りけん 利權【名】利益を得る權利。

りけん 吏權【名】官吏としての權力。

りけん 離權【名】權力を手放すこと。

りげん 俚言【名】鄙俚なる言語。俚俗の語。俗語。俚語。俚辭。

りげん 俚諺・里諺【名】鄙俚なる諺。俗間のことわざ。俗諺。

りげん 利源【名】利益を生ずるもと。

りげん-しふらん 俚言集覽【名】〔書〕雅言集覽に倣ひて、主に、鎌倉時代以後、江戸時代の言語を、五十音順に集めたるもの。五十卷。村田了阿の著と傳ふれど、又、太田全齋の手に成れるかともいひ、詳かならず。明治三十二年、井上頼圀・近藤瓶城の二氏、訂正・增補の上、洋裝三册本として版行せり。

りけん-や 利權屋【名】自ら利用するに非ず、他に賣り附くるために、利權を獲得するを業とする者。「俚語」

りし 利子【名】**りそく**(利息)に同じ。太平記「利子を附けて返すべし」

りこ 利己【名】おのれ一人の利益のみを圖ること。自利。自愛。

りこ 狸鼓【名】たぬきの腹つづみ。

りご 俚語・里語【名】**りげん**(俚言)に同じ。

りこう 里堠【名】**いちりづか**(一里塚)に同じ。

りこう 利口【名】㊀たくみに物言ふこと。巧言。著聞「利口に申したりけるを」同「巻(ヒト)切られて、それにも懲りず、なほ利口しありきけるほどに」㊁さかしきこと。はつめい。怜悧。利發。利根。

狂言(長光)「利口な奴ぢや。騙されまい」 ㊁世才ありて、巧みに立ちまはること。敏捷。

利口な猿は手を燒く【句】智慧を誇る者は、却りて災に遭ふ。(諺語)

りーこう 離鴻【名】こがん(孤雁)に同じ。

りーこうしやう 李鴻章【名】〔人〕支那清末の大官。字は、少荃、晩年、儀叟と號す。安徽省合肥縣の人。曾國藩に知られ、累官して、文華殿大學士一等肅毅伯・直隸總督となり、北洋大臣を兼ぬ。曾國藩に次ぐ近世の大政治家にして、我國と、韓國の事に關して、天津條約を結び、後、日清戰役を開き、又、その講和大使として、馬關に來り、遂にわが全權大使の伊藤博文・陸奥宗光と共に、馬關條約を結べり。光緒二十七年卒す。年七十九。一等侯爵を贈らる。

りこう-もの 利口者【名】㊀利口㊁の人。りはつもの。 ㊁利口ならぬ人を、わざと反對にいふ語。

りこう-もんたい 李公問對【名】〔書〕たいそうもんたい(太宗問對)に同じ。

りーこく 理國【名】ちこく(治國)に同じ。

りこ-しん 利己心【名】利己の心。

りこ-しゆぎ 利己主義【名】〔哲〕㊀『英 Egoism』行爲の目的を、自己を中心として說く倫理說。自己の保存又は主張を中心とするものと、自己の快樂增進を中心とするものとあり。自利主義。自己主義。愛己主義。自我主義。自愛主義。主我主義。(利他主義に對して) ㊁他人の迷惑を顧みず、我儘勝手に行動すること。

りこ-せつ 利己說【名】〔哲〕前條に同じ。(利他說に對して)

りーこん 利根【名】㊀〔佛〕『法華經の方便品に「有二佛子、心淨柔軟、亦利根」とあり』鋭敏なる機根。(鈍根に對して) 盛衰記「利根・聰明にして、有驗(シルシ)、世に勝れたり」 ㊁りこう(利口)㊁に同じ。 曾根崎心中「さのみ利根は言はぬもの」

りーこん 離恨【名】わかれのうらみ。別離に際する遺憾。離愁。離思。

りーこん 離魂【名】人の、睡夢中に體を離れたる魂。

りーこん 離婚【名】㊀夫婦の間の離緣。ふうふわかれ。めをとわかれ。離緣。 ㊁〔法〕婚姻後、死亡以外に發生したる原因によりて、夫婦關係を將來にわたりて消滅せしむる法律行爲。

協議上の離婚【句】〔法〕夫婦の協議によりてなす離婚。(「裁判上の離婚」に對して)

裁判上の離婚【句】〔法〕夫婦の一方が、裁判所に訴訟を提起し、その判決によりてなす離婚。訴訟の提起は、妻が重婚又は姦通をなしたる時等の場合に許さる。(協議上の離婚に對して)

りこん-さう 利根草【名】〔植〕たて(蓼)の異稱。(鈍根草に對して) 狂言(どこんさう)「阿難と申するは、智慧第一の佛……、その塚から、蓼一本生え出る。即ち、これをば利根草に附けられて」

りこん-びやう 離魂病【名】㊀一人の身體、二つに分れて、各自別別に行動することある病なりといふもの。 蘆花遺滿大内鑑「離魂病といふ病あり。俗には影(ヤ)の煩といひ、形を二つに分くるといへども、それも、一つ軒をば離れず、時時形を合はすといへば」 ㊁〔醫〕『英 Somnambulism』精神病の一。睡眠中、我知らず、床を出でて、ここ・かしこを彷徨するもの。夢遊病。

りーさい 吏才【名】官吏たる才能。

りーさい 里宰【名】むらをさ。なぬし。庄屋。里長。

りーさい 罹災【名】災にかかること。殃に「あふこと。

りーざい 理財【名】貨財を整理して、有利なる結果を得るやうにすること。經濟。

りざい-か 理財家【名】理財に長じたる人。經濟家。

りざい-かく 理財學【名】㊀けいざいがく(經濟學)に同じ。 ㊁さいせいがく(財政學)に同じ。

りさい-きうじよ-ききん 罹災救助基金【名】各府縣にて、管下の人民の多數が、同一事件のために、災害に罹りたる時の救助の準備として、貯蓄したる資金。

りざい-きよく 理財局【名】大藏省内の一局。國費の運用・出納、國庫の出納管理、貨幣・金庫の監督、一般金融・國債・罹災救助基金・預金・保管物及び供託物、諸祿の給與、府縣郡市町村その他公共組合の公債の事務を掌る所。

りさい-しや 罹災者【名】災害に罹たり「る人。

りさい-ち 罹災地【名】災害に罹りたる土地。

りさい-みん 罹災民【名】災害に罹りたる人民。

りーさう 理想【名】㊀〔哲〕『英 Idea』自己の理性によりて想像し得る最高の狀態、即ち不滿足の點なく、完全と認むる絕對的概念。客觀的に妥當する規範。現實の發展・到達すべしと考ふる終局の狀態。精神活動の種類なる眞(科學・哲學)・善(倫理)・美(藝術)・聖(宗教)、共に、それぞれ理想あり。 ㊁自己の最も好み欲する事物。一生かけての望。

りーさう 離騷【名】㊀『離は遭、騷は憂の義』憂に遇ふこと。 ㊁〔文〕支那楚の屈原の作りし賦。楚辭の起源を開きしもの。

りーさう 履霜の戒【句】『易經の坤卦に「履霜堅冰至」とあるに本づく』災害の來らざる以前に、戒心すること。

りさう-きやう 理想鄕【名】現實には存在せず。單に思考上に、理想的の完全なる鄕土。ゆうさびや參照。

りさう-くわ 理想化【名】〔哲〕『英 Idealization』缺陷多くして、不完全なる現實界を、想像作用にて、適宜に抽象・變更し、以て完全・圓滿なる理想的狀態に化成すること。醇化。想化。思想化。美化。

りさう-ぐわ 理想畫【名】筆者の理想を描き出したる繪畫。題材を現實より求めずして、作者の理想に存するものを取り扱ひ、又は現實を題材としても、これを理想化したる繪畫。

りさう-くわへい 理想貨幣【名】〔經〕實質を具へざる貨幣。例へば、勘定貨幣・不換紙幣など。

りさう-けい 離騷經【名】〔文〕りさう(離騷)㊁に同じ。

りさう-しゆぎ 理想主義【名】〔哲〕㊀『英 Idealism』一切の行動の制約、諸般の事象の說明に、すべて理想を標準とする主義。ぷらとおん主義。 ㊁〔文〕作者の胸中に蓄ふる或標準を以て、題材に取捨・按排を加へて表出せんとする主義。(寫實主義に對して)

りさう-せうせつ 理想小說【名】〔文〕『英 Ideal novel』理想主義の表出法に依れる小說。くわんねんせうせつ(觀念小說)參照。

りさう-てき 理想的【名】事物の狀態の、理想に合致せること。

りさう-は 理想派【名】〔哲〕『英 Idealism』理想主義により立つ一派。(現實派に對して)

りーさうめい 李滄溟【名】〔人〕りはんりよう(李攀龍)に同じ。

りさう-りう 離想流【名】槍術の一派。石野傳一氏利(慶安頃の人)を祖とす。

りーさげ 利下【名】利率を低下すること。(利上に對して)

りーさつ 利札【名】無記名の公債證書・債券などの利子を受け取る證となすもの。證書債券に接續して、その一部をなす。

りーさん 離散【名】はなれ散ること。ちりぢり・はなればなれになること。散離。

りーざん 離山【名】㊀こざん(孤山)に同じ。盛衰記「一つの離山あり、峰高うして、谷深し」 ㊁僧の、寺を出で離るること。盛衰記「大衆離山して、今は、人無き峯に成りはてて」

りーざん 驪山【名】〔地〕支那陝西(セイ)省西安府臨潼縣にある山。古來、溫泉を以て名高く、秦の始皇は、ここに遊びて、瘡を療し、唐の玄宗皇帝は、ここに華淸宮を營みて、楊貴妃等に浴を賜へり。

驪山の契【句】驪山宮に於ける玄宗と楊貴妃の契。 風俗文選(百鳥譜)「楚臺の夢は、一夜の枕に驚き、驪山の契は、萬里の雲を隔つ」

りざん-きゆう 驪山宮【名】くわせいきゆう(華淸宮)に同じ。 唐物語「唐の玄宗と申す帝(ミカド)……、驪山宮に行幸したまひては、

霓裳羽衣の舞を奏せさせたまふ」

りし 利子【名】**りそく**(利息)に同じ。

りし 利使【名】〔佛〕快利にして、常に心を驅使する煩惱。身見使・邊見使・邪見使・見取使・戒取使の別あり。

りし 律師【名】**りっし**(律師)の轉。〔古語〕落葉「阿闍梨(アザ)・りしなど、いとやんごとなき人多くて」 源氏「故母御息所の御せうとのりしの籠り給へる坊にて」

りし 離思【名】わかるる思。離愁。離恨。

りし 李四【名】**一**すももは、植ゑて後、四年目に果實を結ぶこと。**二**ちやうさんりし(張三李四)を見よ。

りし 李斯【名】〔人〕支那秦の丞相。荀卿に從ひて、帝王の術を學び、秦の客卿となり、始皇帝を佐けて、天下を一統し、丞相を拜す。苛法を布き、天下の書を焚き、儒者を坑にし、一世の怨府たり。後、咸陽の市に腰斬せられたり。

りじ 理事【名】**一**擔任せる事務を處理する事、又その役。**二**〔法〕人、その他の社團又は財團の代表機關、即ちそれを代表して、その一切の業務の執行に任ずる者。日本銀行理事・勸業銀行理事など、これなり。**三**陸軍法官部の高等文官の一。判士と共に、軍法會議の一員となりて、豫審をなし、又、會議に列席して、その意見書を說明し、判決書に署名・捺印するを、主たる職務とするもの。場合によりては、判士長を代表することあり。海軍軍法會議に於ける主理に該當す。**四**鐵道院・製鐵所などの高等官の一。上官の命を承けて、部局の事務の掌理に任ずるもの。**五**〔佛〕じり(事理)**三**に同じ。

りじ 吏事【名】官吏としての事務。

りじ 俚耳・里耳【名】教育なき人の聽覺。俗耳。

りじ 俚辭【名】**りげん**(俚言)に同じ。

りじ 李耳【名】〔人〕**らうたん**(老聃)に同じ。

りしう 李愁【名】離別のかなしみ。離恨。「恨。離思。

りしうむ (英 Lithium)【名】〔化〕**りちうむ**に同じ。

りじくわん 理事官【名】**一**明治四年十月設けられ、特命全權大使に隨伴して、歐米各國に赴き、我國に適用すべき、各國の美事・良法の分擔・研究に任ぜし職。**二**海員審判所の職員の一。審判に付すべき事實に關する證憑の集取・臨檢及び審査開始の申立をなし、且つ審判に立ち會ひて、意見を陳述するを得る奏任官。**三**明治三十八年十二月より、日韓合邦の時に至るまで、韓國須要の地に駐劄し、統監の指揮・監督の下に、從來韓國在勤領事に屬せし事務及び條約・法令に基きて、その執行すべき事務を管掌せし奏任官。**四**北海道廳及び樺太廳の職員の一。上官の命を承けて、事務の分掌に任ずる奏任官。

りじしほ 理事試補【名】陸軍省又は陸軍軍法會議にて、將來理事たるに必要なる實務の修習を命ぜられたる、奏任待遇の陸軍文官。登用試驗に合格せる者、又は、司法官試補たる資格を有する者より採用し、一年半以上實務に服したる後、理事に任ぜらる。

りじちやう 理事廳【名】理事官**三**の、職務を執行せし官廳。

りじちやうれい 理事廳令【名】理事官**三**の、その管轄區域内に發せし行政命令。

りしつ 利疾【名】するどきこと。ときこと。

りしつ 痢疾【名】大腸疾患により、裏急後重を呈する病。風俗文選(去來祿)「同じ痢疾の病を受けて、共に終を取れり」

りしふ 俚習【名】**りぞく**(俚俗)に同じ。

りじつ 離日【名】〔天〕惑星の視運動にて、太陽と最も遠ざかりて見ゆる時の角距離。「に同じ。

りしぶあひ 利子歩合【名】**りりつ**(利率)

りしん 履新【名】新年。元日。履端。

りじん 里人【名】村の人。さとびと。村人。

りじん 吏人【名】やくにん。官吏。

りじん 利刃【名】切味(キレ)のよいやいば。鋭利なる刃物。利器。利兵。

りしん-けう 理神教【名】〔哲〕『獨 Vernunftreligion』**しぜんしんろん**(自然神論)に同じ。

りしんさ 離心差【名】〔數〕『英 Eccentricity of graduated circle』分度環の中心と廻轉軸の中心とが、いかに精巧なる測器にても、完全に一致すること能はざるによりて生ずる、測度の誤差。

りしん-ぶんりき 離心分離機【名】**ゑんしんぶんりき**(遠心分離機)に同じ。

りしん-りつ 離心率【名】〔數〕『英 Eccentricity』圓錐曲線の焦點の中心よりの距離と、その長半經との比。拋物線にありては、一に等しく、楕圓にては、一より小く、雙曲線にては、一より大なり。楕圓率。楕率。

りしん-りよく 離心力【名】〔理〕**ゑんしんりよく**(遠心力)に同じ。

りしん-ろん 理神論【名】〔哲〕**しぜんしんろん**(自然神論)に同じ。

りしめい 李紫溟【名】〔人〕儒者。名は順、字は子友。肥後國熊本の人。博學宏識にして、藩の儒員となる。朱子の學を究め、詩を能くし、又、國學に通ず。文化六年歿す。年七十六。

りしやう 離生【名】〔佛〕生死(シヤウジ)を離るること。解脫(ゲダツ)。

りしやう 理性【名】〔佛〕終始改まることなき本具の理體。萬有の根柢。

りしやう 理障【名】〔佛〕**にしやう**(二障)を見よ。

りしやう 利生【名】〔佛〕衆生(シユジヤウ)に利益(リヤク)を與ふること。佛のめぐみ。冥加(ミヤウガ)。 夫木「後の世に彌陀の利生をかぶらずばあなあさましや月の鼠や」 太平記「榎島(ヱノシマ)の辯才天の御利生」

りしやういん 李商隱【名】〔人〕支那晚唐の詩人。字は義山、玉溪子と號す。懷州の河内の人。累官して、檢校工部員外郎となる。詩文を善くし、尤も律詩に長じ、咏史に精しく、怪譎を以て一格をなし、西崑體と稱せられ、溫庭筠と名を齊しくす。大中十二年死す。年四十六。李義山集・雜纂等の著あり。

りしやう-はうべん 利生方便【名】〔佛〕利生の効果を發揮する、佛の方便。 著聞「命生きにけり。これ、件の觀音の利生方便なり」

りしやうゐん-りう 理性院流【名】〔佛〕眞言宗古義派の内、醍醐三流の一。賢覺理性房を祖とし、山城國宇治郡理性院を本寺とするもの。

りしやう-なさこ 利生男【名】利生を蒙りたる男。冥加(ミヤウガ)なる男。幸運なる男。新水代藏「天道の利生男」

りしゆ 理趣【名】**りち**(理致)に同じ。

りしゆ 離酒【名】離宴に酌む酒。

りしゆ 驪珠【名】驪龍の頷下にありといふ珠。すぐたる珠。

りしゆ 離朱【名】〔人〕古、支那にて、視力のすぐれたるによりて有名なりし人。離婁。

離朱の明【句】『愼子に「愼子曰、離朱之明、察二毫末於百步之外一、下レ水尺、不レ能レ見二淺深一、非二目不レ明、其勢難レ視也」とあり』視力のすぐれたること。離婁の明。 續古事記「離朱之明、不レ能レ視二睫上之塵一、仲尼之智、不レ能レ知二篋中之物一」とて」

りしゆきやう 理趣經【名】〔書〕眞言宗にて、朝夕讀誦する經典。十七章より成り、金剛頂十八會中の第六會の理趣を開說し、初章に二曼荼羅、その他の諸章に、各一曼陀羅を說けり。不空三藏の飜譯に係り、題號に二種あり。初號は大樂金剛不空眞實三昧耶敎、次の題は般若波羅密多理趣品。古來略して、單に理趣經と呼び來れり。「執り行ふ方法。

りじゆつ 吏術【名】官吏として、職務を

りじゆん 利潤【名】**一**まうけ。とく。利益。利得。利澤。**二**〔經〕『英 Profits』企業家の、その企業によりて得る利益。 太平記「利潤を先として、常に非法を行ふ」

りしよ 鯉書【名】**さうり**(雙鯉)に同じ。

りしよ 離書【名】**りえんじやう**(離緣狀)に同じ。「を見よ。

りしよう 理證【名】〔佛〕**にしよう**(二證)

りしよく 利殖【名】利子又は利益を得て、財産の漸次增殖すること。利倍。

りしり 利尻【名】〔地〕北見國八郡の一。

りしり-かにつり 利尻桐花【名】〔植〕禾本科に屬する草。高さ約二尺、葉は二縱列に排列し、狹長にして尖り、莖葉共に軟毛を具へ、花は、小穗狀花序に排列せるもの、多數集まりて、更に穗狀花序に似たる圓錐花序をなす。北海道利尻島及び信濃の山地等に自生す。

りしり-とんぶ 利尻昆布【名】〔植〕褐藻類に屬する海藻。昆布類の一。長さ五尺乃至九尺、幅五寸乃至一尺を普通とし、大なるは六尋乃至九尋に及ぶ。莖短くして、平滑となり、上部は扁平・闊大にして、葉と連續し、葉は線狀倒披針形又は線狀紡錘形にして、全緣、中帶部は厚く闊く、兩緣は薄く、且つ少しく捲縮せり。革質・柔靱、粘液に富み、成熟すれば、黑褐色を呈するに至る。北海道石狩北見等の海中、暖潮の末流の寒潮に混ずる所に產す。中にも、天鹽の產最も優れ、鬼鹿(シオカ)以北、その本場たり。効用は、ほぼ眞昆布(シマブ)に同じ。くろこんぶ。しほこんぶ。だしこんぶ。てしほこんぶ。びろおどこんぶ。ほそめこんぶ。めなしこんぶ。

りしり-しのぶ 利尻荵【名】〔植〕水龍骨(ハナヤシ)科に屬する多年生の草。葉は、地下の塊狀なる根莖より叢生し、その形、大體に於て、荵のに似たれども、小裂片はやや大きく、各裂片の緣邊に、子囊群を生ず。

りしり-たう 利尻島【名】〔地〕北海道北見國に屬する島。天鹽北見の國境を西に距ること八海里の日本海中にあり。周回十八里二十町、全部火山より成り、又、行政上、一郡を成して、利尻郡といふ。

りしり-やま 利尻山【名】〔地〕北海道北見國にありて、利尻島を作れる休火山。高さ五六〇〇尺。形富士山に似たるより、北見富士の名あり。

り-す 栗鼠【名】〔動〕『栗鼠の字の宋音』嚙齧類に屬する獸。形、鼠に似て、體長一尺二三寸、頭部圓く、耳殼直立し、口吻の突出著しからずして、上下共に二箇の銳き門齒あり。毛色は、上面濃灰色、下面白色、尾太く長くして、黑褐色の毛密生し、靜止せる時は、常にこれを背上に負ふ。森林中の樹木の高所に球形の巢を構へて、晝は潛伏し、夜出でて、果實を食す。性よく樹上を走る。きねずみ。

(す り)

りす 利す【動佐變自】利益を得。便益を得。ためになる。

りす 利す【動佐變他】一利益を與ふ。便益を與ふ。ためになるやうにす。二利用す。應用す。

りす 痢す【動佐變自】腹くだる。下痢す。今昔「酸き酒の濁りたるに、牽牛子(ケンゴシ)をすり入れて飲ませば、りせずしてあらん」「のり。里程。

り-すう 里數【名】道程の里の數。みち

りずむ (英 Rhythm)【名】〔音〕聲音又は形式の變化の、規律ありて、人に美的情緒を起さしむるもの。異なる運動の列の、統一せられて、一定の錯綜をなすに依る。律動。節奏。韻律。音律。韻節。

りすりん【名】〔化〕ぐりせりん(佛里說林)の略記。

りすね 利水【名】水を、よく流通せしむること。水利をよくすること。

りすねざい 利水劑【名】りねうざい(利尿劑)に同じ。

り-せい 里正【名】一支那唐代の里(リ)の頭。二りちやう(里長)に同じ。

り-せい 理性【名】〔哲〕『英 Reason』判斷・推理等の作用の根本となる精神上の力。思考上の完全なる最高概念を構成する能力。人類と他の動物との差は、これを有すると否とにありと信ぜらる。但し、理性が先天的に具はれるものなりや、經驗を重ぬる間に漸次に、發達せるものなりやの問題に關しては、諸家の說一定せず。

り-せい 理勢【名】道理上の形勢。自然のいきほひ。

り-せい 吏生【名】年若き下級の官吏。

り-せい 理世【名】ちせい(治世)に同じ。正統記「一道を受け、一藝にも携はらん人、本を明め、理を悟る志あらば、これより理世の要ともなり」

り-せい 理政【名】ちせい(治政)に同じ。盛衰記「百王之理政」

り-せい 利世【名】世の中に利益を與ふること。「良。

り-せい 釐正【名】をさめ正すこと。改

り-せい 犁星【名】さん(參)に同じ。

り-せいおう 李昱應【名】〔人〕たいゐんくん(大院君)に同じ。

り-せい-くわんねん 理性觀念【名】〔哲〕りねん(理念)に同じ。

り-せい-けう 理性敎【名】〔哲〕りしんろん(理神論)に同じ。

り-せい-し 理正司【名】『だいり(大理)』を見よ』だいはんじ(大判事)の唐名。

り-せい-せつ 理性說【名】〔哲〕りせいろん(理性論)に同じ。

り-せい-てき 理性的【名】『英 Ideal』感情に走らず、理性にもとづきて、行動言說すること。「人類の異稱。

りせいてき-どうぶつ 理性的動物【名】

りせい-はふ 理性法【名】〔法〕しぜんはふ(自然法)に同じ。

り-せいれん 李青蓮【名】〔人〕りたいはく(李太白)に同じ。「(純理論)に同じ。

りせい-ろん 理性論【名】〔哲〕じゅんりろん

り-せう 離礁【名】暗礁に乘り上げたる船艦の、其處(ソコ)を離れて浮き上ること。

りせえ (佛 Liége)【名】『アリストオトル(Aristotle)が、アレキサンダア大王の敎師を辭し、アゼンス(Athens)に來り、學校を設けて敎育に從事せし土地の名 Apollo Lyceios に本づき、中世時代には、アリストオトル派の哲學を敎ふる所の名稱となり、近世に至りて、更に轉用せらるるに至りしもの。佛蘭西以外の國にても、同一起源の語を、他の種類の學校の名稱に用ふ』佛蘭西の中等學校中、程度高きもの。

り-せうけい 李少卿【名】〔人〕りりよう(李陵)に同じ。

り-せき 離析【名】はなれ分るること。

り-せき 離籍【名】〔法〕戶主が、その家族中、己の同意を得ずして、婚姻又は養子緣組をなしたる者、或は、成年以上にして、その指定せる場所に居所を轉ずべき催告に應ぜざる者を、家族以外に放逐すること、即ち戶主の戶籍より除くこと。勘當。

り-せつ 籬雪【名】まがきに積れる雪。

り-せつ 梨雪【名】梨の花を、雪に見立てていふ語。

り-せつ 離接【名】離るることと、接續すること。「條に同じ。

りせつ 離絕【名】夫婦・兄弟等の關係を絕つこと。義絕。

りせつ-だんてい 離接斷定【名】〔哲〕次

りせつ-はんだん 離接判斷【名】〔哲〕せんげてきはんだん(選言的判斷)に同じ。

りせつ-めいだい 離接命題【名】〔哲〕せんげめいだい(選言命題)に同じ。

りせつ-ろんぱふ 離接論法【名】〔哲〕せんげてきろんぱふ(選言的推論式)に同じ。

り-せん 利錢【名】利息のぜに。利金。利息。東鑑「出拳利錢」

り-せん 履踐【名】りかう(履行)に同じ。

りせん-きご 理先氣後【句】宋儒の說にて、理氣の內、理は先に生じ、氣は理により、後に生ずといふこと。されど、二者相待ちて、宇宙の構造を維持するものにて、理無ければ氣無く、氣無ければ理無しと說き、二者の根本を太極と呼ぶ。これに反對して、氣先理後の說を唱へたる者もあり。

りぜん-ふく 離染服【名】〔佛〕『煩惱(ボン)の染汚より離れ遠ざかる衣服の義』りちんふく(離塵服)に同じ。

り-そ 鯉素【名】『鯉魚・尺素(セキ)の略』さうり(雙鯉)に同じ。

り-そ 理訴【名】道理にかなひたる訴訟。盛衰記「理訴を、權威に抑され」太平記「山

門は、理訴も疲れて、款狀徒に積り」

りそ 履詐【名】天皇の、位を繼ぎたまふこと。踐祚。

りそうかう 里僧綱【名】〔佛〕せけんそうかう(世間僧綱)に同じ。

りぞおる (獨Lysol)【名】フエノル類のアルカリ化合體に脂肪石鹼と樹脂石鹼とを混じたる、褐色・油狀の液。沸騰點二百度附近のタアル油に、脂肪及び樹脂を混じたるを、苛性曹達と共に煮沸して製し、防腐消毒の目的の藥として用ふ。クレゾオル石鹼液と同種のものなれば、兩者互に代用するを得。

りそく 利息・利足【名】貸借の元金に對する報酬として、借主が、貸主に支拂ふ金。りあひ。利子。利。金利。息利。子錢。利金。「利足は、一分半の手形を極め」

利息の計算【句】〔數〕利息を算出する方法。即ち 元金×期間×率=利息。元金合計−元金=利息。

契約上の利息【句】〔法〕やくぢやうりそく(約定利息)に同じ。

法律上の利息【句】〔法〕はふていりそく(法定利息)に同じ。

りそく 理卽【名】〔佛〕『理は理性(ヤウシ)、卽は相卽(ソウ)きて離れぬ義』天台宗にて、圓敎修道の階位を六等に分ちて、六卽と呼ぶものの最下位。佛性一切の衆生(ヤウジ)の具ふる所なるにかかはらず、未だ菩提の道を聞かざるがために、これを知らざれども、實質に於て、その身そのまま、六卽中の最高位なる究竟卽(クウキヤウ)、即ち佛果・妙覺と不二なること。徒然「貧富分く所なし。究竟(クウキヤウ)は理卽にひとし」

りぞく 里俗【名】地方の風習。里のならはし。

りぞく 俚俗【名】いやしきこと。高尙ならぬこと。鄙俗。野卑。

りぞく 利鏃【名】鋭利なるやじり。

りそく-けいやく 利息契約【名】〔法〕金錢の貸借につきて、利息又はそれと同樣の給付を受くべき契約。

りそくざん 利息算【名】利息に關する數、即ち利息、貸金の期間、利率・元金等の算出法。「利息の計算」參照。

りそく-せいげん-はふ 利息制限法【名】一定の利率以上に高き利息を取り得ざるやうに制限せる法律。百圓までの元金に對しては年二割、百圓以上千圓までは年一割五歩、千圓以上なれば、一割二分などの如き、これなり。

りそつ 吏卒【名】下役の人。小役人。下「更。小吏。

りた 利他【名】一他人を利すること。二〔佛〕自利を得たる人が、更に他人を濟度すること。覺他。化他(クワ)。敎化(ケウ)。(自利に對して)にり(二利)參照。

りたい 理體【名】一〔佛〕萬有の本體。物體を理性(ヤウ)の方面より考へたるもの。二〔哲〕ろじすに同じ。

りだい 里內【名】さざだいり(里內裏)に同じ。禁祕抄「內裏燒亡、必有二廢朝、但里內或有二廢朝一」

りたいはく 李太白【名】〔人〕りはく(李白)に同じ。

りたいはく-しふ 李太白集【名】〔書〕李白の詩集。四卷。「を見よ。

りたいわう 李太王【名】りわうけ(李王家)

りたう 利刀【名】一するどきかたな。鋭利なる刀。利刃。二『りは、形、假名の「り」に似るよりいふ』りったう(立刀)の誤。

りたう 吏黨【名】官吏側に贊成する黨派。政府黨。(民黨に對して)

りたう 李唐【名】『唐の高祖の姓李なるよりいふ』唐(タウ)一の朝廷。唐朝。

りだう 里道【名】國道・縣道以外の、公有の道路。その中、數區の地を貫通し、もしくは、某區の地より他の某區の地に通ずるものを、一等とし、用水・堤防・牧畜・鑛山・製造所などのために、その地域の人民の協議により、特別に開設するものを、二等とし、社寺及び耕耘のために設くるを三等とする。

りだう 利導【名】有利に導くこと。

りたう-しんち-しんたう 理當心地神道【名】主として、儒者の唱導せし一派の神道。

りたく 利澤【名】りじゅん(利潤)に同じ。

りたし-しゆぎ 利他主義【名】〔哲〕『英Altruism』倫理上、他人の幸福中に、自己の幸福が存すとして、他人の幸福を增すを以て、我行爲の標準とする主義。佛蘭西の哲學者コント(Comte)、初めてこれを唱ふ。愛他主義。他愛主義。(利己主義に對して)「(利己說に對して)

りたせつ 利他說【名】〔哲〕前條に同じ。

りたつ 利達【名】身分のよくなること。出世。榮達。

りたん 履端【名】りしん(履新)に同じ。

りだん 離檀・離旦【名】寺院が、その檀家との關係を離るること。りはい(離配)りまつ(離末)參照。〔德川時代の語〕

りだん 利團【名】互に、その利益を異にせる各職業者の團體。

りだん-だいへう-はふ 利團代表法【名】〔法〕議員選出法の一。各利團より、その代表者若干を選出せしむること。

りち 律【名】りつ(律)に同じ。〔古語〕拾遺「りちの歌に琴の音(ネ)あへる夕まぐれ片絲靡く庭の青柳」

りち 理智【名】一理解力と智慧と。二〔佛〕所觀の道理と、能觀の智慧と。眞如の理と、これを悟る智慧と。

りち 理致【名】一道理と旨趣と。事のわけ。理趣。東鑑「相二叶理致一」二〔佛〕禪宗にて、宗匠の、經論の道理を開示して、これを導くこと。

りち 利智【名】心鋭く、智慧明かなること。利根にして、智慧あること。花生要集「利智精進之人、未爲難」

りち 吏治【名】官吏の治めかた。官治。

りちうむ (獨Lithium)【名】〔化〕銀白色の光澤を有するアルカリ金屬元素。比重〇、五三四にして、金屬中最も輕く、水に入るる時は、これを分解して、水素を發生すること、ナトリウム・カリウムと同一なれども、その作用緩かなり。この金屬及びその化合物は、無色の焰に深赤色を帶びしむる特色を有す。りしうむ。

りぢ 律儀【名】一〔佛〕戒律と儀則。又、戒律を持し、儀則を愼み守り、一切の惡を爲さざること。二義理をよく守ること。義理堅きこと。方正。正直。實直。一代女「律義千萬な顏つきをして」諸國はなし「貸傘二十本……日和の時律義に返して」三健康。丈夫。堅固。壽の門松「御律義で重疊重疊」

律儀全(タ)い【句】完全に律儀なり。正直なる點に缺くる所なし。長町女腹切「律義またい半七」

律儀全(タッ)う【句】完全に律儀なること。正直なる點に缺くる所なきこと。浮世風呂「正直で、律義またうな人」

律儀まっぱう【句】『前條の訛か』前條に同じ。

りぢぎ-もの 律儀者・律義者【名】りぢぎなる人。正直なる人。

律儀者の子澤山【句】律儀なる人には、子供多く生る。〔諺語〕

りぢん-え 離塵衣【名】〔佛〕『六塵を離れ遠ざかる衣服の義』けさ(袈裟)の異名。

りぢん-ふく 離塵服【名】前條に同じ。

りちやう 里長【名】一村のをさ。なぬし。庄屋。里宰。二大寶令の制度にて、里(リ)三の頭として、戶口の檢校・農桑の課殖、非違の禁察、賦役の催告等を掌りし職。さとをさ。里正。

りちやう 履長【名】『藏華紀麗の註に「冬至、律中二黃鐘一、其管最長、故有二履長之賀一」とあり。履は履(リ)み迎ふる義』さうじ(冬至)に同じ。「賀」に同じ。

りちやうきつ 李長吉【名】〔人〕りが(李賀)に同じ。

りぢゆう 離住【名】離れて住むこと。

りちゆう-てんわう 履仲天皇【名】〔人〕第十七代の天皇。御名は去來穗別(タイゲホ)。仁德天皇第一の皇子。母は磐之媛(ヒメノ)命。在位六年(元紀一〇六〇—年一〇六五年。即位の六年三月十五日崩ず。壽六十四。(一說に七十、或は七十九)。

りぢよ 里女【名】一むらざとの女。二遊里の女。遊女。傾城。女郎。

里女に戀無し【句】遊里の女は、實意なく、從ひて戀といふことなし。傾城に誠なし。〔諺語〕春花五大力「里女に戀なし。寶を以て戀とする」

りつ 律【名】一音樂・詩歌の調子。音律。韻律。二音樂の調子の中、陽に屬するもの。りち。**じふにてうし**(十二調子)參照。(呂に對して)三**りぞむ**に同じ。四おきて。規律。法律。五**りつりやうきやくしき**(律令格式)を見よ。六〔文〕『法律の律の義にて、法度の極めて森嚴なるよりいふ』支那の詩の一體。絶句と共に新體に屬し、八句より成り、第三・第四の二句と、第五・第六の二句とを、各、對句に作る。五言律と七言律とあり。又、宋以前は、六言なるもあり。別に排律(長律)といふもあり、その條を見よ。律詩。七〔佛〕『梵 Vinaya(鼻那夜・毘尼迦・毘尼)の譯語』**かいりつ**(戒律)に同じ。八〔佛〕**りつしゆう**(律宗)の略。

律國賊【句】**しかかくげん**(四個格言)を見よ。「ひ。

りつ 率【名】比較の數。わりあひ。ぶあ

りつ-あん 立案【名】一文書を作る前に、その草案を組み立つること。二したぐみを工夫すること。

りつ-い 立意【名】趣意を立つること。

りつ-え 律衣【名】〔佛〕『一一の制度、戒律に依れるよりいふ』小乘の戒律を守る人の著る壞色(エジ)の僧衣。僧綱に任ぜられたる者、即ち官僧は、これを著用せずして、官服即ち袍服を用ふることとなり、又禪宗渡來して、別に禪衣(ゼエ)も行はれ、緋衣(ヒエ)・紫衣(シエ)・黑衣(コエ)・金襴衣などの制も生ずるに至れり。(教衣・禪衣に對して)

りつ-か 立夏【名】**にじふしき**(二十四氣)を見よ。

りつ-が 律雅【名】音樂の調子の上品なること。太平記「律雅、調(ヂラ)冷(ヤサ)じく」同「曳曳融融たる律雅の御聲に」

りつ-かく 律格【名】**ゐんりつ**(韻律)に同じ。

りつ-がく 律學【名】一法制の學問。二〔佛〕戒律を講究すること。律宗の學問。

りつ-がくし 律學士【名】次條に同じ。拾芥抄「明法博士、二人。律學博士・律師・律學士」

りつがく-はかせ 律學博士【名】**みやうぼふはかせ**(明法博士)の唐名。曉原抄「明法博士二人。相當正七位下・唐名、律學博士」

りつ-ぎ 律儀【名】一『王褒の文に「永垂二四教、示二靡文之律儀」とあり』のり。模範。儀表。二〔佛〕**りちぎ**(律儀)一に同じ。盛衰記「上宮太子と申す人おはしき。吾薨去の後、二百年を過ぎて、必ず當國に律儀廣まるべし」

りつぎ-かい 律儀戒【名】〔佛〕**さんじゆじやうかい**(三聚淨戒)を見よ。「なひ。

りつ-ぎやう 律行【名】〔佛〕戒律のおこ

りつ-きやく 立脚【名】一脚を立つること。二地歩を占むること。立場を定むること。

りつきやく-ち 立脚地【名】立脚の地點。自己の位置せる場所。たちば。「じ。

りつきやく-てん 立脚點【名】前條に同

りつ-くん 立君【名】君主を立つること。

りつくん-せいぢ 立君政治【名】**くんしゆせいぢ**(君主政治)に同じ。

りつ-くわ 立花【名】大なる瓶に、花の枝を挿みて、山水の景色などを摸する技藝。たてばな。

りつくわ-くやう 立花供養【名】僧は、佛に奉るために、常に花を使ふものなるより、その花のために營む供養。謠曲(半部)「色よき花を集め、花の供養を取り行はばやと存じ候ふ。敬って白す、立花供養の事」

りつ-くわん 律管【名】**てうしぶえ**(調子笛)に同じ。

りつ-ぐわん 立願【名】**りふぐわん**(立願)に「同じ。

りつ-け 律家【名】〔佛〕律宗の宗派。醒睡笑「相撲の娼名寺といふ律家の寺あり」

りつ-けう 立教【名】教化の道を立て定むること。

りつ-げふ 律業【名】〔佛〕佛學を修業すること、又その人。

りつ-けん 立券【名】新たに庄園を立て設けたる證として渡す券(ケン)。百錬抄「新立庄園……立券不二分明一」「と。

りつ-けん 立憲【名】憲法を立て設くること。

りつ-げん 立言【名】『立の字の音、正しくはりふ』言論を立て定むること、又その言論。

りつけん-ぎやうせい 立憲行政【名】〔法〕立憲制度によりて行ふ行政。

りつつけん-きようわ-こく 立憲共和國【名】〔法〕立憲共和政體の國。

りつけん-きようわ-せいたい 立憲共和政體【名】〔法〕共和國にして、立憲政體なること。

りつけん-くんしゆ-こく 立憲君主國【名】〔法〕立憲君主政體の國。

りつけん-くんしゆ-せいたい 立憲君主政體【名】〔法〕君主國にして、立憲政體なること。

りつけん-こく 立憲國【名】立憲制度を採用せる國。立憲政體の國。立憲君主國と立憲共和國との二種に分つ。憲治國。**はふちこく**(法治國)參照。

りつけん-せい 立憲制【名】〔法〕**りつけんせいど**(立憲制度)に同じ。

りつけん-せいたい 立憲政體【名】〔法〕統治權を行使するに、立法・行政・司法三權の各獨立せる國家機關、殊に立法機關たる議會制度に依る國民の參與・協贊を經べき制限ある政體。立憲君主政體と立憲共和政體との二種に分つ。我國も、明治八年、この政體を採るべき詔を發せられ、同二十三年の憲法發布以來、その實施を見るに至れり。(專制政體に對して)

りつけん-せいぢ 立憲政治【名】立憲政體の政治。憲政。

りつけん-せいど 立憲制度【名】〔法〕立憲政治の制度。立憲制。

りつ-ご 律語【名】〔文〕音律的に綴りたる言語。リズムによりて結合したる文。韻文。律文。

りつ-ごう 立后【名】公式を以て、皇后宮と定めさせたまふこと。皇后を冊立すること。正統記「德子入内して、女御とす。即ち立后ありき」「じ。

りつ-こく 立國【名】**けんこく**(建國)に同

りつ-さう 律草【名】〔植〕一**かなむぐら**(金葎)の漢名。二**からはなさう**(唐花草)の漢名。

りつ-ざう 立像【名】『立の字の音、正しくはりふ』立てる姿の像。(坐像に對して)

りつ-ざう 律藏【名】〔佛〕『梵 Vinaya-pitaka の譯語』**さんざう**(三藏)一を見よ。

りつざん 栗山【名】〔人〕**しばのりつざん**(柴野栗山)を見よ。

りつ-し 律師【名】一〔佛〕『涅槃經の卷三に「如レ是能知二佛法所作、善能解說、是名二律師一」、律鈔解題に「佛言、善解二一字一名二律師一。一字者律字也」とあり』よく戒律を解する者。戒律の師範。持律の僧。二〔佛〕我國の僧官の一。僧綱の最下位なるもの、即ち僧都(ソウヅ)の次位。正(シヤウ)・權(ゴン)の二階級に分れ、その位は法橋(ホツケウ)上人位にして、光仁天皇の御代には、共に俗位の從五位に准ぜられ、桓武天皇の御代、五位に准ぜられたり。又、大律師・中律師等の別を立てしこともあれど、延曆十三年廢止せられたり。三**みやうぼふはかせ**(明法博士)に同じ。

りつ-し 律詩【名】〔文〕**りつ**(律)七に同じ。

りつ-し 立志【名】事業・學問等の志望を立て定むること。「を見よ。

りつ-しう 立秋【名】**にじふしき**(二十四氣)

りつ-しぜん 立志傳【名】事業・學問等の志望を立て定め、周圍の困難と鬪ひつつ、これを成し遂げたる人の傳記。又それを集めたる書籍。

りつ-しん 立身【名】世に用ひらるること。世に出づること。榮進。

りつしん-づく 立身盡【名】立身のためにのみすること。艶容劍本地「面面の立身づく、義理も仁義もいるものか」

りつしん-べん 立心偏【名】漢字の偏の一。「快」・「怖」・「恃」などの左傍にある忄(心字の變體)の字。

りっしや 堅者・立者【名】〔佛〕『堅の字の音はじゅなれども、この字を書きたる時も、古來りつと讀み來れり』興福寺・延暦寺などにて、大會の論議の際、堅義(ケン)をなす僧、又その儀式を勤めたる僧。平家「攝津の堅者豪雲、進み出て申されけるは」同「平等院には、因幡の堅者荒太夫」

りっしやう-あんこくろん 立正安國論【名】〔書〕日蓮上人が、正元・正嘉の頃の連年の天災を、淨土宗その他の諸宗の弘布に因れるものとして、文應元年作りて、執權北條時頼に獻じ、正法(ショウブ)は唯法華經に限る旨を論じたるもの。一卷。所言奇矯激越、これがために、伊豆國伊東に配流せられたり。別に、同時の作にして、語句僅かに多き廣本あり、これに對して、他を要本と呼ぶ。

りっしやう-だいし 立正大師【名】〔人〕**にちれん**(日蓮)を見よ。「石寺」に同じ。

りっしやく-じ 立石寺【名】**りふしやくじ**(立石寺)に同じ。

りっしゅう 律宗【名】〔佛〕佛教の八宗の一。戒律を守るを主とするもの。戒律は、佛教中の諸宗に、共通なれども、支那唐の南山大師道宣、殊に四分律に依りて、戒律を弘通せしに創まり、我國へは、天平勝寶六年、唐僧鑑眞來りて弘め、東大・招提(ショウダイ)の二寺を本處とす。南山大師、唯識(ユイシキ)を宗としながら、この四分律を弘め、大乘徒をして受持せしめんことを望めるものなるが故に、小乘の教なれども、又、深義の大乘に通ずる所、その特點なり。戒律宗。正統記「律宗は、大小に通ずるなり」

りっしつ 崒嵂【貌】山の嶮しく高きさま。

りっしゅん 立春【名】**にじふしき**(二十四

りっしよ 律書【名】おきてを書きてある書。「證明。

りっしよう 立證【名】證據を示すこと。

りつじよう 律乘【名】〔佛〕戒律の教法。

りっしよく 立食【名】■洋式の饗應に、飲食物を、大なる卓上に置きて、衆客の好に隨ひて、食ふに任すること。■立ちながら、食事をすること。たちぐひ。〔俚語〕

りっす 律す【動佐變他】法則に從はしむ

りっす 立す【動佐變他】自己の主張を確定す。斷定す。(破すに對して)

りっすね 立錐【名】錐を立つること。

立錐の地【句】『史記の留侯世家に「秦滅二六國一、後、使レ無二立錐之地一」、同書の淮南衡山傳に「陳勝吳廣無二立レ錐之地一、千人之衆、起二於大澤一」とあり』極めて狹き土地の形容。わづかの餘地。置錐。

りつ-ぜん 慄然【貌】おそれわななくさま。ぶるぶる。わなわな。

りっ-そう 律僧【名】〔佛〕■官僧以外の、律衣(エリ)著用の僧侶。沙石集「ある律僧世間になりて、子息あまたありけるなかに」■律宗の僧侶。庭訓往來「禪家者……。律僧者、長老・知事・典座・沙彌(シャミ)・八齋戒・人工(クン)・法師等也」

りっ-たい 立體【名】■水泳にて、水面と直角をなす體形。小堀流の得意とする所なり。(平體・横體に對して)■〔數〕『英Solid』空間の限られたる部分、即ち位置・長さ・厚さ・幅を具へ、その境界は面(ヅラ)なるもの。多面體・球(ギョウ)等は、その簡單なるものなり。

りっ-たい 律體【名】〔文〕律詩の體式。

りっ-たい-かく 立體角【名】〔數〕『英Solid angle』**ためんかく**(多面角)に同じ。

りっ-たい-きか 立體幾何【名】〔數〕次條の略。

りっ-たい-きかがく 立體幾何學【名】〔數〕『英Solid geometry』空間における點・直線・角・曲線・平面・曲面、又は、その集合より成る圖形に就きて論ずる科學。但し上文中の曲線が圓のみに限らるる時は、特に初等立體幾何學と稱す。(平面幾何學に對して)

りっ-たい-きやう 立體鏡【名】**じったいきやう**(實體鏡)に同じ。

りっ-たいし 立太子【名】公式を以て、皇太子と定めたまふこと。皇太子の册立。立坊。正統記「この御門立たせ給ふ。立太子も無くて、直ちに居させ給ふ」

りったい-せき 立體積【名】〔數〕**たいせき**(體積)に同じ。

りったい-てき 立體的【名】表面のみならず、内面にまで深く入り込みて觀察し、論議し、又は表現しなどすること。(平面的に對して)

りったい-は 立體派【名】〔美〕『英Cubism 佛Cubisme』一切の物象が體積の集合として現るるは、世界の實相にして、これ網膜以上の内的認識なりとの主張の下に、視覺又は網膜の映像に囚はれたる印象派後期印象派の光線本位・色彩本位を排し、體積感の表現に力むる、繪畫の一派。佛蘭西に起りて、ピカソ(Picasso)その創始者の一人として名高し。

りったい-び 立體美【名】〔美〕『英Solid beauty』立體の形象に現れたる美。彫刻の美の如き、これなり。(平面美に對して)

りっ-たう 立刀【名】漢字の旁(ボウ)の一。「利」・「創」・「劍」・「劉」等の右傍にある字。(刀の字の變體)

りつ-だん 立談【名】立ちながら話すこと。「だちに。

りっ-に 立地に【副】たちどころに。た

りっ-ちやう 立丁【名】課役に就く丁男。役立(チエ)の丁(ヨロ)。

りっ-ちゅう 立籌【名】數取(カズ)■をなすこと。「と。

りっ-ちよ 立儲【名】儲嗣を立て定むるこ

りつ-でう 律條【名】おきての箇條。法條。「を見よ。

りっ-とう 立冬【名】**にじふしき**(二十四氣)

りつ-どう 律動【名】■週期的の運動。規律に從ひて動くこと。一定時ごとに變換して動くこと。■**りずむ**に同じ。

りっとる 立(佛 Litre)【助數】メエトル法に於ける立體の單位。一立方デシメエトルにして、デカリットルの十分の一、デシリットルの十倍、我國從來の五合五勺四才三五に當る。

りっ-ぱ 立破【名】〔佛〕因明(インミヤウ)の法則に依りて、自己の眞義を成立せしめ、他の所論を說破すること。りふは。

りっ-ぱ 立派【名】■一派を立つること。甲陽軍鑑「一宗の立派」■『前項の轉義なりとも、前條の語の轉義なりともいふ』いかめしく、うるはしきこと。おごそかに見事なること。壯麗。たておんのじ。

りっ-ぱ 律派【名】〔佛〕戒律の流派。

りっ-ぱう 立方【名】〔數〕『英Cube』■**さんじよう**(三乘)■に同じ。(平方に對して)■**りっぽうたい**(立方體)の略。立方に開く【句】〔數〕立法根を算出す。開立(カイリツ)の算法を行ふ。

りっぱう-けい 立方形【名】〔數〕**りっぽうたい**(立方體)に同じ。

りっぱう-こん 立方根【名】〔數〕『英Cube root』**さんじようこん**(三乘根)に同じ。(平方根に對して)

りっぱうこん-すう 立方根數【名】〔數〕『英Cube surd』立方根の不盡數。即ち $\sqrt[3]{7}$ 又は $\sqrt[3]{a}$ など。

りっぱう-しき 立方式【名】〔數〕『英Cube expression』完全に、或式の立方に括り得る代數式。例へば、a_3-3a^2+3a-1 は $(a-1)^3$ に括り得るが故に立方式なる類。

りっぱう-じようよ 立方剩餘【名】〔數〕『英Cube surplus』非立方數より立方數を減じたる剩餘。例へば、$10=2^3+2=2.1^3+0.729=2.1^3+0.471872$ なるが故に、2, 0.729, 0.471872 等を10の立方剩餘といふ類。

りっぱう-すう 立方數【名】〔數〕『英Cube number』自然數 1, 2, 3 ……の立方冪なる 1, 8, 27 ……などの數。

りっぱう-たい 立方體【名】〔數〕『英Cube』多面體の一。六つの正方形にて圍まれたる立方體。正方形にて圍まれたる平行六面體。立方形。立方。

りっぱう-べき 立方冪【名】〔數〕**りっぱう**(立方)■に同じ。

りっぱ-ざうりとり 立派草履取【名】**つくりやつこ**(作奴)に同じ。

りっ-ぱふ 律法【名】■おきて。規則。法律。■〔佛〕戒律の法。

りっ-ぱふ 率法【名】率分の法。

りつ-ぱふ 立法【名】㊀法律を立て設くること。法を制定すること。㊁〔法〕廣義にては、法律命令の制定。狹義にては、法律のみの制定。通常は、後者を指す。立法上の解釋【句】〔法〕法令解釋の方法の一。法令を制定して、他の法令を解釋するか、又は法令の中に實例を掲ぐる等、立法者又は發令機關が、公に解釋するもの。(「司法上の解釋」に對して)

りつぱふ-か 立法家【名】**りつぱふしや**(立法者)㊀に同じ。

りつぱふ-かんとく 立法監督【名】〔法〕立法機關の行ふ財政監督。即ち豫算案の議定、決算の審査、課稅・起債の協贊など。

りつぱふ-きくわん 立法機關【名】〔法〕國家の立法に參與する機關、即ち帝國議會。立法府。「參與する官吏。

りつぱふ-くわん 立法官【名】〔法〕立法に

りつぱふ-けん 立法權【名】㊀〔法〕三權の一。國家の立法に關する統治權の作用。(行政權・司法權に對して)㊁帝國議會が立法の手續に參與する權限、即ちその法律案に對する協贊の權限。

りつぱふ-じかう 立法事項【名】〔法〕㊀法律にて定むるを得策とする政務の事項。㊁憲法の規定あるがために、法律にて定めざるべからざる政務の事項。

りつぱふ-しや 立法者【名】㊀法律を制定する人。立法家。㊁〔法〕法律を制定して、これを人民に命令する權力ある者、即ち主權者。

りつぱふ-ふ 立法府【名】**りつぱふきくわん**(立法機關)に同じ。「例。

りつぱふ-れい 立法例【名】立法上の先

りつぱふ-ろん 立法論【名】〔法〕法令の良否・得失につきての議論。(解釋論に對して)

りつ-ぶ 立部【名】**りつぶ**(立部)に同じ。

りつ-ぶく 立腹【名】はらだつこと。怒ること。腹立。

りつ-ぶん 律文【名】㊀おきての文句。法律の條文。㊁〔文〕**りつご**(律語)に同じ。

りつ-ぶん 率分【名】同種の二つの量の比較の割合。りちぶん。三代實錄「舊年未納率分之數」

りつぶん-ざう 率分藏【名】次條に同じ。

りつぶん-しよ 率分所【名】古、非常の用に供するため、大藏省㊁に收納せる調物の內、十分の二を分ちて貯藏せし倉。正藏院の東南隅に在りて、方四十丈、築垣(ツイヂ)を繞らし、四方に門を開き、職員に別當一人(辨官、これに任ぜらる)勾當一人(令外(リヤウゲ)の官にして、主計頭(カズ)・大藏輔・大監物(ダイケンモツ)等の兼任)あり。正藏(シヤウ)率分所。率分藏。率分堂。

りつぶん-だう 率分堂【名】前條に同じ。著聞「率分堂に草の繁るとは、諸國の貢物の參らぬ由なるべし」

りつ-べう 立標【名】『英 Beacon』航路標識の一。航路に接近せる暗礁・淺瀨・露岩などの地點、又はその附近に立てて、航海者に標示するもの。

りつ-ぼう 立鋒【名】鏃の形の一種。

りつ-づめ 理詰【名】**りくつづめ**(理窟詰)に同じ。

りつ-めい 立命【名】『孟子の盡心上篇に「殀壽不貳、修身以俟之、所以立命也」とあり。立の字の音、正しくは**りふ**』天命を全くして、これを害せぬこと。

り-づよ 理强【名】理窟を强く言ひ張ること。蜉蝣記「心猛く、理强におはしければ、廳務の時も、樣樣の事張り行ひて」

りつりん-とうゑん 栗林公園【名】**くりばやしこうゑん**(栗林公園)に同じ。「照。

りつ-りやう 律令【名】律と令と。次條參

りつ-りやう-きやく-しき 律令格式【名】支那唐代及びこれに倣へる我國中古に於ける法典の四種の總稱。令は、諸般の法令、式は、官職にある者の勤務の規定、律は、令と式とに背きたる者に對する刑罰、格は、律・令・式の三者の、時によりて、變更ありたるを集め、又は、その足らざるを補へるもの。我國のは、近江令・大寶令・大寶律・弘仁格・貞觀(ヂヤウグワン)格・延喜格・弘仁式・貞觀式・延喜式・內裏式・內裏儀式・交替式など、これなり。令と律との今に傳はれるは、大寶令・大寶律のみなるが故に、單に令律といへば、これを指す。

りつ-りよ 律呂【名】㊀律と呂と。呂律。㊁音樂の調子。呂律。

りつ-れい 律令【名】㊀刑律と法令と。の

り。おきて。法律。りつりやう。㊁〔法〕臺灣總督の、その管轄區域內に發する命令の內、臺灣の區域內に於てのみ法律㊂と同等の効力を有するもの。勅裁を請ひて發するを本則とし、臨時緊要を要する場合、この手續を經ずして發することを得れども、發布後、直ちに、直裁を請ふを要し、勅裁を得ざりし場合には、直ちに將來に向ひて、効力なき旨を公布するを要す。「おきて。法規。

りつ-れい 律例【名】㊀刑律の凡例。㊁

りつ-れい 立禮【名】『立の字の音、正しくは**りふ**』起立して行ふ敬禮。立てるままにておこなふ禮式。

りつ-れい-かく-しき 律令格式【名】**りつりやうきやくしき**(律令格式)を見よ。

りつ-れつ 慄烈【名】陰曆十二月の異稱。

りつ-れつ 慄烈・栗烈【貌】寒さのきびしきさま。

りつ-ろん 立論【名】議論の趣旨・順序を

りつろん-か 立論家【名】新聞又は雜誌にて、專ら論說の起草に當る記者。

りつ-ゐん 律院【名】律宗の寺院。(敎院・禪院に對して)太平記「一身を置くに安き所なかりしかば、此處の禪院、彼處の律院に一夜・二夜を明して」

りつ-をう 笠翁【名】〔人〕『笠の字の音、正しくは**りふ**』㊀**をがはりつをう**(小川笠翁)を見よ。㊁**りつをう**(李笠翁)を見よ。

りつをう-ざいく 笠翁細工【名】『笠の字の音、正しくは**りふ**』**はりつざいく**(破笠細工)に同じ。「程。

り-てい 里程【名】みちのり。里數。道

り-てい-へう 里程標【名】街道の傍などに立てたる、里程の遠近を記せる杙。

りてう 李朝【名】**りわうけ**(李王家)を見よ。

り-と 吏途【名】㊀官吏の仕途。吏務。㊁**りむ**(吏務)㊂に同じ。正統記「朝家に仕へ、政務にまじはる道をのみこそ學びはべれ、吏途の方にも習はず、武勇の藝にも拂はらぬ事なれば」

り-と 吏道・吏吐・吏讀(朝鮮 Rito)【名】朝鮮にて、漢字の音訓を借りて、朝鮮語を記すに用ひし文字。我國の萬葉假名の類。新羅の神文王の時、薛聰(セツソウ)の創意に出づと傳ふ。

り-と 李杜【名】〔人〕李白と杜甫と。李杜・韓柳【句】〔人〕李白と、杜甫と、韓愈と、柳宗元と。前の二人は詩に長じ、後の二人は文に長ず。四人共に、唐代文人の巨匠なり。

り-とく 利得【名】まうけ。利益。利分。得分。利潤。得利。

りとます 利篤謨斯(英 Litmus)【名】㊀リトマス苔の體中に含める色素。㊁〔化〕前項の色素より採取したる、紅紫色の染液。アルカリ液を加ふれば、青色に變じ、後、酸を加ふれば、赤色に變ず。

りとます-えき 利篤謨斯液【名】〔化〕前條㊁に同じ。

りとます-ごけ 利篤謨斯苔【名】〔植〕リトマス苔科に屬する地衣類。葉狀體は樹枝狀をなして、やや扁く、革質にして、淡青白色を呈し、所所に突隆せる繁殖器を具ふ。歐羅巴・亞弗利加・東印度及び南米・中央亞米利加・メキシコ海岸なる岩上に自生し、その體よりリトマスを採取す。

りとますごけ-くわ 利篤謨斯苔科【名】〔植〕隱花植物地衣類に屬する一科。植物體にリトマス㊀を含有す。凡そ十二屬・三十五種を含み、熱帶及び溫帶地方に產す。但し、我國にては、未だ發見せず。

りとます-し 利篤謨斯紙(英 Litmus paper)【名】〔化〕液の酸性なるかを知るに用ふる試驗紙。細き紙片を、リトマス㊁に浸して作る。青色なると赤色なるとあり。らくむす紙。

りさます-しげんし 利篤謨斯試驗紙【名】〔化〕前條に同じ。

り-どん 利鈍【名】㊀刃物の切味の鋭きこと、鈍きこと。㊁賢きこと、愚かなること。利根と鈍根と。賢愚。㊂運命の開くこと、塞がること。

りとわにや (英 Lithuania)【名】〔地〕歐羅巴洲の一王國。露西亞の西、波蘭(ポオランド)及び獨逸の東に位す。もと獨立國なりしが、西曆一七九五年露西亞に併せられ、歐洲大戰後、境域舊時に及ばざれども、また、獨立す。首府をビルナ(Vilna)といふ。

り-にん 離任【名】官吏の、一時、その任務より離るること。「賜暇離任」

り-ぬき 利抜【名】〔商〕利を抜くこと。〔取引所の語〕

り-ねう 利尿【名】小便の通じをよくすること。

りねう-ざい 利尿劑【名】利尿の目的を達するために用ふる藥劑。利水劑。

りねん (英 Linen)【名】**りんねる**に同じ。

り-ねん 理念【名】〔哲〕『獨 Idee 又 Vernunftidee』理性の判斷より得たる最高の概念。

り-のせ 利乘【名】〔商〕賣又は買によりて、利の乘りたる場合に、更にその賣玉(ウリダマ)又は買玉(カイダマ)を增すこと。かひのせ。〔取引所の語〕

り-のせ-うり 利乘賣【名】〔商〕**うりのせ**(賣乘)に同じ。〔取引所の語〕

り-のせ-がひ 利乘買【名】〔商〕**かひのせ**(買乘)に同じ。

りのたいぷ (英 Lynotype)【名】活字の鑄造・組立・製版を連續的に爲し得る器械。一行分づつの母型を、器械的に集合し、これに、熔融せる活字合金を注ぎ、一行分づつの文字を一塊として、同時に鑄造するやうに裝置す。西曆一八八四年、獨逸種米國人メルゲンタアレル(Ottmar Mergenthaler)案出す。らいのたいぷ。

りのりうむ (英 Linoleum)【名】樹脂と乾性油とコルク屑とを煉り合はせたるを、ツックなどの面に附著せしめて製したるもの。表面滑かにして光澤あり、又、種種の花紋を染め出せるもあり、やや彈力ありて、丈夫なるを以て、西洋風建築物の廊下・床などに敷くに用ふるに適す。

りは 【名】**すみまへがみ**(角前髮)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

りはい 離杯・離盃【名】**べっぱい**(別杯)に「同じ。

り-はい 離配【名】寺院が、他の寺院の配下を離るること。**りだん**(離檀)・**りまつ**(離末)參照。〔德川時代の語〕

り-はい 離背【名】**りはん**(離叛)に同じ。

り-ばい 利倍【名】利息に、又、利息の生じて、元金の增殖すること。利が利を生むこと。利殖。

り-はく 李白【名】〔人〕支那唐の詩人。字は太白、青蓮と號す。興聖皇帝九世の孫。母、太白星を夢みて生みしかば、因つて名とすといふ。氣宇豪放、酒を好む。玄宗帝召見して食を賜ひ、親しく羹を調するに至る。官を授けられんとして、楊貴妃の阻止に遭ひ、金を賜りて放還せらる。寶應二年死す。年六十二。采石江に遊び、沈醉して、水中の月を捉へんとし、溺れて死すといふは、好事者附會の說なるべし。李太白集三十卷あり。

り-はつ 利發・悧發【名】『利口・發明の義』さかしきこと。はつめい。怜悧。

り-はつ 理髮【名】『頭髮を整理する義』㊀髮を結ひ、又は刈りて調ふること。かみあげ。かみかり。調髮。㊁元服又は裳著(モギ)の時、頭髮の末を剪り、又は結ひなどして調ふること、又その任に當る人。西宮記「庚子內親王著裳(敍三三品)。小一條大臣結二御裳腰一、滋野內侍理髮、尙侍結髻」

りはつ-くみあひ 理髮組合【名】理髮業者の組織する同業組合。

りはつ-げふ 理髮業【名】頭髮を刈り調へ、鬚を剃りなどする職業。

りはつげふ-しや 理髮業者【名】理髮業を營む人。「る人。

りはつ-し 理髮師【名】理髮業に從事す

りはつ-しよ 理髮所【名】**りはつてん**(理髮「業、又理髮師。

りはつしよく 理髮職【名】理髮師の職

りはつ-じん 利發人・悧發人【名】**りはつもの**(利發者)に同じ。一代男「昨日の尊を今日言はず、今日の事を明日語らず、備はつての利發人」

りはつ-だて 利發立・悧發立【名】殊更に利發らしく振舞ふこと。利發ぶること。吉野都女稿「御前をも憚らぬ利發だてな」

りはつ-てん 理髮店【名】理髮業を營む家。かみゆひどこ。とこや。

りはつ-もの 利發者・悧發者【名】利發なる人。りこうもの。利發人。

り-はふ 理法【名】㊀天理に適合せる法則。のり。すぢ。みち。法則。道理。理由。㊁原理と法則と。

り-はん 籬畔【名】まがきのほとり。籬邊。

り-はん 離叛・離畔【名】民心の離れそむくこと。人望の無くなること。離背。

り-はんりよう 李攀龍【名】〔人〕支那明の詩人。字は于鱗、滄溟と號す。歷城の人。九歲にして孤となり、家貧しく、自ら奮ひて學を修む。累官して、河南按察使に遷り、隆慶四年死す。年五十七。王世貞・謝榛・宋臣・梁有譽・徐中行・吳國倫と共に詩社を結び、相和して、古文辭を唱道せり。詩學事類・滄溟集の著あり。又、その編纂に成るといふ唐詩選七卷は、廣く我國にも行はる。

り-ひ 理非【名】道理にあたることと、あたらざることと。是非。平家「理非、佛陀の照覽にあり」

り-ひ 離披【名】枝・葉・花又は雲などが、離れ披(ヒラ)きて、美しきこと。

り-び 鯉尾【名】**はっちん**(八珍)㊁を見よ。

りひけつだん-の-しよく 理非決斷職『爭訟の理非を決斷する職の義』**しっけん**(執權)の異稱。

り-びん 理鬢【名】元服の時、鬢の毛を理(ナ)め調ふること、又その役。百練抄「主上御元服儀也(御歲十一)。加冠攝政太政大臣、理鬢左大臣、理髮內藏頭資平大臣」

り-びやう 痢病【名】腹痛み、大便澁りて瀉る病。赤痢・白痢(ケビリ)などあり。なめしりふり。痢患。著聞「痢病をつかうまつりしに、紙多く入り候ひしに、術盡きて」

り-びやう 罹病【名】病に罹(カカ)ること。わづらふこと。

り-ふ 嫠婦【名】夫なき婦人。やもめ。

りふ 粒【助數】粒狀の物を數ふるに用ふる語。

り-ぶ 吏部【名】㊀支那の六部(ロク)の一。文官の選敍・封爵・處分等を掌りし所。我國、古の式部省に相當す。㊁**りほうしやう**(吏部省)に同じ。〔李部〕

りふあいん (英 Refine)【名】練りて、上品・優雅ならしむること。精練。

りふ-いふ 立揖【名】立ちながら揖(イ)の禮を行ふこと。

りふ-えい 立纓【名】上方に向ひて立てる纓。天皇陛下の用ひ給ふもの。(垂纓・卷纓に對して)「ふち。

りふ-えん 笠檐・笠簷【名】かぶりがさの

りふ-がく 立樂【名】立ちながら奏する音樂。思德日記「節會の儀式、又、常の事なれど、立樂など、ふるきに任せて」

りふ-ぎ 竪義・立義【名】〔佛〕『竪の字の音はじゅなれども、この字を書きたる時も、古來りふと讀み來れり』興福寺・延曆寺などにて、大會の論議の際、指定せられたる僧の、高座に上り、問者の問に答へて、義を立つる儀式。別に一座ありて、探題これに就き、問答數番の後、これを批判し、竪義を經たる僧は、一宗の學匠たる名譽・位置を得。

りふきん-くわ 立金花【名】〔植〕毛茛(ケキン)科に屬する多年生の草。葉は、心臟形をなし、長き葉柄ありて簇生す。花軸は多少伏臥し、その先端に、二三箇の黃花を著く。山間の濕地に自生し、又栽培して觀賞す。ゐんこうさう。

り-ふく 利福【名】利益と幸福と。

りふ-ぐわん 立願【名】神佛に祈り願ふこと。ぐわんだて。發願(ホツグワン)。「よ。

りふ-げん 立言【名】**りつげん**(立言)を見

りふ

りふーご 立鼓【名】りうご(輪鼓)に同じ。
りふーご 粒子【名】りうご(輪鼓)㊁に同じ。
りふーご 立五【名】槍の石突。「じ。
りふーざう 立像【名】りつざう(立像)に同
りふーじん 立人【名】にんべん(人偏)に同じ。字鏡「イ、立人」
りーふじん 理不盡【名】道理を盡さずして、人に迫ること。むりむたい。てどみ。無理。類聚國史「不レ與二解由狀一、依二理不盡一、返却者、十日之内便令二改辨一」
りーふじん 李夫人【名】〔人〕㊀支那漢の武帝の妃。もと倡人。延年の妹。舞を善くせしによりて、帝の幸を得、昌邑哀王を生む。年少くして卒し、后の禮を以て葬らる。帝、思慕止まず、その形を甘泉宮に畫く。衞皇后廢せられて後四年、武帝崩ずるや、大將軍霍光、帝の意に本づきて、夫人を配食し、追尊して孝武皇后といふ。ほんどんかう(反魂香)參照。㊁支那後唐の郭崇韜の妻。畫を善くす。もと西蜀の人。郭、蜀を伐って、これを得たり。夫人、郭の武人なるがために、心樂しまず、月夜、南軒に坐して、竹影の婆娑たるを見、意に從ひて窓の紙に寫す。明日、これを見れば、神韻飛動して、好畫をなしたりきといふ。「者」に同じ。
りふーしや 堅者・立者【名】〔俚〕りっしゃ(堅
りふーじやく 粒狀【名】小く丸き形。つぶの形。
りぶしやうーしよ 吏部尚書【名】㊀支那にて、吏部の長官。㊁りぶたいじやうけい(吏部大常卿)に同じ。〔李部尚書〕
りふじやうーくわやく 粒狀火藥【名】『英Grain powder』野砲・山砲・小銃・獵銃等の發射に使用する不定形粒狀なる黑色火藥の總稱。一般に硝石七十五分、硫黃十分、木炭十五分より成り、野砲及び獵銃に用ふるものは、石墨を塗布す。
りぶーしやう 吏部省・李部省【名】『李の字は、吏の音通にて用ひしものなるべしといふ。りぶ(吏部)㊁參照』しきぶしやう(式部省)の唐名。
りふしやくーじ 立石寺【名】羽前國東村山郡山寺村にある天台宗の別格寺。寶珠山と號す。初名は貞觀寺、俗稱山寺(やまでら)。慈覺大師、清和天皇の勅願によりて建立す。本尊は釋迦・多寶の兩尊及び開山慈覺大師。江戸の寛永寺建立せらるゝや、これに屬し、明治の初、延曆寺に屬す。全山岩石攢立し、山水の壯觀を極む。

りぶしゆ

りぶーしゆじ 吏部主事【名】『李の字につきては、りぶしやう(吏部省)を見よ』式部錄(シキブノ)の唐名。
りふーしよく 粒食【名】米を食ふこと。
りぶーじらう 吏部侍郎・李部侍郎【名】㊀支那にて、吏部の次官。㊁りぶたいけい(吏部大卿)に同じ。
りぶーせうけい 吏部少卿・李部少卿【名】『李の字につきては、りぶしやう(吏部省)を見よ』吏部少輔(ショウフ)の唐名。拾芥抄「式部卿……輔(吏部侍郎・大常少卿、今號二李部大卿一考功郎中一」
りふーせつ 粒雪【名】あられ(霰)に同じ。
りふーそう 立僧【名】〔佛〕禪宗にて、住持に代りて法を說き、衆僧を成立する僧。極めて重任なるが故に、西堂(セイドウ)或は前堂及び諸の耆宿の中より、智德並びすぐれたる者を選びて充つ。「條に同じ。
りふそうーしゆそ 立僧首座【名】〔佛〕前
りぶたいけい 吏部大卿・李部大卿【名】『李の字につきては、りぶしやう(吏部省)を見よ』式部大輔(シキブタイフ)の唐名。吏部侍郎。江吏部集「李部大卿逃二沈滯懷一」
りぶーたいじやうけい 吏部大上卿・李部大上卿【名】『李の字につきては、りぶしやう(吏部省)を見よ』しきぶきやう(式部卿)の唐名。拾芥抄「式部卿、吏部尚書・大常卿・李部大常卿」
りーぶつ 理佛【名】〔佛〕『三身の中、報身と應身とを、事佛といふに對していふ』ほふしん(法身)に同じ。
りーぶつしやう 理佛性【名】〔佛〕理體の佛性(ブッショウ)。(行佛性(ギョウブッショウ)に對して) 太平記「非情草木雖レ具二理佛性一、無二行佛性一。無二行佛性、何有二成佛義一」
りふーつぼ 立坪【助數】立方體の大さの單位。普通は六尺立方を、その一坪とし、小き材料を取り扱ふ時は、一尺立方もしくは一寸立方を一坪とすることあり。

りふは

りふーは 立破【名】〔佛〕りっぱ(立破)に同じ。「同じ。
りふーばう 立坊【名】りったいし(立太子)に
りふーぶ 立部【名】支那唐の代に、伶人を二つの等級に分ちたる内の、堂下にありて、立ちて奏樂せしもの。(坐部に對して) 太平記「御賀の舞のありける時、堂下の立部の袖を翻し、梨園の弟子に曲を奏せしむ」
りふく-じ 笠覆寺【名】尾張國愛知郡鳴海(ナルミ)町の西方十餘町なる笠寺村にある寺。轉輪山と號し、龍禍寺とも書く。本尊は十一面觀世音。聖武天皇の時の創建。昔、本堂頹破して、本尊の大雨の中に濡れゐたりしを、或長者の娘の、見兼ねて、己の笠をさしかけゐたりし由の傳說ありて、今も、本尊は、笠を覆ひ、頭かぶりし、笠寺緣起といふ書、續群書類從にあり。かさでら。
りふほ 立圃【名】〔人〕ののぐちりふほ(野口立圃)を見よ。
りーふん 利分【名】㊀りとく(利得)に同じ。㊁りし(利子)に同じ。太平記「來年、世立ち直らば、本物(モトノ)ばかりを借主に返納すべし。利分は、我添へて返すべし」
りーぶん 理分【名】道理にかなふ方。狂言(內沙汰)「隨分理分になるやうに言はしやれい」「よ。
りふーめい 立命【名】りつめい(立命)を見
りぶーらうちゆう 吏部郎中【名】㊀支那にて、吏部の第三等の官。㊁式部少輔(シキブショウフ)及び式部大丞(シキブノジョウ)の唐名。〔李部郎中〕「つ一つの粒。
りふーりふ 粒粒【名】この粒、かの粒。一粒粒辛苦【句】次條に同じ。
粒粒皆辛苦【句】『唐の詩人李紳の「憫農」と題する詩に「鋤禾日當午、汗滴二禾下土一、誰知盤中飧、粒粒皆辛苦」とあり』農夫の米を作る辛苦の一方ならぬ形容。五穀は民の汗。

りへい

りーへい 利兵【名】銳利なる兵器。利刃。太平記「堅甲・利兵」「同じ。
りーへい 利弊・利病【名】りがい(利害)に同じ。
りーへい 利平【名】りそく(利息)に同じ。建武以來追加「洛中洛外諸土倉利平事」
りーべつ 離別【名】㊀べつり(別離)に同じ。㊁りとん(離婚)に同じ。
離別の母【句】母なれども、現在は父と離別したる者。
りべつーしやう 離別狀【名】りえんじやう(離緣狀)に同じ。
りーへん 籬邊【名】りほん(離畔)に同じ。
りーべん 利便【名】べんり(便利)に同じ。
りーべん 離瓣【名】〔植〕りべんくわくわん(離瓣花冠)の略。(合瓣に對して)
りべん-くわ 離瓣花【名】〔植〕離瓣花冠を有する花。(合瓣花に對して)
りべんくわーく 離瓣花區【名】〔植〕分類上、雙子葉門中の、離瓣花を開く一類。薔薇(バラ)科・山茶(ツバキ)科・荳(マメ)科・十字花科等、これに屬す。(合瓣花區に對して)
りべん-くわくわん 離瓣花冠【名】〔植〕花瓣の分離せる花冠。梅・櫻・油菜等の花冠の如き、これなり。(合瓣花冠に對して)
りべりや (英Liberia)【名】〔地〕亞非利加の西部にある共和國。西曆一八二二年、北米合衆國より解放せられし黑人を以て建設せしもの。首府をモンロビヤ(Monrovia)といふ。
りへん-やき 利兵燒【名】たかまつやき(高松燒)に同じ。
りーほう 吏部【名】『ほうは部の字の漢音ホの延』㊀りぶ(吏部)㊁に同じ。㊂りぶしやう(吏部省)に同じ。〔李部〕 運歩色葉集「李部、リホウ。式部唐名」
りーぼう 吏部の文【句】省試(シヤウシ)㊂の答案。對策。空穗「りぼうの文を、いとになく作り出して」
りーぼうやう 李夢陽【名】〔人〕支那明代の詩人。字は獻吉、空同と號す。慶陽の人。弘治七年の進士。戶部員外郎より郎中に遷り、江西提學副使に至る。事に坐

して、しばしば獄に下りしかど、後、免され、庶人となりて卒す。天啓中に景文と諡せらる。空同集あり。最も七言に長ず。

しちし(七子)【名】『参照。

りほうわうき 李部王記【名】〔書〕『重明親王は、式部卿の官に在りしよりいふ』醍醐天皇の第四の皇子重明(ヂウメイ)親王の、元慶元年正月朔日より延長四年十二月二十九日までの漢文の日記。主として、朝廷の行事・公事等を記せり。十二卷。

りぼん(英Ribbon)【名】幅狭く、紐状に織りたる絹帛。頭髪又は商品の装飾、勳章の綬、帽子の鉢巻、衣服の縁縫等、用途廣し。木綿絲又は麻絲にて織りたるは、特にテエプと呼ぶ。

りま(英Lima)【名】〔地〕祕露(ペルー)國の「首府。

りまい 利米【名】借りたる米の利息として拂ふ米。「に賞用す。

りまう 狸毛【名】たぬきの毛。毛筆の穂

りまう 理毛【名】馬の尾毛などの長毛を刈りて、整理すること。

りまつ 離末【名】末寺の、本寺との關係を離るること。**りだん**(離檀)・**りはい**(離配)参照。〔徳川時代の語〕

りまはし 利廻【名】利息を得んがために貸し出し、又、利益を得んがために流用すること。

りまはり 利廻【名】利益配當又は利息の割合。利率。

りまん【名】〔植〕**れもん**(檸檬)に同じ。

りまん-かいりう リマン海流(英Liman Current)【名】〔地〕『露Liman(河口の義)より出で、アムウル(Amur)河口附近より起れるが故の名なるべしといふ』海流の一。オホオツク(Okhotsk)海の北東隅に發する寒流。樺太の北角にて分れ、黒龍口吐出の寒水と合して、日本海に入り、その北西側を經て朝鮮海峡に向ひ、北東信風の季節には、遠く臺灣海峡に達す。

りみん 吏民【名】官吏と人民と。

りみん 里民【名】村里の人民。むらびと。太平記「徒に里民を煩はすこと、本意にあらざる上」

りみん 理民【名】**ちみん**(治民)に同じ。

りむ 吏務【名】一官吏としての職務。正統記「諸國に守護を置きて、國司の威をおさへしかば、吏務といふ事、名ばかりになりぬ」二特に、國司の職務。吏途。

りむ 釐務【名】『務を釐(サ)むる義』一事務を執ること。二前條一に同じ。後紀「乙上任二佐渡權目一、不レ預二釐務一、唯給二公廨一而已」

りん 鈴【名】『鈴の字の唐音』一**れい**(鈴)に同じ。〔禪宗の語、又俗間の語〕二響銅(ヤウ)にて造り、小き鉢を仰けにしたるが如き形の佛具。經を誦する時、又、佛前に物を供へたる時などに、その縁を打ちて鳴らす。三**べる**に同じ。「倫。

りん 倫【名】たぐひ。ともがら。同類。等

倫を離る【句】『韓愈の進學解に「絶レ類離レ倫、優入二聖域一」とあり』「類(ル)を出づ」に同じ。

りん 綸【名】つりいと。綸絲。「す。

綸を垂る【句】魚を釣る。釣(ル)を爲

りん 輪【名】一車輪(リンヤ)。わ。二花の、圓く開きたる大さ、又その花。花輪(クワリン)。四季物語「花のりん、三つ四つ奉り捨てて行きぬ」三圓き物のかこみ。四『**ふくりん**(覆輪)の略』襟・袖・裾などに縫ひ附けたる、別のきれの緣(ヘリ)。下學集「輪、リン。車具也。或日本俗、謂二衣領裏一曰レ輪也」

りん 臨・輪【名】琴の手の一。りんせつ。源氏「りんの手など、すべて、更にいとかどある御琴の音(ネ)なり」

りん 痳【名】**りんびやう**(痳病)に同じ。

りん 燐【名】一『論衡に「人之兵死也、其血爲レ燐」とあり』**りんくわ**(燐火)に同じ。二〔化〕『英Phosphorus』非金屬元素の一。新鮮なる精製品は、殆んど無色にして、半透明なる蠟様の物質なれど、次第に不透明となり、日光に曝せば、表面褐色に變ず。酸化し易く、空氣中に放置する時は、自然に酸化して、白烟發し、遂に自ら火を發して烈しく燃え、五酸化燐と呼ぶ白色の粉末となる。故に、天然に存することなく、燐酸鹽となりて、自然に廣く配布す。水には溶け難けれども、二硫化炭素には、非常によく溶く。暗處にては、微光を發し、又、濕氣中にては、一種不快なる臭氣ある白煙を生ず。骨灰(燐酸カルシウム)を硫酸にて處分したる上、石炭末と砂とを混じ、電氣爐にて強熱して製し、その蒸餾し來るを、水中に導き、型に入れ、水中に貯ふ。密閉せる鐵管内にて、二三百度に數分間熱する時は、赤燐を得。赤燐は、普通の燐の同素體にして、二六二度以上に熱すれば、普通の燐に變ず。黄燐(クワウリン)。白燐。燐素。

りん 厘・釐【名】『釐の字の音、正しくは厘。厘は店と同字なるを、我國にては釐の省字として用ひ來れり』一貨幣の單位。圓の十分の一、即ち、錢(セン)の十分の一。二尺貫法に於ける長さの單位。尺の千分の一、即ち分(ブ)の十分の一。三尺貫法に於ける重さの單位。貫(クワン)の十萬分の一、即ち分(ブ)の十分の一。四銀目(ギン)の單位。分(ブ)の十分の一。五歩合算に於ける單位。一の百分の一、即ち分(ブ)の十分の一。六**めん**(兎)三に同じ。

りん 貌【名】一金屬の物に當りて、清く涼しく鳴る音。二松蟲・鈴蟲などの鳴聲。風俗文通「嵐雪「松蟲のりんともいはず黒茶碗」三ゆるみなきさま。きびしきさま。

りん-いう 輪友【名】自轉車に乘るなかま。

りん-いう 隣友・鄰友【名】近隣に住める友。

りんいつ-せう 林逸抄【名】〔書〕源氏物語を註釋せるもの。五十四卷。林宗二の著。卷首に、總論あり、花鳥餘情・休聞抄・花曙抄・一葉抄等を引用して註せり。

りん-いふ 隣邑・鄰邑【名】となりむら。隣村。

りんいふ 林邑【名】〔地〕支那三國の頃より隋初にかけて、今の安南の南部より交趾支那(カウチシナ)の北部にありし國。唐以後、占城(チヤンパ)の名を以て知らる。

りんいふ-がく 林邑樂【名】古、林邑國より渡來せし雅樂。**てんぢくがく**(天竺樂)参照。

りんいふ-がくし 林邑樂師【名】古、雅樂寮に屬して、林邑樂を學生に教ふることを掌りし樂師。「し。

りん-いん 綸音【名】**りんげん**(綸言)に同

りん-う 霖雨【名】**ながあめ**(長雨)に同じ。

りん-うち 鈴打【名】次條の略。

りんうち-どけい 鈴打時計【名】時來れば、自然と鈴を打ち鳴らすやうに仕掛けたる時計。りんうち。自鳴鐘。

りん-えい 林永【名】徳川時代に、林に課せし稅。林錢。

りんえき-けん 林役權【名】〔法〕『獨Forstservitut』他人の森林を、或土地の便益上、使用・收益する權利。即ち、承役地が森林なる場合の地役權。

りん-えふ 林葉【名】林の木の葉。

りんえふるゐぢん-しふ 林葉累塵集【名】〔書〕農・商・出家の類に至るまでの當時の諸民の秀歌一千三百六十餘首を、撰集の體に倣ひて集めたるもの。十卷。中、百五十餘は、自家の詠なり。下河邊長流の撰。

りんえふ-わかしふ 林葉和歌集【名】〔書〕僧俊惠(藤原俊頼の子)の歌集。六卷。春・夏・秋・冬・戀・雜の順序にて、各部を一卷づつに配す。

りん-えん 燐鹽【名】〔化〕『英Microcosmic salt』燐酸とアンモニウムとナトリウムとの化合物。無色の結晶質粉末にして、尿及び海鳥の糞の腐敗せるものに含まる。これを白金線に附け、燒きて得る透明體は、金屬の酸化物を溶かして著色するを以て、吹管分析に用ひらる。燐酸水

素あんもにうむなとりうむ。

りん-か 隣家・鄰家【名】一隣接せる家。となりの家。となり。二名香の一。沈(ヂン)の一種。

りん-か 林下【名】林の下。林のほとり。

りん-が 林歌・臨河【名】高麗樂の一。平調(ヒラデウ)に屬す。

林歌の饗【句】「禮座(ヰザ)の饗」に同じ。

りん-かい 臨海【名】海にのぞむこと。瀕海。

りん-かい 鱗介【名】魚類と貝類と。

りん-かい 臨界【名】さかひ。きは。境界。

りん-かい-あつりよく 臨界壓力【名】〔理〕『英 Critical pressure』臨界溫度にある氣體を液化するに要する壓力。

りん-かい-かく 臨界角【名】〔理〕『英 Critical angle』光線が、疎體より密體に進むに際し、投射角が、或角度以上に達する時は、全反射を起すものにて、その全反射を起すと然らざるとの境界の角度。

りん-かい-がくかう 臨海學校【名】夏期などに、臨海の地を選びて、都會地などの兒童を集め、學科を授けつつ、健康の增進を圖る臨時の設備。林間學校の類。

りん-かい-しけんじよ 臨海試驗所【名】臨海の地に設けたる、海產動植物の研究所。多くは、大學等に附屬す。

りん-かい-じやうたい 臨界狀態【名】〔理〕『英 Critical State』氣體が液化を始め、又は終はる場合の、氣體とも液體とも呼び得べき特殊の狀態。

りん-かい-をんど 臨界溫度【名】〔理〕『英 Critical temperature』氣體に壓力を加へて、これを液化せしむる場合に於て、氣體の種類によりて、一定せる或溫度以下なることは必要條件にして、それより高き時は、いかに壓力を加ふとも、決して液化することなき、その一定の或溫度。例へば、水のは攝氏三百六十四度、アンモニヤのは百三十度、酸素の氣は零下百十八度なる類。從來、酸素・窒素・水素等を液化し得ざるものとせしは、それらの氣體の臨界溫度が非常に低きものなるを知らざりしこと。順講。

りん-かう 輪講【名】輪番に、講義をなす「とのよしみ。

りん-かう 隣交・鄰交【名】隣家又は隣國の交際。

りん-かう 隣好・鄰好【名】隣家又は隣國

りん-かう 臨幸【名】天皇の行幸ありて、その場所に臨ませたまふこと。

りん-かう 臨行【名】その場所に臨み赴くこと。盛衰記「宿緣に催されて、一の草堂を構へたり。願はくば、禪下臨行して、供養の蓄念を果したまへ」

りん-かう 臨江【名】江に臨むこと。

りん-がう 隣鄕【名】隣接せる鄕(ガウ)、又その地に住む人。となりがう、隣村。

傾城反魂香「信樂(ラガ)山から虎が出て暴(アバ)れる故、隣鄕が言ひ合はせ」

りんかう 臨卬【名】〔地〕支那蜀の古の縣の一。司馬相如、卓文君と、この地に酒肆を開き、文君は店に居り、相如は器を滌ひなどして過せりといふ。鶉衣(醉鶴亭記)「吳竹の世世經たる酒肆あり。さるは、臨卬にかけむかひのわびしき店には似るべくもあらず」

臨卬の道士【句】支那唐の玄宗皇帝の命を受けて、馬嵬(バイ)に命を墮しし楊貴妃の魂を蓬萊に尋ね、遺品金釵の一片を齎しし由、白居易の「長恨歌」に見えたる道士。名は楊通幽、臨卬の人にして、能く術を以て、死者の幽魂を求むる旨、玄宗に說きて、この命を受けたりといふ。

りんかう-せん 臨港線【名】著港したる船舶の貨物を、直ちに汽車に積み換ふる目的のために、埠頭まで、延長したる鐵道線路。

りん-かく 鱗角【名】一『北史の文苑傳に「學者如二牛毛、成者如二鱗角一」とあり』麒麟の角。稀有なる物事の譬。太平記「捲まざる志は、鱗角よりも稀なり」二〔佛〕りんかくゆ(鱗角喩)の略。

鱗角を抽く【句】甚だ抽(ヌ)んで秀づ。十訓「學抽二鱗角一」「略。

りん-かく 鱗閣【名】きりんかく(麒麟閣)の

りん-かく 隣角・鄰角【名】〔數〕せっかく(接角)に同じ。

りん-がく 林學【名】林業上の理論と方法とを研究する學問。森林學。

りん-がくし 林學士【名】農科大學又は大學農學部の林學科の本科を卒業せる人の稱號。

りん-がくし-はかせ 林學博士【名】りんがくはくし(林學博士)に同じ。

りん-がくし-はかせ-くわい 林學博士會【名】りんがくはくしくわい(林學博士會)に同じ。

りん-がくし-はくし 林學博士【名】博士の一。林學の蘊奧を究めたる人に授くる學位。

りん-がくはくし-くわい 林學博士會【名】林學博士を以て組織する博士會の一。

りん-かく-ゆ 鱗角喩【名】〔佛〕『俱舍論の卷十二に見ゆ』緣覺の中、伴侶ありて、同一の獨悟をなすを部行(ヤウギ)といふに對して、獨身にして、伴侶なき者の喩。鱗喩。鱗角。

りん-かし-ふ 林下集【名】〔書〕德大寺實定の歌集。二卷。「中。

りん-かん 林間【名】はやしのあひだ。林

りん-かん 臨監【名】臨場して、監督又は監視をなすこと。「おろすこと。

りん-かん 臨瞰【名】或場所に臨みて見

りん-かん 輪姦【名】一人の女子を、數人の男子が、順次に强姦すること。

りん-かん-がくかう 林間學校【名】夏期などに、空氣淸涼なる林間の地を選び、都會地などの兒童を集め、學科を授けつつ、健康の增進を圖る臨時の設備。臨海學校の類。

りん-き 悋氣【名】しっと(嫉妬)に同じ。

りん-き 臨機【名】その時の場合に應じて、間に合はすること。

臨機應變【句】『南史の梁宗室傳に「吾自臨レ機應變、勿二多言一」とあり』場合を見はからひて、間に合ふやうに事を爲すこと。「誤讀。

りん-ぎ 稟議・禀議【名】ひんぎ(稟議)の

儒者。字は蕭翁・虜齋と號す。累官して中書舍人に至り、淸廉を以て稱せらる。詩文・書畫を善くし、著す所、易講・春秋傳・老莊列口義・考工記解・竹溪稿等あり。

りん-ぎ-とう 悋氣講【名】『集まれば、互に夫に對する不平などを語りあふよりいふ』下賤なる女たちの寄り合ひて設くる賴母子講(ヨリモ)。しかたばなし「昔、一在所の婦人ども、悋氣講を結びし中に、一人、夫に別れたる者あり」

りん-ぎ-ふかし 悋氣深し【形一】しっとぶかし(嫉妬深し)に同じ。

りん-きん 輪勤【名】輪番の勤務。

りん-きん 淋菌【名】淋病の原因となる細菌。どのこっけん球菌。

りん-きん 林檎【名】〔植〕あかりんご(赤林檎)に同じ。

りん-きん 輪囷【貌】『りんくわん(輪奐)を見よ』まがりくねるさま。

りん-きん-ぜい 釐金稅【名】りきんぜい(釐金稅)の誤讀。

りん-きやう 林響【名】森林中にての反響。やまびこ。こだま。林神。

りん-きやう 隣鄕・鄰鄕【名】りんがう(隣鄕)に同じ。

りん-きやう 隣境・鄰境【名】隣接せる土地。となりざかひ。

りん-きやう-ぐさ りんきやう草【名】〔植〕かにくさ(蟹草)に同じ。

りん-ぎよ 臨御【名】一『徐陵の文に「折二衝四表、臨二御八荒一」とあり』くんりん(君臨)に同じ。二りんかう(臨幸)に同じ。

りん-くしよ 林區署【名】大林區署と小林區署との總稱。

りん-くしよ-ちやう 林區署長【名】大林區署長と小林區署長との總稱。

りん-くわ 燐火【名】墓地・沼澤等の陰濕なる地に自然に發生する火光。をにびきつねび。燐光。

りん-ぐわ 臨畫【名】畫手本によりて、畫をゑがき習ふこと。繪畫の臨寫。

りん-まい 林希逸【名】〔人〕支那宋の

りんくわい-せき 燐灰石【名】〔鑛〕『英 Apatite』火成岩の成分として各地に存在する岩石。種種の結晶と色彩とを示し、玻璃光澤を有す。硝酸肥料の主要原料たり。

りんくわい-ど 燐灰土【名】〔鑛〕『英 Phosphorite』燐灰石の一種。結晶質ならずして、塊狀をなせるもの。燐灰石と同じく燐酸肥料の原料となる。我國にて燐鑛といふは、多くはこの物なり。

りんくわ 林篁【名】竹の叢生したる處。たかむら。たかやぶ。

りんくわ 燐鑛【名】〔鑛〕著しく燐酸を含みたる岩石、殊に、その球塊狀なるもの。我國南鳥島の鳥糞の染みたる土、ラサ島の岩石など、主なるものなり。

りんくわ 燐光【名】[一]**りんくわ**(燐火)に同じ。[二]〔化〕『英 Phosphorescence』燐を空氣中に放置すれば、絕えず蒸氣を發して緩慢なる變化をなすを、暗所にて見れば放つ微光。燐火も、この種の光に外ならざるべしといふ。[三]〔理〕『英 Phosphorescence』或特種の物體を、強き日光又はその他の光に曝したる後、暗所に移す時、暫くの間、その物體自ら發する光。この特性を有するものは金剛石・マグネシヤ・砂糖、その他、なほ多く、大抵は固體にして、光の色は、物質によりて同一ならず。**けいくわ**(螢光)[四]參照。

りん-くわく 輪郭・輪廓【名】[一]周圍の線。[二]大體の外形。

りんくわ-すそ 燐化水素【名】〔化〕『英 Gaseous phosphuretted hydrogen』燐と水素との化合物。無色にして、腐魚樣の特種の惡臭と毒性とを有する可燃性の氣體。苛性曹達の濃液に燐の小片數箇を加へ、豫め器內の空氣を、水素又はエエテルの蒸氣にて驅逐しおきて熱すれば發生す。

りん-くわん 輪奐【名】『禮記の檀弓篇に「美哉輪焉、美哉奐焉」とあるに本づく。輪は曲折して高大なる義、奐は煥と相通じ、文采の明らかなる義』建築の宏大・壯麗なるさま。

りんくわん-じよじ 輪換序次【名】〔數〕「循環の順序」に同じ。

りん-げ 林家【名】**はやし**(林)[三]を見よ。

りん-げ 林下【名】[一]〔佛〕**ゑげ**(會下)に同じ。遠羅天釜「工夫、もし、一人と萬人と戰ふ底の氣力あらば、豈、夫(ソレ)、林下と室家とを擇ばんや」[二]**りんげがみ**(林下紙)

りん-けい 鱗莖【名】地下莖の一種。短縮して、鱗狀・多肉の葉の重なり著けるもの。百合(ユリ)・玉葱などの地下莖、これなり。玉葱のに於けるが如く、表面に薄き皮膜を被れるは、又、特に有皮鱗莖の名あり。

りんけい 麟經【名】〔書〕『くわくりん(獲麟)を見よ』しゅんじう(春秋)[三]の異稱。

りんげ-がみ 林下紙【名】『林下は地名なるべしといふ』美濃國より產する一種の紙。りんげ。

りんげつ 臨月【名】分娩すべき月。うみづき。

りん-げふ 林業【名】森林を經營する事「業。

りんげふ-せいさく 林業政策【名】〔經〕林業上の經濟政策。

りんげふせいさく-がく 林業政策學【名】林業政策につきて研究する經濟政策學。

りん-けん 臨檢【名】臨場して檢査すること。

りんげん 綸言【名】『禮記の緇衣篇に「王言如レ絲、其出如レ綸。王言如レ綸、其出如レ綍」とあるに本づく。初は絲の如く細けれども、一たび出でて、天下に達する時は、綸の如く太くなるとて、譬へていふ』君主のおほせごと。みことのり。綸音。綸宣。綸命。

綸言、汗の如し【句】『はんかん(反汗)を見よ』綸言の、一たび仰せいだされたる上は、取り消されぬものなるを、一たび出でたる汗の、再び體內に戻り入ることなきに譬へていふ語。〔諺語〕平寧「天子に戲の言葉無し。綸言汗の如しとこそ承って候へ」

綸言、反らず【句】『はんかん(反汗)を見よ』前條に同じ。〔諺語〕平寧「始皇、烏頭・馬角の變に驚き、綸言歸らざることを深く信じて、太子丹を宥めつつ、本國へこそ歸されけれ」

りんげる-えき りんげる液【名】〔化〕クロオルナトリウム 83、クロオルカルチウム 0.1g、クロオルカリウム 0.075g 重炭酸ナトリウム 0.1g を蒸餾水 1000g に溶解し、濾過し、蒸氣殺菌を行ひて製す。急性貧血・尿毒症・コレラ・血壓亢進等の場合、注射液に用ふ。

りん-ご 凜乎【貌】**りんりん**(凜凜)に同じ。

りん-ご 林檎・苹果【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉喬木。原產地は中央亞細亞にして、諸國これを培養する中に、東洋在來のは、小(ミ)林檎と呼ぶものなれど、現時培養せるは、何れも、明治五六年頃以來の歐米よりの輸入種にして、唐(ヨウ)林檎又は西洋林檎と呼び、苹果の字はこの種に適用せらる。高さ二丈に達し、葉は卵形又は長楕圓形にして、質柔く、先端尖り、鋸齒を具へ、五月頃、白色又は淡紅色なる五瓣の花を開く。果實は扁圓形にして、基部凹陷す。我國、本州東北部及び北海道にて盛んに栽培し、品種多くして、各、果實の色と大さとを異にすれど、何れも味甘酸にして、廣く食用に供し、又、林檎酒に造る。東洋在來のも、別種なるにはあらざれども、果實の品質には、大なる相違あり。

りん-ご 臨期【名】その時に臨むこと。いざといふ場合。〔古語〕通茂集「りんごにはよしかはるともなぐさめに契らぬ月は見る影もなし」

りんご-かみきり 林檎髮切・苹樹天牛【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。髮切蟲の一。長さ約一寸、體色黃にして、褐色の斑紋あり。幼蟲は、苹果(ヨウ)・梨・櫻などの新條を食害す。

りん-ごく 隣國・鄰國【名】隣接せるくに。となりぐに。隣邦。

りんご-とだつ 臨胡褌脫【名】雅樂の一。和名「臨胡褌脫」

りんご-ざうむし 林檎象蟲【名】〔動〕鞘翅類に屬する昆蟲。象鼻蟲の一。長さ約二分、色黑し。苹果(ヨウ)・梨等を食害す。

りんご-さん 林檎酸【名】〔化〕『英 Malic acid』有機酸の一種。不熟なる林檎・梅・李などの液汁中に存する無色の結晶體。成分は二鹽基酸にして、水・酒精に溶解し、快美なる臭氣を有す。

りんご-しゆ 林檎酒【名】『英 Cider・さいだあ參照』林檎の果實の液汁を醱酵せしめて製する、酸味を帶びたる酒精飲料。主なる產地は佛蘭西。

りんご-たまご 林檎玉子【名】茹(ユデ)玉子の皮を去り、その熱の冷えぬ內に、布巾にて丸めて、林檎の形をつくり、金柑・柚子などの葉を敷きて煮たるもの。

りんご-てつえきす 林檎鐵越幾斯【名】緩和制鐵劑の一。成熟せる林檎の果實の酸味あるを鐵臼にて、搗き碎きて粥狀となし、壓搾して、液汁を採集し、これに鐵粉を混和しなほ數回の手續を重ねて得る稠厚にして、帶綠黑色なる越幾斯。强壯藥として、貧血症等に用ふ。

りんご-てつちんき 林檎鐵丁幾【名】鐵劑の一。林檎鐵越幾斯を酒精と桂皮水とを混和せる液に溶かし、濾過して製する暗黑褐色なる液。貧血性諸症に應用す。

りんご-なし 林檎梨【名】〔植〕**りんご**(林檎)に同じ。

りん-ざ 輪坐【名】くるまざ。圓欒。

りん-ざ 輪座【名】〔佛〕轉輪王の座位。

りん-さい 輪栽【名】〔農〕『英 Rotation』年年、作物の種類を變へて植ゑ付くること。輪作。

りんざい 臨濟【名】[一]〔人〕支那唐の高僧。姓は邢、名は義玄。曹州南華の人。黃檗(ワウバク)に師事して得道し、河北鎭州城の東南滹陀水に臨みて、小院を營み、臨濟院と號して住す。因って、この稱あり。咸通八年寂す。勅して榮照禪師と諡す。世に、その唱ふる所の宗旨を傳へて、臨濟宗といひ、我國にも行はる。[二]〔佛〕**りんざいしゆう**(臨濟宗)の略。

臨濟の喝、德山の棒【句】『傳燈錄に見ゆ』支那唐の臨濟禪師と德山和尚との、學徒を啓導するに、前者は大喝を與へ、後者は痛棒を加ふるを習とせるを對稱せる語。

りんざい-じ 臨濟寺【名】駿河國安倍郡東安東村大字大岩にある臨濟宗妙心寺派の寺。本尊は阿彌陀佛。今川義元の創建。境内に義元の墓あり。

りんざい-しゅう 臨濟宗【名】〔佛〕佛教の宗派の一。禪宗に屬し、支那唐の臨濟義玄の開創に係る。臨濟第六世の法孫に圓禪師あり、その下に楊岐・黃龍の二派ありしを、建仁寺の榮西、後鳥羽天皇の御代に入宋して、黃龍第八世の法孫虛庵懷敞禪師を繼承し來りて、我國に傳へ、後又、東福寺の辨圓、四條天皇の御代に入宋して、楊岐第九世の法孫徑山の無準和尚に嗣法して歸朝し、鎌倉・室町の兩時代、隆盛を極め、五山の制も設けらるるに至りしが、德川時代に至りて頹廢を極め、白隱禪師起るに及びて、宗風中興す。もと禪宗三派の一にして、臨濟派といひしが、明治九年、他の二派曹洞・黃檗(ワウバク)と共に、獨立の宗名を唱ふるに至り、現時、建仁寺派・東福寺派・建長寺派・圓覺寺派・南禪寺派・大德寺派・天龍寺派・永源寺派・相國寺派・妙心寺派・永源寺派・國泰寺派・方廣寺派・白嶽寺派・佛通寺派の十四派に分る。臨濟。「の宗義に依る禪道。

りんざい-ぜん 臨濟禪【名】〔佛〕臨濟宗

りんざい-ぜんじ 臨濟禪師【名】〔人〕りんざい(臨濟)[1]の尊稱。

りんざい-は 臨濟派【名】〔佛〕りんざいしゅう(臨濟宗)を見よ。

りんさいはふ 輪栽法【名】〔農〕輪栽を「行ふ方法。

りんざいーろく 臨濟錄【名】〔書〕支那唐の臨濟義玄の語錄。一卷。慧然禪師の編。具さには、鎭州臨濟慧照禪師語錄といふ。

りん-さう 林相【名】森林の形相。

りん-さう 林葬【名】やさう(野葬)[1]に同じ。「淪沒。沈沒。

りん-さう 淪喪【名】沈みほろぶること。

りん-ざう 輪藏【名】[1]〔佛〕てんりんざう(轉輪藏)の略。太平記「建仁寺の輪藏・開山塔並に塔頭(ユクヒチ)瑞光庵、同時に、皆燒け上る」[2]謠曲の一。山城國北野天滿宮なる輪藏の奇特を記せるもの。

りんざう-しょくぶつ 輪藻植物【名】〔植〕隱花植物中の一綱。すべて水生にして、葉を車軸狀に發出し、腐敗臭を有す。發生學上、蘚類に類似せる點あり。或學者は、その祖先を綠藻又は褐藻に求むれども、假に藻類中に列せしむとせば、最高等の位置を與ふべきなるべし。凡そ六屬・百六十種を包含すれども、我國には二屬・十四種及び三變種の知られたるのみ。車軸藻植物。

りんざう-づ 林相圖【名】『獨 Bestandestafel』森林の現況、殊に各林木の作業種・樹種・樹齡などを、一目の下に知り得るやうに表はせる圖。

りん-さく 輪作【名】〔農〕りんさい(輪栽)に同じ。(連作に對して)

りん-さん 林產【名】山林より產出すること、又その物。

りん-さん 燐酸【名】〔化〕『英 Phosphoric acids』無水燐酸の水と化合せるもの。その化合の割合に三種あり。最も普通なるは、正燐酸といひ、又、最も重要なるものにして、無水燐酸を水に溶かして、放置し又は煮沸する時生ずれど、燐を硝酸と共に煮て、酸化して製するを通例とす。水に溶けやすき含水結晶をなし、快美なる酸味を有す。その水溶液は、硫酸等に比して遙かに弱き酸にして、消渴飲料・骨病藥等として、醫藥に供し、又、化學藥とし、又、骨灰末を稀硫酸に混じ、濾して、硫酸カルシウムの沈澱を去り、發蒸して、濃厚ならしめたるは、通常、粘稠なる液をなし、多少の硫酸カルシウム、その他の不純物を含み、工業用に供す。正燐酸以外のは、焦燐酸・メタ燐酸の二種なり。

りん-ざん 臨產【名】出產せんとすること。むしけづくこと。

りんさん-えん 燐酸鹽【名】〔化〕『英 Phosphates』燐酸の成分中の水素を、金屬にて置換して生ずる化合物。燐酸カルシウムは、その最も普通なるものなり。

りんさん-かるしうむ 燐酸加爾叟母【名】〔化〕『英 Calcium phosphate』カルシウムの燐酸鹽。燐酸鹽中、最も普通・重要なるものにして、その成分には、數種の別ありて、その一種は、燐灰石として產出し、又は骨灰中に多量に存し、水に溶解せず。然るに、可溶性の燐酸鹽は、植物の肥料として大効あるが故に、燐灰石又は骨灰を硫酸にて處理して、可溶性の物となし、人造肥料として賞用し、これを過燐酸石灰と呼ぶ。燐酸石灰。

りんさん-すなそ-あんもにうむ-なとりうむ 燐酸水素安母紐謨那篤個謨【名】〔化〕『英 Ammonium-sodium-hydrogen phosphate』りんえん(燐鹽)に同じ。

りんさん-すなそかるしうむ 燐酸水素加爾叟母【名】〔化〕『英 Calcium hydrogen phosphate』燐酸カルシウムに、適量の硫酸を作用せしめて、そのカルシウム原子の一部を、水素原子にて置換せるもの。組織に二種の別ありて、その一種は、過燐酸石灰の主成分をなす。

りんさん-せきくわい 燐酸石灰【名】〔化〕

りんさんかるしうむ(燐酸加爾叟母)に同じ。

りんさん-そおだ 燐酸曹達【名】〔化〕『英 Sodium phosphates』次條に同じ。

りんさん-なとりうむ 燐酸那篤個謨【名】〔化〕『獨 Natriumphosphat』ナトリウムの燐酸鹽。燐酸に組織上三種の別あるがために、この物の組成も複雜にして、數種あり。市上に賣れる最も普通なるは、骨より製したる燐酸の溶液中に、炭酸曹達を、液の起泡止むまで投入すれば生じ、次に、これを濾過し、蒸發して、結晶せしめて製す。透明にして、水に溶けやすく、リトマス紙を青變するが故に、化學分析上の試藥として用ひ、又は溫和なる吐劑として醫藥に用ふ。化學上、酸性燐酸ナトリウムと呼ぶべきなれども、通常、單に、この名に呼べり。燐酸曹達。

りんさん-ひれう 燐酸肥料【名】燐酸鹽を主成分とする化學肥料。過燐酸石灰・重過燐酸石灰・海島糞・骨粉・魚肥・米糠・油粕・燐灰石など、これに屬し、化合形態同一ならぬため、その性質と肥効とは、それぞれ異なれり。

りんさん-ぶつ 林產物【名】山林より生「ずる產物。

りん-じ 綸旨【名】綸言の旨。みことのりの旨。りんじ(綸旨)參照。

りん-じ 綸絲【名】つりいと。綸。

りん-じ 痳絲【名】〔醫〕慢性の痳病患者の尿中に存する、絲狀・塵埃狀又は雲絮狀のもの。顯微鏡下に檢査すれば、痳菌・膿球等の存在を認む。「と。

りん-じ 臨視【名】臨場して觀察すること。

りん-じ 麟史【名】〔書〕りんけい(麟經)に「序。同じ。

りん-じ 倫次【名】人倫の次第。身分の順

りん-じ 輪次【名】じゅんじ(順次)に同じ。

りん-じ 綸旨【名】『綸言の旨の義』古、藏人(クワウド)の、勅旨を承けて、紙屋紙に書きて渡しし文書。宣旨の手續の簡略となりて、上卿の手を經ず、用紙も黃麻紙・白麻紙等の正式なるを用ひざるに至りしもの。「じ。にて、「被二綸旨一偶」に始まり、「者以二此旨一、可下令二申沙汰一給上、仍執達如レ件」又は「天氣如レ此悉レ此以レ狀」に終り、又、身分尊き者に對しては「執啓如レ件」又は「上啓如レ件」に終りて、宛名の上に「謹上」の二字を冠する等を一般の形式とし、親王・攝關等に對する場合には、その別當又はその他の家司(ケシ)に宛つるを例としたり。後、詔勅の手續形式は、更に簡易なるものとなりて、內侍宣(ナイシノセン)・女房奉書などの變體をも生ずるに至れり。

りん-じ 綸旨の紙【句】かみやがみ(紙屋紙)に同

りん-じ 麟次【名】魚鱗の如くに並びつづくこと。櫛比。

りん-じ 臨時【名】[1]その時に臨みて爲すこと。定まれる時ならぬこと。不時。隨時。源氏「春秋の御讀經をばさるものにて、臨時にも、さまざま、たふとき事どもをさせたまひなどして」[2]一時的に、

假に爲すこと。

臨時の給【句】王朝時代に、年給を給せらるるに當り、その定數以外に、臨時に諸國の權守(ゴンノカミ)・介(スケ)・掾(ジョウ)・目(サカン)及び内官たる助(スケ)・允(ジョウ)・丞(ジョウ)・屬(ゾク)等を給せられしこと。但し、參議には給せられざりき。

臨時の客【句】㊀招かざるに、不時に來れる客。㊁王朝時代に、正月二日、攝政・關白及び大臣の、親王及び公卿以下の上達部(カンダチメ)を、自邸に招きて、酒宴を催ししこと。儀式、殆んど大饗に同じ。藤原氏の勢を得たる後、二宮の大饗に倣ひて行ひはじめしならんといふ。年中行事歌合「臨時の客といふは、攝政・關白の家に、春の初、大臣以下の上達部(カンダチメ)を招きて、遊びたまふ事のあるなり。定まれる公務にてもあらねば、臨時の客と申すなり」

臨時の旬【句】古、二孟の旬、朔旦の旬、新所の旬、萬機の旬等以外に、別に吉日を選び、天皇、南殿に出御ありて、政事を聞しめし、群臣に宴を賜ひし儀式。しゅん(旬)㊁參照。「よ。

臨時の祭【名】まつり(祭)の條下を見

りんじえんしふせうしふ 臨時演習召集【名】陸軍の演習召集の一。充員召集の演習を目的として行ふもの。

りんじかいぐんかんごく 臨時海軍監獄【名】海軍監獄の一。臨時海軍軍法會議又は海軍合圍地軍法會議を設けたる時、その開設期間、その地に置き、囚人及び刑事被告人を拘禁留置する所。

りんじかいちやう-とくきよてすうれう 臨時開廳特許手數料【名】かいくわれう(開關料)に同じ。

りんじかぶぬしそうくわい 臨時株主總會【名】臨時に行ふ株主總會。株主の臨時總會。

りんじがみ 綸旨紙【名】かみやがみ(紙屋紙)に同じ。

りんじきがう 臨時記號【名】〔音〕調號以外の臨時變化を示すために、任意の箇所に用ふる記號。その小節のみ有効なり。

りんじきしやうでんぱう 臨時氣象電報【名】氣象局報の一種。臨時に氣象を報告するもの。

りんじきふ 臨時給【名】「臨時の給」に同じ。

りんじきやく 臨時客【名】「臨時の客」に同じ。

りんじぎゐん 臨時議員【名】臨時の必要に應じて、一時的に選擧する議員。

りんじぐんようききう-けんきうくわい 臨時軍用氣球研究會【名】陸軍大臣及び海軍大臣の監督の下に、會長・委員を以て組織し、氣球と飛行機とに關する諸般の研究を行ふ委員會。

りんじくわい 臨時會【名】臨時の必要に應じて、定期以外に開く會。(常會に對して)

りんじぐわいかうてうさゐゐん-くわい 臨時外交調査委員會【名】時局に關する重要の案件を考査・審議する合議制の官廳。宮中に設け、天皇に直隷し、總裁(内閣總理大臣、これに當る)・委員を以て組織し、職員に幹事長・幹事等あり。大正六年六月の創設に係り、委員は、國務大臣・内閣總理大臣又は國務大臣たる前官の禮遇を賜はれる者、又、親任官の中より簡拔・勅命し、なほ、特別須要の場合には、學識・經驗ある者より、臨時委員を勅命す。

りんじくわいぎ 臨時會議【名】臨時の必要に應じて、定期以外に開く會議。

りんじ-けういく-くわいぎ 臨時教育會議【名】教育に關する重要事項を調査・審議する合議制の官廳。内閣總理大臣の監督の下に、總裁・副總裁・委員を以て組織し、職員に幹事長・幹事等ありて、委員は、内閣總理大臣の奏請によりて、内閣にて命じ、又、特別の事項を調査・審議するため必要なる場合には、臨時委員を置くことを得。

りんじ-こくせいてうさ-きよく 臨時國勢調査局【名】内閣總理大臣の管理の下に屬し、長官(内閣書記官長、これに當る)・次長(内閣統計局長、これに當る)・事務官・統計官・統計官補・屬の職員ありて、第一回の國勢調査に關する事務を掌りし局。大正七年五月の創設に係る。

りんじ-こくみんけいざい-てうさくわい 臨時國民經濟調査會【名】内閣總理大臣の監督の下に、會長(一人、内閣總理大臣、これに當る)・副會長(二人)・委員(五十人以内)にて組織し、職員に幹事長(一人)・幹事(若干人)及び書記ありて、物價の調節、その他國民の生活に緊切なる經濟上の施設事項を調査・審議する合議機關。關係各大臣の諮詢に應じて意見を開申し、且つ關係各大臣に建議するを得るものとし、特別事項審議の必要に際しては、臨時委員を置くことを得。大正七年九月、世界戰爭のための臨時の設置に係り、委員及び臨時委員は、内閣總理大臣の奏請により、關係各廳の高等官及び學識・經驗ある者の中より、内閣に於てこれを命ず。

りんじさい 臨時祭【名】「臨時の祭」に同じ。 續古事談「臨時祭の舞人」

りんじさいにふ 臨時歲入【名】時日も、金額も、共に不定なる收入。

りんじさいばんしよ 臨時裁判所【名】明治五年八月設置せられし司法裁判所の一。必要の場合に組織し、初は、裁判官の犯罪を裁判し、及び國事犯を審査して、司法卿に具上するものなりしが、明治六年十二月以後、司法省裁判所の判決に對する上告を審判する權限を加へられしより、最高の裁判所となり、同八年五月廢止せられたり。

りんじ-さんげふ-てうさきよく 臨時産業調査局【名】世界戰爭の際、農商務大臣の管理の下に、總裁(農商務大臣、これに當る)・部長(農商務次官又は局長、これに當る)・事務官・技師・屬・技手ありて、戰時及び戰後に亙り、帝國にて施設すべき産業上の必要事項を調査せし官署。又、學識・經驗ある者の中より、農商務大臣の奏請によりて、内閣にて命じたる評議員若干名ありて、農商務大臣の諮詢に應じ、主要事項の審議・調査に從ひたり。

りんじ-しうしきよく 臨時修史局【名】明治十九年修史館廢止の後を承けて、臨時、内閣に置かれ、職員に編修長・編修・書記ありて、修史の事を掌りし局。

りんじしけん 臨時試驗【名】臨時に行ふ試驗。(定期試驗に對して)

りんじしけん-こうさい 臨時事件公債【名】我國の國債の一。明治三十九年二月、臨時の事件に要する經費を支辨するため募集せしもの。總額二億圓、年利五分。

りんじしや 臨時赦【名】古の赦(ゼ)の一。輕き罪の者のみを赦ししもの。

りんじじよゐ 臨時敍位【名】古、敍位㊁以外に、臨時に位階を授けしこと。小敍位。

りんじぜい 臨時稅【名】臨時の必要に應じ、一定の期間を限りて徵集する租稅。

りんじせうしふ 臨時召集【名】陸軍召集の一。戰時又は事變によりて必要ある場合、臨時に在鄕軍人に對して行ふもの。

りんじせうしふ-れいじやう 臨時召集令狀【名】臨時召集に應ぜしむるため、聯隊區司令官の作成して、應召員に交付する令狀。

りんじせんきよ 臨時選擧【名】臨時に行ふ選擧。(定期選擧に對して)

りんじ-そうくわい 臨時總會【名】總會の一。定期總會以外に、臨時に招集するもの(株主總會などにいふ)。

りんじ-だいりこうし 臨時代理公使【名】公使の不在中、書記官が、その代理を務むるもの。

りんじ-だいりたいし 臨時代理大使【名】大使の不在中、書記官が、その代理を務むるもの。

りんじ-ちくじやう 臨時築城【名】〔兵〕必要に應じて、臨時に主要地點に築く城塞。(永久築城・半永久築城に對して)

りんじ-ぢもく 臨時除目【名】定期以外に行ひし除目。小除目。

りんじ-ちよう-へいしよ 臨時徵兵署【名】下級徵兵署の裁決に對する訴願につき、

總理徴兵官又は師管徴兵官にて原裁決を不當と認め、又は詐僞若しくは錯誤に起因せるものと認めて、これを取り消し、更に處分を命ずるため、臨時に開設する徴兵署。

りん-しつ 痲疾・淋疾【名】〔醫〕りんびやう

りん-しつ 隣室・鄰室【名】隣接せる室。となりのへや。となりざしき。

りん-じ-つみたてきん 臨時積立金【名】臨時費に支出する目的にて、純益金中よりする積立金。

りん-じ-ていしつ-へんしうきよく 臨時帝室編修局【名】宮内省に置かれ、職員に總裁・副總裁・幹事・編修長・編修・書記ありて、明治天皇紀を編修する局。大正三年十二月の臨時の設置に係り、なほ、別に、宮内大臣の奏請によりて、勅命せらるる顧問を置く。

りん-じ-とくめいぜんけんたいし 臨時特命全權大使【名】特定の國際事務處理のために、臨時に派遣せらるる特命全權大使。

りん-じ-ないきふ 臨時内給【名】ないきふ「(内給)を見よ。

りん-じ-にんわうゑ 臨時仁王會【名】『一代一度の仁王會に對して、臨時といふ』春季仁王會と秋季仁王會と。にんわうゑ(仁王會)の條下を見よ。

りん-じ-はふゐん 臨時法院【名】臺灣總督府法院の一。政府の顧覆、邦土の僭竊、その他朝憲を紊亂せんとし、又、施政に反抗して暴動を企て、又、政事に關し、樞要の官職に在る者に危害を加へんとして、罪を犯したる者、外患に關する罪を犯したる者、及び匪徒刑罰令に掲げたる罪を犯したる者ありて、臺灣總督がその必要を認めたる時、便宜の場所に開設し、普通の裁判管轄に拘らず審判せしむる、合議制の裁判所。その判官は覆審法院又は地方法院の判官を以て兼補し、その裁判は第一審にて終審とす。

りん-じ-ひ 臨時費【名】臨時に、又は數年間不規則に繼續して支出する費用。(經常費に對して)

りん-しふ 鱗集【名】魚鱗の如くに集まること。「(林子平)を見よ。

りん-しへい 林子平【名】〔人〕はやしへい

りん-しへんさんぶ 臨時編纂部【名】御歌所に置かれ、職員に部長・委員・幹事・書記ありて、明治天皇の御製を編纂する部。

りん-じ-ほうへいさい 臨時奉幣祭【名】伊勢大神宮の大祭の一。臨時に奉幣ある時に行ふもの。「時祭」に同じ。

りん-じ-まつり 臨時祭【名】りんじさい(臨

りん-しん 林神【名】りんきやう(林鶯)に「なりの人。同じ。

りん-じん 隣人・鄰人【名】隣家の人。と

りん-じん 輪人【名】車を造る工人。

りん-じん 廩人【名】米倉の番人。

りん-じ-もどし 臨時戻【名】〔商〕臨時の戻稅。

りん-しや 隣舍・鄰舍【名】隣接せる屋舍。

りん-しや 臨寫【名】手本を見て寫すこと。りんぼ(臨摹)參照。

りん-しやう 臨床【名】醫師が病床の側に行くこと。「五常。

りん-じやう 倫常【名】人倫の道。五倫・

りん-じやう 輪狀【名】輪(ワ)に似たる形。

りん-しやう-かうぎ 臨床講義【名】『獨Klinische Vorträge』醫學の教師が、講堂に患者を連れ來り、學生にこれを實驗せしめながら爲す講義。

りん-しやうじよ 藺相如【名】〔人〕支那戰國時代の名士。趙の人。趙の宦者の令繆賢の舍人。趙の惠文王のために、秦の强勢を挫折すること數次、功を以て、上卿に至る。れんぱ(廉頗)參照。

りん-しやう-ゐん 麟祥院【名】東京市本郷區龍岡(ノカヅ)町にある臨濟宗妙心寺派の寺。天澤山と號す。臨濟宗江戸四箇寺の一。本尊は釋迦牟尼佛。開山は本寂定光禪寺渭川周瀏。德川家光の乳母春日局(ノカスガ)の建立。初、報恩山天澤寺と呼びしを、局の法號麟祥院殿仁淵義大姉に依りて、今の名に改む。枳殼寺(カラタチ)といふ。

りん-しやう-ゐ 臨正會【名】『修正會(シユウ)に先だちて行ふよりいふ』東京市淺草區の淺草寺にて、除夜の鐘を鳴らす時に行ふ法會。

りん-しやく 悋惜・悋惜【名】りんせき(悋惜)に同じ。運歩色葉集「悋惜、リンシヤク」

りん-じやく 輪尺【名】『英 Calliper』樹木の直徑を測定する器の一。

りん-じ-やく 臨時役【名】臨時に課する稅。(定役(ヂヤウヤク)に對して)〔德川時代の語〕

りん-じ-やとひ 臨時雇【名】必要に應じて臨時に雇ひ入るること、又その人。(常雇に對して)

りん-じゆ 林樹【名】森林の樹木。林木。

りん-じゆう 臨終【名】『生命の終に臨む義』死にぎは。いまは。末期(マツゴ)。最期。往生。臨命終(リンミヤウジユウ)。

臨終正念【句】〔佛〕臨終の際、三毒の邪念起ることなく、專ら菩提(ボダイ)の心に住すること。平生の行業(ギヤウ)に由りて、專修する所なり。平家「偏に彌陀の名號を唱へ、臨終正念をぞ祈られける」

臨終の一念は無量劫を引く【句】〔佛〕「最期の一念は、善惡の生(シヤウ)を引く」に同じ。〔諺語〕生玉心中「臨終の一念は無量劫を引くと云ふ」

りん-じゆう-がほ 臨終顏【名】臨終の時の顏つき。しにがほ。五十年忌歌念佛「臨終顏も菩薩の數、二十五歲の命は消えて」

りん-じゆう-ぶつ 臨終佛【名】〔佛〕『阿彌陀經に「臨二命終一時、阿彌陀與二諸聖衆一、現二在其前一」とあり』念佛の行者(ギヤウ)の、臨終の際に、その前に現るといふ阿彌陀佛。臨命終(リンミヤウ)の佛(ホトケ)。增鏡「繪像の阿彌陀、余五將軍の臨終佛なりけるを、惠心僧都の傳へられたりけるを」

りん-じゆん 麟峋【貌】山の高く聳えたるさま。

りん-しよ 臨書【名】文字を臨寫すること。

りん-しよう 林松【名】林の松。太平記「霜を戴く林松の色」

りん-しよう 林鐘【名】一じふにてうし(十二調子)を見よ。二陰暦六月の異稱。

りん-しよう-しう 林鐘州【名】ゑてんらく(越天樂)の異稱。

りん-しよう-ばい りんしよう梅【名】〔植〕いはうめ(岩梅)に同じ。

りん-しよく 吝嗇【名】やぶさかなること。しはきこと。けち。悋慾。

りん-しよく-か 吝嗇家【名】吝嗇なる人。

りん-しよく-ど 吝嗇奴【名】吝嗇家を罵りていふ語。けちんぼう。

りん-しよし 林處士【名】〔人〕りんぼ(林逋)を見よ。

りん-じ-りくぐん-ちゆうあうさんぎぶ 臨時陸軍中央金櫃部【名】陸軍官衙の一。戰時又は時變の際、東京に設置し、部長・部員・下士・判任文官の職任ありて、臨時の陸軍經費に關する收入・支出及びその計算報告の事を掌る所。

りん-しるゐ 鱗翅類【名】〔動〕昆蟲類の一目。二對の翅と體面とに、微細なる鱗片を被り、中には、甚だ美麗なる翅を具ふるものあり。變態は完全。口器は、上唇・下唇及び大顎は共に退化し、小顎著しく延長して、細長き管を形成し、花蜜を吸ふに適し、常には螺旋狀に卷曲す。蝶類・蛾類の二亞目に分つ。各條を見よ。

りん-じ-ゐどくわんそくじよ 臨時緯度觀測所【名】文部省管轄の下に、陸中國水澤町に設けて、緯度變化を觀測する所。萬國測地學協會の發議によりて、北緯三十九度八分の地六箇所に、共同觀測所を設け、西曆一九〇〇年(明治三十二年)より觀測を開始せるものの一にして、天頂儀を使用し、タルコット法(Talcott's method)によりて觀測し、開始以來、緯度變化の觀測上、世界的に有名なる理學博士木村榮、主として、これを擔當す。

りん-じ-ゐん 臨時委員【名】必要に應じて、一時的に設置する委員。(常置委員に對して)

りん-ず 綸子・綾子【名】『綾子の字の唐音』經(ケイ)・緯(イ)共に生絲を用ひ、製織後精練を加へたる紋織物。紗綾(サヤ)に似て、厚く且つ滑かにて、光澤と粘氣とを有す。

緯に綿絲を用ひたる綿(ワタ)綸子といふもありて、これに對して、經緯共に生絲なるを本綸子といふ。和漢三才圖會「綾子・綸子、俗里牟須」

りんず-がた 綸子形【名】まんじつなぎ(卍字繋)を云ふ。〔京都・大阪の語〕

りんず-がみ 綸子紙【名】白粉(ヒロフ)の包紙に用ふる紙。

りん-せい 林政【名】森林及び林業に關する行政。

りん-せい 輪精【名】海船の舵の羽板(ハイ)にある孔。しほふき。

りん-せい 稟性・禀性【名】ひんせい(禀性)の誤讀。

りん-せい 稟請・禀請【名】ひんせい(稟請)の誤讀。

りん-せい 輪生【名】■輪狀に生ゆること。■〔植〕『英 Verticillate』三枚以上の葉の、一莖節より、その周りを圍むが如くに生ずること。爽竹桃(ケウチク)の葉に於けるが如きこれなり。(互生・對生に對して)

りんせい 林清【名】『歌念佛の名手日暮(ヒグレ)林清の名を取りて呼ぶ』義太夫節に用ふる曲節の一。歌念佛より出づ。

りんせい-がく 林政學【名】『獨 Forstpolitik』森林及び林業に對する國家の行政政策を論ずる學。

りんせい-くわじよ 輪生花序【名】〔植〕『英 Whorled inflorescence』花序の一。葉腋に數花叢生するもの。

りん-せう 廩稍・稟稍【名】官より、支給する食料の米。ふちまい。

りん-せき 薦席【名】ゐむしろ。たたみ。

りん-せき 隣席・鄰席【名】隣室の座席。となりざしき。「と。出席。

りん-せき 臨席【名】その席にのぞむこ

りん-せき 悋惜・悋惜【名】ものをしみすること。しはきこと。吝嗇。

りん-せつ 臨說・輪說【名】『源氏物語若菜の卷に「りんの手」といふ語ありて、河海抄には「輪說なり」とあり、細流抄には「臨說なり」と註せり』琴の手の一。りん。

りん-せつ 隣接・鄰接【名】となりあひて續くこと。となりつづき。

りん-せつ 林雪【名】『前前條の語の轉義か』小唄の節の一。唱歌は一節切(ヒトヨ)に同じく、三味線には合はず。みだれ。

りん-せん 綸宣【名】りんげん(綸言)に同じ。太平記「綸宣儻被ㇾ優二死刑一」

りん-せん 林泉【名】山林と泉石と、又それの存在する庭園。

りん-せん 林錢【名】りんえい(林永)に同じ。

りん-せん 臨戰【名】戰に臨むこと。

りん-せん 輪山【名】〔佛〕てつゐせん(鐵圍山)に同じ。

りん-せん 輪旋【名】せんくわい(旋廻)に同じ。

りん-せん 臨川【名】■川に臨むこと。■〔地〕支那江西省撫州府に屬する縣。王安石・湯顯祖(臨川と號す)の生地として名高し。

臨川の五峰【句】〔地〕支那の臨川にある、五つの峯、即ち青雲・遊遙・鹿歩・黃家・天慶の總稱。

りん-ぜん 凜然【貌】りんりん(凜凜)に同じ。

りん-ぜん-じ 臨川寺【名】古、山城國嵯峨の天龍寺の東、大井川の端にありし寺。靈龜山と號し、京都十刹の第二に列したり。增鑾「昭慶門院は、……、大井川に向ひて離れたる院のあるをぞ奉らせたまへれば、そこにおはしましほどに、川端殿(カハドノ)の女院など、人は申しはべりし。かの所は、臨川寺とぞいふめる」

りん-せん-じ-ぶぎやう 臨川寺奉行【名】室町幕府の職制の一。山城國嵯峨なる臨川寺に關する政務を掌りしもの。

りん-せん-じゆんび 臨戰準備【名】せんじゆんび(戰鬪準備)を見よ。

りん-せん-ち 臨戰地【名】戒嚴により、臨戰地境と定められたる土地。

りん-せん-ちきやう 臨戰地境【名】戒嚴地境の一種。戰事又は事變に際し、警戒を要する區域の地。その地境内の行政事務及び司法事務の内、軍務に關係あるものは、軍司令官の指揮を請ひたる上にて執行す。(合圍地境に對して)

りん-そ 燐素【名】〔化〕りん(燐)に同じ。

りん-そう 林藪【名】■はやしとやぶと。

やぶだたみ。盛衰記「俎上の魚の、江河に移り、刀下の鳥の、林藪に交はるとは」■多く、物事の集まれる處の譬。淵藪。

りん-そうじ 林宗二【名】〔人〕りんぼ(林逋)を見よ。

りん-ぞく 鱗族【名】鱗(コロ)のある動物、即ち魚類。魚族。(羽族・毛族などに對して)

りん-ぞく 廩粟・稟粟【名】倉に貯へたる「米。廩米。

りん-そん 隣村・鄰村【名】隣接せる村。となりむら。

りんだい 輪臺【名】■〔地〕支那新疆省焉耆(ヱンキ)府に屬する縣、又、古、その地にありし西域の一國。■舞樂の曲の一。唐樂にて、盤涉(バンセフ)調に屬す。もと支那西域の輪臺國より渡來せしものにして、もと平調(ヒヤウデウ)なりしが、仁明天皇の時、良峯(ヨシミネ)安世、勅を奉じて、この舞を作り、又、勅によりて、盤涉調に改む。臺蘊「りんだいを、けしきばかり立ちて舞ひたまへば」

りんだい 麟臺【名】ひしよせい(祕書省)■

りんたう 林塘【名】林のある塘(ツツミ)。平家「島の内を尋ね廻るに、或は林塘の妙(ヨ)なるあり」「貫く柱。

りんたう 輪檯【名】〔佛〕塔上の九輪を

りんだう 龍膽【名】■〔植〕龍膽科に屬する多年生の草。莖は、一二尺に至り、葉は對生し、廣披針形又は長卵形にして、先端尖り、質やや厚くして、三脈縱走し、や竹の葉に似て、葉柄を缺く。秋、莖頂又は上部の葉腋に、碧紫色にして、末端五裂せる合瓣花を開き、花後、蒴果を結ぶ。山野に自生し、又觀賞用として栽培す。根は苦味ありて、健胃劑に用ふ。りうたん。えやみぐさ。にがな。たつのいぐさ。源氏「りんだう・なでしこなどの咲き出でたるを」■紋所の一。前項の草の花に象りたるもの。笹(ササ)龍膽・龍膽車・龍膽菱・三葉(ミツバ)龍膽などの種類あり。■襲(カサネ)の色目の一。表は蘇芳(一說には黃)裏は青。女房の五衣(キヌ)のは、燕子花(カキツバタ)■のと同一。秋用ふ。りうたん。

(龍膽)

りん-だう 輪道【名】〔理〕『英 Chronic』電流のは、電池又は發電機の兩極を銅線にて連結し、その銅線の間に、電流を使用する裝置を入れ、それらが一つの輪をなす如き形となること、普通なるによりていひ、磁力のも、これに擬へていふ。電氣又は磁氣の通ずる路。又、電氣のは、電路といひ、磁氣のは、磁路といふ。わみち。電氣工學にては、回路又は回線といふ。

りんだう-ぐるま 龍膽車【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(龍膽車)

りんだう-くわ 龍膽科【名】〔植〕顯花植物、被子類、雙子葉門・合瓣花區の一科。凡そ六十四屬、八百種を含み、大抵は草本、稀に灌木。我國に自生し、又は栽培せらるるもの九屬・四十七種を算す。

りんだう-たうがらし 龍膽唐辛【名】紋所の一。龍膽車の花の所に、唐辛の實を描けるもの。

りんだう-たちわき 龍膽立涌【名】立涌の一。龍膽の模樣に立涌をなしたるもの。

りんだう-びし 龍膽菱【名】紋所の一。龍膽の葉四枚を以て、菱形を作り、内に葉と花と各二箇を容れたるもの。

りん-たふ 輪塔【名】〔佛〕「五輪の塔」に同じ。謠曲「老松」「火焔の輪塔」

りん-ため 厘秤・釐秤【名】りんばかり(厘秤)に同じ。胸算用「小判を厘秤に懸ける事」

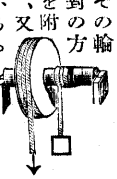
りん-ち (英 Lynch)【名】■北米合衆國の白人間にて、黑人種に加ふる、慘酷なる私刑。州の立法議會の承認を經たるものといふ。■私刑。私的制裁。

りん-ち 隣地・鄰地【名】隣接せる土地。となりぢめん。

りん-ち 臨池【名】■『王羲之の與人書に「張芝臨ㇾ池學ㇾ書、池水盡黑」とあるに本づく。張芝は支那後漢の人にて、草聖の名あり。常に硯の水に乏しければとて、

池に臨みて書き習ひたりといふ』てならひ。習字。 ㊁〔人〕屋代弘賢の雅號。

りん-ぎく 輪軸 【名】〔理〕『英Wheel and axle』輪を軸に固定せしめ、その兩者に、各、綱を卷き、軸の綱を物體に結び附け、輪の綱を引きて、その輪と軸とに、互に反對の方向に轉回する綱を附し、物體を引き上げ、又は引き寄するに用ふるもの。力點・支點・重點の關係は、槓杆に同じきが故に、輪の大なるに隨ひ、力の利、ますます大なり。車地(チヂ)・轆轤など、この類なり。


(くぢんり)

りんぢ-だう 輪地道 【名】火羅(クワ)國へ赴く途中に三つの道ありといふ内の一。平安大唐の一行阿闍梨は、……火羅國へ流されさせたまふ。件の國へは、三つの道あり。輪池道とて、御幸道(ミユキカウ)、幽地道とて、雜人(ザフ)の通ふ道、暗穴道とて、重科の者を遣す道なり」

りん-ちん 隣砧・隣礎 【名】隣家にて打つきぬた。 謠曲(砧)「隣砧ゆるく急にして、「に同じ。月、西に流る」

りん-ちや 林茶 【名】〔植〕**りんさう**(林投)

りん-ちやう 隣町・鄰町 【名】隣接せる町。丹波與作「隣町・隣家の旅籠屋(ヤウ)ども」

りん-ぢやう 臨場 【名】その場に臨むこと。臨席。

りんちやう-ぎ 【名】〔植〕次條の轉訛。

りんちやう-げ 輪丁花 【名】〔植〕**ぢんちやうげ**(沈丁花)の轉訛。 釋迦如來誕生會「誰か悟文字(モジ)輪丁花」

りん-ちゆう 林中 【名】林のなか。林間。

りん-ちゆう 鱗蟲 【名】鱗(ウロ)ある蟲、即ち蛇など。鱗蟲の長【句】〔動〕『孔子家語の執轡篇に「鱗蟲三百有六十、而龍爲之長」とあるに本づく』**りゆう**(龍)㊁の異名。

りん-ちゆう 輪蟲 【名】〔動〕輪蟲類に屬する動物。くるまむし。

りんちゆう-るね 輪蟲類 【名】〔動〕顯微鏡によりて始めて見るを得る一類の動物。曾ては、原生動物中に編入せられしことあれど、幾ばくもなく複細胞動物なること明かにせられて、分類上、別個の一門を立つるに至れり。形は延長形又は類楕圓形にして、體の前端に伸縮自在なる盤狀部ありて、纖毛族生し、これを車輪の如くに動かして、渦流を起し、以て食物を口に誘入す。後端は細く尖り、尾を形成す。雌雄異體にして、雄は、普通雌よりも遙かに小し。多く淡水に產し、よく乾燥に堪へて、濕氣至るや再び活動するものあり。擔輪動物。

りん-ちよく 輪直 【名】輪番の宿直。

りんぢよ-ごげん 隣女晤言 【名】〔書〕『最初に、隣女の事を揭げたるより、取りて、題號とす』和漢の古事・古言等を輯集・解說せるもの。二卷。京都の僧慈延の著。

りん-づけ 厘附 【名】**めんづけ**(免附)に同じ。「に同じ。

りんづけ-どり 厘附取 【名】**りんどり**(厘取)

りん-てい 隣邸・鄰邸 【名】隣接せる邸宅。

りん-てい 輪蹄 【名】㊀車輪と馬蹄と。㊁車と馬と。車馬。「と。

りん-てう 臨眺 【名】高所より見渡すこと。

りん-てき 隣敵・鄰敵 【名】隣接せる敵國又は敵人。

りん-てき 隣笛・鄰笛 【名】㊀隣家にて吹く笛。㊁『向秀の思舊賦に見ゆ』支那晉の向秀が、嵇康・呂安の死後、その舊廬を經て、その隣人の笛を吹くを聞きて、昔日遊宴の好誼を追思せし故事。となりのふえ。「病」に同じ。〔俚語〕

りん-てき 痳的・淋的 【名】**りんびやう**(痳病)に同じ。

りん-でふ 臨帖 【名】手本を見ながら、書を習ふこと、又その手本。臨書。臨本。

りん-てん 輪轉 【名】㊀**りんせん**(輪旋)に同じ。㊁大輪轉(オホリン)と小輪轉(コリン)との總稱。

りんてん-き 輪轉機 【名】『英Rotary Printing-machine 又 Rotary Press』同時に兩面の印刷又は二色以上の印刷をなし得る、最も進歩せる、精巧なる印刷器械。版面臺も料紙を壓迫するシリンドルも圓筒形をなし、版面も彎曲して、その圓筒の表面に取り附けられ、この兩圓筒の相接觸しつつ廻轉する間を、料紙を長卷のまま通過せしむるやうにせるもの。廻轉敏速、取扱も容易に、從ひて刷上(ズリアゲ)の枚數も多く、且つ印刷と同時に、一枚づつの小片に切斷せらるる裝置なるが故に、新聞紙・雜誌等の印刷に賞用せらる。

りん-とう 輪燈 【名】佛前に、天井より吊し下ぐる、輪形の燈籠。多くは、眞鍮にて作る。 榮花「輪燈は、飛ぶ車の形を作りて、水車の形を作り、羅綱燈とては、或は、むらごの組、色色にして、結びわたしたり」

りん-とう 林藤 【名】〔佛〕『倶舍論の卷十二に「地餅後隱。爾時復有二林藤出現一、鏡恥食」とありて、倶舍頌疏記の卷十二に「林藤者、謂以二藤出成一林故名二林藤一」と見ゆ』劫初の人の食物なりといふ物。正統論「地味又失せて、林藤といふ物あり(或は地皮ともいふ)、衆生(ウジヤウ)、又食とす」

りん-とう 林投 【名】〔植〕露兜樹(ロトウジユ)科に屬する喬木。幹は細長にして一二丈に達し、枝を分ち、幹枝より長き氣根を生ず。葉は細長にして、その頂は長尾をなし、葉緣に刺あり。花は單性・雌雄異株にして、雄花數多攢簇して、複穗狀花序をなし、香氣高し。五十箇乃至八十箇ほどの核果より成る大形の集合果、下垂して實のり、各核果は長さ一二寸、幅七分乃至二寸、成熟すれば紅色を呈し、內部は五六胞を成す。臺灣に產し、葉は謂はゆる臺灣パナマ帽子、その他、蓆・籠などの製造に用ふ。琉球に產する阿且(アダ)は、この變種なり。しまたこのき。たいわんたこのき。りんちや。

りんとうじゆ-くわ 林投樹科 【名】〔植〕**たこのきくわ**(露兜樹科)に同じ。「と。

りん-どく 輪讀 【名】輪番に讀書すること。

りん-どく 痳毒・淋毒 【名】痳病の毒。

りん-どり 厘取 【名】昔、田租を、厘附にして取り立てしこと、從ひて、その額、豐凶によりて增減あるのみならず、何升何合と端米を生ず。上方地方に多く行はれたり。りんづけどり。(反取(ドリ))に對して)

りん-ね 輪廻 【名】**りんゑ**(輪廻)を見よ。

りんねる (獨Linnen の訛)【名】亞麻の纖維にて織りたる、薄地の布。りねん。

りんの-たま 輪玉 【名】昔の淫具の一。一代男「牛蒡(ゴボウ)・薯蕷(イモ)・卵……地黃丸(ヂワウ)……女富丹(ニヨウ)……りんの玉」

りんぱ 淋巴 (羅Lympha)【名】〔醫〕血液の、毛細管內を流通して、毛細管外の組織の、これによりて滋養分を受くる際、血漿の一部、毛細管の壁を滲過して、組織に入る無色・透明の液體。斯くて、身體の各部に於て、組織を養ひたる後、多くの淋巴管に集まり、相合して、遂には靜脈に入り、血液と混合して、心臟に還流す。水・鹽類・蛋白質・レチチン脂肪・糖・尿素・エキス分より成り、その內に、少量の淋巴球・脂肪顆粒、稀に赤血球の如き有形成分を含有す。

りん-ぱい 輪背・輪褙 【名】『へうはい(表褙)を見よ』緣(ヘリ)を細く取り附くる表具。「に同じ。

りん-ぱう 隣房・鄰房 【名】**りんしつ**(隣室)

りん-ぱう 隣邦・鄰邦 【名】隣接せる邦國。となりぐに。

りん-ぱう 隣保・鄰保 【名】『支那周代の行政區劃にて、五家を隣とし、互に保證せしめて、治安に資せしよりいふ』互に近接して住める家家、又その人人。となり近所。向(ムカ)三軒、兩隣(リヤウドナリ)。

りんぱ-えき 淋巴液 【名】〔醫〕**りんぱ**(淋巴)に同じ。

りんぱ-かり 厘秤・釐秤 【名】**れいてんぐ**(釐「等具」に同じ。

りんぱ-きう 淋巴球 【名】〔醫〕『獨Lymphkörperchen』淋巴中に存する、球狀の細胞。

りんぱ-くわん 淋巴管 (獨Lymphgefässe)【名】〔醫〕組織間に滲出する淋巴の流通する多くの細管。全身に通じ、皮下を循行するものと、內部に深在するものとあり。腸管より起る淋巴管は、乳糜(ニウビ)を流通せしむるが故に、別に乳糜管の名あり。

りんぱ-さいはう 淋巴細胞 (獨Lymphzelle)【名】〔醫〕**はくけつきう**(白血球)に同じ。

りんぱ-せん 淋巴腺（獨 Lymphdrüsen）【名】〔醫〕多くの淋巴管を受け入れ、又はこれを出す腺。圓形又は楕圓形をなし、淋巴管と同樣に、皮下にあるものと、內部に深在するものとあり、多數群在する部位は、頸部・腋窩・鼠蹊部等にして、瘰癧・横痃などに於けるが如く、病的腫脹を呈することあり。淋巴管を流通する淋巴は、又、この腺をも通過し、ここに於て濾過せらる。

りんぱつ 輪伐【名】年年森林の一部づつを、順次に伐採しゆくこと。

りんばん 輪番【名】㊀じゅんばん（順番）に同じ。㊁〔佛〕『上位より遞次して、下位に到り、復た還りて上位に及ぶこと、車輪の如くなるよりいふ』眞宗にて、寺院を守る役僧。

りん-びやう 淋病・淋病【名】〔醫〕ゴノゴックスと呼ぶ重球菌の感染によりて起る化膿性炎症。主に、泌尿生殖系を冒し、尿道の疼痛を發し、尿道口より膿漏あり、尿意頻數（サク）を來し、急性より慢性に變じ、尿道のみならず、膀胱・攝護腺・睾丸等に及ぶことあるのみならず、血中に移行して、關節・筋・腱・腹膜・心臟內膜・肋膜等を襲ひ、發熱して、死に至らしむることあり。女子のにありては、消渴（カツケツ）ともいふ。傳染は、主として、不潔の交接にあれども、又、淋菌の附著せる布帛・器物などよりすることありて、眼に入る時は、猛烈なる結膜炎を發して、失明に至らしむ。淋疾。しばゆばり。

りん-ぷ 林霧【名】**りんむ**（林霧）に同じ。

平家「花の色は、林霧の底に綻び、鈴（レイ）の音は、尾の上（ノ）の雲に響けり」

りん-ぷう 臨風【名】高所にて、風に對すること。

りん-べい 廩米【名】倉に貯へてある米。くらまい。りんまい。廩粟。「たり。

りん-ぺん 隣邊・鄰邊【名】近所。近邊。あ

りん-ぺん 輪扁【名】〔人〕輪人にて、名を扁といふ者。齊の桓公に對して、技術の妙諦は、父子の間と雖も、口舌を以て傳へ授くること難き旨を告げきといふ寓話、莊子の天道篇に見ゆ。正統記「輪扁が輪を削りて、齊の桓公を敎へ、弓工が弓を作りて、唐の太宗を悟らしむる類もあり」

りんぽ 臨摹・臨摸【名】㊀手本を見ながら書くことと、手本を透寫（ウツシウツ）にすること。臨寫と摸寫と。㊁眞似て書き寫すこと。同じ。

りんぽ 隣保・鄰保【名】**りんぱう**（隣保）に同じ。

りんぽ 輪補・輪甫【名】**りんぱい**（輪補）に同じ。

りんぽ 林逋【名】〔人〕支那宋の隱士。字は君復。錢塘の人。少くして孤となり、自ら刻苦して、學を修む。性恬淡にして、古道を好み、榮利に近かず。西湖の小孤山に住すること二十年、足一たび城市を蹈まず。又、一生娶らず、梅花を愛し、鶴を養ふ。詩畫及び行草の書を善くしたれども、詩は、散佚に任せて、自ら稿を錄せず。死するや、仁宗、賻を賜ひ、又、諡して、和靖先生と賜ふ。その裔林宗二、我國に歸化して、廬瀨宗二といふ。**まんぢゆうやぼん**（饅頭屋本）參照。

りん-ぼう 輪寶【名】㊀〔佛〕『梵Cakra（斫訖羅）の譯語』轉輪王の、位に卽く時、天より感得すといふ寶器。王の遊行する處、必ず前進して、四方を制服すといひ、金輪（コンリン）（千輻）・銀輪（七百五十輻）・銅輪（五百輻）・鐵輻（二百五十輻）の四種ありて、總稱して四輪といひ、轉輪王にも、金輪王・銀輪王・銅輪王・鐵輪王の四種の優劣を生ずと說く。もと印度の兵器にして、通常車輪の形をなし、鋭くして、敵に投げて、これを殪すに用ひしを、宗敎上の說明に轉用せるなり。太平記「輪寶の山を崩し、磊石の卵を壓するに異ならず」㊁紋所の一。前項の輪寶に象りたるもの。普通の輪寶の外、五（イツ）輪寶・六（ムツ）輪寶・菊形（キクガタ）輪寶・三宅（ミヤケ）輪寶などの種類あり。［輪鋒］

（㊁ うぼんりん）

りんぽう-ぎく 輪鋒菊【名】〔植〕**まつむしさう**（松蟲草）に同じ。

りんぼく 輪木【名】〔植〕薔薇（ショウビ）科に屬する常綠喬木。高さ一丈五尺に達し、樹皮は赤黑色を呈し、葉は披針形にして、質剛厚、葉柄短く、緣邊の鋸齒尖りて、針の如し。花は總序花序をなす。吸地の產にて、材は帶紅淡褐にして、その質輕軟・小細工用に適す。伊豆國にては、樹皮の煎汁にて、雁皮紙及び藥袋紙を淡紅色ならしむる染料に用ひ、葉と根とは藥用に供す。かたさくら。たてぎ。はんさざくら。ひらぎがし。ほかのき。めひらぎ。やまちばち。

りんぼく 林木【名】森林の樹木。林樹。

りんぼく 鱗木【名】〔地〕『英Lepidodendron』古生代石炭紀の巨大なる隱花植物。幹の表面に、鱗を列べたるが如き模樣あり。支那に產す。「むこと。沈沒。

りんぼつ 淪沒【名】水中などに陷り沈

りんぼん 臨本【名】**りんてふ**（臨帖）に同じ。「記。

りんぼゑ 輪補繪【名】**りんぱい**（輪補）の

りんまい 廩米【名】㊀**りんべい**（廩米）に同じ。㊁**ふちまい**（扶持米）に同じ。

りんまう 林莽【名】草木の深く茂れること。

りんまう 厘毛・釐毛【名】『**りん**（釐）を見よ』㊀厘と毛と、卽ち極めて僅かなる金額。「厘毛も割引無し」㊁わづか。僅少。毫末。毫釐（ガウリ）。

りん-まつち 燐燐寸【名】**わうりんまつち**（黃燐燐寸）に同じ。

りん-みやうじゆう 臨命終【名】**りんじゆう**（臨終）に同じ。「（臨終）に同じ。

りん-みやうじゆう 臨命終の佛【句】〔佛〕**りんじゆうぶつ**（臨終佛）に同じ。曾我「臨命終の佛たち、親のために廻向（ヱカウ）する、迎へ取りたまへ」

りん-む 林務【名】森林に關する事務。

りん-む 林霧【名】林に立ちまよふ霧。

りんむ-ぎし 林務技師【名】**さんりんぎし**（山林技師）の舊稱。

りんむ-ぎしゆ 林務技手【名】**さんりんぎしゆ**（山林技手）の舊稱。

りんむ-くわん 林務官【名】㊀御料林・國有林の經營に關する業務に從事する官吏。御料林のは、帝室林野管理局の主事・主事補・屬・技師・技手なり。㊁**さんりんじむくわん**（山林事務官）の舊稱。

りんむくわん-ほ 林務官補【名】**さんりんじむくわんほ**（山林事務官補）の舊稱。

りん-めい 綸命【名】**りんげん**（綸言）に同じ。太平記「威を綸命の下に假りて、世を叛逆の中に奪はんと企てける心中」

りん-も 臨摹・臨摸【名】**りんぽ**（臨摹）に同じ。

りん-もじ 悋文字【名】『**もじ**（文字）は接尾語』**りんき**（悋氣）に同じ。松風村雨束帶鑑「御かもじ樣、悋もじに、先づお暇といふ籬（キザ）」

りん-や 林野【名】森林と原野と。

りん-ゆ 麟喩【名】〔佛〕**りんかくゆ**（麟角喩）の略。

りん-よ 輪輿【名】㊀車と輿と。車輿。㊁車を造る工人と、輿を造る工人と。

りん-よく 悋慾【名】しはきこと。ものおしみ。吝嗇。

りん-らう 琳琅【名】美しき玉。

りん-らう 琳琅【貌】玉と玉と、觸れて淸らかに鳴る音。

りん-らく 淪落【名】身沈みて、世にあらはれぬこと。おちぶれ。沈淪。

淪落の女【句】淫賣婦の異稱。

りん-り 倫理【名】㊀人倫のみち。人道。人倫。道德。㊁**りんりがく**（倫理學）の略。

りん-り 隣里・鄰里【名】隣接せるむらざと。隣邑。

りん-り 淋漓【貌】㊀水又は血などの盛んに滴るさま。「流血淋漓」「墨痕淋漓」㊁氣力の溢れ出づるさま。「慷慨淋漓たり」「るること。

りん-りう 輪流【名】めぐりまはりて流

りん-りがく 倫理學【名】『英Ethics』哲學の一部門。善惡の標準を研究し、道德に關する事を研究する學。道德學。倫理。

りんりがく-げんり 倫理學原理【名】〔哲〕

『英 Principles of Ethics』英國の哲學者スペンサア(H. Spencer)の綜合哲學の五部より成れる内の一。進化論の原理によりて、道德界の現象を論じたるもの。

りんりしゆうけうてきーしようめい 倫理宗教的證明【名】〔哲〕『英 Ethicoreligious argument』**だうさくてきしようめい**(道德的證明)に同じ。

りんーりつ 林立【名】林木の如くに立ちならべること。

りんーりつ 凛慄【名】寒く又はものすごくしてをののくこと。

りんーりん【名】〔動〕**めぼそ**(眼細)に同じ。

りんーりん【貌】**一**鈴の鳴る音。**二**鈴蟲・松蟲などの鳴く聲。**三**湯の沸く時、鐵瓶などの響く音。

りんーりん 凛凛【貌】**一**寒さの身にしむさま。凛乎。凛然。**二**端正にして犯すべからざるさま。勢のりりしきさま。凛乎。凛然。「て轟く音。

りんーりん 轔轔【貌】車の地上を廻轉し

りんーりん 粼粼【貌】清き水の底に、白き石の透きて見ゆるさま。

りんーりん 磷磷【貌】**一**石の間を、水の清く流るるさま。**二**玉又は石の清くかがやくさま。「ま。凛凛。

りんーれつ 凛冽【貌】寒氣のきびしきさ

りんーろく 林鹿【名】和琴(ワゴン)及び箏の、絃の端に取り附くる、小き竹。

りんーろく 林麓【名】林と山麓と。

りんーわう 輪王【名】〔佛〕**てんりんわう**(轉輪王)の略。榮花「輪王の位、久しからず、天上のたのしみも、五衰、早く來り」

りんわうーじ 輪王寺【名】**一**下野國日光町大谷(ヤツ)川の岸にある天台宗の寺。俗に日光門跡といふ。本尊は不動明王。天平神護二年、勝道上人の開基。初、四本龍寺と稱し、後、滿願寺・光明院等の號を賜はりし事あり。後、慈覺大師、天台宗を弘め、慶長十八年、天海僧正代り住して中興し、公海を經て、承應三年、尊敬法親王(守澄親王)、門主となりたまひ、明暦元年、院宣を以て、親王に輪王寺の號を賜ひてより、門跡と稱せられ、爾後、法親王の繼承十三世に及び、明治元年、公現法親王還俗して、北白河宮能久(ヨシ)親王と改名せらるるに及びて、輪王寺門跡の稱中絶して、舊稱滿願寺と稱す。同十六年、又、輪王寺の復稱を許され、十八年、門跡の稱をも許さる。**二**東京市下谷區上野(ウヘ)山内にある天台宗の寺。前項のと共に、輪王寺は、もと輪王寺門跡たる法親王の稱號にして、寺院の名にあらず、唯その法親王が東叡山寛永寺の本坊(今の東京帝室博物館の地)を住地とせられしなりといふ。

りんわうじーのーみや 輪王寺宮【名】輪王寺の門跡たりし法親王の稱號。歷代、東叡山寛永寺の本坊に住して、寛永寺及び日光の滿願寺、比叡山の延曆寺の三惣本山を統轄し、天台宗を管領せられ、日光御門主とも稱したり。

りんわうじーもんぜき 輪王寺門跡【名】

りんわうじ(輪王寺)を見よ。「道)に同じ。

りんーわせい 林和靖【名】〔人〕**りんほ**(林

りんわせいーのま 林和靖間【名】宮中の一室。襖に林和靖の畫あり。

りんわせいのまづめ 林和靖間詰【名】明治の初年に置かれ、宮中の林和靖の間に出仕して、舊議奏商量の事務を管せし職。數箇月にして廢せられたり。

りんーゐん 廩院【名】王朝時代に、民部省に屬して、諸國より輸送來れる租米・庸米を收藏せし所。

りんーゑ 輪廻【名】**一**〔佛〕『梵 Saṁsāra の譯語。廻の字、輪の音に引かれて、ネと發音す』衆生(ヤウセウ)の、無始以來、六道の生死(シヤウジ)に旋轉すること、車輪の轉じて、窮無きが如くなること。生れかはり死にかはること。輪轉(リンテン)。流轉(ルテン)。榮花「天上の樂も、五衰早く來り、乃至有頂(ウチヤウ)も、輪廻、期(ゴ)無し」**二**くわいぶんうた(廻文歌)に同じ。庭訓往來「長歌・短歌・旋頭・根本・折句・香冠之風情、輪廻・傍題・打越・落題之體」

輪廻生死【句】〔佛〕六道生死(シヤウジ)の境界に輪廻すること。空穗「輪廻生死の罪を滅して」

輪廻の業【句】〔佛〕輪廻の原因となる惡業(ゴフ)。續世編「なさけをかけ、艷ならんによりては、輪廻のごふとはなるとも、奈落に沈む程の事やは侍らん」

輪廻の塵【句】〔佛〕この世にめぐりあはせて生れたる人の身の價値なきを、塵に譬へていふ語。卯月の淵色「輪廻の塵の賣古(メキシブ)、無明(ムミヤウ)の市に賣り下げられんよりは」

輪廻の波【句】〔佛〕この世にめぐり合はせて生るるを、波の上に漂ふに譬へていふ語。謠曲「天鼓」「我と、心の闇深く、輪廻の波に漂ふこと、生生(シヤウシヤウ)・世世(セセ)も、いつまでの」

輪廻の迷【句】〔佛〕輪廻の原因となる心の惑。謠曲「元服曾我」「生死の道、さまざまにして、輪廻の迷多し」

輪廻深し【句】**しふねんぶかし**(執念深し)に同じ。薩摩歌「過ぎにし事を、輪廻深く氣はさらさら無いものを」

りんーゑつ 林樾【名】林の下かげ。

りんゑてん 林越天【名】**ゑてんらく**(越天樂)の異稱。

りんーゑん 林園【名】林のある園。には。

りんーをう 隣翁・鄰翁【名】隣家のおきな。

りんーをく 隣屋・鄰屋【名】**りんか**(隣家)に同じ。

りーめん 裏面【名】**一**物の、外部にあらはれぬ一面。うら。うらがは。(表面に對して)**二**事の、外部にあらはれぬ方面。うら。內情。(表面に對して)**三**〔地〕**ないたい**(內帶)に同じ。

りーもつ 利物【名】**一**稻・粟などを貸して得る利息と、その貸したる物と。大寶令「出舉(スイコ)……取レ利過二正條一者、任レ人糺告、利物並給二糺人一」**二**〔佛〕佛が、天地間の萬物に、利益(リヤク)を與ふること。盛衰記「古仙經行之聖跡、大悲利物之靈嶋也」

利物の風【句】〔佛〕佛の、萬物に對する利物の德を、風の遍く吹き渡るに譬へていふ語。謠曲「鵜祭」「この神は、垂跡(スイジヤク)年久しと雖も、利物の風あらたなり」

利物の垂迹(スイジヤク)【句】〔佛〕佛が、萬物を利益(リヤク)せんがために、垂迹して教化(ケウ)を施すこと。太平記「誠に、利物の垂迹、順逆の緣に和光したまはず」

りーもと 利元【名】利息と元金と。狂言(胸突)「利元共に免さう程に」「じ。

りもなあて(獨 Limonade)【名】**らむね**に同

りもなあど(佛 Limonade, 英 Lemonade)【名】前條に同じ。

りーもん 里門【名】**りよもん**(閭門)に同じ。

りーもん 理門【名】**一**大寶令の制度にて、宮中の閤門・使門の中、臨時出入を要するために、夜も閉鎖せずして、人の出入を監せしもの。**二**〔佛〕「胎藏界の理門」を見よ。

りやう 量【名】**一**ます。量器。「度量衡」**二**數・大さ・長さ・重さの多少。かさ。數量。分量。重量。**三**〔數〕『英 Quantity』增減し、又は測度し得るもの。物理學的測定の對象たる概念。**四**ほどあひ。かぎり。程度。**五**物事を受け容れて亂れぬ心の程あひ。度量。器量。識量。

りやう 糧・粮【名】『周禮の地官篇廩人の註に「行レ道曰レ糧。謂レ糒也。止居曰レ食。謂レ米也」とあり』旅行又は行軍の際に用ふる食料(古は多く糒(イボヒ)を用ひたり)。食糧。糧食。兵粮(ヒヤウ)。

糧に敵に因る【句】『孫子の作戰篇に「取二用於國一、因二糧於敵一」とあるに本づく』**一**敵の糧を、わが糧として用ふ。**二**相手の力を利用す。

りやう 令【名】「律令(リツリヤウ)格式」を見よ。

りやう 領【名】**一**領すること。領有。占有。空穗「この藏、先祖(ソセン)の御りやうなりけり」**二**所領の地。封地。らう。**三**

ぐんりやう(郡領)に同じ。

りやう 兩・両【名】二つ相對せること。兩方。雙方。一對(ツイ)。一代男「兩の眼(マナ)を見開き」

りやう 凉・涼【名】すずしさ。涼氣。涼風。

りやう 凉を納(イ)る【句】納凉(ナウリヤウ)をなす。すずむ。「暑を避く。

凉を趁(オ)ふ【句】凉しき地に赴く。

りやう 諒【名】『漢書の杜鄴傳贊に「可ノ謂ニ諒不ノ足而談有ノ餘者ニ」とあり』まこと。信實。

諒とす 良【句】りやうす(諒す)に同じ。

りやう 良【名】一よきこと、又その人。二りやうじん(良人)三の略。續紀「免ニ官戸十一人ノ爲ノ良」

りやう 靈【名】人の靈魂の、祟をなすといふもの。生靈(イキリ)・死靈(シリ)などいへり。らう。惡靈。源氏「うらなひよりけん女のりやうこそ、まことに、さる御執(ウシ)の、身に添ひたるならば」

りやう 梁【名】一支那戰國時代の魏の惠王の時、都を大梁に遷ししより後の國號。二支那古代の王朝の名。六朝の一。始祖蕭衍(武帝)は齊の疎族。齊の禪を受けて即位し、四代五十六年にして、陳に亡さる。三支那古代の王朝の名。五代の一。朱全忠、唐を亡して建て、二代十六年にして、後唐に亡さる。前項の梁に對して、後梁ともいふ。四はり(梁)に同じ。

りーやう 利養【名】財利によりて己が身をこやし養ふこと。著聞「名聞(モンヤウ)を好まず、利養を思はず」

りやう 兩・両【數】に(二)に同じ。

りやう 兩・両【助數】一二つづつにて揃ふ物の數にいふ語。延喜式「織二兩」二重さの單位。銖(シ)の二十四倍、斤の十六分の一。匁の四倍なるを、大兩といふ。〔德川時代の語〕三藥の重さの單位。普通匁の四倍なれど、品種によりては、四匁三分乃至五匁を一兩とす。〔德川時代の語〕四金銀貨の價格の單位。金貨は一分の四倍、銀貨は、四匁三分を一兩としたり。〔德川時代より明治初年にかけての語〕五えん(圓)の異稱。六てえる(兩)を見よ。

りやう 領【助數】『衣裝の一部分なる、領(ウエ)にて數ふる義』裝束・鎧などの數にいふ語。保元「八領の鎧」

りやう 輛【助數】車の數にいふ語。方丈「積む所、僅かに二輛なり」

りやうーあし 兩足・兩脚・両足【名】りやうきやく(兩脚)に同じ。

りやうーあぶみ 兩鐙・両鐙【名】もろあぶみ(諸鐙)に同じ。

兩鐙を合はす【句】「諸鐙(モロアブミ)を合はす」に同じ。平治「聞ゆる早馳の名馬に、兩鐙を合はせて驅けられけるに」

りやうあぶーれんず 兩凹レンズ(英Double concave lens)【名】兩面共に凹面をなせるレンズ。

りやうあん 良案【名】すぐれたる考案。

りやうーあん 諒闇・諒陰・亮陰【名】一『書經の說命篇に「王宅ノ憂亮陰三祀」、論語の憲問篇に「高宗諒陰、三年不ノ言」、後漢書の和熹鄧皇后紀に「諒闇既終」とあり。諒は古梁に作る。闇は廬をいふ。諒闇は即ち倚廬の義にして、倚廬に居るをいふ。一說に信默の義にして、天子國政を聽かざるをいふと』天子の喪に居給ふこと。古は十三箇月を期とせり。明治四十二年制定の皇室服喪令にては、大行天皇・皇太后及び皇妣なる太皇太后のためにする大喪を諒闇とし、大行天皇・皇太后の大喪は一年(三期に分ち、第一期・第二期は各五十日、殘餘を第三期とす)、太皇太后の大喪は百五十日(第一期・第二期は各三十日、殘餘を第三期とす)として、皇族及び臣民は、悉く喪に服し、國旗を揚ぐるに黑布を添へ、第一期中は、喪章を著くべきものとす。みものおもひ。らうあん。徒然「諒闇の年ばかりあはれなるものはあらじ。倚廬(イ)の御所の樣など、板敷を下げ、蘆の御簾(ス)を懸けて、布の帽額(モカ)あらあらしく、御調度(ウチド)どもおろそかに、皆人の裝束(ソウ)・平緒(ヒラ)まで、ことやうなるぞゆゆしき」二「諒闇の服」の略。玉葉「夫ノ著ニ諒闇ノ之人等」

諒闇の扇【句】古、諒闇の間用ひし扇。骨は、彫刻を加へず、黑く塗り、紙は、兩面何れも淺黃色。

諒闇の色【句】古、諒闇の間、著用せし裝束の色、即ち鈍色(ニビ)又は黑色。盛衰記「薄あをの帷(ヒラ)を下に著たまへるが、淨衣(ジヤウエ)に透き通りて、諒闇の色の如くに見えければ」

諒闇の脊(ツ)【句】古、諒闇の間使用せし沓。無文・革緣、氈は淺黃絹。

諒闇の服【句】古、諒闇の間著用せし裝束。天皇は橡色(ツルバミ)の闕腋の袍、臣下は鈍色(ニビ)。

りやうあんーてんそう 諒闇傳奏【名】古、天皇崩御の時、諒闇に關する事を奏聞せし臨時の職。

りやうーい 良醫【名】すぐれたる醫者。名醫。「醫。

良醫の門、病人多し【句】『荀子に「良醫之門多ニ病人、驟括之側多ニ枉木ニ、尙書大傳にも、子貢對ニ東郭子思ニ曰、驟括之旁多ニ枉木、良醫之門多ニ疾人ニ」とあり』一良醫の家へは、病人が多く集まる。〔諺語〕二不肖の人は、教育の力によりて導かれざるべからざる譬。〔諺語〕「服。

りやうーい 涼衣・涼衣【名】すずしき衣

りやうーい 涼意・涼意【名】涼しき感じ。涼しきおもむき。「兩方の意味。

りやうーい 兩意・両意【名】二つの意味。

りやうーいう 良友【名】心だてのよき友だち。益友。「と。占有。

りやうーいう 領有【名】わが物とすること。

りやうーいく 涼燠・涼燠【名】一寒さと暑さと。寒燠。寒暑。涼炎。二とし。星霜。蒹葛。太平記「その後、涼燠しばしば改まりて、門墻、漸く全からず」「同じ。

りやうーいふ 領邑【名】りやうち(領地)に同じ。

りやうーいん 涼蔭・涼陰【名】涼しき樹陰。

りやうーいん 良姻【名】りやうえん(良緣)に同じ。「後との兩國。

りやうう 兩羽・両羽【名】〔地〕羽前と羽

りやううで 兩腕・両腕【名】兩方のうで。兩手のかひな。もろうで。もろがひな。

りやううま 兩馬・両馬【名】將棊の駒の、金將と銀將と。王將の左右に直接して金將、更にその左右に銀將を排列して、王將の偏裨たらしむ。壽の門松「手前の金・銀は放さぬと兩馬强き欲の皮」

りやううん 糧運・粮運【名】糧食の運搬。

りやううん-し 良醞史【名】造酒史(クラノツカサ)の唐名。

りやううん-しよ 良醞署【名】一支那唐の光祿寺の被官の一。祭祀・五祭・三酒の事を掌りし所。二みきのつかさ(造酒司)の唐名。

りやううん-じよう 良醞丞【名】一支那の良醞署の次官。二造酒丞(ジヨウノ)の唐名。

りやううん-れい 良醞令【名】一支那の良醞署の長官。二みきのかみ(造酒頭)の唐名。「に同じ。

りやうーえう 兩曜・両曜【名】にえう(二曜)

りやうえうかくせいーりう 涼天覺清流【名】劍術の一派。堀口亭山貞勝(延寶の頃の人)を祖とするもの。「の下。

りやうーえき 兩腋・両腋【名】兩方の腋(ワキ)

りやうーえん 良緣【名】よき緣組。

りやうーえん 涼炎・涼炎【名】一りやういく(涼燠)に同じ。二情愛の冷溫。人情の厚薄。

りやうーおさへ 兩押・両押【名】德川時代に、大名の行列にて、仲間(チウゲン)・小者(コモ)などを支配する足輕二人を具せしこと。(片押に對して)

りやうーおほぜき 兩大關【名】相撲(スマ)の東西兩組の大關。

りやうーおん 兩音・両音【名】二樣の音。十訓「詩に、兩音の字を、平聲(ヒヤウシヤウ)に用ひたりけるを」

りやうーか 良家【名】家柄のよき家。

りやうーかい 領海【名】〔法〕『英Territorial water』その國の主權に屬する沿海。海岸よりの着彈距離以內と定む。古は三哩以內の定なりしに、今は、兵器の進歩により、普通、干潮時の海岸より六哩以內とす。港灣・內海は、この距離を超えたる部分にても、すべて、その國の主權に屬す。沿岸海。領水。(公海に對して)

りやうーかい 領界・両界【名】〔佛〕一りやうふ(兩部)二に同じ。續世繼「日ごとに、法華經一部、兩界など行ひはべるを」三次條の略。盛衰記「兩界を空に覺えて、毎夜の二時に供養法したまふ御門(ミカド)」

りやうーかい 領界【名】領地のさかひ。津國女夫池「馬草(マグサ)刈場の領界」

りやうーかい 領海【名】〔法〕『英Territorial water』その國の主權に屬する沿海。

兩界の曼陀羅【名】〔佛〕**りやうかいまんだら**(兩界曼陀羅)に同じ。盛衰記「兩界の曼陀羅、一夜二夜に懈怠(ケタイ)なく行はせたまふ事」

「に同じ。

りやうかい 領解【名】**りやうくわい**(領會)

りやうかい 諒解【名】事情を察して領解すること。

りやうかい-まんだら 兩界曼荼羅・兩界曼陀羅【名】〔佛〕**りやうぶまんだら**(兩部曼荼羅)に同じ。

りやうかう 良港【名】すぐれたる港。

りやうかう 兩校・両校【名】二つの學校。

りやうかう 兩江・両江【名】〔地〕支那の江西省と江南(江蘇・安徽の二省)との併稱。

「たること。善良。

りやうかう 良好【名】よきこと。すぐれ

りやうかかり 兩掛・両掛【名】德川幕府の職制の一。小納戸衆(コナンドシウ)に屬せし膳番と奥の番と。

りやうかかり 兩懸・両懸【名】『弓と鐵砲とにて攻めかかる義なるべしといふ』昔の戰法にて、持楯を先手の前一面に並べ、その陰に弓・鐵砲を一人おきに組み合はせて備へ、楯の隙間より鐵炮を少し打ち掛けながら、足を早めて、敵との距離十四五間に達したる時、楯を捨て、鐵砲を一齊に打ち放し、弓は矢繼早に兩三矢づつ射掛けて、敵の披き靡く所を、足輕の後に備へたる武士等、各得道具を打ち振り、急太鼓の調子に從ひて、敵中に打ち入り、當るに任せて切り倒し、弓・鐵砲の足輕も持ちたる武器を置き、拔刀にて、諸士に繼ぎ、聲を揚げて切り込むこと。

「きと。

りやうかく 梁桷【名】うつばりと、たる

りやうかく 涼閣・凉閣【名】涼しきたかどの。涼を納るる設の高臺。

りやうかく 領格【名】〔語〕『英Possessive case』名詞・代名詞の所屬を言ひあらはす格。「人の物」「君が代」「時つ風」など、**のがつ**等の助辭にてあらはす。所有格。物主格。

りやうかくし 領客使【名】王朝時代に、外客の接待に當りし役。

りやうけ 兩掛・両掛【名】昔、旅行の時、挾箱又は小形の葛籠(ツヅラ)に、衣服・調度などを入れ、天秤棒の兩端に掛けて、從者に擔はせしもの。膝栗毛「兩掛を人足にかつがせ」

(けがうやり)

りやうがは 兩側・両側【名】㊀兩方の側(カハ)。左側(ヒダリガハ)と右側(ミギガハ)と。表面と裏面と。兩面。(片側に對して) 膝栗毛「祇園町の繁昌は、兩側の芝居、櫓太鼓を打ち交へ」㊁『樂屋に勸請せる稻荷社の兩側に、兩者の部屋相對して存する構造なりしよりいふ』昔の劇場の囃方と稻荷町(イナリマチ)と。

りやうがへ 兩替・両替・兩換【名】『兩は德川時代の金銀貨の價格なるよりいふ』㊀金銀貨・紙幣などを、錢に替ふること、又、切賃(キリチン)を得て、それを營業とすること。兌錢。交兌。㊁或物を、金子と交換すること。淀鯉出世瀧鑒「懷中した金子を里に殘いて、そなたの身と兩替して」㊂

りやうがへ(兩替屋)の略。繊細算用は、むつかしき割物も、埒(ラチ)をあけ、銀は、兩替より、折節は見せに來る事あり」

りやうがへ-しやう 兩替商・両替商【名】兩替㊁の營業、又その營業者。

りやうがへ-だな 兩替店・両替店【名】**りやうがへてん**(兩替店)に同じ。繊細「程なく分限になり、酒町(サカマチ)に兩替店出して」

りやうがへ-ちん 兩替賃・両替賃【名】**きりちん**(切賃)㊁に同じ。

りやうがへ-ちやう 兩替町・両替町【名】兩替屋の集まれる町。長町女殺油「はれ、よい男の。江戸元結に繻子蠟、頭(アタマ)つきは兩替町、内證は曾我殿」

りやうがへ-てん 兩替店・両替店【名】兩替㊁を營業とする家。兩替だな。兩替屋。

りやうがへ-や 兩替屋・両替屋【名】兩替を營業とせる家、又その人。兌銀舗。錢屋。胸算用「利なしに兩替屋へ預け置き」

りやう-かまやり 兩鎌槍・両鎌槍【名】**かまじふもんじ**(鎌十文字)に同じ。(片鎌槍に對して)

りやうかん 兩間・両間【名】㊀二つの物のあひだ。㊁『宋史の胡安國傳に「至剛可三以塞二兩間一、一怒可三以安二天下一矣」とあり』天と地との間。

「と。

りやうかん 兩漢・両漢【名】前漢と後漢

りやうがん 兩岸・両岸【名】兩方の岸。

りやうがん 兩眼・両眼【名】兩方のまなこ。左右の目。兩目。雙眼。太平記「兩眼に涙を浮べたまへば」

りやうがんきやう 兩眼鏡・両眼鏡【名】**さうがんきやう**(雙眼鏡)に同じ。

りやうき 良器【名】㊀すぐれたる才能、又その人。㊁すぐれたるうつは物。

りやうき 良驥【名】よき馬。千里の馬。

りやうき 量器【名】㊀**りやう**(量)㊁に同じ。㊁**きりやう**(器量)㊁に同じ。源氏冷泉節「人君の量器備はって」

「同じ。

りやうき 量基【名】〔數〕**たんゐ**(單位)に

りやうき 涼氣・凉氣【名】涼しき空氣。涼しき氣味。

「㊁と。兩儀。

りやうき 兩氣・両氣【名】陰氣㊁と陽氣。

りやうき 兩毅・両毅【名】大毅と小毅と。

りやうき 兩儀・両儀【名】**にぎ**(二儀)に同じ。

りやうききやうほくかいかくし 領歸鄉渤海客使【名】渤海國の使者の歸鄉する時の領客使。

「(昔)に同じ。

りやうぎし 兩岸・両岸【名】**りやうがん**(兩

りやうきん 良金【名】品質のすぐれたる金屬、又は黃金。精金。「良金美玉」

りやうきん 良禽【名】すぐれたる鳥。良禽は木を擇びて棲む【句】次條に同じ。〔諺語〕

良禽は木を見て棲む【句】『三國志の蜀志に「良禽相ノ木而棲、賢臣擇ノ主而事」とあるに本づく。左傳の哀公十一年の條にも「鳥則擇ノ木。木豈能擇ノ鳥」とあり』賢人は賢主を擇びて仕ふる譬。〔諺語〕聖德太子繪傳記「良禽は木を見て棲み、忠臣は君を選んで仕ふ」

りやうぎん 兩吟・両吟【名】㊀〔文〕連歌・俳諧などを、二人して附けあふこと。(獨吟に對して) 狂言「箕かづき」「世帶を營むすきずきに、そなたと、兩吟にするであらう」㊁芝居にて、立唄(ノタテ)と二枚目(立唄の次の唄手)との二人が、舞臺に現れてうたふこと。(獨吟に對して)

りやうきやう 兩京【名】㊀**りやうけい**(兩京)に同じ。㊁〔地〕東京と西京(京都)と。

りやうきやう 凉轎・涼轎【名】**りやうけう**(凉轎)の誤。下學集「涼轎、リヤウキヤウ。禪家所ノ乘」

りやうきやく 兩脚・両脚【名】左右のあし。もろあし。兩足。雙脚。

りやうきやく-き 兩脚規【名】『英Divid-ers』**こんぱす**㊁に同じ。

りやうきゆう 良弓【名】㊀すぐれたる弓。㊁『禮記の學記篇に「良弓之子、必學ノ爲ノ箕」とあり』すぐれたる弓師(ユミシ)。

りやうきよく 兩局・両局【名】㊀二つの局。㊁局務と官務と。〔古語〕

りやうきよく 兩極・両極【名】㊀**りやうきよくたん**(兩極端)に同じ。㊁南極と北極と。㊂陽極と陰極と。

「美玉。

りやうきよく 良玉【名】すぐれたる玉。

りやうきよくたん 兩極端・両極端【名】兩方の極端。一の極端と、これに反する極端と。

りやうきよくづはふ 兩極圖法【名】〔地〕地圖投影法の一。兩極地方を示すを目的とするもの。一種の直射圖法にて、赤道を圓周とする面上に映ずる有樣を寫す。故に、極はその圓の中心に當り、子午線は、これより射出する半徑となり、緯線は、同心の圓となる。

りやうぎゐん 兩議院・両議院【名】貴族院と衆議院と。兩院。

りやうく 良狗【名】㊀すぐれたる犬。㊁謀臣の譬。韓「狡兎死して、良狗烹(ニ)らる」

りやうぐ 靈供【名】亡魂に齋食(ソウジキ)を供ふること。運歩色葉集「靈供、リヤウグ」

りやうぐち 兩口・両口【名】兩方に口あ

ること。口の二つあること。ふたくち。
兩口を取る【句】『くちとり(口取)』を見よ。馬の左右に、馬方一人づつ附き添ひて、口を取る。「代男」「馬の沓にも、唐絲をはかせ、……、馬子も兩口を取るぞかし」

りやうくん 兩君・両君【名】兩國の君主。二人の君主。

りやうぐん 兩軍・両軍【名】敵と味方との軍勢。兩兄。

りやうくわ 良貨【名】すぐれたる貨物。

りやうくわい 良會【名】よき會合。佳會。

りやうくわい 領會【名】合點のゆくこと。さとること。ゑとく。領解。領悟。領得。了解。

りやうくわ 兩廣・両廣【名】〔地〕支那の廣東省と廣西省との併稱。

りやうくわい 良貨幣【名】品質の良好なる貨幣、即ち實質の價格と法定の價格との差の少き貨幣。良貨。

りやうけ 領家【名】りやうしゆ(領主)を見よ。「太平記」「莊園には、地頭強くして、領家は弱く」

りやうけ 兩家・両家【名】二つの家。雙方の家。

りやうけ 靈氣【名】もののけ。靈(ものの)。

りやうけ 領家職【名】りやうしゆ(領主)を見よ。

りやうけ 涼月・涼月【名】すずしく感ずる月影。

りやうけつ 良月【名】『左傳の莊公十六年の條に「使下以二十月一入上。曰、良月也。就二盈數一也」とあり』陰曆十月の異稱。

りやうけふじ 兩脇士・兩夾侍・兩挾侍【名】〔佛〕にけふじ(二脇士)に同じ。

りやうけん 兩肩・両肩【名】兩方の肩。左右の肩。雙肩。

りやうけん 兩臉・両臉【名】兩方の頰。左右の頰。

りやうけん 量見【名】れうけん(料見)に同じ。

りやうけん 靈驗【名】れいけん(靈驗)に同じ。

りやうげん 量減【名】かけべり。はかりべり。

りやうげん 良源【名】〔人〕天台宗の僧。俗姓は木津氏。近江國淺井郡の人。十二歲にして比叡山に登り、實幢院に入り、理仙に師事す。康保元年天台座主に補し、天元四年大僧正となる。永觀三年寂す。年七十四。寛和三年、慈慧大師の號を勅諡せらる。世に元三(ガンサン)大師といふ。

りやうげ-もん 領解文【名】〔佛〕かいげもん(改悔文)を見よ。

りやうこ 兩虎・両虎【名】二匹の虎。

りやうこ 兩虎・両虎【名】二匹の虎。

りやうこ 良賈【名】その道にすぐれた商人。

りやうこ 領悟【名】りやうくわい(領會)に同じ。

りやうこう 良工【名】技術のすぐれた工人。
良工苦心【句】『「摛藻新話」に「老杜曰、更覺良工心獨苦、不二獨謂一畫也」とあるに本づく』良工の、製作上の美醜を知ること多きがために、技工に心を苦しむること。藝術的良心の苦。
良工は材を擇ばず【句】良工は、手腕すぐれたるがために、材料の善惡の如きは敢て問はず。弘法は筆を擇ばず。〔諺語〕

りやうこうけん 兩後見・両後見【名】鎌倉幕府の執權と連署との併稱。兩執權。兩執事。兩探題。兩探題職。兩所。

りやうこく 良國【名】よき國。すぐれた國。

りやうこく 兩國・両國【名】りやうごく(兩國)に同じ。

りやうこく 領國【名】りやうごく(領國)に同じ。

りやうごく 兩國・両國【名】二つの國。

りやうごく 領國【名】領有せる國。所領の國土。采邑。料國。

りやうけい 兩敬・両敬【名】貴、對話又は書狀にて、相手を尊敬するに用ふる語を、自己の上にも用ふること。例へば、「御返事」といふ語を、相手の返事にも、自己より相手への返事にも用ふる類。一方のみより敬禮するを片敬(ヘンケイ)といへり。

りやうけい 兩京・両京【名】二つのみやこ。りやうきやう。兩都。

りやうけう 涼轎・涼轎【名】禪家にて、長老の乘る手輿。

りやうげ-さい 靈氣祭【名】「靈氣道斷の祭」に同じ。

りやうげ-さく 兩毛作・両毛作【名】にまうさく(二毛作)に同じ。

りやうけ-しき 領家職【名】りやうしゆ(領主)を見よ。

りやうげ-ぜん 靈氣祭【名】「靈氣道斷の祭」に同じ。

りやうこ 兩虎相鬪【句】『大戴禮の曾子制言篇及び史記の老莊申韓傳に「老子曰、良賈深藏若虛、君子盛德、容貌若愚」とあるに本づく』すぐれたる商人は、店頭に貨物を並べ立てず。賢者は、その能を隱して術はざる譬。〔諺語〕
兩虎鬪ふ時は、共に死せずといふこと。
「兩虎鬪ふ時は、共に死せずといふ事なし」

りやうこ 兩湖・両湖【名】〔地〕支那の湖南省と湖北省との併稱。

りやうこく 兩後・両後【名】鎌倉幕府の執權と連署との併稱。兩執權。兩執事。兩探題。兩探題職。兩所。

りやうこく 兩國・両國【名】『昔、今の本所區は下總國に屬せしよりいふ。りやうごくばし(兩國橋)參照』東京市日本橋區の一部、兩國橋西畔、即ち廣小路(ヒロコウ)三の邊の地。橋の東畔即ち回向院(エカウ)所在地の邊は本所區に屬し、又、東兩國又は向(ムカ)ウ兩國の稱あり。
兩國の花火【句】毎年、夏期、隅田川の兩國橋の上下流にて打ち揚ぐる花火。

りやうごく-かぢのすけ 兩國梶之助【名】〔人〕力士。因幡國の人。身長六尺二寸、體量四十二貫餘、力量衆にすぐれ、その技、天下に冠たり。前髪に櫛を插すこと、この人より始まるといふ。貞享元祿頃の人。

りやうごく-ばし 兩國橋・両國橋【名】『創架の當時、日本橋區の地は、江戸の一部にて、武藏國に屬し、東、本所區の地は、下總國に屬し、兩國に跨るとの意にて呼ぶ』東京市日本橋區米澤町一丁目より本所區元町とを連絡して、隅田川に跨る橋。萬治二年の創架、寛文二年の開通に係り、初は大橋と呼びしを、後年、下流に新大橋を架設するに及びて、現稱に改む。今は長さ九十間の鐵構桁橋なれども、もとは木橋にて、長さ九十六間なりしが如しといふ。
兩國橋の上に、槍の三筋絶ゆる事なし【句】德川時代の兩國橋の上の往來繁かりし形容。根岡志具佐「世の諺にも、朝より夕まで、兩國橋の上に、槍の、三筋絶ゆる事なしといへるは、常の事なんめり」

りやうごし 兩腰・両腰【名】もろごし(諸腰)に同じ。

りやうさ 良佐【名】忠良なる輔佐の臣。賢佐。良弼。

りやうさい 良妻【名】よき妻。すぐれたる妻。

りやうさい 良才・良材【名】すぐれたる才能、又その人。

りやうざい 良材【名】すぐれたる材木。すぐれたる材料。

りやうざい 良劑【名】すぐれたるくすり。效能ある藥劑。良藥。

りやうさいけんぼしゆぎ 良妻賢母主義【名】女子教育上、妻としては良妻となり、母としては賢母となるやうに養成する主義。

りやうざう 兩造・両造【名】『書經の呂刑篇に「兩造具備、師聽二五辭一」とあり。造は至る義、即ち法廷に至るをいふ』原告と被告との併稱。

りやうさく 良策【名】すぐれたる策略。良計。良圖。良算。良謀。嘉謀。

りやうざし 兩刺・両刺【名】いちりやうざし(一兩刺)に同じ。

りやうざし 兩差・両差【名】りやうてん(兩天)四に同じ。〔京都・大阪邊の語〕

りやうざしかんざし 兩差簪・両差簪【名】兩差なる簪。〔京都・大阪邊の語〕

りやうさつ 兩札・両札【名】明治初年、太政官並びに各藩發行の、一兩札・五兩札・十兩札など、兩を單位としたる價格の紙幣。

りやうさつ 諒察【名】事情をおもひやり察すること。

りやうさん 凉傘・涼傘【名】ひがさ(日傘)に同じ。

りやうさん 良算【名】りやうさく(良策)に同じ。

りやうさん 兩三・両三【數】にさん(二三)に同じ。

りやうざん 兩山・両山【名】一二つの山。二〔商〕りやうだて(兩建)に同じ。〔取引所の語〕

りやうざん 靈山【名】〔地〕山城國京都の東山の一部。高臺寺の上の半腹に位す。德川幕末、王事に盡瘁せし者の靈を祀れる祠あり。招魂碑、その北に立ち、梅田雲濱・玉松眞弘・安積五郎・藤本鐵石・梁川(ヤナガワ)星巖等の碑及び木戸孝允の墓あり。

りやうざんは 靈山派【句】〔佛〕時宗(ジシウ)の一派。遊行(ユギヤウ)上人第七世の弟子國阿を祖とし、京都靈山の正法寺を本山とす。但し、今は派名を稱せず。

りやうざんはく 梁山泊【名】一〔地〕今の支那山東省兗州(ヱンシウ)府壽張縣の東南、梁山の下にある古の鉅野澤の地。下流、汶・濟の二水來り會し、宋代には、黃河決して、その中に匯入し、綿亙數百里、劇賊宋江、その間に砦を結べりといふ。後、黃河南に徙りてより、湯泥の地となり、遂に平陸に化せり。二『支那の小說水滸傳に、首魁宋江以下三十六人の社交・禮讓などを意に介せぬ者どもの集まり會せし地として記せるよりいふ』豪傑連の寄り合へる場所。

りやうし 良師【名】すぐれたる師匠。よき教師。

りやうし 良士【名】すぐれたる人。賢士。

りやうし 令史【名】さくわん(主典)一を見よ。

りやうじ 令旨【名】一東宮・三后の命令を傳ふる文書。後には、中宮・親王・法親王・王・女院などのをもいふに至りしが、現今の公式令には、主として、皇太子・三后のにいふことに定めらる。れいし。太平記「大塔宮の令旨を賜はりて、この素懷を達すべきといひたまひければ」二古、攝關家にて、家司(ケイシ)を任補せし時の文書。

りやうじ 領事【名】一りやうじくわん(領事官)に同じ。二領事官の一。總領事の監督の下に、その管轄區域内の一地方に駐在して、領事官の事務を行ふもの。

りやうしう 凉秋・涼秋【名】一すずしき秋。二陰曆九月の異稱。

りやうしう 領袖【名】一領(エリ)と袖(ソデ)と。二『領と袖とは、衣類の目に立つ部分なるよりいふ』頭だつ人。

りやうしう 領收【名】受け收むること。うけとること。受領。收受。

りやうしう 涼州【名】〔地〕支那甘肅省武威縣にある都會。海拔六千呎の高地。甘肅・新疆間の大路、隨ひて、又、古は謂はゆる西域への通路に當り、漢初には、匈奴に屬し、後、五胡十六國中の前涼・後涼・北涼の三國の都となりたり。

りやうしう 梁州【名】〔地〕支那古代の九州の一。今の陝西(セイセン)・甘肅二省の南部と四川省の大部分にかけての地なるべしといふ。二支那三國時代より六朝時代にかけての州の一。治所は漢中(今の陝西省漢中府)。時代と共に、管域、次第に縮少せり。

りやうしう 領收書【名】次條に同じ。

りやうしう 領收證【名】次條に同じ。

りやうしうしよ 領收證書【名】うけとりしようしよ(受取證書)に同じ。

りやうじくわん 領事官【名】『英 Consul』外務大臣の指揮・監督の下に、外國に駐在して、專ら自國の臣民の貿易及び通商・航海の利益を保護・奬勵し、その地に在留せる自國臣民の保護・取締をなす官職。主として、經濟上の代表者にして、駐在國にて、治外法權を享有することなき等の點に於て、外交官と異なり。總領事・領事・副領事・領事官補の四階級に分れ、我國にては、奏任を例とし、唯、勅任外交官より轉任する總領事に限りて、勅任となすことを得。

りやうじくわん 領事館【名】領事官が、駐在地にて、その職を扱ふ所。領事廳。

りやうじさいばん 領事裁判【名】領事官が領事裁判權によりて行ふ裁判。

りやうじさいばんけん 領事裁判權【名】〔法〕『英 Consular jurisdiction』他國の人民にして、その在留國の裁判權に服せず、その國に駐在せる自國領事の裁判を受くる權利。もと、歐米各國が、土耳古(トルコ)に對してこれを有したるに基く。

りやうじしようにんじやう 領事證認狀【名】外國に駐在する領事官が、その本國政府より受けたる委任狀を駐在國に呈出して、その國より受け取る證書。即ち、その領事官が、國際法及び條約によりて認められたる、領事官としての職權・特權及び免除の享有を證認する意味のもの。領事認可狀。

りやうじだいり 領事代理【名】領事官、事故あるか又は一時不在中、本國政府の認可、駐在國政府の承諾を得、代りてその職務を執るもの。領事官と同一の特權を享有するを例とす。代理領事。

りやうじだん 領事團【名】或土地に駐在せる諸外國の領事の總體。

りやうじちやう 領事廳【名】りやうじくわん(領事館)に同じ。

りやうしつ 良質【名】すぐれたる性質。「よき品質。

りやうじつ 良日【名】一きちじつ(吉日)に同じ。二七月七日の異稱。

りやうしつけん 兩執權・両執權【名】りやうこうけん(兩後見)に同じ。「に同じ。

りやうしつじ 兩執事・両執事【名】前條

りやうじて 兩仕手・両仕手【名】前仕手(ジテ)と後仕手(ワキジテ)との併稱。

りやうじてすうれう 領事手數料【名】領事官が、法令の規定に從ひ、その駐在國在留の自國臣民のために、或行爲をなしたる時、徵收する手數料。

りやうじにんかじやう 領事認可狀【名】りやうじしようにんじやう(領事證認狀)に同じ。「親)に同じ。

りやうしん 兩親・両親【名】ふたおや(二

りやうしん 兩心・両心【名】『荀子の解蔽篇に「天下無二二道一、聖人無二兩心一」とあり』にしん(二心)に同じ。

りやうしん 良心【名】一『孟子の告子上篇に「所三以放二其良心一者、亦猶二斧斤之於二木也一」とあり』人の固有の善心。二〔哲〕『英 Conscience』道德的價値を辨別して、善とし惡とする道德的意識。良心の呵責【句】こうくわい(後悔)に同じ。

りやうしん 良辰【名】かしん(佳辰)に同じ。

りやうしん 良臣【名】よき臣下。忠良なる臣。「に同じ。

りやうしん 梁津【名】しんりやう(津梁)に同じ。

りやうしん 良人【名】一『詩經の大雅柔桑篇に「維此良人、作爲式穀」とありて、鄭玄の箋に「式、用也。賢者在レ位、則用二其善道一」と見ゆ』賢良なる人。二妻より夫を指していふ語。三王朝時代に、普通の人民を、宮戶・陵戶・家人・奴婢(ヌヒ)など區別して呼びし語。良民。良。(賤民に對して)りやうせん(良賤)參照。

りやうしん-おん 兩脣音・両唇音【名】〔語〕『英 Bilabial』しんおん(脣音)に同じ。

りやう-しや 兩社・両社【名】㊀二つの神社。兩方の神社。二社。㊁二つの會社。兩方の會社。二社。

りやう-しや 兩者・両者【名】二つの物事。兩方の物事。二者。「將。名將。

りやう-しやう 良將【名】すぐれたる大將。

りやう-しやう 良相【名】すぐれたる宰相。賢良なる大臣。賢相。名相。

りやう-しやう 良匠【名】㊀『淮南子の泰族篇に「良匠不能斲金」とあり』すぐれたる木工。㊁**りやうこう**(良工)に同じ。

りやう-しやう 涼牀・涼床【名】涼しき臥牀。涼榻。

りやう-しやう 糧餉・粮餉・糧饟【名】ひやうらう(兵粮)に同じ。

りやう-しやう 領掌【名】㊀『領は悟る義』聽き入ること。うけあふこと。承諾。領承。承知。㊁**りやうち**(領知)に同じ。

りやう-じやう 梁上【名】梁(ハリ)の上。

梁上の奸盜【句】次條に同じ。古事談「山城國池田の莊の解(ゲ)……。その狀の中に、非三當輕二殿下之御威一、兼又戒二梁上之奸盜一と書きたるを」

梁上の君子【句】『後漢書の陳寔傳に「有盜夜入二其室一、止二於梁上一。寔陰見之、呼二子孫一正色訓之曰、夫人不可不二自勉一、不善之人未二必本惡一、習以性成、遂至二於此一、梁上君子是矣。盜大驚、自投二於地一、稽顙歸罪」とあるに本づく』盜賊の異稱。

梁上の塵を動かす【句】『七略に「有二善歌者虞公一、發二聲動二梁上塵一」とあり』「梁塵を動かす」に同じ。

りやう-じやう 領掌・領狀【名】**りやうしやう**(領掌)に同じ。著聞「領狀の請文(ウケブミ)書きて奉る」盛衰記「承り侍りぬと領掌して」

りやう-じやう-だんそう 梁狀斷屑【名】

りやうじやう-ぎやうかう 兩社行幸・両社行幸【名】平安朝時代に、男山八幡宮に行幸ある時、必ず賀茂神社にも行幸ありしこと。圓融天皇以來の習なり。

りやう-しゆ 兩手・両手【名】**りやうて**(兩手)に同じ。

りやう-しゆ 良手【名】**じやうず**(上手)㊀に同じ。

りやう-しゆ 兩種・両種【名】二つの種類。二種。正統記「三種の神器の事は、先づ內侍所は神鏡なり。……寶劍も……。かの兩種は、正體、昔に變りましまさず」

りやう-しゆ 良種【名】㊀すぐれたる種子。㊁すぐれたる種類。よき品種。

りやう-しゆ 良主【名】すぐれたる主人。賢主。「酒。

りやう-しゆ 良酒【名】すぐれたる酒。美

りやう-しゆ 領主【名】㊀領地の主。㊁特に、王朝時代の中期以後、武家時代にかけて、莊園の所有主。その人三位以上の公卿なる場合には、領家(ケケ)といへり。領主・領家は、名義主として、上に本家(本所)を戴き、その支配を受け、又、後には、領主・領家を領主職(リヤウシキ)・領家職と呼べり。㊂德川時代に、陣屋㊃を設けて、領內を治めし、國主・城主より地位の低き大名。「に同じ。

りやう-しゆ 領收【名】**りやうしう**(領收)

りやうじゆ 靈鷲【名】〔地〕**りやうじゆせん**(靈鷲山)の略。藤葉毛「王母が桃を甘んじ。靈鷲の說法を聽くも、偏に名馬の功によれり」

りやうじゆ-せう,おうらく 梁州韶應樂【名】**せうおうらく**(韶應樂)に同じ。

りやうじゆ-せん 靈鷲山【名】〔地〕了巴利 Gijjhakūta (耆闍崛)、梵 Gṛdhrakūṭa (姞栗陀羅炬吒)の譯語。山形鷲に似たるが故とも、山上鷲多く棲めるが故ともいふ。印度摩竭陀(マカダ)國の舊都なる上茅城の周圍を城郭の如くに圍める五山の中にて、最高なるもの。上茅城の東北一里弱の地に、頻婆娑羅(ビンバサラ)王の新都王舍城あり、この山は上茅城の東北二三里にあり。佛陀の說經・敎化の聖蹟にして、法華經に於ける二處三會(エ)の中、この山上に於けるを、靈山會(リヤウセンエ)といふ。耆闍崛山(ギシヤクセン)。鷲峰山(シユウホウセン)。鷲峰。鷲嶺(シユウリヤウ)。靈山(リヤウセン)。鷲の峰。鷲の御山(ミヤマ)。桑花「瑠璃の經卷は、靈鷲山の曉の空よりも青し」

りやう-しよ 良書【名】すぐれたる書物。

りやう-しよ 領所【名】領有する所。領地。所領。

りやう-しよ 兩所・両所【名】㊀二つの場所。ふたところ。㊁兩人の敬稱。㊂**りやうこうけん**(兩後見)に同じ。

兩所・二聖(ヤウシヤウ)【句】山王七社の內、大宮と二宮(ニノミヤ)との兩所と、大宮權現の本地(ホンヂ)なる釋迦如來、その傍なる聖眞子(シヤウシン)の本地阿彌陀如來、二宮權現の本地藥師如來の三聖との總稱。

りやう-しよ 梁書【名】〔書〕支那梁の四代の間の事を記せるもの。唐の姚思廉・魏徵の二人、詔を奉じて撰す(但し、魏徵は總論を書きたるのみ)。本紀六卷、列傳五十卷。二十一史の一。

りやう-しよ 兩序・両序【名】〔佛〕禪宗にて、住持の下に、寺僧を二組に分てるもの。學德に長ずる者を西序又は西班(ヒヤウ)として、頭首(ヅシユ)といひ、世法に通ずる者を東序又は東班(ヒヤウ)として、知事といふ。東序は都寺(ツジ)・監寺(カンジ)・維那(イノ)・典座(テンゾ)・直歲(チヤウ)と次第し、西序は首座(シユ)・書記・知藏・知客・知浴・知殿と次第するを、普通とす。兩班(リヤウハン)。

りやう-じよ 諒恕【名】思ひやりてゆるすこと。斟酌。

りやう-しよう 領承【名】**りやうしやう**(領掌)㊀に同じ。醒睡笑「心得たりと領承せしが」

りやう-しよく 糧食・粮食【名】かて。糧米。食料。

りやうしよく-どう 兩色燈・両色燈【名】小形なる船舶にて、舷燈に代用する船燈。一箇の燈の、一面には綠色、他の一面には紅色の光を示すやうに裝置したるもの。甲種・乙種の二種に分ち、前者は、乙種舷燈と同じく、總噸數四十噸未滿の汽船にて、又、後者は二十噸未滿の帆船にて使用すべきものと定む。

りやう-す 諒す【動佐變他】まことととして承知す。事情を酌みて咎めず。諒察す。諒解す。

りやう-す 領す【動佐變他】㊀すべまとむ。統領す。支配す。領ず。らうず。正統記「宜しく八十萬(ヤソヨロ)の神を領して、皇孫を守りまつれ」㊁わが物とす。占有す。占領す。らうず。㊂うけとる。領收す。㊃さとる。領會す。

りやう-ず 領ず【動佐變他】㊀前條㊁に同じ。太平記「須彌(シユ)の四方を領じて、鬼門の方を守護し」㊁前條㊂に同じ。枕「をのこ子をば、ただ、わが物にして、立ち添ひりやうじてうしろみ」

りやう-ず-せん 靈鷲山【名】〔地〕**りやうじゆせん**(靈鷲山)の約。

りやう-ずね 兩膸・両膸【名】兩方のすね。本朝廿四孝「さあ、足採んで下されと、踏み出す兩膸」「に同じ。

りやう-すね 領水【名】**りやうかい**(領海)

りやうすね-き 量水器【名】『英 Water-meter』壓力を有する水の量を測る器。水量計。

りやうすね-そくりやう 量水測量【名】

そくすねそくりやう(測水測量)に同じ。

りやうすね-へう 量水標【名】『英 Water-gauge』河川・湖海等の水位を測定する計器。「政。

りやう-せい 良政【名】善良なる政治。美

りやう-せい 兩性・両性【名】㊀二つの性質。㊁男性と女性と。

りやう-せい 兩棲・両棲【名】動物の、水中と陸上との兩方に棲み得ること、又その動物。

りやう-せい 兩省・両省【名】支那の門下省と中書省との併稱。

りやうぜい 兩勢・両勢【名】二つの軍勢。太平記「兩勢併せて五百餘騎」

りやうせいくわ 兩性花・両性花【名】〔植〕『英 Hermaphrodite flower』一箇の中に雌蕊と雄蕊とを兼有せる花。完全花。兩全花。(單性花に對して)

りやうせいせいしよく 両性生殖・両性生殖【名】〔生〕『英Hermaphrodite reproduction』有性生殖の一。卵(ラン)と精蟲との合體して作りたる一細胞の發達して、一箇體となるもの。高等なる動植物は、大抵この生殖法をなす。(單性生殖に對して)

りやうせい-どうぶつ 両棲動物・両棲動物【名】両棲類に屬する動物。

りやう-せいばい 両成敗・両成敗【名】原告・被告の雙方に、罪を課すること。相諍へる者の雙方を、共に惡しとすること。諺「喧嘩、両成敗」

りやうせい-るゐ 両棲類・両棲類【名】〔動〕脊椎動物の一。魚類と爬蟲類との間に位し、卵生にして、冷血を有し、四肢ありて、有尾なるも、無尾なるもあり。幼時は、鰓(エラ)ありて、水中に棲息し、成長するに從ひ、鰓消失して、肺を生じ、陸上にて呼吸することを得るに至る。蛙・蠑螈(ヤモリ)・山椒魚など、これに屬し、有尾類・無尾類の二に分つ。

一同じ。

りやう-せう 良宵【名】**りやうや**(良夜)に同じ。

りやう-せつ 良説【名】すぐれたる説。

りやう-せつ 両説・両説【名】二つの説。この説と、かの説と。

りやう-ぜつ 両舌・両舌【名】〔佛〕十惡の一。甲乙に向ひて、相違の言を吐き、以て兩者を離間すること。

りやう-せん 良賤【名】良人(ヨ)と賤民と。

りやう-せん 霊山【名】〔地〕岩代・磐城兩國に跨れる山。阿武隈(クマ)山脈中の一峰。高さ二六五六尺。山上に北畠顯家の城址、北麓に霊山神社あり。「きの人。

りやう-せん 良選【名】よりぬき。よりぬ

りやう-ぜん 両全・両全【名】二つながら全きこと。両方とも缺けぬこと。

りやう-ぜん 霊山【名】〔地〕**りやうじゆせん**(霊鷲山)の略。十訓「釋迦如來の霊山に說法したまひけんよそほひこそめたでかりけめ」

霊山の父【句】釋迦の子羅睺羅(ラゴ)に對して、釋迦をいふ語。平家「胎内の者の、霊山の父を見しにも超えたり」

りやう-ぜん 亮然【貌】(一)さわやか。さらさら。(二)はっきりしたる狀。

りやうぜん-くわ 両全花・両全花【名】〔植〕**りやうせいくわ**(両性花)に同じ。

りやうぜん-じ 霊山寺【名】東京市本所區太平(ヘイ)町にある寺。法恩寺の北隣。淨土宗十八檀林の一。

りやうせん-じんじや 霊山神社【名】岩代國伊達郡霊山村大字大石に鎮座せる別格官幣社。祭神は北畠親房・顯家・顯信・守親。

りやうぜん-じやうど 霊山淨土【名】〔佛〕『法華經の壽量品に說く所によりていふ』霊鷲山(ユセンジン)を、寂光(ジヤクワウ)淨土と見なしていふ語。釋迦如來の本土は寂光淨土なれば、說法の場處なる霊鷲山は、その垂跡(スイセキ)の地なれども、本迹(ホンジヤク)不二の原理より、霊鷲山を直ちに寂光淨土と見るなり。平家「妙音菩薩は、霊山淨土に詣(イ)して、不孝(フカウ)の罪を戒め」

りやうぜん-ゑ 霊山會【名】〔佛〕**りやうじゆせん-ゑ**(霊鷲山)を見よ。

りやうぜん-ゑ-ぢやう 霊山會場【名】〔佛〕霊山會の會座(ザ)。謠曲「西王母」「霊山會場の法(ノリ)のには」

りやう-そ 両鼠・両鼠【名】〔佛〕**にそ**(二鼠)に同じ。

りやう-そ 両蘇・両蘇【名】〔人〕支那の文人蘇軾(ソシ)と蘇轍との兄弟。又、父の蘇詢を加へて、三蘇といふ。

りやう-そう 両總・両總【名】〔地〕上總國(南總)と下總國(北總)と。

りやうそう-し 領送使【名】流人(ルニン)を配所に護送する使。

りやうそう-し 両送使・両送使【名】前條の語の誤。平家「遠流(ルル)に定めらる。……、追立(オヒタテ)の檢使、両送使あんなれば」

りやう-そく 両足・両足【名】**りやうきやく**(両脚)に同じ。

りやう-ぞく 両屬・両屬【名】両方に屬すること。

りやうそく-そん 両足尊【名】〔人〕『両足を具ふる有情(ウジヤウ)の中にて、最も尊き者の義』**ほとけ**(佛)(一)の尊稱。

りやう-そで 両袖・両袖【名】両方のそで。左右のそで。もろそで。雙袖。丹波與作「両袖を、目にあてて」

りやう-そん 両存・両存【名】両方とも存在すること。

りやう-ぞん 両損・両損【名】両方とも損失を蒙ること。(両得に對して)

りやう-たい 糧袋・粮袋【名】**りやうなう**(糧囊)に同じ。

りやう-たい 領臺【名】日清戰爭の結果、我國が臺灣を領有するに至りしこと。

りやうたい 涼岱【名】〔人〕**たけべりやうたい**(建部涼岱)を見よ。

りやう-だいし 両大師・両大師【名】(一)二人の大師。叡山記「弘法・智證の兩大師」(二)〔人〕比叡山延曆寺の慈慧(ジエイ)大師と東叡山寛永寺の慈眼(ジンゲン)大師との併稱。この二人、殊に、一實神道と釋迦金輪(ヨリン)法とを鼓吹して、一宗を擴張せし効著大なるより併稱す。

りやう-たう 良刀【名】すぐれたる刀。銳「き刀。

りやう-たう 両刀・両刀【名】(一)刀と脇差と。大小。両腰(ヨウヨウ)。(二)**りやうたうつかひ**(両刀遣)の略。

りやう-たう 裲襠・裲襠・両當【名】『釋名に「其一當ノ胸、其一當ノ背」、令義解及び和名抄にも「一片當背、一片當ノ胸、故曰二裲襠一」とあり』(一)王朝時代の武官の禮服の一。後には、大儀の時にのみ、二幅の緋地の錦にて作り、袖なく、胸と背とに打ちかけ、首は上部の穴より差し入れて、袍の上に著るを常とし、上より帶を施したり。うちかけ。(二)舞樂にて、舞人の用ふる裝束。前項のより轉じたるものなるべく、製作、大抵それに似たれど、平舞(ヒラマヒ)のと走舞(ハシリマヒ)のとの二種ありて、前者は、端に毛緣を施さず、腰帶は革のを用ひ、後者は、端ごとに、白毛絲にて、緣の如く粧を施し、腰帶は、金銅製のを用ふ。うちかけ。

りやう-だう 糧道・粮道【名】城中などへ兵糧を運ぶ道すぢ。餉道。食道。

りやう-だうたい 良導體【名】〔理〕**でんだうたい**(傳導體)に同じ。

りやうたう-つかひ 両刀遣・両刀遣【名】(一)左右の手に、両刀を持ちて鬪ふ劍法。又それに熟達せる人。二刀流。(二)一人にて、二つの藝に堪能なること、又その人。(三)二つの事を同時に引き受けて行ふこと、又その人。(四)酒も菓子も好むこと、又その人。

りやうたう-めいだい 両刀命題・両刀命題【名】〔哲〕**かげんせんげんめいだい**(假言選言命題)に同じ。

りやうたう-ろんばふ 両刀論法・両刀論法【名】〔哲〕**ぢれんま**(一)に同じ。

りやう-だく 領諾【名】**りやうしやう**(領掌)に同じ。

りやう-だて 両建・両建【名】〔商〕同一の神買にて、同一の限月及び同一の銘柄(メイガラ)なる賣玉(ヨウリヤク)と買玉(ヨウカヒギ)との數量が對當なること。両山。あんこ。〔取引所の語〕

りやうだて-ぎよく 両建玉・両建玉【名】〔商〕両建とせる玉(ギヨク)。〔取引所の語〕

りやう-たふ 涼榻・涼榻【名】**りやうしやう**(涼牀)に同じ。

りやう-たん 両端・両端【名】(一)両方のはし。前端と後端と。左端と右端と。りやうはし。(二)『中庸に「執二其兩端一、用二其中於民一」とあり』過ぎたると及ばざるとの兩極端。

兩端を構ふ【句】「兩端を持す」に同じ。

兩端を叩く【句】『論語の子罕篇に「有二鄙夫一問二於我一、空空如也。我叩二其兩端一而竭焉」とあり』事の始終・本末を究め盡す。

兩端を持す【句】『史記の鄭世家に「晉聞二楚之伐一鄭、發ノ兵救ノ鄭。其來持二兩端一故遲」とあり』二心を抱く。

りやう-たん 両祖・両祖【名】左右両方の肩を脱ぐこと。「(良女に對して)

りやう-だん 良男【名】良人(ヨ)の男子。

りやう-だん 両段・両段【名】(一)二つの段階。(二)ふたたび。二度。両度。

兩段・再拜【句】神社・山陵などを拜する時の禮法として、再拜を二度重ぬること、即ち合はせて、四度拜すること。儀式「春日祭儀」「内藏頭執ㇾ幣、入置二瑞籬前上棚、兩段再拜退出」

りやうだん 兩斷・両斷【名】二つに切斷すること。ふたつぎり。

りやうたんだい 兩探題・両探題【名】**りやうたんだいしよく** 兩探題職・両探題職【名】前條に同じ。太平記「入道、斜ならず感謝して、やがて兩探題職に据ゑらるべき御教書(ミセウ)を成され」

りやうだめ 兩爲・両爲【名】兩方のためになること。雙方の利益になること。浮世風呂「早く了簡が附いたで、あれも、おれも兩爲さ」

りやうち 領地【名】㊀諸侯旗本などの領せる土地。封地。領分。知行(チギヤウ)。㊁德川時代に、萬石以上の武人の封地。(知行(チギヤウ)に對して)㊂**りやうど**(領土)㊃に同じ。

りやうち 領知【名】武士が、土地を占有すること。己の知行(チギヤウ)となること。領掌。著聞「法性寺殿、天王寺へ參らせたまひけるに、武正御供したりけるが、……武正が所かと仰せられければ、武正、さん候と申して、それより、やがて領知してけり」「えたる地。

りやうち 良地【名】すぐれたる土地。肥

りやうち 領置【名】領收しておくこと。

りやうち 良知【名】㊀『孟子の盡心上篇に「人所二不ㇾ學而能一者、其良能也。所二不ㇾ慮而知一者其良知也」とあり』人類の生れながらにして具へたる、善良なる知力。本能の知力。天然自然の辨別力。㊁支那明の王陽明が、前項の孟子の語に本づきて、心の虛靈明覺なる内容、やがて又宇宙の本體を指していひ、吾人百行の指針なりとせしもの。**しげんけう**(四言教)參照。良知を致す【句】良知を働かして、惡を避け、善に進む。支那明の王陽明が、大學の「致知」の「知」の字を、孟子の盡心上篇なる「良知」の意に解して唱道せるもの。

りやうち 量地【名】土地を測量すること。測地。(量天に對して)〔德川時代の語〕

りやうち 掠笞【名】罪人などを笞(ムチ)にて打つこと。

りやうち 掠治【名】『掠は笞(ムチ)にて打つ義、治は治罪の義』笞刑に處すること。

りやうぢ 【名】四錢の隱語。(楊弓・大弓に「同じ。

りやうちう 良籌【句】**りやうさく**(良策)に

りやうちがく 良知學【名】『**りやうち**(良知)㊁を見よ』**やうめいがく**(陽明學)に同じ。

りやうちきんぴん—**もとちやう** 領置金品基帳【名】領置物の品目と數量とを記載する基帳。

りやうち—**じやく** 量地尺【名】㊀量地の上に專用せしよりいふ』**だいしやく**(大尺)に同じ。㊁德川時代に、曲尺一尺四厘を一尺とせし物指。

りやうち—**しゆけん** 領地主權【名】〔法〕**りやうざしゆけん**(頭土主權)に同じ。

りやうち—**じゆつ** 量地術【名】土地を測量する術。測地術。

りやうぢん 兩陣・両陣【名】敵と味方との兩方の陣。敵陣と味方の陣と。

りやうぢん 梁塵【名】梁上に積れる塵。梁(ハリ)の塵。

梁塵動き搖ぐ【句】次條に同じ。盛衰記「虞公、謌を發せしかば、梁塵動き搖げり」

梁塵を動かす【句】『劉向の別錄に「魯人虞公、發ㇾ聲淸越、歌動二梁塵一」とあり』歌ふ聲の善きを賞めていふ語。梁上の塵を動かす。

りやうぢんぐあんせう 梁塵愚案抄【名】〔書〕神樂歌・催馬樂(サイバラ)などの歌を註釋せるもの。二卷。一條兼良の著。

りやうぢんひせう 梁塵祕抄【名】〔書〕今樣歌の類を集めたるもの。八雲御抄に據れば、後白河法皇の撰なりといふ。實物は久しく世に知られざりしを、文學博士和田英松、その第二卷を發見し、續いて、文學博士佐佐木信綱、第一卷の一部を發見せり。徒然「梁塵祕抄の郢曲の詞こそ、又あはれなることは多かめれ」「器と。

りやうぢやう 糧仗・粮仗【名】兵糧と武

りやうぢやうと 兩杖鼓・両杖鼓【名】『通典に「羯鼓正如二漆桶一。兩頭俱擊、以ㇾ出二羯中一、故號二羯鼓一。亦謂二之兩杖鼓一」とあり』**かつこ**(羯鼓)㊀に同じ。

りやうぢ—**やま** りやうぢ山【名】『**りやうぢやま**(山)㊁を見よ』七錢の隱語。(楊弓・大弓にて、賭くる錢にいふ)

りやうちゆう 良忠【名】〔人〕勤王の僧。護良親王の候人。元弘の初年、龍駕に笠置に從ひ、鎌倉を亡さんと謀り、捕へられて幽せられしが、潛かに逃れ去り、赤松則村と共に、六波羅を攻めて、大にこれを破る。終る所を知らず。

りやうぢよ 良女【名】良人㊁なる女。(良男に對して)「に同じ。

りやうぢよく 諒直【名】**しやうぢき**(正直)

りやうつら 兩面・両頰【名】忠義を裝ひながら、二心を抱くこと。

りやうて 兩手・両手【名】㊀兩方の手。左右の手。もろて。兩手(シリヤウテ)。雙手。㊁女の髮の結ひ方の一。德川時代に、京阪地方に行はれしもの。

兩手に花【句】二つの優れたる物を、一人にて占有する譬。

兩手の奴【句】己の兩手を使用し、他の力を借らずに用を辨ずる形容。源氏十二「薄長生島臺「人に兩手の奴あり、足に乘物あるが故に」

りやうて—**つるがしは** 兩手蔓柏・両手蔓柏【名】**つるがしは**(蔓柏)に同じ。

りやうてう 兩朝・両朝【名】㊀二つの朝廷。兩國の朝廷。正統記「和漢兩朝に先例なし」㊁二代の天皇。「兩朝に歷事す」

りやうてん 兩天・両天【名】㊀晴天と兩天との何れにも用ひ得る傘。㊁**りやうてんびん**(兩天秤)に同じ。㊂兩方とも同樣なること。三河物語「小山田將監も、内前と兩天なるが」㊃簪の兩端に、一對の定紋・花形などあるもの。りやうざし。

りやうてん 兩點・両点【名】㊀昔、漢籍の訓點にて、一語を、音と訓との兩樣を重ねて訓みしこと。例へば、詩經の「關關鳩鳩」を「關關とやはらげる鳩鳩のみさご」と訓みし類。㊁漢籍の句點と反點(カヘリテン)と。㊂漢文に、反點(カヘリテン)のみならず、送假名をも添へたること。(片點(カタテン)に對して)

りやうてん 量天【名】天體を測量すること。(量地に對して)〔德川時代の語〕

りやうてんさう 兩典廐・両典廐【名】左典廐と右典廐との併稱。

りやうてん—**じやく** 量天尺【名】天體を測量するに用ふる器械。

りやうてんそう 兩傳奏・両傳奏【名】『定員二人なるよりいふ』**ぶけてんそう**(武家傳奏)に同じ。

りやうてんびん 兩天秤・両天秤【名】㊀『三才圖會に「天平、其制以ㇾ銅爲ㇾ梁。又有二兩天平一。以二鋼索一懸二梁之兩端一、梁之中間上下、各有二銅簪一、相對則輕重各等、不ㇾ然則互有ㇾ所ㇾ欲矣」とあり。天平は即ち天秤なり』天秤㊁の一種。㊁一つを尖ひても、他を得んがために、事を二樣に仕掛けておくこと。兩端を構ふること。

兩天秤を掛く【句】「兩端を構ふ」に「同じ。

りやうと 良圖【名】**りやうさく**(良策)に

りやうと 兩都・両都【名】㊀二つの都。二箇所の都。兩京。㊁〔地〕支那の長安(西都)と洛湯(東都)と。

りやうど 凉荒【名】〔人〕俳人。姓は岩田、名は正致、通稱は又次郎。後、權七と改む。神風館、又、園友齋と號す。伊勢山田の祠官。芭蕉の門に學び、俳諧をよくす。享保二年歿す。年五十七。

りやうど 領土【名】㊀**りやうち**(領地)に同じ。㊁領土主權の下にある、一定の土地と領海と。領地。

りやうど 兩度・両度【名】ふたたび。二度。再度。「に同じ。

りやうとう 梁棟【名】**どうりやう**(棟梁)

りやう-とう 兩頭・両頭【名】㊀二つの頭。㊁兩方の突端。左右又は前後の先端。兩頭の蛇【句】『賈誼新書に「孫叔敖爲兒、出遊還、憂不食。母問其故。泣曰、今且見兩蛇。母曰、蛇安在。曰聞見兩頭蛇者死。恐人復見之、已殺而埋之矣。母曰無憂、汝不死矣。吾聞有陰德必有陽報。後爲楚相」とあり』體の兩端に頭ありといふ蛇。

りやう-とう 兩統・両統【名】二つの血統。兩方の皇統。兩流。太平記「兩統、南北に分れ」

兩統迭立(テツ)【句】鎌倉時代に、大覺寺統(後宇多天皇の御血統)と持明院統(伏見天皇の御血統)との兩皇統より、代る代る皇位に即きたまひしこと。

りやうとうきでう 兩頭軌條・両頭軌條【名】上下に同樣の頭を有する軌條(レエル)、即ち縱斷面の工の形なるもの。英國の創製に係り、又今日これを用ひをれるも、英國のみなり。

りやうど-かうけん 領土高權【名】【法】

りやうどしゆけん(領土主權)に同じ。

りやう-どく 兩得・両得【名】㊀一時に二樣の利を得ること。㊁兩方共に、利益あること。(兩損に對して)

りやう-とく 凉德【名】德のうすきこと。

りやう-とく 領得【名】**りやうくわい**(領會)に同じ。

りやうど-けん 領土權【名】【法】次條に

りやうど-しゆけん 領土主權【名】【法】『英 Territoriality』國際法上、自國の領土內に、他國の主權の侵犯を許さず、その領土に在る者は、その國の民たると外國人たるとに論なく、等しく、その國權に服從せしむる、主權の作用。その範圍は、土地の上下を問はざるのみならず、領海及び軍艦にまでも及べども、又、若干の例外あり、治外法權、即ちこれなり。領土權。領土高權。領地主權。(臣民主權に對して)

りやうとつ-れんず 兩凸レンズ・両凸レンズ【名】『英 Double convex lens』兩面共に凸面なるレンズ。

りやうど-ほぜん 領土保全【名】『英 Territorial integrity』一國の領土の喪失を防ぎ、これを保持すること。

りやうどん-かんばん 量噸甲板【名】西洋形船舶の噸數を計るに用ふる甲板。一層又は二層の甲板を備ふる船舶にありては、その上甲板、三層を備ふるものにては、最下層の甲板より第二層にある甲板。一層又は二層の甲板を備ふる船舶にありては、甲板下の噸數に甲板上蔽圍せる場所の噸數を加へたるもの、又、三層以上のものにては、甲板下の噸數に、甲板上各甲板間の噸數及び甲板上蔽圍したる場所の噸數を加へたるものを、その船舶の總噸數とす。

りやう-ない 領內【名】領地の範圍の內。「封內。

りやう-なう 糧囊・粮囊【名】兵糧を入れて、腹に著くるふくろ。糧袋。

りやう-なふ 領納【名】**りやうしう**(領收)に同じ。盛衰記「その後、漢土より字書を傳へける時、倭と書きて、この國の名に用ひたるを、即ち領納して」

りやう-にく 梁肉【名】㊀上等なる米と牛・羊などの肉。㊁美食。膏粱。

りやう-にせんせき 良二千石【名】善政を布く地方長官。

りやう-にん 兩人・両人【名】ふたり。二「人。兩名。

りやう-にん 良忍【名】【人】高僧。融通念佛宗の開祖。尾張國富田の人。俗姓は藤原氏。十二歲にして、比叡山に登り、十五歲園城寺に、二十一歲仁和寺に至りて、學修に勤め、二十三歲にして、感發する所あり、京都大原山に隱棲して、來迎院等を創建し、辭明(ジヤウ)を大成し、淨土敎を唱ふ。長承元年寂す。年六十一。勅諡聖應大師。

りやう-のう 良農【名】その道にすぐれたる農民。

りやう-のう 良能【名】人類の、學ばずして、生れながらによく事を爲し得る力。本能。**りやうち**(良知)參照。

りやう-の-ぎけ 令義解【名】【書】大寶令を、漢文にて註解せるもの。十卷。大寶元年、淸原夏野總裁の下に、當時の學者たちの手に成れる官撰の書にして、淳和天皇の天長中に成れり。

りやう-の-さんべん 令三辨【名】【書】律令格式(リツリヤウキヤクシキ)の令は、大寶の令なること、及び、養老年間の修正は、ただ律令を刪り定めたるまでなること、又、今の令は、全卷、養老年間に出でたりしことを辨ぜるもの。一卷。荷田在滿の撰。

りやう-の-しふげ 令集解【名】【書】大寶令を註釋せるもの。三十卷の內、八卷散逸す。惟宗直本の撰。令義解の說を初に擧げ、次に古書・諸家の說を記したれば、異說を知り、義解の不足を補ふに足る。

りやうは 兩刃・両刃【名】**もろは**(諸刃)に同じ。

りやうは 兩把・両把【名】兩手ににぎること、又それだけの分量。「馬。

りやうば 良馬【名】すぐれたる馬。細良馬の骨【句】「駿馬(シユンバ)の骨を買はずや」を見よ。藤製毛「二子(ツク)が鼻の下の長きより出でたる滑稽の骨にして、價、良馬の骨より貴し」

りやうはい 量配【名】大寶令の制度にて、太政官に於て、移流人の罪の輕重を量り、配地の遠近を定めしこと。

りやう-ばい 良媒【名】よき媒酌人。よき仲人(ナカウド)。「に同じ。

りやう-はう 良方【名】**りやうほふ**(良法)

りやう-はう 凉棚・涼棚【名】納涼のために設くる棧敷。すずみどこ。

りやう-はう 兩方・両方【名】㊀二つの方面、又その事物。ふたかた。雙方。二方。㊁**りやうはうづな**(兩方綱)の略。

兩方立てれば、身が立たぬ【句】相爭ふ二人の中間に立ちて、兩方共に面目の立つやうに計らふ時は、自分の立つ瀨が無くなる。〔諺語〕

りやうはう-づな 兩方綱・両方綱【名】**みなは**(耳繩)に同じ。

りやう-はふ 良法【名】すぐれたる方法。よき手だて。良方。「し。

りやう-はん 梁飯【名】上等なる米のめ

りやう-はん 兩班・両班【名】支那及び昔の朝鮮にて、文官と武官と。

りやう-ばん 兩班・両班【名】【佛】**りやうじよ**(兩序)に同じ。

りやう-ばん 兩番・両番【名】德川幕府の職制の一。㊀初は大番(オホバン)と書院番と。兩御番。㊁後には、書院番と小姓組(コシグミ)番と。兩御番。

りやう-ばん 量盤【名】**そくりやうらばん**(測量用羅盤)に同じ。

りやうばん-がしら 兩番頭・両番頭【名】德川幕府の職制の一。㊀初は大番(オホバン)頭と書院番頭と。㊁後には、書院番頭と小姓組(コシグミ)頭と。**さんばんがしら**(三番頭)參照。

りやうばん-ぐみ 兩番組・両番組【名】德川幕府の職制の一。㊀初は、大番(オホバン)組と書院番組と。㊁後には、書院番組と小姓組と。

りやうばん-じゆつ 量盤術【名】量盤を用ひてする、土地測量の術。

りやう-ひ 良否【名】よきことと、わろきことと。よしあし。

りやう-び 兩眉・両眉【名】兩方の眉。左右の眉。雙眉。

りやうひ-くわ 兩被花【名】〔植〕『英 Diphmyldeous flower』二重の花被、即ち萼と花冠とを有する花。普通の花は、皆これなり。(無被花・單被花に對して)

りやう-ひざ 兩膝・両膝【名】兩方の膝。左右の膝。もろひざ。

りやう-ひぢ 兩肘・両肘【名】兩方の肘。左右の肘。もろひぢ。

りやう-ひつ 良筆【名】㊀すぐれたる筆。㊁すぐれたる文章家。

りやう-ひつ 良弼【名】忠良なる、輔弼の臣。良輔。賢佐。良佐。

りやう-ひつ 輛匹【名】車と馬と。

りやう-ひん 良品【名】すぐれたるしな。佳品。「左右の鬢。雙鬢。

りやう-びん 兩鬢・両鬢【名】兩方の鬢。

りやう-びらき 兩開・両開【名】**くわんおん**

びらき(観音開)に同じ。「同じ。

りやう-ふ 両夫・両夫【名】**にふ**(二夫)に

りやう-ぶ 両部・両部【名】■二つの部分。二つの部分。■【佛】密教の二大法門たる金剛界と胎蔵界と。東密にては金(コン)・胎と次第し、台密にては胎・金と次第す。両界。盛衰記「瑜伽(ユガ)・唯識(ユイシキ)両部の法門」■**りやうぶしんたう**(両部神道)の略。四**しゆげんだう**(修験道)に同じ。

両部不二【句】【佛】両部■の胎蔵界は理性、金剛界は智用を表現すれども、理は智の體、智は理の用にして、両者、畢竟はこれ一に歸す。

りやう-ふ 令法【名】【植】令法科に屬する落葉喬木。高さ一丈餘に達す。葉は、茶又は櫻の若葉に似て、六七葉、枝の端に群生し、白色の小花、總狀花序をなして開く。山地に自生し、若葉は、煮又は飯にまじへて食ふべく、木材は床柱・挽物・細工・薪炭の料に供すべし。うらざくら。さるだめし。びやうぶな。はたつまり。はたつもり。はなばのき。ゆきふぢ。よぼ。

りやう-ふう 涼風・涼風【名】すずしきかぜ。すずかぜ。

りやう-ふう 良風【名】すぐれたる風俗。善良なる風習。(惡風に對して)

りやうぶ-くわ 令法科【名】【植】顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區に屬する一科。凡そ一屬・三十種を包含し、濕木又は喬木なるが中に、我國に自生するものは、ただ一種のみ。

りやうぶけっかい 両部結界・両部結界【名】【佛】両部■の深意を以て組み立てたる結界■。盛衰記「大師入定の靈地なり。両部結界の道場なり」

りやうぶ-しがふ 両部習合・両部習合【名】【佛】次條の略。

りやうぶしふがふ-しんたう 両部習合神道・両部習合神道【名】【佛】次條に同じ。

りやうぶ-しんたう 両部神道・両部神道【名】【佛】眞言宗傳ふる所の神道。兩部曼陀羅(マンダラ)に、天竺に奉ぜらるる一切の諸天・神祇をも包羅して、本迹(ホンジャク)・權實(ゴンジツ)の深祕を盡せるに基き、我國の密教者の、その意を推して、天照大神は大日如來の垂迹(スイジャク)、八幡宮は阿彌陀如來の垂迹等の如く、兩部曼陀羅の諸尊に習合せるもの。天台宗所傳の一實神道も、兩部神道の類なれども、その、釋迦金輪(コンリン)を主とせるに對して、これは、大日金輪を主とす。奈良朝以來行はれ、神祇に菩薩・權現等の名稱を附するに至れるも、その結果なりしが、明治以後、神佛混淆の禁止に伴ひて衰頽せり。**ゆゐいつしんどう**(唯一神道)參照。兩部習合神道。兩部習合。兩部。

りやう-ぶた 兩蓋・両蓋【名】懐中時計の、両面共に、金屬性の外蓋を有せるもの。(片硝子に對して)

りやうぶどりね 兩部鳥居・両部鳥居【名】鳥居の一種。明神(ミヤウジン)鳥居の柱の上に、圓き臺輪を加へ、本柱の前後に控柱を設け、兩柱を貫(ヌキ)にて連結したる形式のもの。

りやうぶ-まんだら 兩部曼荼羅・両部曼陀羅【名】【佛】金剛界の曼陀羅と胎藏界の曼陀羅と。これを安置するには、前者を西、後者を東とす。兩界曼荼羅。

りやう-ぶん 領分【名】『領有する部分の義』**りやうち**(領地)に同じ。「に同じ。

りやう-ぶん 兩分・両分【名】**にふん**(二分)

りやう-へい 良兵【名】■すぐれたる兵士。■すぐれたる兵器。

りやう-へい 良平【名】【人】支那漢の高祖の臣なる張良と陳平。

りやう-へん 兩邊・両辺【名】兩方の邊(ハタ)。雙方のほとり。兩端。

りやう-べん 兩便・両便【名】■『漢書の溝洫志に「衣二食縣官」而爲之作、廼兩便」とありて、註に「爲二公私兩便一」と見ゆ』兩方の便利。雙方に都合よきこと。■大便と小便と。二便。兩用。

りやうべん 良辨【名】【人】**らうべん**(良辨)を見よ。「はかりごと。

りやう-ぼ 良謨【名】すぐれたる大本の

りやう-ほう 良朋【名】弟子なかまのすぐれたる友人。

りやう-ほう 兩豐・両豐【名】【地】豐前と豐後との兩國の併稱。「同じ。

りやう-ぼう 良謀【名】**りやうさく**(良策)に

りやうぼう-だ 兩峯駝・両峯駝【名】【動】背上に隆起せる肉峰の二つある駱駝。ふくぼうだ。

「用に立つ木。

りやう-ぼく 良木【名】すぐれたる立木。

りやう-ぼく 梁木【名】器械體操の器械の一。地上に、二本の柱を、數間を隔てて立て、その柱の双方にかけて、地面より一二丈の高さに、横木を架せるもの。

りやう-ほだ 兩絆・両絆【名】罪人の兩足に、絆(ホダ)を施すこと。

りやう-ぼっかいこく-かくし 領渤海國客使【名】渤海國の使者に對する領客使。

りやうぼんね 兩本位・両本位【名】【經】次條の略。

りやうぼんね-せい 兩本位制・両本位制【名】【經】**ふくほんゐせい**(複本位制)に同じ。

りやうまい 糧米・粮米【名】糧食の米。粮料(レウ)。粮物(モツ)。らうまい。

りやう-まう 兩毛・両毛【名】【地】『上代に、毛野(ケノ)と呼びし地を、仁德天皇の時、上毛野(カミツケノ)・下毛野(シモツケノ)の二國に分ち、和銅年間、國名を漢字二字に一定せらるるに及び、毛の字を省きて、上野(カミツケ)・下野(シモツケ)とし、更に、今日の稱呼に轉ぜしものなるよりいふ』上野と下野との兩國の併稱。

りやう-まつ 糧秣・粮秣【名】兵粮(ヒヤウ)と秣(マグサ)と。芻糧。

りやうまつ-しやう 糧秣廠【名】**りくぐんりやうまつしやう**(陸軍糧秣廠)の略。

りやう-みん 良民【名】■善良なる民。■一箇獨立の資格ある人民。俘囚・奴僕などならぬ民。良人。

りやう-むかひ 兩向・両向【名】二つ向ひあひてあること。東海道名所記「大門の前に、兩むかひに、茶屋あり」

りやう-め 量目【名】はかりめ。めかた。

りやう-め 兩目・両目【助數】**りやう**(兩)四に同じ。

りやう-めい 兩名・両名【名】**りやうにん**(兩人)に同じ。「に同じ。

りやう-めい 領命【名】**りやうしやう**(領掌)

りやう-めん 兩面・両面【名】■表と裏と又は左右の二つの面。■疊の緣(ヘリ)の、輪莚(ワナ)の文あるもの。續紀「兩面二匹」■【植】**このてがしは**(側柏)に同じ。

りやうめん-おび 兩面帶・両面帶【名】**ちうやおび**(晝夜帶)に同じ。

りやうめん-がき 兩面垣・両面垣【名】直徑一寸二三分ほどの竹を、二つに割りて、腹合(ハラアハセ)にし、且つ、少しく喰ひ違はせて立て、二三段の押緣を添へ、蕨繩にて結びて作れる垣。

りやうめん-しだ 兩面羊齒・両面羊齒【名】【植】**こがねわらび**(黃金蕨)に同じ。

りやうめん-しのぶ 兩面惹・両面惹【名】【植】**ひめしだ**(姫羊齒)に同じ。

りやうめんずり 兩面摺・両面摺【名】紙の兩面に印刷すること、又その摺方にしてある印刷物。

りやうめん-べり 兩面緣・兩面端・両面緣【名】敷物などの、表面・裏面共に緣を取り附けたるもの。延喜式「兩面端茵七枚」

りやう-もく 兩目・両目【名】**りやうがん**(兩眼)に同じ。

りやうもく-りやうそく 兩目兩足・両目両足【名】『**りやうそくそん**(兩足尊)といふ語あるによりて、兩目の二字を加へていへる語』ほとけ。佛陀。海道記「兩目兩足の並びたまひし臺(ウテナ)」「たばん。

りやう-や 兩夜・両夜【名】二度の夜。ふ

りやう-や 涼夜・涼夜【名】すずしき夜。

りやう-や 良夜【名】仲秋の頃などの、月の明らかに冴えわたれる夜。

りやう-や 良冶【名】技術のすぐれたる鍛冶屋(カヂ)。

りやう-やう 兩樣・両樣【名】二つの樣式。ふたいろ。ふたみち。二樣。

りやうやう-けんたい 兩様兼帯・両様兼帯【名】本補地頭(ホンブジトウ)たる地頭の、更に新補地頭の得分をも兼領するに至りしこと、又その地頭。

りやう-やく 良薬【名】効能のすぐれたる藥。ききめある藥。妙藥。らうやく。良藥、口に苦し【句】『孔子家語に「良藥苦二於口一、而利二於病一、忠言逆二耳一、而利二於行一」とあり』㊁藥の効果を望まば、苦味を忍ばざるべからず。〔諺語〕㊂身のためになることは、聞くも厭しけれども、益ある譬。〔諺語〕

りやう-やなぎ 【名】〔植〕**びやうやなぎ**(未央柳)の轉訛。

りやう-ゆう 兩雄・両雄【名】二人の英雄。兩雄俱に立たず【句】『史記の酈食其傳に「兩雄不二俱立一、楚漢久相持不レ決」とあり』二人の英雄、同時に世にある時は、必ず相爭ひて、一方は倒る。兩雄並び立たず【句】前條に同じ。兩雄は必ず諍ふ【句】前條に同じ。太平記「兩雄は必ず諍ふ習なれば、互に威勢を競はれけるにや」

りやう-よう 兩用・両用【名】㊀二つ共に用ふること。㊁二つの事に用ふること。兼用。㊂大便と小便と。兩便。

りやう-よく 兩翼・両翼【名】㊀兩方のつばさ。左右のつばさ。㊁兩者相待つて用を成す物事の譬。兩輪。㊂軍隊の左翼と右翼と。㊃昔の陣立の一。軍を三隊に分ち、左右の二隊は物陰に隱しおきて、中央の隊を敵と戰はしめ、敵の混亂に陥りたる時、左右の二隊をして討たしむること。㊄鷹の翼の眉の部分。

りやう-よつぐな 兩横綱・両横綱【名】相撲(スマフ)の東西兩組の横綱。

りやう-らく 良樂【名】〔人〕『文選の劉琨答二盧諶一詩の序に「驥驥倚二轅於吳坂一、長二鳴於良樂一」とあり。樂の字の音、正しくは**らう**』王良と伯樂と。十訓「驥驥も、良樂に遇はざりける間は、鹽をこそ負ひければ」

りやう-り 良吏【名】吏務にすぐれたる官吏。順良なる官吏。

りやう-りう 兩流・両流【名】㊀二つの水流。㊁二つの流派。㊂**りやうさう**(兩統)に同じ。正統記「御母は、中宮禎子内親王(陽明門院と申す)、三條院の皇女なり。後朱雀の御素意にて、太弟に立ちたまひき。又、三條の御末をも受けたまへり。……兩流を内外に受けたまひて、繼體の主となりましましき」

りやう-りつ 兩立・両立【名】二つ共に並び立つこと。

りやう-りん 兩輪・両輪【名】㊀二つの車輪。㊁相待って用を成す物事の譬。兩翼。太平記「これは唯二人、二翼・兩輪の如く」

りやう-りやう 兩兩・両両【副】㊀二つづつ。雙雙。㊁これも、かれも。雙雙。

りやう-りやうじ 【形二】**らうらうじ**に同じ。〔古語〕枕「かしこまりて、物など言ひたるぞりやうりやうじき」

りやう-ろくはら 兩六波羅・両六波羅【名】**ろくはらたんだい**(六波羅探題)を見よ。太平記「始めて、洛中に兩人の一族を居(ス)ゑて、兩六波羅と號す。西國の沙汰を取り行はせ、京都の警衛に備へらる」同「主上は、御簾を捲かせて叡覽あり、兩六波羅は、敷皮に坐して、これを檢知す」

りやう-わ 兩輪・両輪【名】女の髪の結ひ方の一。髷を二つ作りて、笄を差し、その餘りの垂れたる毛を上げたるもの。新版歌祭文「一世一度の娘の晴(ハレ)、定めて髪も美しう出來たであろ。……いえ、そんなら兩輪か」「ること。

(わうやり)

りやう-わけ 兩分・両分【名】兩方に分くること。

りやう-ゐん 兩院【名】㊀二人の院(上皇又は法皇)。盛衰記「兩院・主上還御の事」㊁院といふ字を下に附けたる二つの公署學校など。「淳和奬學兩院の別當」㊂**りやうぎゐん**(兩議院)に同じ。

りやうゐん-けふぎくわい 兩院協議會・兩院協議會【名】貴族院にて、或議案を可決して、衆議院に回送せるに、衆議院は、これを修正して可決したる場合に、兩院より選出したる、各十人以下同數の委員が、會同して、協議をなすこと。協議の結果成立したる議案は、再び、先づその議案を提出したる議院の議に付し、次で、他の議院に移す。而して、兩院は、これに對して、再度修正の動議を呈出すること能はざるものとす。

りやうゐん-せい 兩院制・両院制【名】〔法〕**にゐんせい**(二院制)に同じ。

りやうゐん-せいど 兩院制度・両院制度【名】〔法〕前條に同じ。

りやうゐん-の-べつたう 兩院別當・両院別當【名】**じゆんわしやうがくりやうゐんのべつたう**(淳和奬學兩院別當)の略。「見よ。

りやう-ゐ 靈會【名】**ごりやうゐ**(御靈會)を

りやう-ゐつ 兩越・両越【名】〔地〕越前越中・越後の三國中の何れかの二國の併稱。

りやう-ゐつ 兩粤・両粤【名】〔地〕『この二省の地は、古代の百粤の地なるよりいふ』支那の廣東(トウ)省と廣西省との併稱。

りやう-ゐん 梁園・梁苑【名】**ちくゐん**(竹園)㊁に同じ。

りやく 略・畧【名】㊀ちゐ。はかりごと。智略。才略。㊁はぶくこと、又、はぶきたるもの。省略。「すずり(硯)は、すみすり(靈麝)の略」

り-やく 利益【名】〔佛〕他に利益を與ふること。便益。めぐみ。歌仁「ちやうによらいといふ碁うちの、碁打つを見て。長如來ごをりやくともしけるかな」

りやく 略・畧【副】ほぼ。あらまし。概略。大略。約。「味。

りやく-い 略意・畧意【名】あらましの意

りやく-おう 暦應【名】北朝光明院の用ひたまひし年號。(紀元一九九八—二〇〇一年)

りやく-おう-じ 暦應寺【名】**てんりゆうじ**(天龍寺)に同じ。

りやく-おん 略音・畧音【名】〔語〕連聲の便によりて、音をはぶきて呼ぶこと。例へば、「あしぶみ(足蹈)」の「あぶみ(鐙)」となり、「はだあし(肌足)」の「はだし(跣)」となる類。

りやく-かい 略解・畧解【名】簡略に解釋すること、又その解釋を記したる書。りやくげ。

りやく-がう 略號・畧號【名】簡略ならしめたる記號又は番號。

りやく-がう-とうきれう 略號登記料・畧號登記料【名】電報の受信人が、自己の居所・氏名に略號を常用せんとする時、その略號の登記を受くるために、逓信局所に納むる料金。

りやく-はふ 略可法【名】〔書〕諸家古來の筆蹟を摸寫手轉し、臨寫縮小したるもの。二卷。市河米菴の著。縮臨は、男三千の手に成る。

りやく-き 略記・畧記【名】簡略に記すこと、又その記したるもの。「式」に同じ。

りやく-ぎ 略儀・畧儀【名】**りやくしき**(略式)に同じ。

りやく-くん 略訓・畧訓【名】萬葉集に於ける漢字使用法の種類の一。その字の訓の略音を取りて用ひたるもの。例へば、「起(スヨウ)」の字を「こす」、「足(ソク)」の字を「あ」又は「し」に用ひたる類。

りやく-げ 略解・畧解【名】**りやくかい**(略解)に同じ。

りやく-げん 略言・畧言【名】㊀簡略に言ふこと。概略を語ること。㊁省略して「じ」いふ言葉。略語。

りやく-ご 略語・畧語【名】前條㊁に同

りやく-ごふ 歴劫【名】〔佛〕『法華經の普門品に「弘誓深如レ海、歴劫不思議」とあり』多くの劫(カ)を經ること。平家「歴劫不思議、力及ばずと、返(シカ)の札をぞ打ちたりける」

りやく-じ 略字・畧字【名】畫(クワク)を略したる文字。例へば、「雁」を「厂」、「兩」を「冂」、「應」を「応」、「壓」を「圧」、「菩薩」を「艹」と書く類。省文。

りやくしき 略式・畧式【名】簡略ならしめたる樣式。省略したる手續。略儀。

りやくしき-ほけんじやう 略式保險狀・畧式保險狀【名】〔商〕保險契約の要件確定せる後、普通の保險證券に代用する目的にて、作成する略式の證券。

りやくしき-ほけんしようけん 略式保險證券・畧式保險證券【名】〔商〕前條に同じ。

りやくしき-めいれい 略式命令・畧式命令【名】〔法〕區裁判所が、檢事の請求により、その管轄に屬する刑事事件につき、公判前、正式の裁判手續を經ずして、罰金又は科料を科する命令。罪となるべき事實、適用すべき法令の規定、科すべき刑及び附隨の處分、並びに正本の送達ありし日より七日以內に、正式裁判の申立をなすべき旨を明示せる正本を、被告人に送達するによりて、その効力を生ず。

りやくしやう 略章・畧章【名】略式の勳章又は記章。

りやくしやく 略灼・畧灼【名】まるきば。

りやくしゆ 略取・畧取【名】かすめ取ること。奪ふこと。

りやくじゆ 略綬・畧綬【名】略式の綬。

りやくじゆ 略頌・畧頌【名】らくしゆ(落首)に同じ。著聞「略頌に作りて嘲りはべりける程に」

りやくじゆつ 略述・畧述【名】概略を陳述又は記述すること。

りやくじよ 略敍・畧敍【名】概略を敍述すること。

りやくじようはふ 略乘法【名】〔數〕『英 Contracted multiplication』省略算に於ける乘法。或小數と他の或小數との乘積を、小數第n位まで求むるに當り、普通の計算にては、第n位以下までも、全部算出するが故に、不必要なる部分まで計算することとなれども、計算の結果が、第n位に影響を及ぼさざる範圍に於て、第n位以上を正しく求め得るやうに省略を行ふ方法。りやくちようはふ(略除法)參照。

りやくす 略す・畧す【動佐變他】Ⅰはぶく。省略す。Ⅱかすめ取る。奪ふ。略取す。略奪す。〔掠す〕

りやくせう 略抄・畧抄【名】せうりやく(抄略)に同じ。

りやくせつ 略說・畧說【名】簡略に說くこと。概略を說明すること。

りやくそく 略則・畧則【名】がいそく(概則)に同じ。

りやくだつ 略奪・畧奪・掠奪【名】かすめ奪ふこと。奪取。奪略。

りやくだつ-ざい 掠奪罪【名】〔法〕陸海軍刑法に於ける犯罪の一。戰地又は帝國軍の占領地にて、住民の財物を掠奪し、或は、戰地に於ける戰死者又は戰傷病者の衣服、その他の財物を褫奪せるによりて成立す。

りやくだつ-ぶつ 掠奪物【名】掠奪したる物。

りやくぢやう 略定・畧定【名】りやくしき(略式)に同じ。大鏡「御葬送の沙汰を、むげに略定に書き置かせたまへりければ」

りやくぢようはふ 略除法・畧除法【名】〔數〕『英 Contracted division』省略算に於ける除法。乘法に於ける略乘法の類。「略なる圖取(ヴリー)。

りやくづ 略圖・畧圖【名】略式の圖。簡

りやくでん 略傳・畧傳【名】簡略に記せる傳記。

りやくどく 略讀・畧讀【名】簡略に讀むこと。さっと讀むこと。(精讀に對して)

りやくにん 曆仁【名】四條天皇の御代の年號(紀元一八九八年)。

りやくばい 略賣・畧賣【名】略取して賣ること。かどはかすこと。

りやくばう 略帽・畧帽【名】略式の帽子。(正帽に對して)「法。

りやくはふ 略法・畧法【名】簡略なる方

りやくひつ 略筆・畧筆【名】文句を略して記すこと。略文。

りやくふ 略譜・畧譜【名】五線・音符等の代りに、算用數字を用ひて、簡略に記したる樂譜。

りやくふく 略服・畧服【名】簡略なる服裝。略儀の時に著る衣服。

りやくぶん 略文・畧文【名】簡略なる文章。文句を省略したる文。

りやくへう 略表・畧表【名】簡略に表示すること、又、簡略に記せる表(ヒヤウ)。

りやくほんれき 略本曆・略本暦【名】ほんれき(本曆)を見よ。

りやくみやう 歷名【名】れきめい(歷名)に同じ。「たる名。

りやくめい 略名・畧名【名】簡略に記し

りやくもんるゐ 略文類【名】〔書〕けうぎやうしんしよう(敎行信證)Ⅱを見よ。

りやくりやう 掠領【名】掠奪して占領すること。太平記「烏帽子峯に城を拵へ、四邊の庄園を掠領す」

りやくりよ 掠虜【名】掠めて虜(ヒヨ)にすること。太平記「吏民を掠虜す」

りやくれき 略曆・畧曆【名】簡略に記したる曆(ヒヨ)。ほんれき(本曆)參照。

りやくれき 略歷・畧歷【名】簡略に記せる履歷、又その履歷書。

りやくろん 略論・畧論【名】簡略に論ずること、又その論。概論。

りやくわき 略脇・畧脇【名】神能(カミ)に近くして、神能と同じく脇能として演ずる曲。例へば、「山姥(ヤマ)」・「邯鄲」など。

り-やす 利安【名】利子の少きこと。利率の低きこと。根南志具佐「虎の皮のふんどしを質にお置きなさるとも、隨分利安に仕らん」

りやん 兩・両【名】Ⅰ『數詞の**りやん**(兩)の轉義にて、武士は、大小兩刀を帶ぶるにつきていふ』さむらひ。武士。八笑人「しかつべらしい帶刀(ヲビ)」「同じ。

りやん 亂・乱【名】〔建〕ふぞろひ(不揃)に

りやん 兩・両【數】『兩の字の唐音』ふたつ(二つ)に同じ。〔拳(ケン)を打つ時にいふ語〕

りやん 兩・両【助數】てえる(兩)に同じ。

りやんくうる-れつがん リヤンクウル列岩(英 Liancourt island)【名】〔地〕たけしま(竹島)Ⅱに同じ。

りゆう 龍・竜【名】Ⅰ支那にて、鱗蟲の長とし、麟・鳳・龜と合はせて、四瑞とする想像上の動物。角は鹿、頭は駝、眼は鬼、頭は蛇、腹は蜃、鱗は魚(その數八十一枚)、爪は鷹、掌は虎(その指三本)、耳は牛に似たりといひ、飛龍・應龍・蛟龍・青龍・白龍・黑龍・黃龍・赤龍など、種類多く、雲氣に乘じ、陰陽に養はれ、雲を起し、雨を致し、水に潛み、天に上り、大なる時は、宇宙に徜徉し、小なる時は、拳石の中に隱るなど稱せらる。佛典中に八部衆の一として記せる龍は、梵語Nāgaの譯語にして、長身・無足、蛇屬の長にして、神力を有し、雲雨を變化すといひ、海の神とす。西洋にも、形體これに似たるもの(英語の Dragon)の說話あり。

(Ⅱ りゆう)

りゆう。たつ。源氏「りゆうの中より、佛生れはべらねばこそあらめ」盛衰記「龍にもあらねば、雲へも上らず」Ⅱ紋所の一。前項の龍に象れるもの。龍の丸・龍の爪・角雨龍(カクアマ)などの種類あり。

龍興りて、雲を致す【句】『王褒の聖主得二賢臣一頌と題する文に「虎嘯而風冽、龍興而致雲」とあるに本づく』「虎嘯きて、谷風至る」に同じ。〔諺語〕

龍吟ずれば、雲起る【句】前條に同じ。〔諺語〕諸曲(和布刈)「虎嘯くや風早鞆(ヤ)の、龍吟ずれば雲起り、雨となり」

龍、雲を得【句】「蛟龍(コウリ)、雲雨を得」に同じ。

龍、天に翔りて、雲を起す【句】「龍興りて、雲を致す」に同じ。〔諺語〕太平記「將軍父子の御勢、只、龍の天に翔りて、雲を起し、虎の山に靠(ヨ)りて、風を生ずるが如し」

龍に翼【句】「虎に翼」に同じ。太功記

「龍に翼の尾田春長」

龍に攀ぢ、鳳に附く【句】『杜甫の詩に「攀龍附鳳勢無窮」とあり』「龍鱗に攀ぢ、鳳翼に附く」の略。

龍の頷の珠を取る【句】「龍(リヤウ)の頷(アギト)の珠を取る」に同じ。

龍の陣【句】**りゆうぢん**(龍陣)に同じ。

龍の駒【句】「龍(リヤウ)の駒」に同じ。空穂「いばゆるりゆうの駒」

龍の鬚を蟻が狙ふ【句】「蟻螂(ギリヤウ)が斧」に同じ。〔諺語〕

龍の髭を撫づ【句】何時一身の破滅を来すや測られぬ、極めて危険なる立場にある譬。虎の尾を蹈む。桑芝榮餘「於身、賞過於分、如履虎尾、如撫龍鬚」盛衰記「龍の髭を撫て、虎の尾を蹈む心地せられけれども」

龍の鰭【句】魚の尾鰭の上方の先端。

龍は一寸にして、昇天の氣あり【句】「梅檀は二葉より香し」に同じ。〔諺語〕

龍は、時を得て、天地に蟠り、時を失へば、守宮・蚯蚓(キウイン)と、身を潛む【句】龍の變幻出沒の靈妙なる作用の形容。鎌倉三代記「龍は、時を得て天地に蟠り、時を失へば、守宮・蚯蚓と身を潛む。我、君のために軍慮をめぐらし、肺肝を碎くと雖も、賴家公の武運の拙さ」

龍は、眠りて、本體を現す【句】龍も、眠りて油斷すれば、正體を見とほさる。〔諺語〕會我「龍は、眠りて、本體を現し、人は、酔ひて、本性をあらはす」

龍を畫きて、狗に類す【句】『後漢書の儒林傳に「若是所謂畫龍不成、反類狗者」とあり』「虎を畫きて狗に類す」に同じ。〔諺語〕「こと。

りゆうあく 隆渥【名】君恩の高く厚き

りゆうあんじ 龍安寺・竜安寺【名】山城國葛野(カヅノ)郡衣笠(キガサ)村、等持院の西にある、臨濟宗の寺。大雲山と號す。本尊は釋迦三尊。義天和尚の開山。庭に池あり、その鴛鴦は、洛北名勝の一に數へらる。後山に細川勝元の塔あり。「盛運。

りゆうーうん 隆運【名】さかんなる運命。

りゆうーえう 龍腰・竜腰【名】〔一〕琴の一部。下なる兩方より彎曲して刳り込みたる所。〔二〕**ほし**(橋)〔二〕の異稱。

りゆうおんじ 龍穩寺・竜穩寺【名】武藏國入間(イルマ)郡梅園村大字龍ケ谷(ガヤツ)にある曹洞宗の寺。足利義教の創立、太田道灌の中興と傳へ、德川時代には、下總國の總寧寺、下野國の大中寺と共に、同宗の僧錄三箇寺の稱ありたり。

りゆうーか 龍舸・竜舸【名】『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天皇乘御の船。りようか。

りゆうーか 龍河・竜河【名】〔地〕『河中に龍棲めりとていふ』**にれんぜんが**(尼連禪河)の異稱。

りゆうーが 龍駕・竜駕【名】『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天皇の車駕。りようが。龍車。

りゆうがいじ 龍蓋寺・竜蓋寺【名】大和國高市郡高市村、岡本宮の舊址にある眞言宗の寺。東光山と號す。本尊は空海の作と傳ふる如意輪觀音。天智天皇の勅願にて、義淵僧正の開基。西國順禮第七番の札所。一名、岡寺(オカデラ)。

りゆうーかく 龍角・竜角【名】和琴(ワゴト)と箏との一部。櫓(ヤグラ)の表の小木を架して、絃を乘する所。

りゆうーがーさき 龍崎・竜崎【名】〔地〕常陸國稻敷(イナシキ)郡にある町。茨城縣の管下。米澤氏の舊藩地。

りゆうがさきーじやう 龍崎城・竜崎城【名】常陸國龍崎町にありし城。源頼朝、家臣下河邊政義を封じ、子孫代代居りて、龍崎氏を稱す。豐臣秀吉の時、封を奪はれて以來、佐竹氏の有に歸し、慶長中、佐竹氏秋田に移るに及びて、廢墟となる。

りゆうーかん 隆寒【名】はげしく寒きこと。厳寒。烈寒。

りゆうーがん 龍顏・竜顏【名】『易經の乾卦の「飛龍在天」の語に本づきて、龍を天皇に譬ふ』天皇の御顏。天顏。りようがん。

りゆうーがん 龍頷・竜頷【名】龍の頷(ガン)。龍頷を探る【句】「龍(リヤウ)の頷(アギト)の珠を取る」に同じ。

りゆうーがん 龍眼・竜眼【名】〔一〕『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天皇の御眼。盛衰記「かの卒都婆を召されつつ、龍眼より御涙を流させたまひ」〔二〕〔植〕無患樹(ムクロジ)科に屬する常綠小喬木。高さ約一丈五尺に達し、葉は羽狀複葉にして、各小葉は全緣の楕圓を成し、果實は簇生し、圓形にして、外皮に茶褐色なる細鱗あり。種子は、暗褐色にして、味甘く、龍眼肉として、藥用とし、素乾にして、舶來す。臺灣・南支那・馬來・印度に產す。材は、工作用及び木炭用に供す。さかき。〔三〕〔植〕**いぬびは**(犬枇杷)に同じ。

(〔三〕んがうゆり)

りゆうがんしゆ 龍眼酒・竜眼酒【名】龍顏肉にて製したる酒。龍眼肉酒。

りゆうがんにく 龍眼肉・竜眼肉【名】**りゆうがん**(龍眼)〔二〕を見よ。

りゆうがんにくーしゆ 龍眼肉酒・竜眼肉酒【名】**りゆうがんしゆ**(龍眼酒)に同じ。

りゆうがんぼ 龍巖浦・竜巖浦【名】〔地〕朝鮮平安北道鴨綠江口にある港。滿洲の大東溝と斜に相對す。新義州と相距る水路十四海里、四時間にして達す。明治三十七年の開港に係り、日露戰役中より、內地人・朝鮮人の來住する者多し。

りゆうがん-まつだけ 龍眼松茸・竜眼松茸【名】細き松茸を、生麩にて包み、油にて揚げたる料理。

りゆうき 龍旗・竜旗【名】〔一〕**りゆうがん**(龍顏)を見よ』支那にて、天子のしるしに用ふる御旗。二つの龍の依倚せる樣を畫がく。蒼龍旗。〔龍旂〕〔二〕天皇の御旗。りようき。

りゆうき 隆起【名】たかまること。もりあがること。突起。

りゆうき 龍葵・竜葵【名】〔植〕**いぬほづき**(犬酸漿)の漢名。「同じ。

りゆうき 隆琦【名】〔人〕**いんげん**(隱元)に

りゆうきーたう 隆起島【名】〔地〕『英Rising-island』地盤の一部、特に隆起して成りたる島。

りゆうきーへい 龍騎兵・竜騎兵【名】『佛Dragon』佛蘭西にて、長尾の毛飾を附けたる兜をかぶり、長身の軍刀と騎銃とを携へ、徒步又は騎士にて戰をなす重騎兵。乘馬步兵の一變せるもの。西曆一五五四年、元帥ブリサック(Brissac)の建議により創設す。初は中隊編制、後、種種の變更を經て、一七六二年、聯隊編制となり、野戰に於て、屢ば殊功を奏し來れり。

りゆうーぎん 龍吟・竜吟【名】〔一〕**しもむ**(下無)に同じ。(鳳音に對して)盛衰記「龍吟・鳳鳴の曲」〔二〕**りゆうてき**(龍笛)に同じ。

りゆうぎんてう 龍吟調・竜吟調【名】龍吟〔一〕の調子。下無(シモム)調。

りゆうーぐう 龍宮・竜宮【名】大海の底にありて、龍王の居るといふ宮殿。法華經等の佛典に見え、華嚴(ケゴン)經は、龍樹菩薩がこの宮殿より携へ歸れるものといふ傳說あり、我國にては、浦島太郎の說話によりて名高し。「ること。

りゆうーぐう 隆遇【名】さかんに待遇す

りゆうぐうーじやう 龍宮城・竜宮城【名】

りゆうぐうーのいとまき 龍宮絲捲・竜宮絲捲【名】〔動〕**たこのまくら**(蛸枕)に同じ。

りゆうぐうーのおとひめーのもとゆひーのきりはづし 龍宮乙姫元結切外・竜宮乙姫元結切外【名】〔植〕**あまも**(大葉藻)に同じ。

りゆうーげ 龍華・竜華【名】〔佛〕**りゆうげさんえ**龍華三會(エ)の略。盛衰記「龍華の値遇(ヂグ)」

りゆうげーがは 龍華川・竜華川【名】〔地〕

龍華の曉【句】〔佛〕龍華三會(エ)を、世の闇黑を破りて、この時期に達すとて、曉に譬へていふ語。龍華下生(ゲシヤウ)の曉。慈尊の曉。三會(エ)の曉。平家「金堂(ゴンダウ)の彌勒(ミロク)へ參らせたまひけり。龍華の曉、値遇(ヂグ)の御爲かとおぼしくて」

河内國長瀬川の古稱。

りゅうげ-しゃう 龍華下生【名】〔佛〕彌勒(ミロク)菩薩が、兜率天(トソツ)の内院より、龍華樹の下に生れて、成佛すること。龍華下生の曉【句】〔佛〕「龍華の曉」に同じ。

りゅうげしゃう-さんゑ 龍華下生三會【名】〔佛〕**りゅうげさんゑ**(龍華三會)に同じ。

りゅうげ-ごえ 龍華越【名】〔地〕山城國愛宕(オタギ)郡大原村大字小出石(イデイシ)より近江國滋賀郡伊香立(イカタ)村大字龍華に通ずる山路。京都北門の鎖鑰にして、歴史上著名の地。南に比叡山、北に比良(ヒラ)山を望む。天安元年、近江國相坂(アフサカ)・大石の兩地と共に關を設け、三關の稱ありき。その關の址、今詳かならず。

りゅうげ-さう 龍華草・竜華草【名】〔植〕**くまつづら**(馬鞭草)に同じ。

りゅうげ-さんゑ 龍華三會・竜華三會【名】〔佛〕釋迦在世の時、兜率天(トソツ)の内院にありし彌勒(ミロク)菩薩の、その後五十六億七千萬年を經て、この土に出世し、華林園(クワリン)の龍華樹の下に成道(ジヤウダウ)し、三回の法會を開きて、釋迦の教化に洩れたる上・中・下三根の衆生(シユジヤウ)を度すべしといふこと。龍華とは、花の形龍に似たるよりの名、又、その樹あるにより て、園を華林と呼ぶ。慈尊三會。**ぜんぶつ**(前佛)・**ごぶつ**(後佛)参照。

龍華三會の朝(アシタ)【句】〔佛〕「龍華の曉」に同じ。 榮華「彌勒の出世、龍華三會の朝にこそは驚かせたまはめ」

りゅうげ-じ 龍華寺・竜華寺【名】駿河國安倍郡不二見(フジミ)村にある日蓮宗の寺。觀富山と號す。甲斐國大野本遠寺の日近の開山。山に據り、脚下に三保(ミホ)の海を隔てて、富士の勝景を望む。境内に大なる蘇鐵あり。

りゅうげ-じゅ 龍華樹・竜華樹【名】〔佛〕**りゅうげさんゑ**(龍華三會)を見よ。

りゅう-けつ 龍闕・竜闕【名】『**りゅうがん**(龍顔)を見よ』**きゅうけつ**(宮闕)に同じ。

りゅうげ-ゑ 龍華會・竜華會【名】〔佛〕 ㊀園城寺にて、毎年一度、良日を選び、彌勒(ミロク)菩薩を本尊として修する法會。本朝續文粹「園城寺龍華會緣起」東鑑「園城寺興隆、並執二行龍華會」 ㊁**くわんぶつゑ**(灌佛會)に同じ。

りゅう-と 龍虎・竜虎【名】㊀龍と虎。りようこ。 ㊁二人の英雄・豪傑の譬。りようこ。

りゅうこう-じ 龍口寺・竜口寺【名】相模國鎌倉郡川口村にある日蓮宗の寺。同宗四十四本山の一。寂光山と號す。文永八年九月十二日に於ける日蓮の龍口(ノクチ)法難の遺跡。後人、塔を建てて記念し、後、寺を設けて、宗祖を開山とす。

りゅう-こく 龍谷・竜谷【名】次條の略。

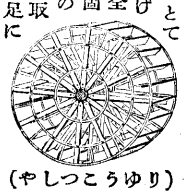
りゅうこく-ざん 龍谷山・竜谷山【名】京都西本願寺の山號。

りゅうこ-し 龍骨車・竜骨車【名】『漢字の音の訛』㊀次條に同じ。 ㊁消火用の具。大なる箱の中に、柱ありて、その柱は、大なる横木を支へ、横木を上下すれば、押上喞筒(ポンプ)の仕掛によりて、水を彈き出すやうにせるもの。龍吐水。

りゅうこ-しゃ 龍骨車・竜骨車【名】**りゅうこっしゃ**(龍骨車)の訛。 心中及は氷の朔日「すがる涙のりゅうこしやに、あひの水さへ撥かすらん」

りゅう-こつ 龍骨・竜骨【名】㊀龍(リウ)の骨なりといふもの。りようこつ。 ㊁マストドンの骨。往往、諸國の土中より發掘す。 ㊂巨大なる和船に於ける間切骨(カヤキツリ)、又、西洋形船舶のキイル。各條を見よ。 ㊃次條の略。

りゅうこっ-しゃ 龍骨車・竜骨車【名】『形、龍の骨に似たりとていふ』水をすくひ上げて、田に注ぐ器械。全體車輪狀をなし、一箇の軸の周圍に、多くの板を、横に螺旋狀に取附け、二入相對して、足にて蹈みて回轉し、水を跳ね上ぐるやうにせるもの。支那にて、後漢以來唯一の揚水機として使用し、我國にては、九州地方にて突出す。



(やしつこうゆり)

りゅうこつ-とっき 龍骨突起・竜骨突起【名】〔動〕『英 Great lion』鳥類の胸部に突出し、その兩側に翼を動かす筋肉の附著する骨。

りゅうこつ-べん 龍骨瓣・竜骨瓣【名】〔植〕『英 Keel』蝶形花冠の最も内部にある、二枚の花瓣。

りゅうこつ-ぼく 龍骨木・竜骨木【名】〔植〕仙人掌(サボテン)類の一種。

りゅう-ざ 龍座・竜座【名】『**りゅうがん**(龍顔)を見よ』天皇の御座。玉座。りようざ。

りゅう-ざう 龍象・竜象【名】㊀龍と象と。 ㊁〔佛〕『水中に力大なるは龍、陸上に威あるは象なるによりていふ』**けんじやう**(賢聖)の美稱。榮花「築二寺於祖父之廟北、聚二龍象、以弘二知峯一」 ㊂僧の敬稱。凡聖。

りゅう-ざう 龍藏・竜藏【名】㊀〔佛〕『禪宗龜鑑に「庭前拍子話、龍藏所レ未レ有底」とあり』龍宮の經藏。 ㊁**なんれう**(南鐐)㊂の異稱。浮世床「龍藏とは、南鐐一片の事なり。ふんどうの紋、亂龍藏より出でたる詞」

りゅうざう-たうばん 龍象蠨幡・竜象蠨幡【名】蠨幡㊀の一。龍の像を描き、御即位の時に立てて、左近衛府の軍旗とせり。

りゅう-さうろ 龍草廬【名】〔人〕京都の儒者。名は公美、字は君玉、通稱は彦二郎、後、衛門と改む。伏見の人。十一歳にして父に後れ、京都の筆商に養はれ、稼業の傍、經史・歌詩に親しみ、二十五歳にして、烏丸小路に帷を下し、徒に授く。最も詩を善くし、楷草に巧みなり。寛延三年彦根侯に仕へ、致仕の後、鴨川四條河原に僑居し、寛政四年歿す。年七十九。

りゅう-さく 龍作・竜作【名】『書經の舜典に「帝曰、龍、……、命汝作二納言一、夙夜出二納朕命一、惟允」とあるに本づく。龍は舜の臣下の名』**ちゅうなごん**(中納言)の異稱。 雲州消息「龍作之官」

りゅうざん 龍山・竜山【名】〔地〕朝鮮京城の南部。漢江に臨み、形勝の地にして、京城城内との間に、電車・汽車の往來頻繁なり。總督官邸・駐劄軍司令部・第十九師團司令部・南滿洲鐵道株式會社京城管理局・總督府印刷所等あり。京釜・京義兩鐵道線の分岐點にして、又、京元線の基點たり。もと龍山浦と呼ぶ。「よ。

りゅうざんほ 龍山浦【名】〔地〕前條を見

りゅう-し 龍子・竜子【名】㊀『列仙傳に「琴高入二涿水中一、取二龍子一」とあり』龍㊁の子なりといふもの。 今昔「龍子免二金翅鳥難一語第九」 ㊁『西京雜記に「漢文帝良馬九匹、一名二龍子一」とあり』支那の古の名馬の名。 ㊂〔動〕**とかげ**(蜥蜴)の異稱。

りゅう-し 龍蓑・竜蓑【名】けだかくすぐれたる姿。りようし。

りゅう-し 龍趾・竜趾【名】和琴(ワゴン)及び箏の一部。前者のは末の足の方、後者のは兩脇端の下にある木。(龍手に對して)。

りゅう-しう 龍州・竜舟【名】㊀次條を見よ。 ㊁天皇の御舟。りようしう。

龍舟鷁首(ジユ)【句】『淮南子の本經篇に「龍舟鷁首、浮吹以娛」とあり』「龍頭(トウヨウ)・鷁首」に同じ。

りゅう-しふ 龍集・竜集【名】『龍は歳星の異稱、集は次(ヤド)る義。この星、一年に一次周行するに由る』意義なく、ただ年次を揭げたる下に記す語。りようしふ。「何年龍集何月」「昭和三年龍集戊辰」

りゅう-じん 龍神・竜神【名】㊀〔佛〕八部衆の一。龍㊀を神としていふもの。太平記「金作(カナガネ)の太刀を抜きて、海中へ投げたまひけり。眞に龍神納受やしたまひけん」 ㊁隈(クマ)㊄の一。前項の龍神に扮する時に、青く塗るもの。

龍神三熱の苦【句】〔佛〕龍㊀は、日に三たび熱湯をあびせらるる苦厄を有すること。平家「諸天五妙の樂も、この時長く盡き、龍神三熱の苦も、彌よ盛んなるらんとぞ見えし」

りゅうじん-はちぶ 龍神八部・竜神八部【名】〔佛〕**てんりゅうはちぶ**(天龍八部)に同

じ。盛衰記十六、洛叉(ラクシ)の底までも答へつつ、堅牢地祇・龍神八部も驚きたまひけるとこそ覺えたれ」太平記「仰ぎ願はくは、内海・外海(イカ)の龍神八部、臣が忠義を鑑みて、潮を萬里の外に退け」

りゆうじん-まき 龍神卷・竜神卷【名】俳優の衣裳の一。片袖には紋を描き、片袖は、斗包(トシツ)の如くに卷き立てて、背に負ふもの。「菅原傳授手習鑑」の照國、「平假名盛衰記」の源太など、著用す。

りゆう-しや 龍車・竜車【名】『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天皇の御車。龍駕。

りゆう-しや 隆車【名】高く立派なる車。

りゆう-しやう 龍章・竜章【名】龍を模様に現はしたるしるし。龍文。「に同じ。

りゆう-しやう 隆昌【名】**りゆうせい**(隆盛)

りゆう-じやう-こう 龍驤虎視【句】『蜀志の諸葛亮傳に「亮之素志、進欲二龍驤虎視、苞二括四海一」とあり』志氣の高遠なる形容。勢威盛んに、一世に雄視する形容。

りゆうじやう-こほ 龍驤虎步【句】『後漢書の何進傳に「今將軍總二皇威一握二兵要一、龍驤虎步、高下在レ心」とあり』前條に同じ。

りゆう-しゆ 龍手・竜手【名】和琴(ワゴン)及び箏の一部。和琴のは本の方の足。(龍趾に對して)

りゆう-しゆ 龍種・竜種【名】㊀『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天子の子孫。龍孫。㊁賢き子。りようしゆ。㊂龍馬の子。すぐれてよき種の馬。龍孫。りようしゆ。

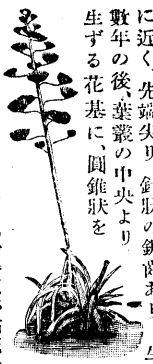
りゆう-しゆ 龍珠・竜珠【名】『「龍(リウ)の頷の玉を取る」を見よ』龍の頷に藏し有てりといふ珠。たつのたま。りようしゆ。

りゆう-しゆ 龍鬚・竜鬚【名】㊀『劉禹錫の謝二禪客一詩に「添レ爐烹二雀舌一灑二水淨一龍鬚」とあり』上等なる茶。㊁〔植〕『本草に「石龍芻、一名龍須」とあり。**りゆうひん**(龍鬢)㊂參照』**こひげ**(小髭)㊃の漢名。

りゆう-しゆ 龍髭・竜髭【名】㊀『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天子の子孫。龍孫。㊁龍馬の子。すぐれてよき種の馬。龍孫。りようしゆ。

りゆう-じゆ 隆準【名】**りゆうせつ**(隆鼻)に同じ。

りゆう-じゆ 龍舌蘭【名】〔植〕石蒜(シヤクサン)科に屬する多年生の草。葉は多肉・淡綠色にして長く、兩側は白色に近く、先端尖り、針狀の鋸齒あり。生後數年の後、莖叢の中央より生ずる花基に、圓錐狀をなして、多數の花を著け、結實後、枯死す。原産地は北米メキシコ。觀賞用として栽培し、又、葉の纖維を製紙の料とし、葉の汁液よりは、一種の酒を釀す。ひねやくんさう。まんねんらん。


(龍舌蘭)

りゆう-せん 龍泉・竜泉【名】支那古代の名劍の名。

りゆう-せん 龍潛・竜潛【名】**せんりゆう**(潛龍)に同じ。

りゆう-せん 龍仙・竜仙【名】〔植〕**しらびそ**(白檜曾)の漢名。「りようせん。

りゆう-ぜん 龍髯・竜髯【名】龍の髭。龍髯に攀づ【句】支那にて、黄帝、鼎を荆山の下に鑄、鼎成りて、龍に乘りて上仙し、小臣、これに隨はんとて、悉く龍髯を持せしに、髯拔けたりといふ故事(史記の孝武紀に見ゆ)。

りゆう-ぜん 龍涎・竜涎【名】次條の略。

りゆうぜん-かう 龍涎香・竜涎香【名】抹香鯨(クヂラ)の腸の末端部より得ることあり。松脂の如きもの。抹香鯨が烏賊(イカ)を食ふ時、腸を刺戟せられて生ずるものといふ。香料とす。

りゆうせん-こさう 龍戰虎爭【句】『班固の答賓戲に「七雄虓闘、分二裂諸夏一、龍戰而虎爭」とあり』群雄の激しき戰の譬。

りゆうせん-じ 龍泉寺・竜泉寺【名】河内國南河内郡東條村にある眞言宗の寺。牛頭(ゴズ)山。醫王院と號す。本尊は藥師如來。蘇我馬子、勅を奉じて創建す。弘法大師の再興。龍泉と稱する靈水あり。

りゆう-そん 龍孫・竜孫【名】㊀**りゆうしゆ**(龍種)㊁㊂に同じ。㊃**たけのこ**(筍)の異名。

りゆう-だ 龍蛇・竜蛇【名】㊀龍と蛇と。㊁『溫庭筠の詩に「落筆龍蛇滿二壞墻一」とあり』草書の筆勢の形容。㊂〔佛〕『佛印語錄に「凡聖同居、龍蛇混雜」とあり』聖者(シヤ)と凡夫との譬。凡聖。「同じ。

りゆう-たい 隆替【名】**りゆうてい**(隆替)に同じ。

りゆう-たい 龍體・竜體【名】『**りゆうがん**(龍顏)を見よ』天皇の御からだ。玉體。

りゆう-たう 龍韜・竜韜【名】㊀〔書〕六韜(リクタウ)の第三篇の名。㊁兵法又はその書。

りゆう-だう 龍膽・竜膽【名】㊀〔植〕**りんだう**(龍膽)に同じ。御堂關白集「りゆうだうの、露、いみじうおきたるに」㊁**りんだう**(龍膽)㊂に同じ。

りゆうたつ 隆達【名】〔人〕隆達節の開祖。和泉國堺の顯本寺の僧。名は日長。還俗して、生家高三(ダカ)氏に歸り、藥種商を業とす。慶長十六年歿。年八十五。

りゆうたつ-ぶし 隆達節【名】小唄の節の一。文祿の頃、隆達の創めしもの。慶長頃にかけて流行せり。歌は長短種種あれども、四句より成るもの多し。

りゆう-たん 龍膽・竜膽【名】㊀〔植〕**りんだう**(龍膽)㊁に同じ。㊂**りんだう**(龍膽)㊃に同じ。

りゆうたん-こん 龍膽根【名】龍膽(リウタン)㊀の根を藥用とするもの。味甚だ苦し。

りゆうち 龍智・竜智【名】〔人〕『梵 Nāgabodhi の譯語』眞言宗付法八祖中の第四祖。龍樹の弟子。壽七百歲を越えて、面貌なほ壯者の如く、唐の玄奘、親しく就きて學べりと傳へらる。

りゆうち-あじやり 龍智阿闍梨・竜智阿闍梨【名】〔人〕前條の敬稱。

りゆう-ちく 龍畜・竜畜【名】〔佛〕龍㊀は、六道の上よりいへば、畜生道に屬するよりいふ語。盛衰記「この人人、龍畜の依身(エシン)を改めて、淨土菩提に至りぬらん」

りゆうちく-きやう 龍畜經・竜畜經【名】〔書〕佛經の一なるべけれども、大藏經の中に、その名見えず。平家「龍宮城、……、是(ガ)に苦は無きかと問ひ候ひしかば、……、龍畜經に見えて候」

りゆうちく-きやう 龍軸經・竜軸經【名】〔書〕前條の語の誤なるべし。盛衰記「龍宮城、……、此(コ)には苦(ク)は無きかと問ひ候ひしに、爭(カ)でか苦無くて候べき、龍軸經の中に說かれて候」

りゆう-ちん 龍陣・竜陣【名】山を前にし、河を後にして、陣を取ること。

りゆう-ちよう 隆寵【名】深く寵愛すること。優寵。

りゆう-づ 龍頭・竜頭【名】㊀**たつがしら**(龍頭)に同じ。㊁梁に吊すために、釣鐘の頭部を、龍の頭の如き形にせるもの。鐘

紐。 ㊁懐中時計の、捻ぢてぜんまいを巻くためにしたる紐(ツル)。

りゅうづ-かぶと 龍頭冑・竜頭冑 【名】㊀「龍頭(クワザ)の冑」に同じ。 ㊁紋所の一。前項の形に摸したるもの。

りゅうづまき 龍頭巻・竜頭巻 【名】懐中時計の製に、龍頭にて、ぜんまいを巻くやう造りたるもの。

りゅう-てい 龍蹄・竜蹄 【名】**りゅうば**(龍馬)㊀に同じ。平治「この龍蹄を以て、如何なる陣なりとも、などか破らで候ふべき」

りゅう-てい 隆替 【名】隆(サカ)なることと、替(ス)るることと。消長。りゅうたい。

りゅう-てき 龍笛・竜笛 【名】『西羌の人の、龍の鳴くを聞きて製作せるものといふ』よこぶえ(横笛)㊁の異稱。

りゅう-てん 龍天・竜天 【名】㊀〔佛〕**てんりゅう**(天龍)㊀に同じ。 ㊁〔人〕龍樹と天親と。「に同じ。 ㊂陰暦十二月の異稱。

りゅう-とう 隆冬 【名】㊀**げんとう**(厳冬)

りゅう-とう 龍燈・竜燈 【名】㊀『印度にては、龍は海の神なりとするによりていふ』海上に、燐火の、燈の如くに連なり現るるもの。 ㊁社頭に點ずる神燈。聖燈。芭蕉「五月雨や龍燈あげる番太郎」

りゅう-とう 龍頭・竜頭 【名】㊀龍㊁のかしら。 ㊁**りょうとう**(龍頭)㊁に同じ。

龍頭・鷁首 【句】「龍頭(リョウトウ)・鷁首」に同じ。

龍頭・蛇尾 【句】物事の、始は盛んにて、終の振はぬ譬。りょうとうだび。

りゅうとう-すい 龍騰水・竜騰水 【名】**たつまき**(龍巻)に同じ。

りゅう-とうだ 龍頭太・竜頭太 【名】『龍頭太といふ者が作れるよりいふ』㊀馬兜(バトウリカ)・水干・奴袴に扮ちて、神祭の行列に加はる者のかぶる天狗の假面。 ㊁山城國なる稲荷神社の祭禮に用ふる王鼻。

りゅう-とく 龍徳・竜徳 【名】『**りゅうがん**(龍顔)を見よ』天皇の御徳。りょうとく。

りゅうと-すい 龍吐水・竜吐水 【名】㊀**りゅうこし**(龍骨車)㊁に同じ。 ㊂**みつてっぽう**(水鐵砲)に同じ。

りゅう-なう 龍脳・竜脳 【名】㊀〔植〕龍脳香科に屬する喬木。高さ十五丈内外に達す。葉は全緣の卵形にて、先端尖り、花は黄色にして、複總狀花序をなして開き、佳香を放つ。果實は一箇の種子を含む。原産地はスマトラ・ボルネオ等。幹より採取したる結晶をも龍脳といひて、藥用に供し、殊に支那にて貴重す。 ㊁〔化〕『英Borneol』前項の龍脳の幹等に含有する物質。成分は、樟脳・薄荷精等に近く、共にカンフォル類と呼ぶ一類をなす。無色・透明の結晶をなし、樟脳に類する香氣を有し、水に溶解しがたく、揮發しやすく、テンペンチン油の主成分たるピネンを適當に處理すれば、この物を生じ、更に樟脳を生ず。從て、樟脳を還元しても、この物を得。ぼるねおおる。ぼるねおしやうなう。 窄蕉「はらに、龍脳こみて、雉の皮をはぎて被ひたる」 「條㊁に同じ。

りゅうなう-かう 龍脳香・竜脳香 【名】前

りゅうなう-ぎく 龍脳菊・竜脳菊 【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達す。葉は互生し、卵形にして、缺刻あり、裏面に帶白色の密毛を具ふ。花は頭狀花序をなして開き、周圍のは、白色の舌狀花をなし、中部のは、黄色の筒狀花をなす。山野に自生し、又、觀賞用として栽培す。こぎく。やまぎく。

りゅうなう-ぐわん 龍脳丸・竜脳丸 【名】昔の藥の一。もと和氣廣世の後裔半井(ナカヰ)氏の、入唐して、熊宗立より、製方を學び來りしものといふ。

りゅうなう-じゅ 龍脳樹・竜脳樹 【名】〔植〕**りゅうなう**(龍脳)㊀に同じ。

りゅうなう-ちんき 龍脳丁幾・竜脳丁幾 【名】龍脳をアルコオルに溶解せる液。

りゅう-によ 龍女・竜女 【名】〔佛〕龍王の女(ムスメ)。龍宮に居るといふ仙女。おとひめ。謡曲「春日龍神」「龍女が立ち舞ふ波瀾の袖」 同(朱女)「龍女が如く、我も、はや變成男子(ヘンジヤウナンシ)な」

龍女が正覺(シヤウガク) 【句】〔佛〕次條に同じ。平家「女房だち……も、遂には、かの龍女が正覺の跡を追ひ」

龍女が成佛 【句】〔佛〕次條に同じ。盛衰記「五障・三從の身を持ちながら、早く釋迦太師(ヨイ)の遺弟(ユイテイ)に列なり、龍女が成佛、憑(タノ)あり」

龍女が速成(ソクジヤウ) 【句】〔佛〕次條に同じ。盛衰記「五障の女身(ニヨシン)を悲みて、……、龍女が速成を貴み」

龍女變成(ヘンジヤウ) 【句】〔佛〕次條に同じ。謡曲通盛「龍女變成と聞く時は、姥(ウバ)も頼もしや」

八歳の龍女 【句】〔佛〕娑竭羅(シヤカラ)龍王の女、八歳にして、龍宮にて、文殊(モンジユ)が法華經を說きしに頓悟し、靈鷲山(リヤウセン)に詣りて、女人ながらも、即身成佛(ソクシンジヤウブツ)せし由、法華經の提婆品(ダイバボン)に見えたる故事。**によにんわうじやうぐわん**(女人往生願)參照。

りゅうのけ-じろ 龍毛白驢 【名】馬の毛色の一。膝の下に、白き毛のあるもの。

りゅう-の-ひげ 龍鬚・沿階草 【名】〔植〕『本草に「石龍芻、一名龍須」とありて、須は鬚の古字。石龍芻は、和名「こひげ」にて、科を異にする草なれど、形態は似たる所あれば、直譯して、誤り用ひしならん』百合(ユリ)科に屬する多年生の草。根莖より纖長なる匐枝を生じ、葉は多數叢生し、線形又は披針形にして、長さ五寸乃至一尺五寸、平行脈を具す。夏日、四五寸の花莖に、淡紫色の小花、總狀花序をなして簇生す。果實は小き球形をなし、熟すれば瑠璃色を呈す。山野の林藪に自生し、又、土手・花壇の外圍等に並べ植う。根は漢方の藥劑とす。じゃのひげ。いとがや。

りゅう-の-まる 龍丸・竜丸 【名】紋所の一。龍を、首を中央として、圓形に描く。

りゅう-ば 龍馬・竜馬 【名】㊀すぐれて逞しき馬。たつのうま。たつのまま。りようめ。りようめ。龍蹄。 ㊁支那にて、伏羲の時、黄河より、八卦を背に負ひて現れたりといふ神馬。りゅうめ。りようめ。

「び簞などの背面。

りゅう-はい 龍背・竜背 【名】和琴(ワゴン)及

りゅう-ばん 龍蟠・竜蟠 【名】『李白の詩に「恥學瑯琊人、龍蟠事躬耕」とあり』豪傑の民間に潛み居ることの譬。臥龍。りようばん。

龍蟠虎踞 【句】『六朝事迹に「諸葛亮、論金陵地形曰、鐘阜龍蟠、石城虎踞、眞帝王之宅」とあり。龍虎の蟠踞するが如しとていふ』豪傑の士の、一方に據りて雄視することの譬。

りゅう-び 龍尾・竜尾 【名】㊀龍㊁の尾。りようび。 ㊁若子・賢人のしりへ。臓尾。りようび。 ㊂國語に「童謡有之、曰、丙之晨、龍尾伏辰」とあり』き(箕)に同じ。「ある石。

龍尾の据石 【句】龍尾道の邊に据ゑてる鼻。高き鼻。隆準(リヤウセツ)。

りゅう-び-しや 龍尾車 【名】らせんみづあげき(螺旋水揚機)に同じ。

りゅう-び-じゅつ 隆鼻術 【名】鼻の低きを、人工的に高くする方法。パラフィンを插入する方法、一時用ひられしが、今は、又、他の方法を取るといふ。

りゅう-び-せき 龍尾石・竜尾石 【名】一種の石。萬葉千虹「加賀の國に住める越川氏の家に藏むる龍尾石の硯は、いさごの凝り固まりて、おのづからあやある石の形をなせるを、人の工(タク)を添へて、硯とはなせるなりけり」

りゅう-び-たう 龍尾道・竜尾道 【名】㊀支那唐の含元殿に設けし石の步道。紆曲七轉、宛も龍の尾の如き形をなしたりといふ。 ㊁大極殿の南庭に、石にて築きし步道。東西二道ありて、南北に亙り、朱欄・石階等の設ありたり。たつのをのみち。たつのこうぢ。龍尾壇。 拾芥抄「蒼龍樓東、謂二之龍尾道一」 太平記「龍尾道の傍に」

りゅう-び-だん 龍尾壇・竜尾壇 【名】前條に同じ。著聞「黑き雲……、南より來りて、龍尾壇を蔽ふ」

りゅう-びん 龍鬢・竜鬢 【名】㊀〔植〕**こひげ**(小髭)㊁に同じ。 ㊁(植)**ゐ**(薤)に同じ。 ㊂古、細圓(ホソ)を五色に染めて織りし筵。後世の花筵(ハナ)の類。りゅうびんむし

ろ、雅裝抄「りゆうびんは、色色にまだらなる筵にて、青地の錦の緣(ヘリ)の、弘さ三寸ばかりなるを、四方にさしまはして、濃き打裏(ウツリ)を附けたり。弘さ、長さ、疊に同じ」同「りゆうびんを、二枚敷きて」

りゆうびんたい 觀音座蓮【名】〔植〕觀音座蓮科に屬する多年生の羊齒植物。莖は塊狀をなして、多數の鱗片に被はれ、葉は大形なる二回羽狀複葉をなし、各小葉は披針形又は楕圓狀披針形にして、鋸齒を具へ、裏面に子囊を著く。我國、南部の地に自生し、又、栽培して觀賞す。りゆうりんたい。りゆうびんたい。

りゆうびんたい-くわ 觀音座蓮科【名】羊齒植物に屬する一科。凡そ五屬・五十八種を含む中、我國に自生するものは、一屬・二種。くわんおんざれん科。りうびんたいくわ。

りゆうびん(龍鬢) 【名】三に同じ。

りゆうびん-むしろ 龍鬢筵・竜鬢筵【名】

りゆう-ふく 龍服・竜服【名】『りゆうがん(龍眼)を見よ』天皇の御服。袞龍(コンリウ)の御衣。りようふく。

りゆう-ふく 龍伏・竜伏【名】建築の時、柱の下の礎石を初めて据ゑ付くる式。その礎石の所と他の一箇所とに、祭壇を設けて行ふ。

りゆうふく-じ 龍福寺・竜福寺【名】りふ

りゆう-ぶん 龍文・竜文【名】龍一を模様として描きたるもの。龍章。りようぶん。

りゆうへい-えいはう 隆平永寶【名】次條の略。

りゆうへいえいはう-せん 隆平永寶錢【名】延曆十五年より弘仁八年に亙りて鑄造せし銅錢。徑八分、表面に「隆平永寶」の文あり、一箇を舊錢十箇に當てたり。

りゆうへい-せん 隆平錢【名】前條の略。

りゆう-ぼ 龍母・竜母【名】『りゆうがん(龍顴)を見よ』皇太后の敬稱。りようぼ。こくも。こくぼ。

りゆう-ほう 龍鳳・竜鳳【名】一龍と鳳凰と。りようほう。二すぐれたる人物の譬。りようほう。「じゆ(龍樹)に同じ。

りゆうみやう 龍猛・竜猛【名】〔人〕りゆうみやう-ぼさつ 龍猛菩薩・竜猛菩薩【名】〔人〕前條の敬稱。「じ。

りゆう-め 龍馬【名】りゆうば(龍馬)に同

りゆう-めい 龍鳴・竜鳴【名】りゆうてき(龍笛)に同じ。

りゆう-もん 龍文・竜文【名】りゆうぶん(龍文)に同じ。

りゆう-もん 龍紋・竜紋【名】一前條に同じ。二りゆうもん(流紋)に同じ。「龍門、竜門」一代女「帶は龍門の薄樺」膝栗毛「羽織は、龍紋のごりごりするやつの、芥子霰(カシラ)なぞが金持らしくて」

りゆうもん 龍門・竜門【名】一〔地〕支那黃河の中流の一部。山西省絳州府河津縣の西北と陝西(セン)省同州府韓城縣の東北とに對峙せる兩龍門山の間を流下する時、懸流千仞、激流怒號の勢をなす、この河第一の險處。二〔地〕大和國吉野郡にありし村。吉野川上流の北岸、龍門岳の南麓、古の龍門牧また龍門莊の地。平治「大和國宇多の郡龍門といふ所に尋ね至り」三前條一に同じ。「を見よ。

龍門に登る【句】とうりようもん(登龍門)

龍門三級【句】支那の黃河の、龍門に於て、懸流上下三段になれること。江海の大魚、その下に集まるもの數千なれど、上ること能はず、上れば、龍に化すとの傳說あり。太平記「宇治へは、……、河水、二つに分れて、白浪、漲り落ちたること、恰も龍門三級の如くなり」

龍門・扶風【句】『史記の著者司馬遷は、憑翊(ヒヨク)夏陽縣の龍門、即ち黃河の龍門に生れし人、漢書の著者班固は、扶風の人なるよりいふ』良き歷史又は良き歷史家の異稱。

りゆうもん-がたけ 龍門嶽・竜門岳【名】〔地〕大和國宇陀郡の西南境にある山。神戸(カンベ)村大字上宮奧に屬し、高さ三二六〇尺。南、吉野郡に跨る。

りゆうもん-ざん 龍門山・竜門山【名】〔地〕紀伊國那賀郡の中央にある山。高野山脈の一峯。山容富士山に似たるより、又、紀州富士といふ。別稱、勝神(カミ)山。

りゆうもん-じ 龍門寺・竜門寺【名】大和國龍門岳の上にありし寺。義淵法師興立すといふ。久米仙人、この所にて行を修めて、仙となりし後、吉野川の邊にて、美女の脛を見て、空中より落ちたりとの說話を傳ふ。伊勢集「龍門といふ寺に詣づ。……。その寺のありさま、瀧は、雲の中より落ち來るやうに見ゆ」

りゆうもん-しやうはい 龍紋賞牌・竜門賞牌【名】明治十一年の第一回內國勸業博覽會の際、優等のものに賜ひし銅製の一等賞牌。表に龍紋を彫り、裏に出品人の原籍・姓名等を刻せり。「さま。

りゆう-りゆう 隆隆【貌】勢の盛大なる

りゆう-りん 龍鱗・竜鱗【名】一龍一のうろこ。二老松の幹の肌など、すべて龍のうろこに似たる形の譬。三陣立の形の一。太平記「虎蹈に連なりて圍めば、虎蹈に分れて相當り、龍鱗に結びて蒐(カカ)れば、龍鱗に進んで戰ふ」

龍鱗に附き、鳳翼を攀づ【句】次條に同じ。太平記「龍鱗に附き、鳳翼を攀ぢて、宿望を達せばや」

龍鱗を攀ぢ、鳳翼に附く【句】『後漢書の光武紀に「其計固望下其攀二龍鱗、附二鳳翼、以成下其所上志」とあり』英主に仕へて、功業を立つる譬。龍に攀ぢ鳳に附く。

りゆうりんたい 觀音座蓮【名】〔植〕りゆうびんたい(觀音座蓮)に同じ。

りゆう-ろう 龍樓・竜樓【名】一『漢書の成帝紀に「成帝初居二桂宮、嘗急召二太子一出二龍樓門一」とあり、註に「門樓上有二銅龍一、故曰二龍樓一」と見ゆ』皇太子の御所。東宮。盛衰記「御裳濯(スソ)川の流涼しく、龍樓・鳳闕の月陰(ヤシ)無かりしかども」太平記「大塔宮二品親王……、この君、もとより、龍樓・鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒・香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば」二皇太子の異稱。東宮。拾芥抄「春宮、……龍樓」

りゆう-わう 龍王・竜王【名】一〔佛〕龍屬の王。りゆう(龍)一及びはちだいりゆうわう(八大龍王)參照。源氏「海の中の龍王の、いといたう物めでするものにて」二甲斐國中巨摩(コマカ)郡龍王村附近より產出する煙草。

りゆうわう-め 龍王目・竜王目【名】昔、龍王一の重さをはかるに用ひし量目。

りゆう-を 隆汙・隆汚【名】りゆうてい(隆替)に同じ。

りゆう-ざっく 《獨 Rücksack》【名】『Rücken は背、Sack は囊の義』登山の時、背負ひゆく雜囊。

りよ 呂【名】じふにてうし(十二調子)を見よ。(律に對して) 源氏「琴にて、呂の歌は」十訓「御遊ありけるに、呂終りて、律に移りける時」

りよ 閭【名】りりよ(里閭)に同じ。閭に倚る【句】いりよ(倚閭)を見よ。

りよ 旅【名】一支那周代の軍隊の制度にて、五百人の兵を一團としたるもの。五旅を一師とし、五師を一軍とせり。二軍衆。軍隊。軍旅。太平記「張二旅於西南一之日」同「萬將、軍兵を率(ヒ)し、旅を屯して、雍州に至るに」「敵を罵りていふ語。

りよ 虜【名】一とりこ。捕虜。俘虜。二

りよ 稜【名】〔數〕『英 Edge』多面體又は立體角の相隣れる二つの面の交はる直線。

りよう 龍竜【名】りゆう(龍)一に同じ。

りよう 陵【名】一大なるをか。二みささぎ。陵墓。

陵の如し【句】『詩經の小雅天保篇に「如二山如一阜、如二岡如一陵」、左傳に「有酒如澠、有肉如陵」とあり』「山の如し」に同じ。

りよう 綾【名】れう(綾)を見よ。

りよう 利用【名】一『書經の大禹謨篇に「正二德利一用、厚二生惟和」、易の繫辭傳に「利用出入、民咸用一之、謂二之神一」とあり』物の用を便利にすること。二役に立つやうに用ふること。巧に應用すること。三自己の利益を達する手段に用ふること。だしに使ふこと。

利用・厚生【句】『左傳の文公七年の條に「正德・利用・厚生謂二之三事一」とあ

り。厚生とは、帛を着、肉を食ひて、飢寒の憂なき類』物の用を便利にして、生活をゆたかにすること。

りようあえんくわう 菱亞鉛鑛【名】〔化〕亞鉛の原鑛の一。成分は炭酸亞鉛。腎臓形・葡萄狀・鐘乳石狀等をなすこと普通なれども、稀に結晶す。質やや硬く、色は白色・灰色等にして、玻璃光澤を呈す。我國にては、飛驒國に少量を產出す。

りよういい 陵夷【名】一陵(カ)の、次第に夷(タヒラ)かになること。陵遲。二世の中の狀態の、次第に衰ふることの譬。陵遲。

りよう-うん 凌雲・陵雲【名】一雲を凌ぎて、上に出づること。凌霄。二**りようううんくわん**(凌雲觀)の略。十訓抄「凌雲の、忽ち雪を梳(ケヅ)る頭に變じける」徒然「凌雲の額(ガク)を書きて、白頭の人となりし例(レイ)なきにあらず」三高く世外に超脫すること。凌霄。「凌雲の氣」「凌雲の志」

りようううん-かく 凌雲閣【名】東京市淺草公園にありし十二階の建築物。明治二十五年の建造に係り、入場料を取り、登りて眺望せしめしが、大正十二年の大震災に遭ひて危險に瀕したるため、撤廢せり。俗に十二階と呼びたり。

りようううん-くわん 凌雲觀【名】**りようううんだい**(凌雲臺)を見よ。

りようううん-しふ 凌雲集【名】〔書〕延曆元年より弘仁五年までの三十三年間に於ける二十三人・九十篇の詩を、官位の順によりて集めたるもの。一卷。小野岑守(モリ)が、勅を奉じて菅原淸公(キヨ)・勇山連文繼(ヲヤマノムラジフミツグ)と共に撰集せしもの。具さには凌雲新集といふ。

りようううん-しんしふ 凌雲新集【名】〔書〕前條を見よ。

りようううん-だい 凌雲臺【名】『卓氏藻林に「魏曹丕築二凌雲臺一。在二洛陽孟津上。樓觀極二其精巧一」とあり』支那魏の文帝が築かしめし樓閣。樓成りて、凌雲觀と書くべき額を、未だ書かざる先に、過ちて揭げければ、書に巧みなる韋誕を、籠に載せて、二十五丈の高所に、轆轤にて引き上げ、これを書かしめしが、韋誕の下り來れるを見れば、鬢髮俄かに雪の如くに變じ居たりし由、「三國志」に見ゆ。

りよう-えふ 菱葉【名】菱(ヒシ)の葉。

りよう-えん 凌煙・凌烟【名】『雲煙を凌ぐ意』**りようううん**(凌雲)一に同じ。

りようえん-かく 凌煙閣【名】支那唐の朝廷の樓閣の一。太宗が、貞觀十七年、功臣二十四人、即ち長孫無忌・河間孝王恭・杜如晦・魏徵・房玄齡・尉遲敬德・李靖・蕭瑀・段志玄・張亮・劉弘基・屈突進・柴紹・殷開山・侯君集・長孫順德・張公謹・程知節・虞世南・劉政會・唐儉・李勣・高士廉・秦叔寶の像を圖畫して、揭げしめし所。

りよう-か 菱歌【名】船を泛べて、菱の花を採る者のうたふ歌。

りよう-か 菱荷【名】菱と、はちすと。

りよう-か 菱舸・菱舸【名】**りゆうか**(龍舸)に同じ。

りよう-が 龍駕・竜駕【名】**りゆうが**(龍駕)「に同じ。

りよう-が 凌駕・陵駕【名】他を壓して、その上に出づること。

りよう-かく 稜角【名】角(カド)の尖端。「ど。

りよう-かち 利用價値【名】〔經〕『英 Value in use』財貨を使用して、それが人類の欲望を充たす程度につきての價値。例へば、米が空腹を醫する價値の類。使用價値。直接利用價値。(交換價値に對して)

りよう-かふ 鯪甲【名】〔動〕**せんざんかふ**(穿山甲)の漢名。

りよう-がん 龍顏・竜顏【名】**りゆうがん**(龍顏)「に同じ。

りよう-き 菱芰【名】ひし(菱)一に同じ。

りよう-がん 龍領・竜領【名】**りゆうがん**(龍領)に同じ。

りよう-き 龍旗・竜旗【名】**りゆうき**(龍旗)「に同じ。

りよう-き 龍袞・竜袞【名】〔植〕**りゆうき**(龍袞)に同じ。

りよう-きう 陵丘【名】**きうりよう**(丘陵)「同じ。

りよう-きう-でん 綾綺殿【名】古の禁中の御殿の一。宜陽殿の左、麗景殿の右、溫明(ウンメイ)殿の前にあり。西面して仁壽(ジウジウ)殿を隔て、淸涼殿に對したり。宮中の內宴に、妓女の舞伎を行ひし所。又、時時主上の御在所にも充てられ、南方の一部は、納殿として、恒例の御物を納むる所としたり。ろうきでん。

りよう-きへい 龍騎兵・竜騎兵【名】**りゆうきへい**(龍騎兵)に同じ。

りよう-きん 龍吟・竜吟【名】**りゆうぎん**(龍吟)に同じ。

りよう-ぎやく 凌虐・陵虐【名】むごく虐「(ヤウ)ぐること。

りよう-くわ 菱花【名】一菱(ヒシ)の花。二『裏面に、多くは菱の花の形を鑄附くるよりいふ』金屬製の鏡。

りよう-ぐわん 綾紈【名】綾(ヤ)と白きねり絹と、又その衣服。

りようくわ-わん 菱花灣【名】〔地〕安房國館山(ヤカ)灣の異稱。

りよう-けい 菱形【名】四邊の長さ等しく、對邊の平行せる斜方形。ひしがた。「闕)に同じ。

りよう-けつ 龍闕・竜闕【名】**りゆうけつ**(龍

りよう-と 陵戶【名】古、治部省の諸寮司に屬して、山陵の守護に從ひし賤戶。一山陵を五戶乃至一戶にて守る規定なりしかど、陵戶なき場合もありて、その時は、附近の百姓をして、年を限り、庸・調を免じてこれに充て、守戶と呼びたり。

りよう-と 龍虎・竜虎【名】一**りゆうこ**(龍虎)に同じ。二謠曲の一。入唐の僧が、龍虎の戰ふさまを、眼前に見たる事を作れるもの。

りよう-と 菱湖【名】〔人〕**まきりようこ**(卷「菱湖)を見よ。

りよう-こく 陵谷【名】陵(カ)と谷と。陵谷の變【句】『詩經の小雅十月之交篇に「高岸爲(ナル)谷、深谷爲(ナル)陵」とあるに本づく』一地勢の變遷。桑滄の變。二世事の變遷の譬。

りよう-こ-ちやう 陵戶帳【名】**だいちやうえだぶみ**(大帳枝文)を見よ。

りよう-こつ 龍骨・竜骨【名】**りゆうこつ**(龍骨)一に同じ。

りようこつ-しや 龍骨車・竜骨車【名】**りゆうこつしや**(龍骨車)に同じ。撮壤集「農作、龍骨車、リョウコッシヤ」

りようごん-きやう 楞嚴經【名】〔書〕**しゆりようごんきやう**(首楞嚴經)に同じ。

りようごん-じゆ 楞嚴呪【名】〔佛〕楞嚴經に說ける神呪。四百二十七句より成り、內、最末の八句を心呪とす。佛頂呪。

りようごん-ねん 楞嚴院【名】**しゆりようごんねん**(首楞嚴院)に同じ。

りようごん-ゑ 楞嚴會【名】〔佛〕禪宗の古法として、安居(ア)結制中の魔障を除かんがために、四月より七月十三日まで、毎日、衆僧集まりて、楞嚴呪を諷誦(フウジユ)すること。「に同じ。

りよう-ざ 龍座・竜座【名】**りゆうざ**(龍座)

りよう-し 龍子・竜子【名】**りゆうし**(龍子)「に同じ。

りよう-し 龍姿・竜姿【名】**りゆうし**(龍姿)

りよう-しう 龍舟・竜舟【名】**りゆうしう**(龍舟)に同じ。

りよう-しふ 龍集・竜集【名】**りゆうしふ**(龍「集)に同じ。

りよう-しや 龍車・竜車【名】**りゆうしや**(龍車)に同じ。

りよう-しやう 龍章・竜章【名】**りゆうしやう**(龍章)に同じ。

りよう-しやう 陵掌【名】明治七年、山陵及び皇后の御陵の存する各府縣に置かれ、日日その山陵・御陵を巡護して、陵丁の勤惰を檢することを掌りし等外官。

りようじやう-こし 龍驤虎視【句】**りようじやうこし**(龍驤虎視)に同じ。

りようじやう-こほ 龍驤虎步【句】**りようじやうこほ**(龍驤虎步)に同じ。

りよう-しゆ 陵守【名】古、山陵の管守を掌りし職。その上に陵守長ありき。續後紀「楯列(タテナミ)陵守……當陵守長百濟春繼」

りよう-しゆ 龍珠・竜珠【名】**りゆうしゆ**(龍「種)に同じ。

りよう-しゆ 龍種・竜種【名】**りゆうしゆ**(龍

りよう-しゆ 龍鬚・竜鬚【名】**りゆうしゆ**(龍髮)に同じ。

りようしゆ-ちやう 陵守長【名】**りようしゆ**(陵守)を見よ。

りよう-しゆん 龍駿・竜駿【名】**りゆうしゆん**(龍駿)に同じ。

りよう-じよく 凌辱・陵辱【名】しのぎはづかしむること。

りようーすう 龍雛・竜雛【名】りゆうすう(龍雛)に同じ。

りようせいそん 龍井村・竜井村【名】〔地〕りゆうせいそん(龍井村)を見よ。

りようーせう 凌霄・陵霄【名】〔植〕りようーうん(凌霄)〔一〕〔二〕に同じ。「凌霄の志」〔三〕〔植〕のうぜんかづら(紫葳)の漢名。

りようせうーくわ 凌霄花・陵霄花【名】〔植〕凌霄(カウセウ)の花。

りようーぜつ 龍舌・竜舌【名】〔一〕りゆうぜつ(龍舌)に同じ。〔二〕鏃の形の一。

りようーせん 龍潛・竜潛【名】りゆうせん(龍潛)に同じ。

りようーせん 龍仙・竜仙【名】〔植〕りゆうせん(龍仙)に同じ。

りようーせん 龍泉・竜泉【名】りゆうせん(龍泉)に同じ。

りようーぜん 龍髯・竜髯【名】りゆうぜん(龍髯)に同じ。

りようせんーこさう 龍戰虎爭【句】りゆうせんこさう(龍戰虎爭)に同じ。

りようーそん 龍孫・竜孫【名】りゆうそん(龍孫)に同じ。

りようーだ 龍蛇・竜蛇【名】りゆうだ(龍蛇)

りようーたう 龍韜・竜韜【名】りゆうたう(龍韜)に同じ。

りようーち 陵遲【名】『遲は遲緩の遲にて、慢の意』りようい(陵夷)に同じ。「世の陵遲、事におきて此(ク)の如し」平家「本朝鼎臣の外相を以て、異朝浮遊の來客に見えん事、かつは國の恥、かつは道の陵遲なり」

りようーちやう 陵長【名】陵掌・陵丁の設置以前、山陵及び皇后の御陵等に置かれて、國忌(キ)の事、點燈の事を掌りし職。

りようーちやう 陵丁【名】明治七年、山陵及び皇后の御陵の存する各府縣に置かれ、日日御陵の掃除と守衛とを掌りし準等外吏。御陵側近の民戸、これに充てられ、同十六年宮內省に屬し、翌年廢せられたり。

りようーてい 龍蹄・竜蹄【名】りゆうてい(龍蹄)に同じ。

りようーてう 凌苕・陵苕【名】〔植〕りようせう(凌霄)〔二〕に同じ。

りようーてき 龍笛・竜笛【名】りゆうてき(龍笛)に同じ。

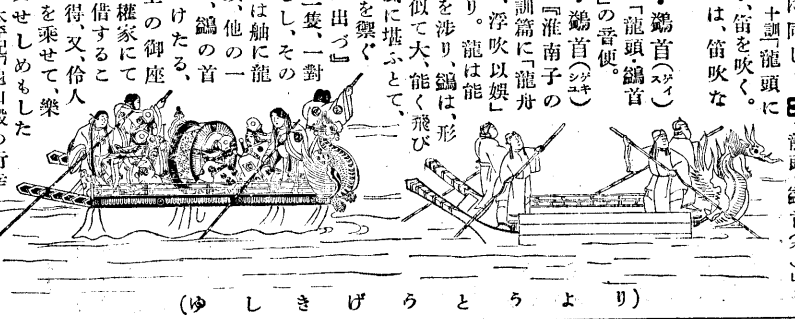
りようーてつくわう 菱鐵鑛【名】〔化〕鐵の原鑛の一。成分は炭酸第一鐵。菱狀又は塊狀をなし、多くは、鑛脈をなして現出し、本來は黑褐色、久しく大氣中にある時は黑變す。炭分を混ずるを炭鐵鑛、粘土を混ずるを泥鐵鑛といふ。

りようーとう 龍頭・竜頭【名】〔一〕りゆうとう(龍頭)に同じ。〔二〕「龍頭・鷁首(スイ)」を見よ。十訓「龍頭には、惟季、笛を吹く。鷁首には、笛吹なくて」

龍頭・鷁首(スイ)【句】「龍頭・鷁首(スイ)」の音便。

龍頭・鷁首(シユキ)【句】『淮南子の本經訓篇に「龍舟鷁首、浮吹以娛」とあり。龍は能く水を涉り、鷁は、形鷺に似て大、能く飛びて、風に堪ふとて、水患を禦ぐ意に出づ』古二隻、一對をなし、その一隻は舳に龍の頭、他の一隻は、鷁の首を附けたる、主上の御座船。權家にては拜借することを得、又、伶人などを乘せて、樂を奏せしめもしたり。太平記「龜山殿の行幸の、嵐の山の花ざかり、龍頭・鷁首の船に乘り、詩歌・管絃の宴に侍りし事も」

龍頭・鷁首(スイキ)【句】前條の約。落窪「廣くおもしろき池の、鏡の如くなるに、りようとうげきす、樂人ども、舟に乘りて遊びゐたるは」



(ゆしきげうとうより)

龍頭・蛇尾【句】「龍頭(リユウ)・蛇尾」に同じ。

りようとうーすゐ 龍騰水・竜騰水【名】りゆうとうすゐ(龍騰水)に同じ。

りようーとく 龍德・竜德【名】りゆうとく(龍德)に同じ。

りようーば 龍馬・竜馬【名】りゆうば(龍馬)に同じ。

りようーはい 陵廢【名】りようい(陵夷)〔三〕に同じ。太平記「朝議の陵廢」

りようーはう 稜堡【名】〔兵〕堡壘の一。特別の構築物に賴ることなく、火線の屈折によりて、各正面各自に側防し得る如く構築せるもの。函館の五稜郭は、その一例なり。「すこと。

りようーはん 凌犯・陵犯【名】しのぎおか

りようーばん 龍蟠・竜蟠【名】りゆうばん(龍蟠)に同じ。「に同じ。

りようーび 龍尾・竜尾【名】りゆうび(龍尾)

りようーぶ 凌侮・陵侮【名】しのぎあなどること。

りようーふく 龍服・竜服【名】りゆうふく(龍服)に同じ。「同じ。

りようーふん 陵墳【名】りようぼ(陵墓)に

りようーぶん 龍文・竜文【名】りゆうぶん(龍文)に同じ。

りようーべい 菱米【名】菱の實を、米に代へて食ふこと、又その菱の飯。

りようーべう 陵廟【名】陵(ビヤウ)にあるおたまや。「墳。

りようーぼ 陵墓【名】みささぎ。山陵。陵

りようーば 龍母・竜母【名】りゆうぼ(龍母)に同じ。

りようーほう 龍鳳・竜鳳【名】りゆうほう(龍鳳)に同じ。

りようぼーかん 陵墓監【名】宮內省諸陵寮に屬し、陵墓の管守を掌る奏任官。

りようぼし 陵墓使【名】こくりようし(告陵使)に同じ。

りようぼしゆちやう 陵墓守長【名】宮內省諸陵寮に屬して、陵墓の管守に從事する判任官。

りようぼしゆぶ 陵墓守部【名】宮內省諸陵寮に屬して、陵墓の管守に從事する判任官待遇。

りようまち【名】次條の略。

りようまちす 僂麻質斯【名】りうまちす(僂麻質斯)に同じ。

りようーめ 龍馬・竜馬【名】りゆうば(龍馬)に同じ。著聞「龍馬にてぞありける。それに乘りて」

りようーめい 龍鳴・竜鳴【名】りゆうめい(龍鳴)に同じ。

りようめんーたい 菱面體【名】〔鑛〕『英Rhombohedron』六角晶系に屬する形の一。方解石の劈開面に見るが如く、通例、六角錐の半面像をなし、六系面を具へ二面づつ平行し、稜は何れも斜角をなす。

りようーもん 龍門・竜門【名】りゆうもん(龍門)に同じ。

りようもんーさや 綾紋紗綾【名】綾地に紋を織りたる、一種の紗綾。「と。羅綾。

りようーら 綾羅【名】あやと、うすもの

りようーり 鯪鯉・陵鯉・龍鯉【名】〔動〕せんざんかふ(穿山甲)の漢名。

りようーりん 龍鱗・竜鱗【名】りゆうりん(龍鱗)に同じ。

りようーりよう 稜稜【貌】〔一〕寒氣の肌をさすさま。〔二〕氣性の鋭く角だつさま。

りようーれぎ 凌轢・陵轢・轢轢【名】〔一〕しのぎきしること。軋轢。〔二〕蹈みにじること。蹈みつくること。

りようーろう 龍樓・竜樓【名】りゆうろう(龍樓)に同じ。盛衰記「或は陛下誕生の靈跡、或は龍樓幼稚の靑宮(ヒヤウ)」

りようーわう 陵王【名】らりようわう(羅陵王)の略。續世繼「砂子白く散らしたる庭の上に、櫻の花をりしきたるに、陵王舞ひたるになん似て」

りようーね 稜威【名】〔一〕神靈の威光。みいつ。〔二〕天皇の御威光。みいつ。

りようーゑん 陵園【名】みささぎ。陵墓。陵園の妾(ヲミナ)【句】『白居易に陵園妾と題する詩あり、序に「憐二幽閉一也」と見え、その詩に「陵園妾、顏色如レ花命

如レ葉、命如レ葉薄暮二奈何一……、願令三輪轉直二陵園一、三歳一來均二苦樂一」と見ゆ』後宮の美婦の、君寵を失へるもの。「間。

ほんがく(板額)[II]参照。

りよ-かう 閭巷【名】まち。むらざと。民

りよ-かう 旅行【名】**たび**(旅)に同じ。

りよかう-あんない 旅行案内【名】旅行者に便利なるやう、各地の道程・地理・交通などの模様を記したる册子。

りよかう-か 旅行家【名】旅行する人、又旅行を好む人。

りよかう-かばん 旅行鞄・旅行革鞄【名】旅行者の携へ行くために造りたる鞄。

りよかう-き 旅行記【名】或土地への旅行に依る見聞を記述したるもの。

りよかう-ぐせ 旅行癖【名】**たびぐせ**(旅癖)に同じ。

りよかう-けん 旅行券【名】**りよけん**(旅「券)に同じ。

りよかう-さいがいほけん 旅行災害保険【名】〔商〕『獨 Reisesunfallversicherung』旅行中に發生する災害に關する災害保險。鐵道旅行災害保險・海上旅行災害保險・萬國旅行災害保險等に分つ。

りよかう-さき 旅行先【名】旅行する道中の土地又は到著地。

りよかう-しんようじやう 旅行信用狀【名】〔商〕**じゅんくわいしんようじやう**(巡廻信用狀)に同じ。

りよかう-しや 旅行者【名】たびびと。

りよかう-しよう 旅行證【名】**りよかうけん**(旅行券)に同じ。

りよかう-だん 旅行團【名】目的地を同じくする旅行者の團體。「居る間。旅中。

りよかう-ちゆう 旅行中【名】旅行して

りよかう-ひ 旅行費【名】**りよひ**(旅費)に同じ。「**けん**(旅券)[II]の俗稱。

りよかう-めんじやう 旅行免狀【名】**りよかう-よう** 旅行用【名】旅行する時携帶して用ふること、又その目的に適合するやうに造りたる物。「に同じ。

りよ-かく 旅客【名】**りよかうしや**(旅行者)

りよかく-ぜい 旅客稅【名】旅客運輸事務の成績の良否に應じて、運輸機關に課する稅。

りよかく-せん 旅客船【名】旅客の運送に使用する船舶。客船。(貨物船に對して)

りよかく-れつしや 旅客列車【名】客車のみを連結せる列車。

りよ-がん 旅雁【名】遠き處へ飛びゆく雁。征雁。『曲花筐「その上、名に負ふ蘇武が旅雁、玉章(ガ)を附けし南の都路に」

りよぎん 旅銀【名】**りよひ**(旅費)に同じ。

りよく 力【名】**りき**(力)[II]に同じ。

りよく 綠【名】**みどり**(綠)に同じ。

りよ-よく 利慾・利欲【名】利益を欲する心。

りよく-い 綠衣【名】[I]綠色のころも。[II]**ろうさう**(綠袗)[II]に同じ。平家「供の宮人おしなべて、綠衣の袖をぞ絞りける」

綠衣の使者【句】〔動〕『開元天寶遺事に「明皇封二鸚鵡一爲二綠衣使者一、付二後宮一養餵」とあり』**あうむ**(鸚鵡)の異稱。

りよく-いん 綠陰【名】青葉の繁りたる陰。こかげ。翠陰。

りよく-う 綠雨【名】新綠の時に降る雨。

りよくう 綠雨【名】〔人〕**さいとうりよくう**(齋藤綠雨)を見よ。「同じ。

りよ-ぐう 旅寓【名】**りよしゆく**(旅宿)に

りよく-うん 綠雲【名】[I]綠色の雲。[II]**りよくはつ**(綠髮)の譬。

りよく-えい 綠營【名】支那清朝にて、專ら各地の守備に任ぜし兵。召募によりて編制し、陸師(陸軍)と水師(海軍)とに分れ、各提督ありて統率し、內若干は各省の總督又は巡撫の統率の下に置かれたり。

りよく-えき 力役【名】力業(ガヤク)の役立(エキ)。りきえき。「ば。

りよく-えふ 綠葉【名】綠色の葉。あを

りよくえふ-かんらん 綠葉甘藍【名】〔植〕**はごろもかんらん**(羽衣甘藍)に同じ。

りよく-かう 力行【名】力をこめて行ふこと。努力して行ふこと。

りよく-かう 力耕【名】力をこめて耕すこと。努力して耕すこと。力田。

りよく-がく 綠萼【名】〔植〕**りよくがくばい**(綠萼梅)に同じ。

りよく-がく 力學【名】力をこめて學ぶこと。努力して學ぶこと。

りよくがく-ばい 綠萼梅【名】〔植〕**あをぢく**(青軸)に同じ。

りよく-がん 綠眼【名】綠色のまなこ。碧「眼。

りよく-がん 綠岩【名】〔鑛〕輝綠岩・閃綠岩などの總稱。

りよく-き 騄驥【名】『文選の劉琨答二盧諶一詩の序に「昔騄驥倚二輈於吳坂一、長二鳴於良樂一。知與二不知一也。百里奚愚二於虞一、智二於秦一。遇與二不遇一也」とあり』**りよくじ**(騄駬)に同じ。十訓「吳坂を過ぎける騄驥も、良樂に遇はざりける間は、鹽をこそ負ひければ」

りよく-ぎよく 綠玉【名】〔鑛〕次條に同「じ。

りよくぎよく-せき 綠玉石【名】〔鑛〕**りよくちゆうせき**(綠柱石)に同じ。「鬢。

りよく-くわん 綠鬢【名】綠髮のわげ。翠

りよく-けい 綠溪【名】綠水の流るる溪。

りよく-こう 力攻【名】力をこめて攻むること。努力して攻むること。

りよく-さう 綠草【名】綠色の草。あをくさ。翠草。青草。

りよく-さう 綠藻【名】〔植〕綠色藻類に屬する藻。「こと。

りよく-さう 力爭【名】力をこめて爭ふ

りよくさう-るゐ 綠藻類【名】〔植〕**りよくしよくさうるゐ**(綠色藻類)に同じ。

りよく-さく 力作【名】[I]力をこめてはたらくこと。[II]力をこめたる藝術上の作品。りきさく。

りよく-し 綠紙【名】綠色の紙。

りよく-じ 綠兒【名】大寶令の制度にて、三歳以下の小兒。(綠女に對して)

りよく-じ 綠駬【名】[I]支那周の穆王の乘りし良馬の名。[II]良馬。駿馬。騄驥。

りよく-しう 綠秀【名】陰曆三月の異稱。

りよく-じん 力人【名】勇力ある人。りきじん。力者。

りよく-しや 力者【名】前條に同じ。

りよく-しゆ 綠珠【名】〔人〕支那の白州隻角山下の梁氏の女。容貌、甚だ美、石崇、交趾採訪使となり、これを聞きて、眞珠三斛を以て購ひ、妾とせり。これより、世人、梁氏の家の井を汲めば、美麗なる女を生むとなし、その井を綠珠井といへり。

りよく-しゆ 醵酒【名】よき酒。美酒。

りよく-しゆ 綠酒【名】綠色を帶びたる酒。綠醅。「木。

りよく-じゆ 綠樹【名】青葉の繁れる樹

りよく-じゆ 綠綬【名】綠色の綬。

りよくじゆ-はうしやう 綠綬褒章【名】褒章の一。孝子・順孫・節婦・義僕の類にして、德行卓越なるもの、又、實業に精勵して、衆民の模範となるべき者に賜ふもの。綠綬によりて佩用す。

りよく-しよく 綠色【名】みどりの色。あをいろ。

りよく-しよく 力食【名】力作して生活「すること。

りよくしよく-さうるゐ 綠色藻類【名】〔植〕單細胞又は多細胞より成り、細胞中に純綠色の葉綠體を有し、綠色を呈する藻類。多くは、淡水又は鹹水に產し、稀に陸上に生ず。綠園は各學者によりて異同あれど、青海苔(ノリ)・石蓴(サノ)・水松(ミ)など、これに屬す。

りよく-すゐ 綠水【名】綠色なる水。碧「水。

りよく-せい 力制【名】力をこめて制すること。威力にて制壓すること。

りよく-せき 力積【名】〔理〕『英 Impulse』力とその力の作用したる時間との相乘積。運動量の變化は、この相乘積に比例す。「石。

りよく-せき 綠石【名】綠色なる石。翠

りよく-せん 綠蘚【名】綠色のこけ。碧蘚。蒼苔。

りよく-せん 力戰【名】力のあらん限り戰ふこと。努力して戰ふこと。

りよく-せん 綠腺【名】〔動〕『英 Green gland』蝦・蟹の類の排泄器。第二觸覺の基部にあり、全體複雜なる管狀をなす。

りよく-たい 綠苔【名】綠色の苔。「翠苔。青苔。

りよく-ちく 綠竹【名】青青としたる竹。綠筠。翠竹。

りよく-ちや 綠茶【名】『英Green tea』我國にて、日常、飲料に用ふる茶、即ち煎茶(ヤセ)・碾茶(ヤセ)など。(紅茶に對して)

りよくちゆう-ぎよく 綠柱玉【名】〔鑛〕次條に同じ。

りよくちゆう-せき 綠柱石【名】〔鑛〕六角柱又は柱狀集合體をなし、色は種種あり、多少透明にして、硝子光澤を呈する、極めて堅き石。成分はベリリウム・アルミニウムの硅酸鹽類。結晶片岩類及び花崗岩等の地に產す。深綠色なるは、エメラルドといひて、高價なる寶石なり。有名なる產地はウラル山地方にして、我國にては、磐城國石川山等に出づれども、美品なし。綠柱石。綠柱石。綠玉。

りよく-ぢよ 綠女【名】大寶令の制度にて、三歲以下の女兒。(綠兒に對して)

りよくでい-せき 綠泥石【名】〔鑛〕成分は、硅酸・礬土・苦土及び水にして、綠色を呈し、眞珠光澤又は玻璃光澤を有し、稀に六角板の結晶をなせるもあれど、多くは、薄片狀もしくは鱗狀の聚合體をなす石。磁鐵鑛と共に產する性質あり、硬度は、滑石と石膏との間、比重は二・八。我國にては、武藏國の秩父(チチ)、近江・伊勢・四國等に產すれども、用途狹し。

りよくでい-へんがん 綠泥片岩【名】〔鑛〕綠泥石が主合成分をなせる結晶片岩。柔軟・綠色にして、多少鱗片狀を呈し、往往角閃岩を含み、又屢ば良質なる磁鐵鑛を有す。庭石とするに、美觀愛すべし。

りよく-てん 力點【名】〔理〕『英Power』槓杆にて、物を動かす力のかかる點。りきてん。(重點・支點に對して)

りよくしゆく 旅宿【名】旅行先にて宿泊すること、又その家。たびのやどり。旅寓。旅次。

りよくじゆん 旅順【名】〔地〕次條の略。

りよくじゆん-こう 旅順口【名】〔地〕『古來、山東省より廟島列島を經て、遼東に至る旅程の順路に當りしによりて名づく』支那滿洲關東州にある軍港。遼東半島の南端に位し、渤海灣の口を扼す。清朝、光緒六年、ここに要塞を設けて、北洋艦隊の根據地となし、同二十年の頃に至り、東洋無比の堅塞の稱あるに至れり。日清・日露兩戰役共に、我國、これを攻陷し、今は、租借地の一部たり。港は東西の兩部に分れ、兩水相合して外洋に通ずる所、僅かに二町半の水道に過ぎざれども、水深くして、船舶の通行自在にして、港口の東西には山嶽起伏し、灣內、嚴冬も氷結せず、實に天然の軍港たる地形を有するのみならず、商港としても、大なる價値を有す。

りよく-てん 綠天【名】〔一〕綠色の天空。碧空。蒼空。翠天。蒼天。〔二〕〔植〕**ばせう**(芭蕉)〔一〕の異稱。

りよくでん 力田【名】**りよくかう**(力耕)〔一〕に同じ。

りよくない-しやう 綠內障【名】〔醫〕『歐人にありては、この病に罹る時、散大せる瞳子の綠色を帶ぶること多きに由る』眼內硬固となる一種の眼病。炎性なると然らざるとあり。前者には、又、急性・慢性の別ありて、急性のは、發作性に視力の減退、病眼と同側なる頭顱・耳・齒の劇痛、角膜の雲濁、瞳孔の散大等の症候あり、終には、失明するに至る。炎性なるは、遠視眼を有する老人に多く發し、すべて、一眼罹れば他眼にも及ぶを常とす。非炎性なるは、視力徐徐に減退し、發作も、疼痛・充血なく、單純綠內障の稱あり。

りよく-は 綠波【名】綠色の波。碧波。

りよく-は 綠坡【名】樹木の綠に茂りたるつつみ。「に同じ。

りよく-はい 綠醅【名】**りよくしゆ**(綠酒)

りよく-はう 綠袍【名】位袍の一。六位の官人の著用せし、綠色なるもの。綠(ロク)の衣(コロモ)。綠衣。ろうさう。『謠曲皇帝』「贈官のみか、綠袍を屍體に蒙る舊恩に」

りよくはつ 綠髮【名】婦女の頭髮の黑く麗しきもの。みどりの髮。翠髮。

りよく-ばん 綠礬【名】〔鑛〕**ろうは**(綠礬)に同じ。

りよく-ひ 綠肥【名】〔農〕『英Green Manure』**くさごえ**(草肥)に同じ。「青蘋。

りよく-ひん 綠蘋【名】綠色のうきくさ。

りよく-ぶ 綠蕪【名】雜草の青青と生ひ茂れる所。

りよくぼん-せつ 力本說【名】〔哲〕**りきほんせつ**(力本說)に同じ。

りよくまう-き 綠毛龜【名】**みのがめ**(蓑龜)〔龜〕に同じ。

りよくまう-せん 綠毛仙【名】綠色の毛の生じたる仙人。

りよく-めい 綠茗【名】綠色なる茶。

りよく-もん 綠門【名】**ああち**〔三〕に同じ。

りよくもん-し 綠紋紙【名】琉球より產する一種の紙。「る野。

りよく-や 綠野【名】草木の青青と茂れ

りよく-やう 綠楊【名】葉の青青とせるかはやなぎ。翠楊。

りよく-ら 綠雜【名】綠色のうすもの。

りよく-ら 綠蘿【名】葉の青青とせるつたかづら。青蘿。碧蘿。平家「綠蘿の垣、翠黛の山」「攬」に同じ。

りよく-らん 綠攬【名】〔植〕**かんらん**(橄欖)

りよく-りん 綠林【名】〔一〕綠樹の林。〔二〕〔地〕支那湖北省當陽縣にある山。〔三〕『漢書の王莽傳に「南郡張霸、江夏羊牧王匡等起二雲杜綠林一、號曰二下江之兵一」、後漢書の劉元傳に「諸亡命聚二藏于綠林中一」とありて、通俗編に「綠林、地名、在二荊州當陽縣一、自三李涉有二綠林豪客夜知聞句一、後人竟稱二此輩一爲二綠林一」と見ゆ』ぬすびと。白波。

りよくれん-せき 綠簾石【名】〔鑛〕細長き柱狀又は針狀なる單斜晶形の結晶をなし、硬度高く、綠・黃等の色を呈する石。成分はカルシウム・アルミニウム・鐵等の硅酸鹽にして、接觸變質作用、又は角閃石・輝石・長石等の分解によりて生ず。

りよくれん-へんがん 綠簾片岩【名】〔鑛〕綠簾石が主合成分をなせる片石。

りよ-ぐわい 慮外【名】〔一〕おもひのほか。意外。案外。〔二〕ぶしつけ。無禮。不敬。庶突。俳諧新選(且水)「神の梅鼻であしらふは慮外なり」

りよぐわい-もの 慮外者【名】虜外〔一〕の行爲ある者。ぶしつけもの。無禮者。最明寺殿百人上臈「慮外者めと、柄(ヒ)に手を掛け」

りよ-ぐわうごう 呂皇后【名】〔人〕**りよこう**(呂后)に同じ。

りよ-ぐわく 虜獲【名】『運文釋義に「生得曰虜、斬首曰獲」とあり』俘虜と斬獲と。生捕(イケド)と首を斬り取りたる者と。

りよく-わん 綠灣【名】綠水を湛へてある灣。

りよく-わん 旅館・旅舘【名】はたごや。やどや。客舍。旅舍。

りよく-わん 旅管【名】陸軍管區の一。師管の下にありて、旅團長の管轄する區域。

りよくわん-ぐんぱふくわいぎ 旅管軍法會議【名】陸軍軍法會議の一。その旅管に屬する地域內の所屬軍人の犯罪を取り扱ふもの。「に同じ。

りよく-ねん 綠鶐【名】**りよくちく**(綠竹)

りよけい 呂刑【名】〔書〕書經の中の、周書の篇名。贖刑の法を述べたるものにて、周の穆王の司寇なりし呂侯の作。

りよけん 旅券【名】〔一〕旅行者の通行するための手形。〔二〕**ぐわいこくりよけん**(外國旅券)の略。

りよ-こう 呂后【名】〔人〕支那前漢の高祖の皇后。名は雉、父を呂父といふ。性慓悍、よく高祖を扶け、畫策する所多し。高祖の歿後、惠帝立つや、大政を攝し、その歿後は、宮人の子を立てて、自ら制を稱し、一族に王侯・將相の地位を授けて、威福を恣にし、又、妬心深く、高祖の寵最も厚かりし戚夫人を酷遇して、怨に報いたりといふ。制を稱すること八年にして歿す。

りよ-こん 旅魂【名】〔一〕他鄕にて死したる人の魂。太平記「青塚忽ちに破れて、白楊已に枯れぬれば、旅魂・幽靈、いづくにか吟(ヨナ)ふらん」〔二〕族人の心。客心。

りよ-さ 閭左【名】閭門の左側。閭左の民【句】支那古代の制にて、前項に住める民。賤民なりき。

りよ-さう 旅裝【名】たびのよそほひ。旅行の身支度。客裝。「じ。

りよ-じ 旅次【名】**りよしゆく**(旅宿)に同

りよしう 旅愁【名】旅中の愁思。客愁。「じ。

りよーしう 虜囚【名】しうりよ(囚虜)に同じ。

りよしーしゅんじう 呂氏春秋【名】〔書〕支那秦の呂不韋、門客中の文學の士を集めて撰せるもの。多數者の手に成れるが故に、書中の思想も、老莊・法家・儒教等多岐に亙れり。二十六卷。一名、呂覽。

りよじーてあて 旅次手當【名】我國と駐在國との間を往復する官吏に、旅次の費用として、特に給與する手當。

りよーじん 旅人【名】旅行する人。たびびと。旅客。

りよじんやど 旅人宿【名】はたごや(旅籠屋)に同じ。

りよじんやどーえいげふ 旅人宿營業【名】旅客を宿泊せしめ、又は人を寄宿せしむる營業。「じ。

りよーしや 旅舍【名】りよくわん(旅館)に同

りよーしやう 旅商【名】たびあきんど(旅商人)に同じ。

りよーしやう 呂尚【名】〔人〕支那周代の賢人。齊國の始祖。老いて、渭水の濱に釣し、西伯(文王)に知られて、これに仕ふ。西伯悅びて、子は、祖父太公、即ち古公亶父(ココウタンポ)の「當に聖人の周に適(ユ)くあるべし、周、因りて以て興らん」と云ひし、その人なるべし、わが太公、子を望むこと久しかりきとて、太公望と號し、車に乘せて、共に歸り、立てて師となし、因って、又、師尚父といへり。西伯を輔け、殷を滅して、周室の基礎を定め、齊に封ぜらる。

りよーじやう 旅情【名】旅中の心。旅人の心情。たびごころ。旅魂。客心。

りよーしゅく 旅宿【名】旅行さきの宿泊、又その宿泊したる家。

りよーすね 旅帥【名】『りよ(旅)を見よ』大寶令の制度にて、軍團に屬し、兵士百人を統率せし職。

りよーそう 旅僧【名】たびそう(旅僧)に同じ。津國女夫池「旅僧の御宿」

りよーそけん 呂祖謙【名】〔人〕支那宋の儒者。字は伯恭、東萊と號す。累官して、著作郎直祕閣に至り、一代の宗師たり。淳熙八年死す。年四十五。成と謚す。著す所、左氏博議・東萊博議・大事記・文集等あり。「と。

りよーだい 旅大【名】〔地〕旅順口と大連

りよ-だん 旅團【名】『兵士の數は異なれど、名稱は、りよ(旅)■より出づ』陸軍編制上、二箇乃至四箇の聯隊を合はせたるもの。しだん(師團)參照。

りよだん-えんしふ 旅團演習【名】機動演習の一。旅團長の統監・指揮の下に、旅團の行ふもの。

りよだん-しれいぶ 旅團司令部【名】陸軍官衙の一。旅團長がその事務を取り扱ふ所。旅團長の下に、副官と書記とあり、前者は、旅團長の命を承けて、司令部一般の事務に從事し、且つ司令部の經理事務を掌り、後者は、上官の命を承けて、事務に服す。

りよだん-ちやう 旅團長【名】旅團の長官。陸軍少將これに補せられ、部下の軍隊を統率し、部下各隊の教育・進歩の齊一を圖り、軍紀・風紀・內務・經理・衛生及び動員計畫を統監す。「中)に同じ。

りよ-ちゆう 旅中【名】りよかうちゆう(旅行

りよ-ちゆう 閭中【名】むらざとのうち。

りよ-てい 旅亭【名】はたごや。やどや。

りよ-てい 旅程【名】たびの道のり。

りよ-てん 旅店【名】はたごや。やどや。

りよ-とうらい 呂東萊【名】〔人〕りよそけん(呂祖謙)に同じ。

りよ-はく 旅泊【名】旅次に、水上に宿ること。「じ。

りよ-はん 侶伴【名】はんりよ(伴侶)に同

りよ-ひ 旅費【名】旅行の入費。旅行費。旅銀。旅用。路用。路銀。

りよ-ふね 呂不韋【名】〔人〕支那戰國時代の秦の宰相。商賈の出身にして、秦の莊襄王の、趙に質たりし時、これに結託して、世に出でたりといふ。王、位に即くや、丞相となり、文信侯に封ぜられ、始皇帝韋んで仲父となす。太后に通じ、始皇帝の十一年相國を免ぜられて、蜀に遷され、後、自殺す。始皇帝は、もと己の寵妾の姙めるを莊襄王に上りて生れし所といふ。

りよ-しゅんじう(呂氏春秋)參照。「じ。

りよ-もん 閭門【名】りよ(里閭)■に同

りよ-よう 旅用【名】りよひ(旅費)に同じ。

りよ-らん 呂覽【名】〔書〕りよしゅんじう(呂氏春秋)に同じ。

りよ-り 閭里【名】りりよ(里閭)■に同じ。

りよ-りつ 呂律【名】音樂の調子の呂と律と。じふにてうし(十二調子)參照。

りよ-りやく 虜掠【名】人をとりこにし、物をかすむること。「力。

りよ-りよく 膂力【名】筋肉のちから。腕

りよりよく-ふ 膂力【名】次條に同じ。

りよりよく-ふぢよ 膂力婦【名】ある者を擇ぶよりいふ。『ぢよちやう(女丁)に同じ。

りよりよくふちよ-でん 膂力婦女田【名】不輸租田の一。王朝時代に、膂力婦女に給せしもの。「に同じ。

りよりよくふ-でん 膂力婦田【名】前條

りら(伊 Lira)【助數】伊太利國の貨幣の單位。西曆一八六七年、貨幣同盟の結果、フランと同額のものとなれり。

りら-ら(名)〔人〕らいらっくを見よ。

りーらう 李老【名】〔人〕りくわう(李廣)の敬稱。盛養記「將門(カドヒ)、自ら甲冑を著、駿馬(シヒ)を疾(ヤ)めて、先陣に進みて戰ふ處に、王事臨(モ)い事なし、天罰、正に顯れて、馬は風飛の歩を忘れ、人は李老の術を失へり」「と。村落。

りーらく 里落【名】さと。むら。むらざ

りーらく 籬落【名】まがき(籬)に同じ。

りーらん 理亂【名】ちらん(治亂)に同じ。

りーり 離離【貌】■心の離れて親まぬさま。■穀物の穂の秀でて垂れたるさま。

■花・實・雲などの繁く連なり續けるさま。

りりい-やあん(英 Lily-yarn)【名】細き紐の形に造りたる人造絹絲。りりやん。

りーりく 離陸【名】飛行機の、陸地を離れて、空中に上りゆくこと。(著陸に對して)

りりし 凜凜し【形二】きりりと引き締りてあり。おごそかなり。いかめし。重唯子「りりしげなる旅裝束」

りーりつ 利率【名】元金に對する利息の率。計算上、期限の長短によりて、年利・月利・日歩(ブ)の三種あり。利子歩合(ワリヒキ)。法定の利率【句】〔法〕はふていりりつ(法定利率)に同じ。

約定の利率【句】〔法〕やくちやうりりつ(約定利率)に同じ。

りーりふをう 李笠翁【名】〔人〕りぎよ(李

りりやん【名】りりいやあんの略。

りーりゆう 驪龍・驪竜【名】りりよう(驪龍)に同じ。

りーりよ 里閭【名】■里(ト)■の入口の門。里門。閭門。閭。■むらざと。村落。閭里。

りーりよう 驪龍・驪竜【名】黑色なる龍。

驪龍頷下(カン)の珠【句】りゆうしゆ(龍珠)に同じ。

驪龍の髯に攀づ【句】『晉書の郭璞傳に「夫攀二驪龍之髯一、撫二翠禽之毛一、而不レ得レ絕レ霞肆跨中天津上者、未二之前聞一也」とあり』「龍髯(リヨウ)に攀づ」に同じ。

りーりよう 李陵【名】〔人〕支那前漢の名將。字は少卿。李廣の孫。性謙讓、騎射に長ず。今の外蒙古の地にて、蒙古の大軍と戰ひ、齊闘の後、力竭きて降る。後、漢使匈奴に會し、詩を贈答し、又、一書を與へて、心事を述ぶ。匈奴に在ること二十餘年、元平元年病死す。

りーれう 吏僚【名】もろもろのつかさびと。役人。百官。百僚。

りれえ(英 Relay)【名】■けいてんき(繼電器)に同じ。■次條の略。

りれえ-れえす(英 Relay-race)【名】『Relay は換馬(カヘ)又交代の義』遊技の一。各數人(正式なるは四人)の選手を一組とし、各組共、一人づつ交代して走り、最も早く全人員の走り終りたる組を勝とするもの。交代のしるしとして、バトン(Baton)とて、形竹筒の如き木製の棒を授受す。驛傳競走。

りーれき 履歷【名】その人の、今まで歷(ヘ)來れる學校・職業などの次第。人の來歷。經歷。

りれきしよ 履歴書【名】履歴を列ね記したるかきつけ。

りろ 離婁【名】〔人〕**りしゅ**(離朱)に同じ。

りろ 離婁の明【句】『孟子の離婁上篇に「離婁之明、公輸子之巧」とあり』「離朱の明」に同じ。

りろん 理論【名】物事の理法を論じ究むること。理を推して論議すること。(實驗に對して)

りろん-および-ぶつり-くわがく 理論及物理化學【名】〔化〕『英 Theoretical and physical chemistry』**りろんくわがく**(理論化學)に同じ。

りろん-か 理論家【名】實地の如何を措きて、理論を說く人。談理家。

りろん-くわがく 理論化學【名】〔化〕『英 Theoretical chemistry』**ぶつりくわがく**(物理化學)に同じ。

りろん-けいざいがく 理論經濟學【名】〔經〕**じゅんせいけいざいがく**(純正經濟學)に同じ。

りろんてき-とくかがく 理論的國家學【名】〔法〕國家學の一。國家の關係を、理論上より說明せんとするもの。國家學汎論・國法學・政治學など、これなり。

りろん-てんもんがく 理論天文學【名】〔天〕『英 Theoretical astronomy』觀測上より得たる材料を基とし、數學の助を借りて、天體の位置、星座を定め、天體の視運動・眞運動及び天體相互の作用等を研究する天文學。

りろん-ぶつりがく 理論物理學【名】〔理〕實驗によりて得たる諸定理を基とし、數學の助を借りて研究する物理學。(實驗物理學に對して)

り-わう 李王【名】**一**〔人〕李攀龍と王世貞と。王李。**二**次條を見よ。

りわう-け 李王家【名】元韓國の皇室。李成桂、高麗(カウライ)朝の禪を受け、李朝を開きてより、二十七代・五百十九年を經たる明治四十三年八月の日韓併合以後の稱にして、舊韓國皇帝(御名は垈)を王となして、昌德宮李王と稱し、舊太子(御名は埈)を王世子となし、舊皇太弟(御名は熙)を太王となして、德壽宮李太王とし、李王の懿親李堈・李熹を公とし、何れも、その配偶を王妃・王世子妃・太王妃・公妃となし、王族・公族の稱を定め、殿下の敬稱を用ひしめられ、且つこれらの稱號は、將來に亙りても用ひしめらるることとなり、同年十二月、皇室令を以て、同家のために、李王職官制を公布せられ、在位當時と同一なる年額百五十萬圓の歲費を、朝鮮總督府特別會計より支出して、その費用に充て、祭祀・典禮亦すべて、從前のままならしめられたり。

りわう-しちし 李王七子【名】〔人〕**しちさいし**(七才子)に同じ。

りわう-しよく 李王職【名】宮內大臣の管理の下に、李王家のために、王族及び公族の家務を掌る官署。職員として、長官・次官(共に一人・勅任)・事務官・贊侍・典祀・典醫・技師(以上奏任)・屬・典祀補・典醫補及び技手(以上判任)を置き、李太王には事務官(三人)・贊侍(四人)・典醫(二人)・屬及び典醫補を、王世子には事務官・贊侍・典醫(各一人)・屬及び典醫補を、公族には事務官一人づつと屬とを分屬せしめ、なほ、李王職に掌侍司を置き、贊侍(五人)・典醫(二人)・屬及び典醫補を分屬せしめ、贊侍を掌侍司長とし、上官の命を承けて、李王の身側と典醫とに關する事務を掌理せしむ。「王家」を見よ。

りわう-せいし 李王世子【名】**りわうけ**(李王家)に同じ。

り-ゐん 吏員【名】**一**やくにん。官吏。**二**地方自治團體の選出によりて、その團體の事務を執行する者。

り-ゐん 梨園【名】**一**梨の樹を植ゑてある園圃。**二**『唐書の禮樂志に「明皇既知二音律一、又酷愛二法曲一、選二坐部伎子弟三百一、教二於梨園一、聲有レ誤者、帝必覺而正レ之。號二皇帝梨園弟子一」とあり』俳優の伎を習ふ所。**三**芝居。劇場。

梨園の弟子(シディ)【句】**一**『前條を見よ』宮中の伶人。**二**やくしや。俳優。

り-をく 離屋【名】離れて立てる家。孤屋。

【發音】一ら行第三の音。子音 r が母音 u に結び附きて發す。その發音の方法・位置に就きては、**ら**及び**ひ**の條下に說けるが如し。**二**長音は、**るう**と書くと**るー**と書くとの兩法あり。本書にては、前者に依れり。

【字源】平假名**る**は「漢字「留」(吳音ル)の草體、變體平假名**ゐ**・**ゐ**も同字の草體、**ゐ**は「累」(漢・吳音共にルキ)の草體、**ゐ**は「類」(漢・吳音共にルキ)の草體、**ゐ**は「流」(吳音ル)の草體より出で、片假名は「流」の略體、又、萬葉假名としては、前記「留」・「累」・「類」・「流」の外、字音に據れるものに「琉」・「樓」・「婁」・「屢」・「縷」・「漏」・「盧」・「蘆」等あり。「の語」

る 流【名】**るざい**(流罪)に同じ。〔王朝時代

る 僂・瘻【名】**せむし**(傴僂)に同じ。

る 縷【名】絲すぢ。いと。

る【助動】**らる**に同じ。(但し、四段活用・行變格活用・ら行變格活用の三種の動詞に添ふ)「被・所・見」「打たる」「死なる」

る-い 留移【名】罪人を流し、又は他に移すこと。〔王朝時代の語〕

るい-くぶんでん 留移口分田【名】流移人に給する口分田。

るいす-いんでん ルイス印傳・ルイス應帝【名】綾(ジ)こまかに、色の煤黑き印傳革。

るい-にん 流移人【名】流移に處せられたる人。〔王朝時代の語〕

るうだ(蒲 Ruda)【名】〔植〕**ありたさう**(土荊芥)に同じ。

るうたあ 路透(英 Reuter)【名】**ろいてる**(路透)に同じ。

るうださう ルウダ草【名】〔植〕**るうだに**同じ。

るうでーさっつく(獨 Rutensack の訛)【名】避妊又は花柳病豫防のために、男子の用ふる、薄きゴム製の淫具。

るうびい 紅玉【名】〔鑛〕**るびい**(紅玉)に同じ。

るうぴい 留比留(印 Rupee)【助數】印度の貨幣の單位。もと回回種族の間に行はれしを、印度一般に通用せしむるに至りしものにて、英貨一シリング四ペンス、我國の五十錢弱に相當し、その十六分の一をアンチ、六十四分の一をパイス、百九十二分の一をパイといふ。るぴい。

るうぷ-しき ルウプ式(英 Loop)【名】鐵道線路敷設の一方式。或二つの地點の間の高度に大差ある場合、同一の地點を、高度を異にして、通過せしむること。これによりて、線路の延長は增加する代りに、勾配を緩和せしむ。瑞西(スイス)國・印度などに行はる。

るうふる(蘭 Roffe)【名】銅にて長さ三尺餘の喇叭形に造り、音聲を遠方に達せしむるに用ふる器。メガホンの類。づうふる。

るうぶる 留(露 Ruble)【助數】露西亞國の貨幣の單位。我國の約一圓〇六錢に相當す。その百分の一をコペエカといふ。

るうまにや 羅馬尼亞(英 Roumania, Rumania 又 Romania)【名】〔地〕歐羅巴洲の東南部にある王國。首府をブカレストといふ。るめにや。るめにや。「じ。

るうめにや 羅馬尼亞【名】〔地〕前條に同

る-かす 【名】**ろかす**(爐滓)に同じ。

るき 流記【名】寺院の寶物・地所などを記せる記錄。〔王朝時代の語〕伊呂波字類「流記、ルキ」

るくせんぶるぐ【名】〔地〕次條に同じ。

るくせんぶるひ(英 Luxemburg)【名】〔地〕**一**歐羅巴洲の佛蘭西・白耳義・獨逸の三國の間に介在せる大公國。同名の首府あり。**二**ルクセンブルヒ國の首府。

るくらんしえ-でんち ルクランシエ電池(英 Lechlanché cell)【名】〔理〕一次電池の一種。硝子製の瓶の內に、素燒(キヤ)製の